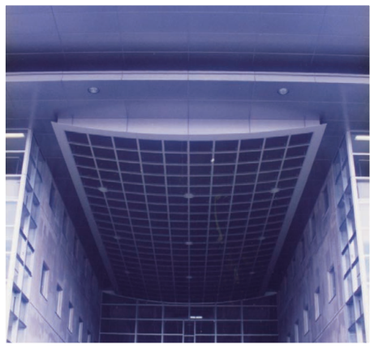
広島市立大学

開学20周年記念誌

20th anniversary
Hiroshima City University



広島市立大学
HIROSHIMA CITY UNIVERSITY

刊行の辞

広島市立大学 理事長・学長
青木　信之

1994年に開学した本学は、今年度開学20周年を迎えました。第1期生を迎える入学式は、大学講堂が未完成であったため、中区アステールプラザで行われました。訓示の中で、初代学長の田中隆莊先生が「科学と芸術を軸に世界平和と地域に貢献する国際的な大学」を建学の基本理念としたことを紹介されています。その4年後の1998年に広島平和研究所および大学院博士前期課程を設置し、藤本黎時先生の2代目学長ご就任と同時に博士後期課程を設置して、大学院の完成をみました。そして、2010年には、3代目学長の浅田尚紀先生の下で公立大学法人広島市立大学となりました。

本学はこの20年間に学部卒業生6,440名、大学院博士前期課程修了生1,813名、後期課程修了生109名を輩出してきました。地域をはじめ、社会に優秀な人材を還元するという公立大学の教育的使命を果たすとともに、国際、情報、芸術、そして平和という他大学にない特色を持つ本学は、研究、社会貢献においても着実な実績を積み重ねてきました。このことは、大学基準協会による認証評価に加えて、広島市公立大学法人評価委員会からも高い評価を頂いていることによっても証明されています。

このたび、本学は人間でいえば成人となったわけですが、ここに至るまで温かく大学を見守ってくださった広島市、広島市民の皆様、そしてこれまで本学の発展のためにご尽力くださいました教職員をはじめ多くの方々に、あらためて御礼申し上げる次第です。

さて、成人になったばかりとはいえ、20年も経つと草創期の事情を知る方も減り、記録も散逸してしまう恐れがあります。この機会に開学から現在までの歴史をまとめ、未来への指針ともなることを願って、記念誌を発行する運びとなりました。編纂については、記念誌編集委員会の皆様にご尽力いただきました。開学20周年記念事業本部を代表して、ここに謝意を表したいと思います。

今後も広島市の皆様のご期待、そして諸先輩方のご功績に応えるため、広島市の公立大学としての使命をより明確に自覚し、それを果たすべく真摯に取り組んでいく所存ですので、引き続きご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

祝辞

広島市長
松井　一實

広島市立大学が、開学20周年を迎えられましたことを心からお喜び申し上げます。また、長年にわたり本学を支えてこられた、歴代の学長、理事長を始め、教職員の皆様方の御熱意と不断の御努力、保護者、卒業生、地域、企業など関係者の方々の御尽力に深く敬意を表しますとともに、設立者である市といたしまして、厚くお礼を申し上げます。

広島市立大学は、1994年4月、「深く専門の学芸を教授研究し、次代を担う感性と創造力の豊かな人材を養成するとともに、優れた教育研究の成果を地域に還元し、もって文化の向上と社会の発展に寄与する」ことを目的として、開学しました。

「科学と芸術を軸に世界平和と地域に貢献する国際的な大学」を建学の基本理念に、国際学、情報科学、芸術学というユニークな学部構成に加え、附置機関として平和研究所を有する特色ある大学として、研究活動はもとより、豊かな人間性と確かな社会性を備える有為な人材を育成し、地域への社会貢献も積極的に行うなど、着実に実績を積み重ね、高い評価を得て来たことは皆様御承知のとおりです。2010年に公立大学法人に移行して以降も、理事長を中心に、時代や社会の要請に柔軟、迅速かつ適切に対応し、自律的に改革を継続する運営体制を構築してこられました。

さて、開学後20年が経過し、その間、少子・高齢化や人口減少の進展など、本市や大学を取り巻く社会情勢は大きく変化しています。こうした時代の大きな転換期にあって、国や地域が活力を維持していくうえで、知的な価値の創造・発信と、将来を担う若者の知的訓練は非常に重要であり、中四国地方の中枢都市として「世界に誇れるまち」を目指す本市としては、特に、大学の機能を重要視しています。広島市立大学には、地域の「知」の拠点として、また、本市の活力源として、今後とも大きな役割を果たされることを期待しています。

終わりに、広島市立大学のますますの御発展を祈念しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

開学20周年を迎えて

—21世紀の大学への期待—

広島市立大学 第2代学長
藤本　黎時

広島市立大学開学20周年を心からお祝い申し上げます。

「国際平和文化都市」を都市建設の目標としていた広島市は、国際的で高度な学術・研究機関を設置するという施策を、1978年当時の広島市新基本計画の中で掲げました。1988年、当時の西日本地域の大学には充実していなかった分野、すなわち「国際」「情報」「芸術」の3分野を専門とする高等教育機関の設立計画策定が始まり、1994年、その3分野が現在の3学部となって本学は開学しました。その後、年次進行にしたがって3研究科と平和研究所が設置され、所期の目的を果たしつつ今日の姿にまで成長し発展しました。設立準備にいくらか関わった者の一人として、本当に嬉しいことです。

この20年間に、本学を卒業し、修了した8千数百余名の同窓生たちは、今や社会の中堅として活躍しています。新聞やテレビの報道を通して、在学生、卒業生、修了生たちがさまざまな分野で活躍している様子を知り、本学の存在感をいっそう感じるとともに、人材育成の成果と社会への貢献を心から誇りに思っています。

ところで、わが国の大学は現代社会構造の中に深く組み込まれているため、少子化時代を迎え、今や大学が淘汰される厳しい時代となりました。研究と教育を基軸とする大学は、研究成果としての学術知識を積極的に社会に還元し、社会の発展に寄与するとともに、優れた人材を育成して社会に送り出す使命を持っています。一方、入学者の供給源としての社会は、それに応えて大学の維持、発展を支援することでしょう。入学定員確保の厳しい過当競争の中で、教職員、同窓生、在学生をはじめ本学の関係者が、熱い思いをもって建学の基本理念の実現に向かうとき、本学の将来はますます明るいでしょう。

本学は専門分野に関して、一見、全く関連のない3学部と平和研究所というユニークな構成を特色としています。今後、このユニークな特色を生かし、学部・学科や研究所という仕切りを越えて、横断的、学際的な研究協力と教育を進めることによって、21世紀の地域社会と国際社会の期待と要望に応えてほしいものです。その成果が本学のブランド・イメージとなって、存在感がいっそう高まることを期待しています。

開学20周年を祝して

広島市立大学 初代理事長・第3代学長
浅田　尚紀

広島市立大学が開学20周年を迎えられたことを心からお慶び申し上げます。

二十歳というと人間では成人を迎えたことになります。私は、大学が誕生して間もない1歳（1995年度）から成長著しい18歳（2012年度）まで在職しましたが、3学部3研究科1研究所の組織体制が整備された後、教育研究成果を社会に還元し地域に貢献する大学として個性を伸ばす12歳（2006年度）から18歳の時期に、学長として大学運営に携わることができたことは、何物にも代えがたい経験でした。

学長就任当時は、国立大学の法人化に続き公立大学が次々と法人化され、広島市立大学にも大学改革の大きなうねりが迫り来る時期でした。少子高齢化やグローバル化が進展する社会情勢を背景に、広島市の高等教育研究機関としての独自の公立大学法人像を目指して熟議を重ねた結果、広島市立大学は2010年4月に、自治体の保護管理下にある公立大学から社会に対して直接説明責任を負う公立大学法人に移行しました。これは、広島市立大学が自律性と社会性を身に付けるという意味で、成人する前の大切な成長過程だったと思います。法人化を契機とした教育研究機能の強化という基礎体力の向上と、理事会を中心とした運営体制や情報公表を原則とした教員評価制度の導入という体質改善によって、広島市立大学は新たな成長段階に移行し現在に至っています。

学部と大学院の学生総数が約2,000人に対して専任教員数が約200人という恵まれた教育体制と、国際、情報、芸術、平和というバランスの取れた研究分野を持つ広島市立大学は、特色ある教育の深化や新たな研究分野の開拓など、まだまだ飛躍の可能性を秘めた魅力的な大学です。今後は、国際平和文化都市を都市像とする広島市が創った唯一の公立大学として「知の継承（教育）」と「知の創造（研究）」で存在感を増すとともに、「知の活用（地域貢献）」でより一層個性を発揮されることを期待しています。

広島市立大学開学20周年に寄せて

広島市立大学後援会会長
奥田　栄彦

広島市立大学が開学20周年を迎えられ、このたび記念誌を刊行される運びとなりましたことに、心よりお喜び申し上げます。また、20周年を迎えられるにあたり、その準備段階から開学まで、そして開学以来今日に至るまで市立大学発展にご尽力された関係各位に、心より敬意を表します。

私事ではございますが、本学には長男が情報科学部および情報科学研究科において6年間、三女が芸術学部で4年間、そして現在は芸術学研究科1年生として、都合足掛け11年にわたりお世話になっております。その間、幾度となく本学に足を運ぶ機会がございましたが、折に触れ感じておりましたのは、自然豊かな落ち着いた環境の下、学びや研究に正面から取り組む学生たちの真摯な姿です。これは、これまで本学における教育研究活動に携わってこられた先生方の、高い専門性と熱心なご指導の賜物と存じます。深く感謝申し上げます。

さて、20年と申しますと、そろそろ学風が文化としてまとまり、根付くころではないかと思います。これまで多くの先生方と学生たちによって培われてきた素晴らしい文化がこれからも継承され、また一層深まり高まって輝かしい伝統が築かれていくことを、心から願っております。

私ども広島市立大学後援会は、広島市立大学の教育事業を援助し、大学の円滑な発展に寄与することを目的に掲げ、開学以来大学と共に歩んでまいりました。これからも、学生の学業や生活および就職活動の支援、大学と保護者の連携、教育研究活動の充実などのお手伝いをしてまいりたいと存じます。学生たちの大学生活の充実、そして明日を担う人材の育成に、わずかながらでもお役に立つことができればと願っております。どうぞこれからもよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、発展されつつ今日を迎えられたことをあらためてお祝い申し上げるとともに、他に類のない特色ある大学として今後ますます発展されることを祈念してやみません。

開学20周年、誠におめでとうございます。

20周年記念誌刊行に寄せて

広島市立大学同窓会会長
鍋屋　朗美

広島市立大学は1994年の開学から、本年で20周年を迎えました。この節目の年にあたり、同窓会を代表して心より御祝い申し上げます。設立から運営に至るあらゆる面において御尽力されてきた広島市、教職員の皆様、また本学の活動に多大なる御理解を示してくださった地域の皆様方に、深く敬意を表すとともに厚く御礼申し上げます。

卒業生の視点からこの20周年を振り返ると、私が2期生として入学した当時は校舎も整備の途中で全ては完成していませんでしたが、今やこうして立派に二十歳の成人式を迎えられたというのは、非常に感慨深いものがあります。本学はいわゆる「マンモス校」ではなく比較的規模の小さい大学ですが、それゆえに学生同士の、また学生と教職員との距離が近く、密度の濃い学生生活を送ることができ、これが広島市立大学の魅力の一つになっていると思います。

大学の魅力を形作るものとして、先生方のすぐれた研究活動が挙げられるのはもちろんですが、在学生・卒業生の活動・活躍もまた大きな要素であります。現在、本学を巣立った多くの卒業生が国内外で活躍していますが、そうしたOB・OGと在学中の学生とをつなぐ場が同窓会であり、その担うべき役割は決して小さくないと思っております。現在同窓会は、年次の総会のほかに懇親会の開催、会報の発行を主な活動としておりますが、より多くの「市大生」が集える場となるよう決意を新たにしている次第です。

最後に、二十歳を迎えた広島市立大学の更なる成長と発展、また広島の街に根差した特色ある大学としての伝統が築かれていき、その過程において多くの同窓生が共に歩まんことを祈念して、御祝いの言葉といたします。

建学の基本理念

科学と芸術を軸に世界平和と地域に貢献する国際的な大学

広島市立大学が基本理念として掲げた「科学と芸術を軸に世界平和と地域に貢献する国際的な大学」という言葉には、科学・文化の発展と世界平和を願う広島市の意志と、公立大学としての地域貢献への期待が込められている。そうした本学の使命は、学術の中心として、深く専門の学芸を教授研究し、次代を担う感性と創造力の豊かな人材を養成するとともに、優れた教育研究の成果を地域に還元し、もって文化の向上と社会の発展に寄与することにある。

国際平和文化都市を都市像とする広島市に設置された本学は、国際学部、情報科学部、芸術学部の３学部、そしてその上に大学院博士前期・後期課程として、国際学研究科、情報科学研究科、芸術学研究科を有する総合大学である。また世界平和と人類の幸福を実現するための研究や提言を行うことを目的とした広島平和研究所を附置研究所として設置している。

広島市立大学は、特色のある独自の教育研究活動を通じて、世界と地域が求める新しい時代の要請に応え、本学の目標である「国際平和文化都市の『知』の拠点 一地域と共生し、市民の誇りとなる大学一」を築き上げていきたいと念じている。

校章

広島市立大学の３学部の連帯と無限の学問追究をテーマに、国際学部（International）、情報科学部（Information）、芸術学部（Art）、それぞれの頭文字I・I・Aを組み合わせ「果てしなき上昇」「未来への飛翔」をイメージし、また、広島の戦国の武将・毛利元就の「三本の矢の教え」にも通ずるデザインとなっている。

コミュニケーションマーク

建学の基本理念を中心とした本学のブランドイメージを高めるツールとして、2013年6月14日、新たにコミュニケーションマークを発表した。デザインコンセプトは、本学のタグラインである「3つのひかり　未来をつくる」が基になっており、磁力に吸い寄せられるように集まり、互いに刺激し合い、そして解き放たれる3つの光を表現している。さらに、３学部を表した３つの「光」の組み合わせをユーザー自身がカスタマイズできるようになっており、可変性を持ちながら一つのブランドイメージを損なわない、新しいスタイルのマークとなっている。

歴代学長紹介

初代学長（1994～1999年度）

田中　隆莊

1925年生まれ。広島県出身。1950年、広島文理科大学生物学科卒業。理学博士。専門は植物学。1994年度に本学初代学長に就任。2000年3月に退任し、同年4月に本学名誉教授となる。2008年7月14日、永眠。

第２代学長（2000～2005年度）

藤本　黎時

1932年生まれ。広島県出身。1961年、広島大学大学院文学研究科博士課程英文学専攻単位取得退学。文学修士。専門分野はイギリス地域文化、アイルランド文化・文学。1995年度に本学着任。本学在職中、学長就任までに国際学部長（1996～1999年度）、国際学研究科長（1998～1999年度）を務める。2006年３月に退任し、同年５月に本学名誉教授となる。

第３代学長（2006～2012年度）・初代理事長（2010～2012年度）

浅田　尚紀

1957年生まれ。京都府出身。1984年、京都大学大学院工学研究科博士後期課程電気工学専攻単位取得退学。1987年、同修了。工学博士。専門分野は画像情報処理。1995年度に本学着任。本学在職中、学長就任までに情報処理センター長（2000～2002年度）、副学長（2003年度）、情報科学部長・情報科学研究科長（2004～2005年度）を務める。法人化後の2010～2012年度は理事長を兼務。2013年３月に退任し、同年５月に本学名誉教授となる。

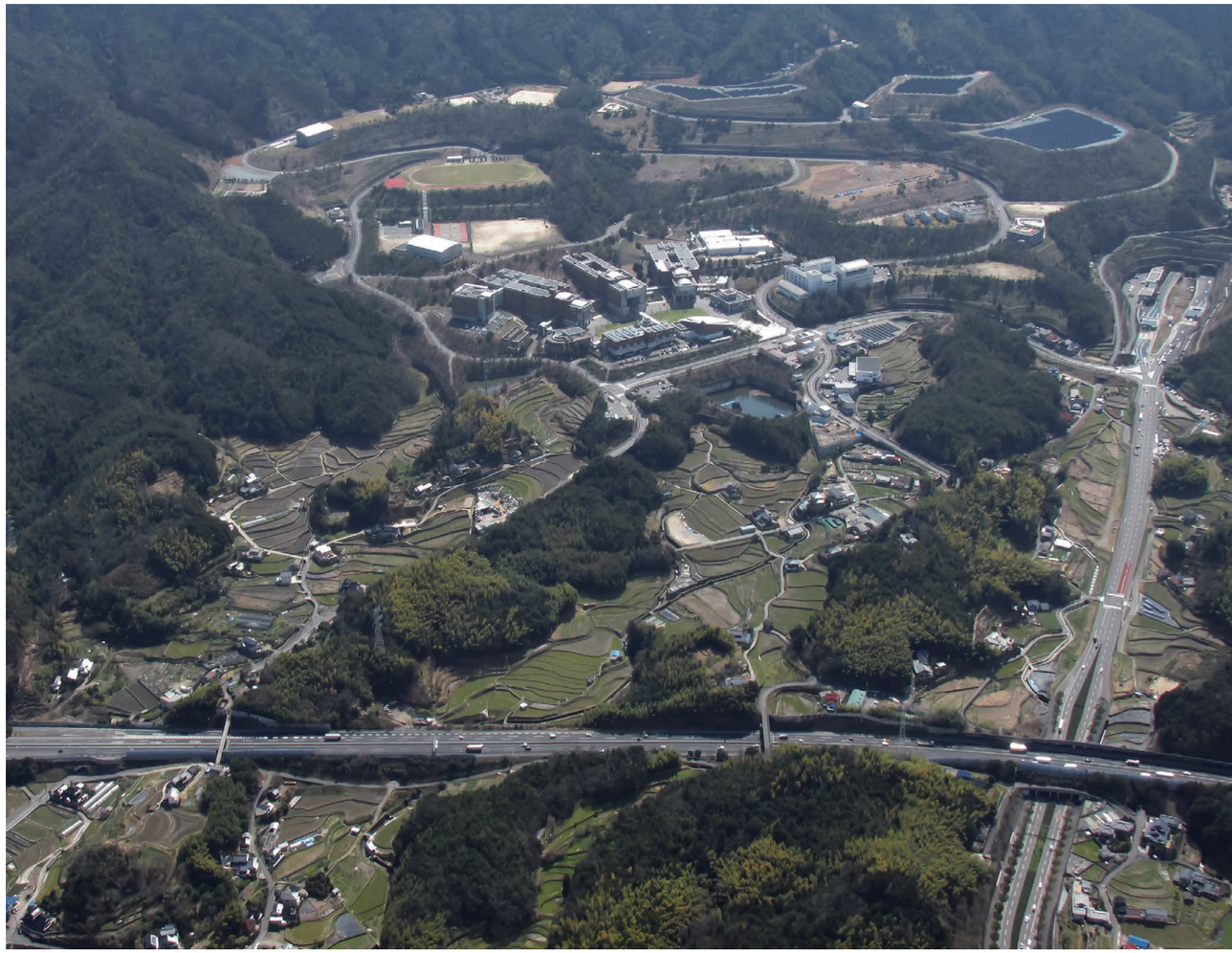
第４代学長・第２代理事長（2013年度～）

青木　信之

1959年生まれ。大阪府出身。1987年、広島大学大学院教育学研究科教科教育学専攻博士課程前期修了。博士（教育学）。専門分野は英語教育学。1994年度に本学着任。学長（理事長を兼務）就任までに語学センター長（2004～2005年度）、副学長（教務・学生担当）（2006～2007年度）、副学長（企画・研究担当）（2008～2009年度）、理事・副学長（企画・戦略担当）（2010～2012年度）を務める。

空から見る広島市立大学 ―今昔

1992年（写真提供：広島市広報課）



2014年

目次

刊行の辞
広島市立大学理事長・学長　青木信之……4

祝辞
広島市長　松井一實……5

開学20周年を迎えて ―21世紀の大学への期待―
広島市立大学第2代学長　藤本黎時……6

開学20周年を祝して
広島市立大学初代理事長・第3代学長　浅田尚紀……7

広島市立大学開学20周年に寄せて
広島市立大学後援会会長　奥田栄彦……8

開学20周年記念誌刊行に寄せて
広島市立大学同窓会会長　鍋屋朗美……9

建学の基本理念・
校章・コミュニケーションマーク……10

歴代学長紹介……11

空から見る広島市立大学 ―今昔……12

第1章　広島市立大学のあゆみ……17

1.開学に至るまで……18

2.年表で見るこれまでのあゆみ……25

第2章　学部・研究科・広島平和研究所……43

国際学部・国際学研究科……44

1.国際学部長・国際学研究科長のメッセージ……44

2.概要……45
（1）国際学部設置の経緯……45
（2）学部・学科教育の特色……45
（3）国際学研究科設置の経緯……46
（4）研究科教育の特色……46

3.年表で見るこれまでのあゆみ……47

4.歴代教員一覧……50
（1）過去在職教員……50
（2）教員略歴……52
（3）在職期間一覧……57

5.教育研究活動紹介……59
（1）教育……59
（2）研究……63

情報科学部・情報科学研究科……66

1.情報科学部長・情報科学研究科長のメッセージ……66

2.概要……67
（1）情報科学部設置の経緯……67
（2）学部・学科教育の特色……67
（3）情報科学研究科設置の経緯……67
（4）研究科教育の特色……68

3.年表で見るこれまでのあゆみ……69

4.歴代教員一覧……73
（1）過去在職教員……73
（2）教員略歴……77
（3）在職期間一覧……87

5.教育研究活動紹介……91
（1）情報工学科と情報工学専攻……92
（2）知能工学科と知能工学専攻……93
（3）システム工学科とシステム工学専攻……94
（4）医用情報科学科と創造科学専攻……96

芸術学部・芸術学研究科……98

1.芸術学部長・芸術学研究科長のメッセージ……98

2.概要……99
（1）芸術学部設置の経緯……99
（2）学部・学科教育の特色……100
（3）芸術学研究科設置の経緯……100
（4）研究科教育の特色……100

3.年表で見るこれまでのあゆみ……101

4.歴代教員一覧……110
（1）過去在職教員……110
（2）教員略歴……112
（3）在職期間一覧……115

5.教育研究活動紹介……116
（1）芸術学部の教育……116
（2）芸術学研究科の教育……120
（3）芸術学部および芸術学研究科の研究……121

広島平和研究所……132

1.広島平和研究所長のメッセージ……132

2.概要……133
（1）広島平和研究所開設の経緯……133
（2）研究の特色……134

3.年表で見るこれまでのあゆみ……136

4.歴代教員一覧……140
（1）過去在職教員……140
（2）教員略歴……140
（3）在職期間一覧……142

5.研究教育活動紹介……142
（1）研究……142
（2）教育・社会貢献……145

第3章　学生の課外活動……149

1.大学祭……150
（1）これまでの大学祭……150
（2）大学祭の20年を振り返って……152

2.クラブ・サークル……154

第4章　附属施設……161

1.附属図書館……162

2.語学センター……164

3.情報処理センター……166

4.芸術資料館……168

5.社会連携センター……170

6.国際交流推進センター……172

7.キャリアセンター……173

8.サテライトキャンパス……174

9.歴代教員一覧……175
（1）過去在職教員……175
（2）教員略歴……175
（3）在職期間一覧……175

10.その他の学内施設……176

11.学内アートマップ……178

12.学外アートマップ……180

第5章　資料……183

1.学生・教職員数……184

2.組織の変遷……186

3.歴代役職者一覧……188

4.名誉教授一覧……190

5.入学者数の推移……192

6.卒業生・修了生数等の推移……194

7.外部資金獲得の推移……196

8.国際交流事業実績……198

第１章　広島市立大学のあゆみ

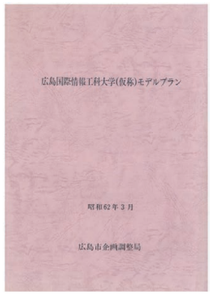
1. 開学に至るまで

（1）新大学設立計画の萌芽

1987年3月、広島市企画調整局が薄紅色の冊子を発行した。『広島国際情報工科大学（仮称）モデルプラン』というタイトルが付けられたその冊子は、2014年に開学20周年を迎えた広島市立大学のいわば「青写真」だ。

このモデルプランの冒頭には大学設立の必要性が説かれており、新大学設立のねらいの1つ目は、広島都市圏における「学術・研究機能の充実・強化」とされている。これは、当時政府が策定中だった第四次全国総合開発計画（1987年6月策定）にある「東京一極集中から多極分散型国土への移行」という課題を反映している。

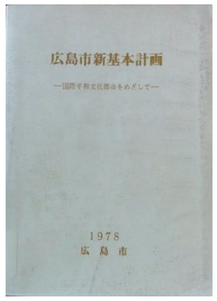
大学設立の構想は、多極分散型国土の形成という国家レベルの事情だけでなく、広島市特有の課題とも強い関連性を持っていた。それが大学設立のねらいの2つ目であり、「世界の平和と人類の幸福を追求し、それの実現に貢献する国際的かつハイレベルな人材を養成する」ための「学術・研究機関の整備・充実」とされている。加えて、広島市の掲げる都市像「国際平和文化都市」の創造に必要であるとの記述もある。このほか、札幌、仙台、福岡などの他の地方中枢都市と比較した際、広島が教育都市としての役割に後れをとっていることや、自動車工業を中心に発展してきた広島都市圏が、世界の産業競争、技術革新、国際化の流れの中でも世界をリードしていけるだけの教育研究体制を確立しなければならないことも、大学設立のねらいとして説かれている。



『広島国際情報工科大学（仮称）モデルプラン』
（1987年3月、広島市企画調整局）

こうしてみると、大学設立の構想は当時の広島、そして日本社会の趨向や変化を如実に反映していたといえる。同時に、こうした日本社会の様相を反映した大学設立の気運は、広島市特有のものではなかった。当時全国規模で「大学設立ブーム」があったと振り返るのは、広島市職員として本学の開学準備期から開学後まで通算10年半にわたって本学に関わり、現在は広島平和記念資料館長を務める志賀賢治氏だ。実際、本学が開学した1994年度の新設大学数は、4年制大学が本学を含めて18校（公立大2校、私立大16校）、短期大学が1校（公立大1校）で、これは第1次ベビーブーム世代が入学した1967年度の23校以来、最多であった。

志賀氏によると、その当時、各地の新設大学には地域振興の期待がかけられていたのだという。公立大学数の増加は1980年代後半から著しく、一般社団法人公立大学協会の統計によると、1984年度に36校であったのが、30年後の2014年度には86校まで増加している。また私立大の中には、地方自治体が土地や資金を提供して誘致する「公私協力方式」で設立されたものもある。この背景には、進学や就職による人口流出や1992年を境に始まる18歳人口減少への対策、産学連携による産業活性化など、大学新設によって地域振興を図る地方自治体の意図があったとみていだろう。本学の場合も、前述のモデルプランに謳われている産業界との連携、また後述する立地選定の過程を見れば、例外でないことがわかる。



『広島市新基本計画
—国際平和文化都市をめざして—』
（1978年12月、広島市）

しかし、大学設立の構想は、この時期に突然降って湧いた話ではない。その萌芽は、このモデルプラン策定から約10年さかのぼる。広島市では、1978年から大学設立の必要性が叫ばれていた。まずこの年の9月に策定された「広島市新基本計画」の中で、「本市の学術文化の向上発展に寄与しうる特色ある国立単科大学 —例えば美術工芸大学・外国語大学などの誘致を促進する」ことが掲げられた。同様に広島市議会定例会においても、大学設立への意欲が表明されている。1980年2月の定例会では、「国際平和文化都市にふさわしい国際的大学あるいは、世界の発展に寄与」できる「高等教育機関の充実強化」が重要課題であること、1982年9月の定例会では「芸術、工科大学など特色ある高等教育機関が必要であり、国立大学等の誘致を進めていく」ことを表明した。

以降、広島市は数回にわたって大学設立に向けた調査研究に着手することになる。1983年に「広島都市圏における高次教育（研究）機能の整備方策に関する調査研究」を、1984年に「広島都市圏の高次教育（研究）機能整備構想調査」を、1986年に「広島国際情報工科大学（仮称）整備基本計画検討委員会」を組織して、「広島国際情報工科大学（仮称）整備基本計画策定調査」を実施した。そして1987年3月に大学設立構想の最終段階として、冒頭で紹介したモデルプランの策定に至るのである。

（2）新大学のモデルプラン

広島市への大学誘致がいわれ始めてから約10年の時を経て策定された「広島国際情報工科大学（仮称）モデルプラン」は、大学設立に向けた動きの「節目」であったといえよう。1986年から開学前年まで8年間、広島市企画調整局で大学設立準備に携り、モデルプランの作成も担当した喜多川寛・公益財団法人広島平和文化センター常務理事は、このモデルプランには現状分析から大学設立の意義、新大学の構想まで「洗いざらい盛り込んだ」と言う。その言葉どおり、モデルプランの内容は綿密な調査と分析に基づき、具体性を持ったものとなっている。

モデルプランでは、「広島市において整備する大学は世界的に最先端を走る情報関連部門を専門分野とし、理学、工学分野から人文、社会科学分野にわたる学際的な教育研究体制を持つ国際大学とする必要がある」とされている。これに関連してモデルプランにある「設置の基本構想」では、新大学の学部構成は「当面、『国際』の分野と『情報』の分野を対象に教育・研究を行う二学部」（「国際学部」および「情報学部」）とされている。これは、今日の広島市立大学が、そのタグライン「3つのひかり　未来をつくる」で表現されているように、国際学部、情報科学部、芸術学部の3学部構成であることを考えれば、興味深い点といえよう。

構想にある2学部のうち、国際学部は国際学科のみの構成で、その中に「国際政治コース」「国際経済コース」「国際文化コース」の3コースを設けるとされている。このモデルプランが策定された1980年代は、「国際」の名を冠する学部は全国的にも文化学、地域研究、経済学など、特定の分野の中のみで扱われる場合が多く、「国際」と名の付く学問分野や学部名自体、当時は日本社会にまだ浸透していなかった。後述する「広島市立大学（仮称）設立準備委員会専門部会」による開学前のカリキュラム構築や教員選考に関わり、のちに第2代学長を務めることになる藤本黎時氏は、大学設置申請で文部省を訪れた際や第1期卒業生の就職先開拓のため全国の企業を訪問した際、文部省や企業から出た質問はまず「国際学部とは何を学ぶところか」というものだったと回想する。開学後にも、1996～2000年度の国際学部長時代、講義の名称を決める際に「国際学」という分野そのものの妥当性が議論に上がったことさえあるという。こうしてみると、国際学部の設置も、政治、経済、文化と多様な分野を単一学部の中で扱う学際的アプローチも、当時としては画期的な試みだったのである。

一方の情報学部は、「基礎科学系学科」「経営系学科」「情報工学系学科」「芸術工学系学科」の4学科構成となっている。この構成は、「従来まで、人文、社会、理・工の各学部で教育されてきた学問体系を情報という視座で再編し、情報の基礎理論から応用まで体系的な教育を行う」ことを目的としている。その当時すでに注目を浴び始めていた情報関連の研究をさまざまな学問分野と組み合わせ、より学際的に扱うという構想は、前述の国際学部同様、画期的な試みだったといえよう。

国際学部も情報学部もその構想を見れば、1970年代から80年代にかけて世界で急速な進展を見せた国際化と情報化の流れに、柔軟に対応できる人材を育成するという目的が見てとれる。同時に、広島都市圏ではまだ少なかった「国際」「情報」両分野を学際的に扱うという、画期的なアプローチの試みもうかがえる。

独自性や先進性を目指そうとする動きは、学部構成以外にも見られる。例として、教育課程への社会実習の導入や、調査書選抜、推薦入学、3年編入学などの多様な入学者選抜制度の積極的導入、産学共同研究の実施、一般市民向け公開講座や社会人向け専門研修の実施などが挙げられる。

このような、当時の世界や日本社会の変化に対応すべく新しい大学像を創ろうとする意図は、モデルプランと同時に発行された『広島国際情報工科大学（仮称）整備基本計画策定調査報告書』に掲げられた、以下の4点からなる新大学整備の基本理念に表れている。

① 国際交流のメッカとなりうる世界に開かれた大学を目指す。

② 実学重視の教育を目指す。

③ 社会的評価の高い大学を目指す。

④ 国際平和と人類の幸福の達成に資する深い教養を持つ人材の養成を目指す。

（3）モデルプランの検討

モデルプラン発表と同じ年の1987年6月、第四次全国総合開発計画が閣議決定され、その中で地方中枢都市における高等教育研究機能の充実が目標の一つに掲げられる。これを契機に、広島市の大学設立の動きが加速した。まず同年11月、国土庁の「学園都市・地区基本計画策定調査」の地域指定を受け、国土庁と広島市が共同で「広島国際情報工科大学（仮称）整備検討調査」に着手する。この中で広島都市圏の大学教員と中四国地方の企業を対象に、モデルプランに対する意見調査が実施され、その結果を受けてモデルプランの再検討とさらなる具体化が行われるが、芸術学部創設の案はこの時に出たものである。調査結果をまとめて翌1988年3月に発行された『広島市立大学（仮称）創設に向けて』によると、科学技術の進歩が人類に多大な恩恵をもたらした反面、深刻化している「核兵器の出現にみるような人類の脅威となる問題」「資源・環境問題」「人間疎外などの問題」に対して、原爆の廃墟から復興した広島が「文化の薫り高い人間性豊かな都市」となり、「あるべき科学技術と人間社会の関係を回復する場所」としての役割を果たせるよう、その核として芸術学部の設置が提案されている。

『広島市立大学（仮称）創設に向けて』（1988年3月、国土庁大都市圏整備局、広島市、ほか）

ここで特筆すべきは、この時の芸術学部創設案には「序章」があることだ。既述のように、1978年策定の「広島市新基本計画」で掲げられた施策では「特色ある国立単科大学 一例えば美術工芸大学・外国大学などの誘致を促進」とあることに加え、1982年9月の市議会定例会でも広島市は誘致を想定する国立大学等について「芸術、工科大学など特色ある高等教育機関」と表明している。また1987年、モデルプランと同時に発行された『広島国際情報工科大学（仮称）整備基本計画策定調査報告書』の中でも、そのタイトルにある仮称の大学名にもかかわらず、他の地方中枢都市に比べて広島市の文化的機能および諸要素が弱いという分析結果が示されている。芸術学部設置の発案につながる素地は、モデルプラン策定の10年近くも前からあったのだ。同時に、中国地方以西に芸術が学べる国公立大学が極めて少なかったことも考えると、芸術学部設置の意義とそれに期待される役割は、本学にとっても広島市にとっても大きかったであろうことが推察される。

新大学の設置主体や設置場所の具体的検討がなされたのもこの時期である。設置主体については当初、広島市が設置主体となる公立大学方式と、学校法人が設置主体となり国もしくは地方公共団体が協力する公私（国公私）協力方式が選択肢に挙げられた。そして検討の結果、広島市が目指す「国際平和文化都市」の創造に資するのにより適していること、学校法人に比べて開学資金や優れた教員を確保しやすいため早期開学が可能であること、さらに運営経費の財源確保や学生募集も容易であることなどから、公立大学方式が採用された。前述の調査報告書のタイトルに「広島市立大学（仮称）」とあるのはこのためである。

設置場所については、選定するにあたり2つの視点が示された。まず、目指す大学像の実現にふさわしい環境と十分な敷地を有すること。そして、国際化、情報化、産業の高度化など、広島市の発展に寄与するにふさわしい場所であることだ。当初は中区東千田町の広島大学本部跡地を含めた8カ所が候補に挙がったが、検討の結果、1988年11月に、広島市の国際化・情報化への寄与、産業の高度化への寄与、都市開発面への寄与が最も期待されるという理由から、広島西部丘陵都市（現「ひろしま西風新都」）学術研究地区が最有力候補となった。この背景には、広島市が1986年5月に「広島西部丘陵都市建設基本計画」を、1989年11月には「広島西部丘陵都市建設実施計画」を策定していたことがあり、新大学の設置場所は、西部丘陵都市の学園都市（アカデミック・リサーチパーク）として発展することが期待されていた。

大学キャンパスイメージプラン（『広島市立大学（仮称）創設に向けて』pp. 91-92）

大学キャンパスイメージ（『広島市立大学（仮称）創設に向けて』p. 93）

このような調査・検討を経て、『広島市立大学（仮称）創設へ向けて』の発行から半年後の1988年9月には、開学時期を1994年4月、設置場所を西部丘陵都市内に決定。翌1989年4月には広島市企画調整局内に市立大学設立準備室が設置され、いよいよ開学に向けた最終段階に入ることとなる。

（4）開学へ向けた最終段階

市立大学設立準備室は設置初年度、3人体制で始動した。大学設立という広島市にとっては「前人未踏」の一大事業を前に、まさに「手探り」で歩みを進めていった。まずは全国の公立大学の視察・調査から着手し、そして運営体制構築、人選、予算確保、施設整備など開学実現までの階段を一歩一歩昇っていく。同時に設立準備室自体の体制も年を追うごとに強化され、当初は3人であったのが翌1990年度には5人、91年度には9人、92年度には15人、そして開学前年度の93年度には23人となる。

設立準備室設置と同じ1989年の11月には「広島市立大学（仮称）設立準備委員会」が設置された。これにより、有識者の見地からも検討できる体制が確立される。設立準備委員会は委員長の田中郁三氏を筆頭に、以下の8名で構成された。

【委員】

田中 郁三（委員長）	前東京工業大学長
猪瀬 博	学術情報センター所長
田中 隆莊	広島大学長
平山 郁夫	東京藝術大学長
福田 歓一	明治学院大学長
福島 隆義	広島市助役

【顧問】

井内 慶次郎	東京国立博物館長
林 忠雄	自治医科大学理事長

（順不同、敬称略、肩書は当時のもの）

設立準備室職員が当時使用していた名刺。下半分には本学のジオラマの写真が

広島市立大学（仮称）設立準備委員会（1994年1月18日、赤坂プリンスホテルにて）。前列中央が平岡敬広島市長、その左隣がのちの初代学長・田中隆莊氏、右隣が田中郁三委員長

また1990年7月には、カリキュラムの構築や教員の選考など、より専門的で具体的な事項を検討する組織として、同委員会専門部会も設置される。この専門部会は以下に示すとおり、新大学の3学部の分野に通じた他大学の研究者らがメンバーとなっている。

【部会長】

田中 郁三	前東京工業大学長

【委員】

大藪 雅孝	東京藝術大学美術学部教授
河合 秀和	学習院大学法学部教授
当麻 喜弘	東京工業大学工学部教授

西川 亮　　広島大学文学部教授
福井 爽人　東京藝術大学美術学部教授
吉田 典可　広島大学工学部教授
白崎 徹也　広島市企画調整局長

（順不同、敬称略、肩書は当時のもの）

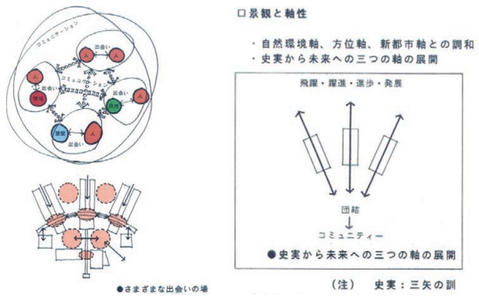
開学に向けた具体的な動きは順調に進み、1991年7月には「広島市立大学（仮称）基本構想」を策定。この中で、「科学と芸術を軸に世界平和と地域に貢献する国際的な大学をめざす」ことを基本理念とし、国際学部、情報科学部、芸術学部の3学部構成であること、また、学部の充実を待って大学院と「国際平和研究所」を設置することとしている。広島市は同月中に文部省および自治省へ基本構想を説明し、今後の進め方について協議している。開学直前の1992年から1993年にかけても、数回にわたり文部・自治両省と、開学に向けた検討の進捗状況や新大学の体制などについて協議を重ね、1993年4月に大学設置認可申請書を提出した。

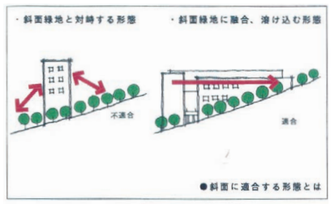
『広島市立大学（仮称）基本構想』（1991年7月、広島市）

『広島市立大学設置認可申請書』（1993年4月、広島市）

並行して、準備委員会および専門部会と連携しながら、カリキュラム構築、教員選考、運営体制構築、規定制定なども進む。当時、広島大学附属図書館長を務めながら新大学国際学部のカリキュラム構築や教員選考に関わっていた藤本氏によると、設立準備の段階から大学院設置構想もあったため、大学院教育も見据えた上で、推薦や公募による優秀な研究者の採用に力を注いでいたという。また、すでに業績を十分に積んだ重鎮の研究者はもとより、多様なバックグラウンドを持つ勢いある若手研究員の採用も積極的に行った。選考はもっぱら研究業績の評価と面接によって行われたが、時には応募者2名を同時に面接したり、英語担当教員の選考では英語での面接を課したりするなど、新大学を充実させるために工夫を凝らしていたことがうかがえる。一方、当時設立準備室に所属していた志賀氏は、教員公募にあたって「広島の宣伝」も意識したと言う。とりわけ県外の人は広島に対して「観光で訪れる街」としての印象を強く持っていると感じたため、「暮らす街」としても魅力があることを新大学と併せて「宣伝」したと、当時を振り返る。こうして教員選考にはかなり力を入れた甲斐あってか、開学時にはそうそうたる教員陣がそろっていると話題になっていたと、志賀氏は述懐する。

カリキュラム構築では、新しい構想に基づく大学であるため、多くの「これまでにない課題」に取り組んだ。例えば国際学部では、科目名一つとっても、旧来の科目名ではなく新学部の構想に相応しい斬新な科目名を考案した。また、新しい学際的なカリキュラムの構築のためには、指導法などに関して人文科学、社会科学それぞれの分野において特有の「慣習」があったり、そこから生じる研究者間の見解にも違いがあったため、こうした違いを整合し、埋めるところから始めなければならなかった。3学部の教員が協力し合って考案した全学共通科目では、分野の全く異なる3学部の学生が興味を持つような内容を見出だし、3学部の教員が協働して





『広島市立大学（仮称）基本設計説明書』（1991年12月、広島市ほか）（左上から時計回りにp. 3、p. 5、p. 11）

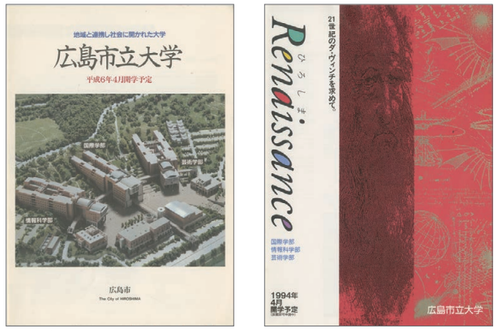
開講できる科目を考案した。学部内であれ学部間であれ、それまで異分野で活躍してきた教員らが時間をかけて議論を重ね、見解の相違を乗り越えて新しい形を模索するのは、新構想に基づいた大学の創設には避けられない「宿命」だったのだろうと、藤本氏は振り返る。しかしこうした努力の積み重ねがあったからこそ、分野の全く異なる3学部の学生が互いに影響し切磋琢磨し合えるという、独特の環境を備えた今日の広島市立大学がある。過去の学生の中には、国際学部を卒業し芸術学研究科に進んだ学生や、情報科学部で学んだ知識と在学中に身近にあり影響を受けた芸術をうまく融合させて、自身のビジネスに生かしている卒業生もいる。これらは、前述の開学前からの努力が実を結んだ例だろう。

キャンパス自体の準備も進む。まず1991年10月に造成工事が、翌1992年11月に校舎建設工事が始まる。1991年12月に作成された『広島市立大学（仮称）基本設計説明書』を見ると、建築計画の基本理念には、キャンパスが「豊かな出会いの場」となることが掲げられている。人と人、人と空間、人と情報、人と文化、人と自然が出会う環境を整え、広島市の都市像「国際平和文化都市」と本学の基本理念「科学と芸術を軸に世界平和と地域に貢献する国際的な大学」を体現しようとの理念で、これは実際、キャンパス設計のあちこちに見て取れる。本学を訪れるとまず、門の代わりに広い階段があり、それを上ると青々とした芝生に覆われた中庭が広がって、開放感を与えてくれる。その中庭に向かって集まるように配置された3学部の建物（学部棟）は、人と人との出会いや交流、団結を表す。学部棟は2階部分と3階部分が曲線状のコリドール（回廊）で互いにつながっており、図書館へも空中回廊でつながるなど、空間を生かした設計となっている。各学部棟は斜面を生かした奥行きのある設計で、周囲の自然と調和している。なお、本学の校舎はのちに、1997年度「ひろしま街づくりデザイン賞」の建築物・工作物部門で表彰されている。受賞理由は「丘陵地の立地条件を生かし、大規模な建築群を有機的に配置し、周辺の自然環境と調和した、まとまりのある空間を形成している」ことであった。これは、計画時の基本理念が体現された証であるだけでなく、それが高く評価された結果である。

造成中の本学敷地（1993年2月、大段徳市氏撮影、広島市市民局文化スポーツ部文化振興課所蔵）

建設中の学部棟（1993年10月撮影）

開学が近づくと、受験者確保に向けて新大学の宣伝も始まる。全国の高校に案内を送付したり、設立準備室の職員らが地元の予備校を訪れ、新大学の説明をするなどした。しかし、文部省から大学設置認可が下りるまでは入試日程や入試科目など公にできない情報も多く、広報活動はもちろんのこと、新大学に関心を持った受験生や市民からの問い合わせにも苦慮したという。



大学紹介リーフレット（1993年発行、A4サイズ）

開学約3カ月前の1993年12月21日、文部省から大学設置認可が下り、年が明けると入学試験が始まる。1月に国際学部・情報科学部の推薦入試、2月に国際学部・情報科学部の前期試験と芸術学部の学力・実技検査、3月に国際学部・情報科学部の後期試験が行われた。また、当時は本学の校舎が未完成であったため、これらの入学試験は広島市立看護専門学校（中区）、広島大学東千田キャンパス（中区）、広島経済大学（安佐南区）、東区・安佐北区のスポー

ツセンターで実施されている。全ての試験を合わせた総受験者数は、国際学部5,692名、情報科学部2,190名、芸術学部692名の計8,574名。競争倍率が最も高かったのは国際学部前期試験で、定員60人より50人多い110人を合格としたものの、受験生が3,751人だったため、実質の競争倍率は34.1倍となった。設立準備室長の石原道雄氏は毎日新聞（1994年1月29日付）の取材に対し「入試センター試験が（大学設置認可が年末だったため利用できず）いらないなど、併願しやすい条件だからだろうが、予想以上の人気。国公立大にはまだ少ない芸術学部や国際学部を設置したこともよかった」と話している。

1993年12月21日、文部省の遠山高等教育局長から設置認可状を受け取る平岡敬広島市長（1993年12月22日付中国新聞、写真提供：中国新聞社）

この新しいキャンパスに最初の一歩をしるしてほしい

広島市立大学 4月開学

平成6年度入学試験 1月19日水から出願受け付け

広島市広報紙『ひろしま市民と市政』1994年1月1日号、p. 2

そして1994年4月12日、国際学部99名、情報科学部202名、芸術学部82名、計383名の第1期生を迎え、中区のアステールプラザにて入学式が執り行われた。設立準備委員会委員として本学の設立準備に関わってきた田中隆莊・初代学長は「栄えある第1期生として、歴史と伝統をつくり、本学の将来を開拓する責務がある。立派な国際人となり、世界平和と地域に貢献できる素養を身に付けてほしい」と訓示。平岡敬・広島市長は「夢と希望を抱く皆さんが広島に集い、大学を拠点として活動し、そこから生まれるさまざまな思想、文化を世界に向けて発信するよう期待する。自然に恵まれた広島を愛し、後世に残る立派な学風をつくり上げてほしい」と式辞を述べた。「広島市新基本計画」で大学誘致が謳われてから約15年。広島市立大学の歴史の幕開けである。

<参考資料>

広島市（1978）『広島市新基本計画 ―国際平和文化都市をめざして―』

広島市企画調整局（1987）『広島国際情報工科大学（仮称）モデルプラン』

広島市企画調整局（1987）『広島国際情報工科大学（仮称）整備基本計画』

国土庁大都市圏整備局、広島市、ARPA・K地域計画・建築研究所（1988）『広島市立大学（仮称）創設に向けて』

広島市（1989）『第3次広島市基本計画　1989―2000』

広島市（1991）『広島市立大学（仮称）基本構想』

広島市都市整備局建築部営繕第二課、佐藤総合・中電技術設計共同企業体（1991）『広島市立大学（仮称）基本設計説明書 計画概要書』

広島市（1991）『広島市立大学（仮称）施設整備計画』

<取材協力>

喜多川寛氏（公益財団法人広島平和文化センター常務理事）

志賀賢治氏（広島平和記念資料館長）

藤本黎時氏（広島市立大学名誉教授・第2代学長／広島大学名誉教授）

2. 年表で見るこれまでのあゆみ

本学開学から20年間の主なできごとを年表とコラムで紹介する。（コラム内の肩書は当時のもの）

	本学のできごと	社会のできごと
1994年度		
4月	開学。田中隆莊初代学長就任（1日）	
	第1回入学式（以後、入学式は毎年4月に開催）（12日）	
	市長講演会（以後、1998年度まで開催）（15日）	
6月	開学記念式典および坂井利之京都大学名誉教授開学記念講演（14日）	
7月	福田歓一明治学院大学長開学記念講演（29日）	
8月		アストラムライン開通（20日）
10月	平山郁夫東京藝術大学長開学記念講演（5日）	
	第12回アジア競技大会に286名の学生がボランティアとして参加。また同大会に合わせて芸術展開催やインターネットでの競技結果発信も実施	第12回アジア競技大会広島開催（2～16日）
12月	第1回市大祭および第1期生の森記念植樹（17～18日）	
1月		阪神・淡路大震災発生（17日）
3月		地下鉄サリン事件発生（20日）

第1回入学式と初代学長就任

1994年4月、広島市立大学が開学した。同月12日には、広島市中区のアステールプラザ大ホールにおいて第1回入学式が執り行われ、383名の第1期生のほか、来賓、保護者、教職員ら、合わせて約1,000人が参列した。初代学長に就任した前広島大学長の田中隆莊氏は「しっかりとした専門学力を身に付けて、それを土台にして、物事の全体を見る目と全体の核心をとらえる能力を養ってほしい」と訓示した。さらに同月15日には平岡敬・広島市長が「新入生に語る」と題して、新入生を対象に講演を行った。

開学記念講演会

開学1年目には、年間を通じてさまざまな開学記念講演会が開催された。講演者には、国際、情報、芸術の各分野の著名人であり、また本学開学や広島平和研究所開設に尽力するなど本学との関わりも深い方々を招聘した。まず開学記念式が開催された6月14日は、坂井利之・京都大学名誉教授が「情報科学の発展と展望」と題して講演。その後、7月29日には福田歓一・明治学院大学長が「21世紀への修行 一世界を展望して」と題した講演を、10月5日には平山郁夫・東京藝術大学長が芸術展および「アジアのなかの日本」と題した講演を行い、学内外からの多くの参加者が聴講した。

第１回市大祭

12月17日と18日の両日、第１回市大祭が開催された。開学１年目とあって第１期生のみで構成された大学祭実行委員会が中心となり、2カ月にわたって準備。当日はクラブ・サークルによるステージや展示、模擬店でにぎわった。また、学生と教職員による「第１期生の森記念植樹」も併せて実施された。以来、市大祭は恒例行事となり、現在でも毎年秋に２日間にわたって開催されている。

4.15
広報ひろしま
市民と市政
広島市立大学が開学しました

広島市広報紙『ひろしま市民と市政』1994年4月15日号の表紙は産声を上げたばかりの本学が飾った

1995年度

7月	オープンキャンパス（以後、毎年開催）（26日）	
9月	ソーラー式屋外壁時計設置（23日）	
10月	「長崎平和の鐘」の贈呈・序幕式（31日）	
11月	第２回市大祭（18～19日）	
12月	桜植樹祭（20日）	
1月		第１回ひろしま男子駅伝開催（21日）
		第51回ひろしま国体開催（1996年1月26日～10月17日）
3月	第１工房棟完成	
	西南師範大学（中国）と学術交流協定を締結（27日）	

「長崎平和の鐘」贈呈・除幕式

被爆50周年のこの年、日本労働組合総連合会と同長崎・広島両県連合会から「長崎平和の鐘」が広島市に贈呈され、次代を担う若者を育てる場所である本学に設置された。そして10月31日には、関係者らが見守る中、贈呈・除幕式が執り行われた。2010年の本学法人化に伴い広島市から本学へ無償譲渡されたこの鐘は、毎年広島・長崎両市の平和記念日や卒業式の日に打鐘している。広島原爆記念日の打鐘式には、本学の夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」の受講生も参列する。

桜植樹祭

田中学長が、新入生を桜の花で迎えようと、大学正面の斜面へのソメイヨシノの植樹を提案したところ、賛同した多くの教職員より多額の寄付金が集まった。この年の12月20日の植樹祭で植えられた23本の桜は、今でも毎年春にはきれいな桜並木となり、新入生を出迎えてくれる。

西南師範大学との学術交流協定締結

広島市の友好都市・中国四川省重慶市にある西南師範大学との間で、本学にとって初めての学術交流協定が調印された。同年中、本学３学部から教員各１名ずつが西南師範大学で１カ月の研究活動を行い、また、西南師範大学美術学部の李白玲助教授（中国画）が本学で３カ月間、研究と作品制作を行った。西南師範大学は2005年７月に西南農業大学と合併して西南大学となったが、本学とは継続して教員や学生の相互派遣など学術交流が続いている。

第2、3回（1995、1996年度）の入学式は本学体育館で挙行。現在のように講堂で行われるようになったのは第4回（1997年度）から

1996年度

5月	第２～４工房棟完成	
10月	講堂完成（7日）	
11月	第３回市大祭（2～3日）	
12月		原爆ドームと厳島神社が世界遺産に認定（7日）

講堂完成

開学３年目の1997年10月７日、講堂の竣工式が行われた。建築面積1,993.10㎡、延床面積2,542.81㎡で、大ホール（841席）と小ホール（244席）からなるこの講堂には、250インチと150インチのハイビジョン対応大型スクリーンや４室の同時通訳室、電動収納式の講義椅子と机など、多目的な使用が可能な設備を備えている。また、潮隆雄教授がその総合計画・制作指導を手がけた、５万メートルの光ファイバーを利用した大ホールの舞台緞帳をはじめ、エントランスホールの壁面レリーフ（若山裕昭助教授、南昌伸講師、永見文人助手の制作）、入り口近くの三日月形の池にある御影石の懸樋（細井良雄教授のデザイン）など、本学芸術学部教員の作品も随所にちりばめられた広島市立大学ならではの講堂が完成した。

緞帳（左）や壁面レリーフ（右）など芸術学部教員の作品が講堂に彩りを添える

1997年度

4月	散策道「山辺の道」完成（10日）	消費税5%に引き上げ（1日）
5月	ハノーバー専科大学（ドイツ）と学術交流協定を締結（30日）	広島市と韓国・大邱広域市が姉妹都市提携（2日）

6月	大学院設置認可申請書を文部大臣へ提出（30日）	
8月	本学関係者やバス会社などにより「西風新都中央線の開通を祝う集い」開催（27日）	
10月	「西風新都中央線」一部開通により新バス路線（アストラムライン大塚駅～本学）および大学正面玄関近くのバス停新設（1日）	
	第４回市大祭（18～19日）	
11月	「フォーラム　21世紀への創造」および明石康国連事務次長講演会（12～13日）	
12月	大学院設置を文部大臣が認可（19日）	
1月	学歌完成（7日）	
2月		長野オリンピック開催（7～22日）
3月	第１回卒業式（以後、毎年３月開催）(23日)	
	同窓会発足（23日）	

ハノーバー専科大学と学術交流協定を締結

本学２番目の学術交流協定が５月30日、ドイツのハノーバー専科大学との間で調印された。ハノーバー市は1983年に広島市と姉妹都市提携を結んでおり、本学も開学以来、教員や研究員らの相互交流を行っていた。調印式に引き続き、今後の交流発展を願って、芸術学部棟東側においてハノーバー市を代表する樹木である菩提樹の記念植樹も行った。この協定締結以来、教員・学生の相互派遣、教員の交換授業の実施、共同展覧会の開催、さらには本学芸術学部との共同による学術交流協定10周年記念誌の発行など、本学において最も活発な学術交流の一つとなっている。

国際平和フォーラム開催

読売新聞社、日本放送協会との共催で「フォーラム　21世紀への創造」平和フォーラム広島セッションが、11月12日に本学で開催された。本学が主催する本格的な国際フォーラムとしては初めてのものとなるこの行事には、1994年ノーベル平和賞受賞者のシモン・ペレス元イスラエル首相、同年のノーベル文学賞受賞者で作家の大江健三郎氏、そして平岡敬・広島市長がパネリストとして参加。1,000名を超える聴講者を迎えたフォーラムでは、ペレス氏の基調講演に続いて、パネリストらが「21世紀の平和と創造的多様性 一摩擦を乗り越えて、若者へのメッセージ」をテーマにパネルディスカッションを行った。また、翌13日には明石康・国連事務次長を迎えて「21世紀の平和秩序を求めて 一国連と日本の役割」と題した講演会も開催した。

学歌完成

第１期生を送る卒業式に合わせ、広島市立大学の学歌が完成。制定にあたっては学内で学歌制定委員会が設置され、「100年後も歌える」「人類の基本的なテーマをとらえている」「卒業式や入学式で歌えると同時に、愛唱歌としても歌える」などの方針を打ち立てた。詩人・小川英晴氏の作詞、若尾裕・広島大学助教授の作曲による学歌「旅立ちの詩（うた）」は、この年の第１回卒業式で斉唱され、後援会により作成されたCDが卒業生に配られた。

第１期生の就職活動に合わせて作られた「求人のお願い」パンフレット

田中学長（左）と談笑する学歌の作曲者・若尾裕氏（左から2番目）と作詞者・小川英晴氏（同３番目）

1998年度

4月	大学院修士課程開設（1日）	
	広島平和研究所開設（1日）	
5月		広島市とカナダ・モントリオール市が姉妹都市提携（4日）
9月	猪瀬博東京大学名誉教授大学院開設記念講演（9日）	
10月	第５回市大祭（24～25日）	
	広島県高等教育機関等連絡会議に入会（29日）	
12月	クラブハウス新棟を整備（1日）	
2月		秋葉忠利広島市長就任（23日）
3月		NATO軍によるユーゴスラビア空爆開始（24日）

大学院修士課程開設

広島市立大学開学前より構想にあった大学院開設が、ついに実現した。大学院構想は開学初年度の1994年12月に設置された「広島市立大学大学院設置準備委員会」を中心に検討が重ねられ、1996年の基本構想第１次案（４月）および第２次案（10月）の策定、翌1997年６月の文部省への大学院設置認可申請、そして同年10月の設置認可を経て、この年の４月、145名の修士課程（2000年度より「博士前期課程」）第１期生を迎えるに至った。また９月９日には、東京大学名誉教授で文部省学術情報センター所長の猪瀬博氏を迎え、「日本は自信と抱負を持て」と題した記念講演も行われた。

『広島市立大学大学院修士課程基本構想』(1998年２月、広島市立大学)

1999年度

4月		エール・エールＡ館開業（20日）
5月		西瀬戸自動車道（しまなみ海道）開通（1日）
6月	大学院博士（後期）課程設置協議書を文部大臣へ提出（30日）	
9月		東海村JOC臨界事故発生（30日）
10月	第６回市大祭（30～31日）	

11月	初の自衛消防訓練（学生３名が一日消防隊員）(9日)	
12月	大学院博士（後期）課程設置を文部大臣が認可（22日）	

大学院博士（後期）課程設置を文部省が認可

博士後期課程まで擁する総合大学の設立は、1987年３月に「広島国際工科情報大学（仮称）モデルプラン」がまとめられた時点ですでに構想にあったが、この年、前年に開設された修士課程の修了者が出る時期に合わせ、博士後期課程開設に向けた動きが最終段階に入った。６月に博士後期課程設置協議書を文部省に提出し、12月には設置認可が下りた。３研究科からなる博士後期課程のうち、国際学研究科と情報科学研究科では昼夜開講制を導入し、社会人が仕事を続けながら学べる体制も整えるなど、特色あるものとなっている。翌年６月16日には講堂大ホールにおいて、山口大学長で数学者の広中平祐氏を迎えて記念講演「人生での出会い 一学問をめざして」を開催。「広島市新基本計画」で大学設置が謳われてから約20年の時を経て、待望の総合大学完成となった。

2000年度

4月	藤本黎時第２代学長就任（1日）	
	大学院博士後期課程開設（1日）	
6月	広中平祐山口大学長博士後期課程設置記念講演（16日）	
7月		二千円札発行（19日）
10月	第７回市大祭（28～29日）	
11月		第15回国民文化祭・ひろしま2000開催（2～12日）
12月	モハメド五世大学（モロッコ）と学術交流協定を締結（12日）	
1月	ハワイ大学マノア校（米国）と学術交流協定を締結（11日）	中央省庁再編（6日）
3月		芸予地震発生（24日）
		ユニバーサル・スタジオ・ジャパン（USJ）開園（31日）

第２代大学長就任

2000年１月12日の学長選挙を経て、４月に藤本黎時・第２代学長が誕生。就任時、藤本新学長は「田中前学長のリーダーシップの下で発展した大学を継承し、さらに充実、発展させ、同時に大学の国際化と地域社会への貢献を目指したい」と抱負を語っている。また田中隆莊・初代学長は５月31日、定年を迎えた他６名の教員とともに、本学初めての名誉教授称号を授与された。

田中隆莊初代学長（前列左から３番目）と藤本黎時新学長（同４番目）らが出席した本学初の名誉教授称号授与式

ハワイ大学マノア校と学術交流協定を締結

2001年１月、広島市の姉妹都市であるハワイ州ホノルル市近郊にあるハワイ大学マノア校と、学術交流協定を締結した。ハワイ大学マノア校との学術交流は開学当初からその可能性が模索されており、開学直後から重ねていた現地訪問や協議がついに実を結ぶ運びとなった。本学とハワイ大学マノア校の交流は、学生の相互派遣や夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」などを通じて今も継続している。

2001年度

4月	大学組織改編（1日）	紙屋町シャレオ開業（11日）
9月	本学博士号第１号誕生（25日）	東京ディズニーシー開園（4日）
		アメリカ同時多発テロ発生（11日）
10月	第８回市大祭（27～28日）	広島高速４号線開通（2日）
11月	国際学部川田順造教授が紫綬褒章を受章	

大学組織改編

大学機能の充実と強化を目的として、この年、大学組織が改編された。まず教学部長の職務が廃止され、代わりに学長補佐（2003年度より「副学長」）が１名から２名になり、それぞれ総務と教務を担当することとなった。また、教学部と学部事務室となっていた事務組織も事務局として一本化された。

2002年度

4月	大学広報誌刷新（1日）	
5月		2002FIFAワールドカップ開催（5月31日～6月30日）
8月		国立広島原爆死没者追悼平和祈念館開館（1日）
9月		初の日朝首脳会談開催（17日）
10月	第９回市大祭（26～27日）	
11月		ひろしまドリミネーション開始（15日）
12月	広島市立大学大学院完成記念講演会「わが国の産業構造の変化と広島経済のあり方」(6日)	
3月		イラク戦争勃発（20日）

大学広報誌刷新

開学２年目に創刊された大学広報誌が刷新された。創刊以来、大学正門にある平岡敬・元広島市長揮毫の石標がその題字に使用されてきた広報誌『広島市立大学』は、この年の４月に発行された通巻26号から『West Breeze』と誌名を変えた。新誌名は本学の位置するエリア「西風新都」に由来している。2013年度にはさらに一新され、それまでA4サイズで10ページ前後の構成であったものが、ジャバラ折りとなった。

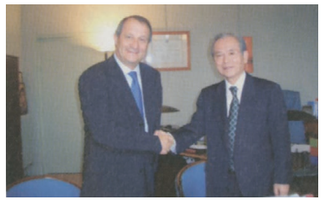
創刊号（上段左）、誌名が『West Breeze』となった通巻26号（上段右）、そしてジャバラ折りとなった通巻59号と2014年度発行の開学20周年記念特別号（下段）

2003年度

4月	産学官連携推進室を設置（1日）	重症急性呼吸器症候群（SARS）流行（日本政府が指定感染症に指定）
	学長補佐を廃止し副学長を設置（1日）	
5月		個人情報保護法成立（23日）
6月	オルレアン大学（フランス）と学術交流協定を締結（4日）	有事制法（武力攻撃事態対処関連３法）成立（6日）
7月		広島みなと夢花火大会開始（26日）
8月	チュニス・アルマナール大学（チュニジア）との学術交流協定締結（28日）	
10月	第10回市大祭（25～26日）	

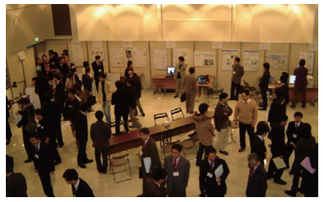
オルレアン大学と学術交流協定を締結

フランスのオルレアン大学との学術交流協定が６月に調印され、10月には藤本学長が現地を訪問し、あらためて調印式が行われた。14世紀初めに開学したオルレアン大学は15,000人を超える学生を擁する総合大学で、オルレアン市に進出している日本企業が多いことから、特に理工学部は日本との関わりが深い。協定締結以来、本学からは毎年学生を派遣し、活発な学術交流を行っている。



産学官連携推進室設置

教育研究成果の地域社会への還元をより充実させるべく、この年、新たに「産学官連携推進室」が設置された。同年、その新組織が中心となって開催された初めてのイベントの一つが「リエゾンフェスタ」である。リエゾンフェスタは本学の研究を広く地域の市民や産業界に公開し、産学官連携を推進することを目的として、全学部の協力を得て開催するイベントで、現在も年１回の頻度で開催している。



現在も毎年開催されるリエゾンフェスタ

2004年度

10月	第11回市大祭（30～31日）	新潟県中越地震発生（23日）
11月	同窓会関東支部設立（17日）	新紙幣発行（1日）
3月	西京大学校（韓国）と学術交流協定を締結（15日）	マリーナホップ開業（17日）
		愛知万博（愛・地球博）開催（2005年3月25日～9月25日）

西京大学校と学術交流協定を締結

３月15日、本学の藤本学長ら一行が韓国ソウルにある西京大学校を訪問し、本学にとっては韓国の大学とは初めてとなる学術交流協定に調印した。西京大学校には日本語学科、デザイン学科、美容芸術学科などが開設されており、日本への留学を望む学生も多い。以来、本学と西京大学校の間では、国際学部との留学生相互派遣や、芸術学部との共同展覧会開催など、活発な交流が続いている。

広島市広報紙『ひろしま市民と市政』2004年1月1日号では開学10周年を迎えた本学が表紙を飾った

2005年度

4月		JR福知山線脱線事故発生（25日）
8月		郵政民営化をめぐり衆議院解散（8日）
10月	アラヌス大学（ドイツ）と学術交流協定を締結（12日）	
	第12回市大祭（29～30日）	
11月	同窓会関西支部設立（26日）	
12月	ベルリン・バイセンゼー芸術大学（ドイツ）と学術交流協定を締結（9日）	

アラヌス大学およびベルリン・バイセンゼー芸術大学と学術交流協定を締結

この年、ドイツの2大学と学術交流協定を結んだ。ノルトライン＝ヴェストファーレン州にあるアラヌス大学は、芸術学と社会学を専門とする私立大学。芸術で社会と個人の発達と変革を目指すという、特色ある教育理念を掲げている。ドイツの首都にあるベルリン・バイセンゼー芸術大学は、1946年に旧東ベルリンに開学。東西ドイツ統一後の1991年に現在の名称となり、500名を超える学生を擁する芸術大学である。ともに芸術系に特化した大学であることから、特に本学の芸術学部との交流が盛んである。

2006年度

4月	浅田尚紀第3代学長就任（1日）	
7月		広島平和記念資料館本館と世界平和記念聖堂が国の重要文化財に（5日）
10月	第13回市大祭（28～29日）	
11月	西南大学（中国）と学術交流協定を締結（17日）	
2月		広島平和記念公園の中央部分が国の名勝に（翌年3月に指定部分が公園全体に拡大）（6日）
		年金記録問題発覚（16日）

第3代学長就任

2006年4月、情報科学部長であった浅田尚紀教授が第3代学長に就任した。日本の大学、特に国公立の大学では珍しい40代での学長就任となった。浅田新学長は就任時、「知の拠点」として成長してきた本学の教育と研究の品質をさらに向上させながら、社会や地域への貢献を通じて公立大学としての存在感を高めることが自らの役割だと、抱負を語った。

浅田尚紀新学長（右）から名誉教授称号を授与される藤本黎時前学長（左）

西南大学と学術交流協定を締結

本学が1996年3月に学術交流協定を結んだ西南師範大学は、2005年7月に隣接する西南農業大学と合併し、西南大学として新たなスタートを切った。これに伴い本学は西南大学との協定をあらためて締結し、さらにこれまでは教員同士に限られていた相互交流の範囲を学生まで拡大することを決定。11月17日、西南大学の王小佳学長ら7名が本学を訪問し、学術交流協定書の更新と、学生交流に関する覚書の締結を行った。

2007年度

4月	教員の職名を変更（助教授が准教授、助手が助教となる）（1日）	
	「広島市立大学の分煙化に関する基本方針」を策定（11日）	
7月	社会連携センターを設置（6日）	新潟県中越沖地震発生（16日）
10月	第14回市大祭（27～28日）	日本郵政公社民営化（1日）

社会連携センターを設置

2003年に設置された産学官連携推進室が、その機能をさらに拡充させるため、この年の7月に「社会連携センター」に改組された。これにより、開学前から構想に含まれていた産学共同研究や一般市民に開かれた教育研究活動が、一層推し進められる体制が整ったことになる。2010年の法人化の際にはセンター内に「連携推進室」と「プロジェクト研究推進室」が設置され、今日ではさまざまな産学官共同プロジェクトや公開講座を実施するなど、本学の地域社会貢献に欠かせない組織となっている。

2008年度

4月	国際関係学院（中国）と学術交流協定を締結（4日）	
9月		リーマンショック発生（15日）
10月	第15回市大祭（25～26日）	
2月	広島修道大学と包括協定を締結（19日）	
3月	梨花女子大学校（韓国）と学術交流協定を締結（4日）	
	広島東洋カープと企業インターンシップ実施に係る覚書を締結（10日）	
	広島大学と包括協定を締結（16日）	

国際関係学院と学術交流協定を締結

本学はすでに広島市の友好都市・重慶にある西南大学と学術交流協定を結んでいたが、昨今の中国の目覚ましい経済発展を受け、首都・北京にある大学との協定締結を推す声が学内で高まり、国際関係学院との協定締結の運びとなった。国際関係学院は1949年に開学した大学で、国際政治、国際経済、IT、英語、日本語、フランス語などのコースが設けられている。また、留学生への中国語教育にも力を入れていることから、本学との学術交流は双方の教育研究活動に大いに資するであろうことが期待され、協定締結に至った。

梨花女子大学校と学術交流協定を締結

近年、本学から梨花女子大学校を含めた韓国への留学希望者が増加し、そして梨花女子大学校からの夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」への参加者も増加していたことから、2009年3月に梨花女

国外だけでなく広島県内の他大学とも協力関係を築いた

子大学校との学術交流協定締結が実現した。1886年開学の梨花女子大学校は韓国初の女子大で、20,000人を超える学生を擁する総合大学である。国内外の大学との交流も盛んで、現在は英語のみによる学部プログラムも実施されていることなどから、本学とも活発な学術交流が期待される中での協定締結となった。

広島東洋カープと企業インターンシップ実施に係る覚書を締結

広島東洋カープと本学の間で3月10日、ドミニカ共和国にあるカープアカデミーでの本学学生の企業インターンシップに係る覚書が締結された。同年中にさっそくインターン生第1号が派遣された。半年にわたるドミニカ滞在中は、アカデミーのさまざまな業務に従事するほか、インターン生がそれぞれ新たな取り組みをするなど充実したプログラムに発展し、現在も続いている。

2008年1月10日、広島東洋カープの松田元オーナーとブラウン監督が国際学部生らとの討論会のため来学。これがカープアカデミー・インターンシップ実現のきっかけとなった

2009年度

4月		MAZDA Zoom-Zoom スタジアム広島開場（1日）
5月		裁判員制度施行（21日）
7月	大学案内刷新（1日）	
8月		民主党が衆議院選挙で第1党に（30日）
10月	第16回市大祭（24～25日）	
1月	公立大学法人広島市立大学設立認可申請書を総務大臣および文部科学大臣へ提出（26日）	
3月	財団法人大学基準協会の定める大学基準に適合と認定（12日）	
	公立大学法人広島市立大学の設立を総務大臣および文部科学大臣が認可（19日）	

大学案内刷新

大学案内が大幅リニューアルされた。これまでのA4冊子に比べ、A5サイズのリニューアル版では学生生活の様子がよりわかりやすいよう写真が豊富に使われ、表紙も鏡面仕上げとなった。2013年発行の2014年度版大学案内では再改訂された。

開学後に発行された1995年度版（上段）、鏡面仕上げとなった2010年度版（下段左）、そしてさらに刷新された2014年度版（下段右）

2010年度

4月	大学法人化（1日）	
	浅田尚紀理事長・学長就任（1日）	
9月	安佐南区役所と地域連携協力に関する協定を締結（27日）	
10月	ウェブサイトを大幅リニューアル（1日）	
	第17回市大祭（23～24日）	
11月	広島市および日本IBM株式会社東京基礎研究所とICT地域連携プロジェクトの実施に関する協定を締結（9日）	旧広島市民球場解体開始（29日）
12月		東北新幹線全線開通（4日）
3月		東日本大震災発生（11日）
		九州新幹線鹿児島ルート全線開通（12日）

大学法人化

2010年4月1日、本学が法人として生まれ変わったのを記念し、「公立大学法人広島市立大学」のプレートの除幕式が執り行われた。本部棟入口に掲げられたこの銅蟲製のプレート（1200mm×350mm）は、芸術学部長の若山裕昭教授がデザインし、同学部の学生らが制作したものである。

公立大学法人広島市立大学の設立に向けて始動したのは2005年。2004年4月1日の地方独立行政法人法の施行に伴う、公立大学法人制度の創設を受けてのことであった。公立大学法人制度は、国立大学の法人化と同様、大学の教育研究の特性を踏まえつつ、自主自律的な環境の下で、地域社会の要請に応え優れた教育や特色ある研究に積極的に取り組む、個性豊かな魅力ある大学づくりを図ることを目的として創設された制度である。

2005年、本学では「広島市立大学将来計画」を策定し、改革の取り組みを示した。その翌年には、学外の有識者で構成された運営協議会、およびその下に設置された将来計画検討専門委員会において、本学の現況評価と課題整理がなされ、本学のあり方に関する提言が「広島市立大学のあり方検討報告書」としてまとめられた。さらに2007年には、これらの将来計画や検討報告書に示された提言に基づいた「広島市立大学改革実施計画」を作成。本学として実施すべき新たな項目を加え、以後10年間の大学改革の取り組みとした。

そして2008年9月、運営協議会による「広島市立大学の法人化の基本方針について」の答申を受け、翌10月、大学事務局内に「公立大学法人制度設計委員会」（浅田学長を委員長とする13名で構成）、および事務局総務課内に法人化担当の部署を設置。人事給与制度や財務会計制度の構築、中期目標・中期計画等の策定など、法人化に向けて検討・準備を重ね、2010年4月1日、公立大学法人広島市立大学が誕生した。

法人化と同じ年にウェブサイトも一新（上が旧ウェブサイト、下が現在のもの）

法人化により、広島市ではなく法人である本学がその設置・管理を行うことになったため、新たに理事会、経営協議会、教育研究評議会などの組織が設置された。理事会は理事長（学長）と理事５名（副学長２名、事務局長、学外者２名）で構成され、法人の重要な事項の審議、経営協議会および教育研究評議会との相互調整、理事長（学長）の意思決定のサポートを役割とする。経営協議会と教育研究評議会は、前者が法人の経営、後者が大学の教育研究に関して、それぞれ重要事項を審議する機能を持つ。

これらの主要な組織以外にも、新たに設置された組織・役職がある。まず、法人経営および大学運営に係る重要なプロジェクトを迅速かつ効率的に実施するため、特命担当として副理事を設置した。理事のうち２名が副学長の職務を担っているが、それぞれの理事（副学長）の下には１名もしくは２名の副理事を設置。企画・戦略担当理事（副学長）の下には広報担当副理事および社会連携担当副理事を、教育・研究担当理事（副学長）の下には入試担当副理事が置かれた。2014年度現在、副理事は５名となり、それぞれ広報担当、入学試験・就職担当、社会連携担当、情報担当、学生担当となっている。

また、理事会と各学部・研究科・研究所との情報共有を図るため、運営調整会議も設置。理事長（学長）、理事（副学長）２名、理事（事務局長）、各学部・研究科長３名および広島平和研究所長の計８名で構成され、法人経営および大学運営に係る重要事項の連絡調整等を行っている。

事務局組織も大幅に再編され、法人経営の企画・調整を行う企画室、教職員の人事給与や予算・決算に関する事務を行う総務財務室が新設された。また、既存の部局を名称変更・体制強化して、各学部・研究科および附属施設の運営を支援する教育研究支援室と、教務関係事務や学生生活を支援する教務学生室も設置された。

こうして本学は法人化に合わせて運営組織を再編し、新生「公立大学法人広島市立大学」として始動する体制を整えた。社会情勢の変化に迅速かつ的確に対応しつつ、教育研究活動や社会貢献をより活発に行い、これまで以上に特色と魅力ある大学となることを目指し、新たなスタートを切ったのである。

安佐南区役所（上）、広島市および日本 IBM（下）など、高等教育機関以外の組織との連携も強固に

2011年度

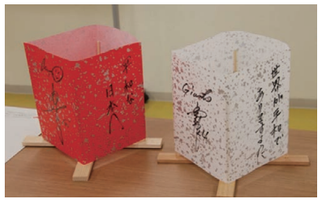
4月		松井一實広島市長就任（10日）
6月	プレ・オープンキャンパス（26日）	
7月		アナログ放送終了（東日本大震災被災地の岩手、宮城、福島の３県は翌年３月31日に終了）（24日）
7月		FIFA女子ワールドカップで日本代表が初優勝（17日）
8月	マツダスタジアムで平和メッセージを発信（6日）	
	オープンキャンパス（7日）	
10月	レンヌ第２大学（フランス）と学術交流協定を締結（4日）	
	第18回市大祭（29～30日）	
	ミニ・オープンキャンパス（29日）	

オープンキャンパス３本立て

これまで夏に開催していたオープンキャンパスが、6月の「プレ・オープンキャンパス」と、秋の大学祭と同時開催される「ミニ・オープンキャンパス」と併せて、３本立てになった。3つのオープンキャンパスにはそれぞれサブタイトルが付けられており、プレ・オープンキャンパスは主に高校３年生を対象とした「いちだい進学準備編」、オープンキャンパスは学年を問わず幅広く高校生を対象とした「いちだい徹底研究編」、そしてミニ・オープンキャンパスは高校1、2年生を対象とした「いちだい入門編」となっている。

マツダスタジアムで平和メッセージを発信

2009年と2010年の8月6日、本学学生がMAZDA Zoom-Zoomスタジアム広島（略称：マツダスタジアム）でキャンドルを灯して平和のメッセージを発信する取り組みをしたが、この年は53年ぶりに原爆記念日に広島でプロ野球公式戦が行われたことから、広島東洋カープ・読売巨人軍両チームのメンバーも参加する一大イベントとなった。試合前のセレモニーでは、両軍の監督、コーチ、選手らがメッセージをしたためたとうろうを本学学生の代表が受け取る「とうろう流し委任式」を実施。また、スタジアムに続く遊歩道入口横の広場にピースキャンドルを設置し、平和記念公園の「平和の灯」から採火した火を灯して、広島が持つ意味を考え、平和への思いをキャンドルの火に託した。



レンヌ第２大学と学術交流協定を締結

本学のフランスの高等教育機関との学術交流については、2003年にすでにオルレアン大学と協定を締結しているが、大学院レベルでの学術交流に重点を置くことを目的として、この年、レンヌ第２大学と学術交流協定を結んだ。きっかけは、レンヌ第２大学の卒業生で、のちに同大学で教鞭を執ったこともある教員が、本学国際学部にいたことだった。日仏それぞれの言語や文化に関心の高い学生を中心に、今後ますますの交流の発展が期待されている。

2012年度

5月	短期留学プログラム開始のため西南大学との協定内容を更新（30日）	東京スカイツリー開業（22日）
7月	日本公認会計士協会中国会と連携・協力協定を締結（31日）	
10月	第19回市大祭（27～28日）	
11月	国連平和大学（コスタリカ）と学術交流協定を締結（6日）	サンフレッチェ広島が初のJ1年間総合優勝（24日）
2月	短期留学プログラム開始のため国際関係学院との協定内容を更新（22日）	
	上海大学（中国）と学生交流に関する覚書を締結（25日）	
3月	短期留学プログラム開始のため西京大学校との協定内容を更新（6日）	

短期留学プログラム開始のため
西南大学・国際関係学院・西京大学校との協定内容を更新

本学は中国の西南大学および国際関係学院、そして韓国の西京大学校とそれぞれ学術交流協定を結び、特に西南大学とは「西南師範大学」であった時から数えると20年近く交流を継続してきた。しかし近年、本学からこれらの大学への留学生派遣数が受入数に比べて少ないことが懸念され、その改善策として、夏季休暇を利用した1カ月程度の短期留学制度が創設されることとなった。これにより、個々の学生の修業計画やニーズに合った留学が可能となった。

国連平和大学と学術交流協定を締結

国際学部教員が前年に国連平和大学を視察訪問したことがきっかけで、この年、本学と国連平和大学は学術交流協定を締結することとなった。中米コスタリカにある国連平和大学は、1980年に国連総会決議によって設立された大学院大学。国連平和大学には国際法や環境問題、平和教育などのコースがあり、平和学で修士号および博士号が取得できる本学との協定締結は、双方にとって相乗効果を生み出すことが期待される。翌2013年4月8日には、国連平和大学アムル・アブダラ副総長とプロジェクト・マネジメント・ヘッドのトーマス・クランプマーケル氏が来学し、アブダラ副総長による国連平和大学についての講演も開催された。

2013年度

4月	青木信之理事長・第4代学長就任（1日）	ひろしま菓子博2013開催（4月19日～5月12日）
	国際交流推進センター開設（1日）	
6月	コミュニケーションマーク発表（14日）	
9月		広島東洋カープが球団史上初のクライマックスシリーズ進出（25日）
10月	サテライトキャンパス開設（6日）	
	第20回市大祭（26～27日）	
12月		特定秘密保護法成立（6日）
		サンフレッチェ広島がJ1で2連覇（7日）

第4代学長就任

第4代学長に、副学長であった青木信之・国際学部教授が就任。法人化後の理事長兼学長としては2代目となる。就任にあたって青木新学長は、在学生、卒業生、保護者、そして広島市民の誇りとなる大学、広島市になくてはならないと思える大学にしていくことを目標に掲げた。

サテライトキャンパスのオープニング・セレモニー

サテライトキャンパス開設

広島市中区にあった広島平和研究所が2013年1月に安佐南区の大学キャンパスへ移転し、同年10月6日、移転前のスペースが本学初のサテライトキャンパスとしてオープンした。当日は開設セレモニーに引き続き、英語eラーニング講座の開講式が行われ、市民ら約70人が参加。このサテライトキャンパスは研究会や公開講座などさまざまな行事に活用され、本学の市内中心部の活動拠点となることが期待されている。

国際学部・国際学研究科

1. 国際学部長・国際学研究科長のメッセージ

広島市立大学は、2014年6月14日をもって創立20周年を迎えました。

この20年間を振り返ると、我が国の経済社会も海外の情勢も大きく変化してまいりました。我が国は、高度経済成長が終焉し、バブル崩壊の後、20年に及ぶ長いデフレ不況が続き、構造的にも少子高齢化社会に突入し、経済の行き詰まりを打開すべく財政再建、経済の軌道修正に官民挙げて注力しているところです。海外の情勢をみると、米ソ冷戦の構造が終結し、米国のリベラリズムに端を発したグローバリズムの考え方が世界的に波及し、市場原理主義をベースとした金融自由化の嵐は、2008年リーマンショックといった未曾生の金融危機をもたらす結果となりました。また、2011年には、東日本大震災が発生し、原子力発電所の事故を含めて日本全体が大きな災害を被りました。また、大学を取り巻く環境も大きく変わり、国公立大学は法人化され、自主独立の位置付けとなり、教育・経費面でも厳しい自己責任を持つようになってきています。

こんな中で、国際学部でも、創立以来、約2千人に及ぶ学部生、大学院生を卒業生として社会に出してきました。20年の学部の歴史の中で、さまざまな経験をしてきたユニークな人材が、自由闊達な雰囲気の中で広く深く研究活動や教育活動、社会貢献活動に勤しんできたと思います。山本雅・元学部長、荒井貞光先生、中島潤先生、友枝啓泰先生、田中隆二先生、西川亮先生、松村幹男先生といったすでに鬼籍に入っておられる先生方や、途中で他の大学に転籍された先生方、現役の先生方も含めて、それぞれ在任中にユニークな個性を存分に発揮して研究、社会貢献をベースに学生たちを教育し、現在の国際学部・国際学研究科を築き上げてきたと思っています。おかげさまで、入試倍率や就職内定率も比較的に安定しており、ようやく、広島市をはじめ国際社会にも通用する元気な人材を輩出することができるようになりました。この間、2006年には、学部内での改革を行い、基礎演習に加え2年生の発展演習を追加したり、学部の3系列制度を改め、5プログラムに編成替えし、それまであった系列間の壁を取り払い、学際性をより重視して専門科目を取りやすい形と致しました。また、国際交流については、学術交流協定大学との留学制度に加え、短期の語学研修を中心とした複数の研修プログラムやスタディツアーを企画・実行してきました。国際学部にも、一般入試の段階から海外からの留学生が入学し協定校からの短期受け入れも進める一方で、当方からも協定校に学生たちを安定して派遣できるようになりました。また、国際学研究科に関しても、協定校からの推薦入試制度を取り入れて、海外から優秀な大学院生を受け入れるよう努めております。大学院の学位として、国際学、学術に加え、平和学の学位取得を開始致しました。もちろん、まだ解決しなければならない問題はありますけれども、漸進的に改革してまいります。

2013年9月に、2020年の東京オリンピック開催が決定致しました。現在、近隣諸国との関係が微妙になっており、中東・極東において情勢が不安定でありますし、世界的にも経済の不況が継続している中では、国際学部にとっても明るい話題であると考えます。国際学部の5プログラムに標榜している「多文化」「共生」「平和」「公共政策」「国際ビジネス」「コミュニケーション」という、学部の教育理念に基づいた未来に必要となるべき象徴的な言葉が、今後の将来にわたってどんどん輝きを増してくるように思います。

今後、50周年、100周年、200周年と継続して、国際学部で経験を積んだ仲間たちがどんどん社会に出ていき、活躍してくれることを祈ってやみません。

国際学部長・国際学研究科長
二村　英夫

2. 概要

(1) 国際学部設置の経緯

1993年4月に文部省へ提出した大学設置認可申請書（同年12月に再補正申請）には、

① 国際社会への貢献

② 地域の要請

③ 国際関連学部の収容力拡大

の3点から国際学部の設置趣旨が述べられている。世界的に国家間の相互依存関係が深まる中で、我が国が将来にわたって平和を維持し、発展していくためには、異文化間の理解を深め、諸外国とのより一層の信頼と協力関係を築いていくことが不可欠で、異文化を理解しさまざまな価値観を認め合える国際的な視野と、一分野の専門だけに偏らない総合的な視野を持った人材育成が必須である。このような事情を背景に、外国語能力やコミュニケーション能力の向上の必要性、中小企業も含めた海外進出企業の増大を受けて出てきた貿易・投資等の専門知識や交渉力を有した国際的な人材育成に対する地域からの強い要請、中四国地方での国際関連学部の収容力が低い現状から、国際学部設置の必要性が述べられていた。

(2) 学部・学科教育の特色

設置申請における国際学部の教育目標（養成する人材像）は、次のとおりである。

「現代社会は、多様な政治、経済、文化構造を持ちつつも同時代的に関係し合う国際社会であり、国際的視野を持った人材があらゆる分野で求められている。

本学部は知識を単に分析の手段としてではなく、国際社会における現実の問題解決に生かすことのできる確固たる国際人、すなわち現代社会における時代的要請である国際的視野を持ち、国際社会に貢献できる人材を養成する。」

教育研究の特色としては、次の6つを挙げている。

① 国際的視野の下で、広く世界各地域の文化、政治、経済について学際的な教育研究を行う。

② 日本研究を含め、アジア、アメリカ等の地域研究を充実させ、国際社会における日本と世界諸地域の多面的な比較研究を行う。特に、異文化理解を理論的にも現実的にも深めることを狙いとする。

③ 母国語教員の直接指導やLL、AV、CAIなどの最新の語学教育機器を活用して、英語の実践的運用能力を高める教育研究を行う。

④ 実践的な情報処理能力を高める教育研究を行う。

⑤ 全学生に対して、ゼミナールに所属させ、卒業論文を完成させることにより、大学教育の集大成及び学生と指導教員との交流を重視した教育研究を行う。

⑥ 学生が総合的で多角的な学習ができるよう、特定の専門教育を早期に固定させず、科目履修に当たっては、3群のいずれか一つに重点を置きながら、他の群及び地域研究からも科目を履修させ、できるだけ広い分野の学習を促す。

開学当初、専門教育科目は、専門基礎科目と専門科目からなっていた。1年次に履修する専門基礎科目には、各専門科目への入門的側面と、異なる専門科目を統合する包括的側面を有する科目（「総合比較文化論」および「総合国際政治経済論」）と、「基礎演習」があった。2年次から履修する専門科目には、国際文化、国際政治、国際経済と幅広い分野を網羅する3系列の科目群を設け、加えて全学生が自由に選択できる英語特論と地域研究も設けていた。そして、3、4年次に必修の専門演習、さらに卒業論文で集大成とするカリキュラムであった。

卒業要件単位数は、開学時に135単位、1998年度に131単位、2012年度に129単位、2014年度に128単位となった。

開学当初、ドイツ語、フランス語、中国語、ハングルの4つで構成されていた第2外国語は、1996年度にロシア語、アラビア語、1998年度にイタリア語、2000年度に日本語（留学生向け）、2005年度にスペイン語を加えた。現在、国際学部の学生は、イタリア語を除き英語を含めた9言語を学べる。

1999年度に専門基礎科目の「総合比較文化論」と「総合国際政治経済論」を「国際研究入門Ⅰ・Ⅱ」に名称変更し、現代の多様で複雑な国際社会を多角的な視点から総合的、学際的に学べるように充実させた。開学10年を経た2004年度には、大学財政の緊縮化傾向（人員の削減化傾向）の影響と、それ以上に、教育課程をさらに進化させて「学生個々の自主性とそれぞれの将来の目標を尊重した柔軟な教育課程」にする目的で、カリキュラム検討を開始した。

具体的には、従来の国際文化・政治・経済の系列制度を廃止し、科目選択がより柔軟な履修方式の導入へと進展させ、広範な科目を5つないし6つに再編する方向とした。ほぼ同時期に「広島市立大学のあり方検討委員会」で、大学全体の将来計画が検討され、2006年1月には中間報告案が提示された。その案を学部でもさらに検討した結果、国際政治・平和、公共政策・NPO、多文化共生、言語・コミュニケーション、国際ビジネスの5プログラム構成とした。カリキュラムは、広範な分野を網羅する総合的入門科目である「国際研究入門」(1年次必修)、各プログラムの入門・専門科目、分野あるいは領域横断的な国際研究特講と英語特論、そして演習は1年次から4年次の各年次に設け、卒業論文で集大成とする形とした。また、5つのプログラム各々の特色とねらいを明確化し、各科目の位置付けや、各プログラム内外の他の科目との関連性が明確になるように試みた。

2007年度には専門基礎科目を「国際研究入門」、「基礎演習」、「発展演習」に、専門科目を5つのプログラムの科目群等に整理した。異質で多様な文化、言語、政治、経済、経営（ビジネス）などについての知識を、単なる情報としてだけでなく、問題の解決に役立つように統合された新しい知として身に付けるためである。世界各地域の違いのあり方を尊重し、共生の必要を理解できる国際的な感覚を備えることが求められているとの認識から、教育研究方針を、

① 「学際性」の実現に向けて
② 5つのプログラムの可能性
③ 少人数教育の魅力
④ 丁寧で適切なサポート体制

の4つにまとめ、多種多様な価値を受容し共生できる寛大な精神を養い、多面的、多角的に世界をとらえる国際人としての知識と問題解決能力を育むことを目指している。

(3) 国際学研究科設置の経緯

第1期生を送り出した1998年度、国際研究の先導的役割を担い、国際社会の問題点や課題を自ら発見し解決できる実践的な真の国際人の養成と、高度で先端的な国際研究に携わることのできる教育者・研究者の養成を目指して、修士課程（2000年度より「博士前期課程」）を開設し、さらに2000年度には博士後期課程を開設した。これにより修士・博士（国際学）もしくは修士・博士（学術）の学位が取得できるようになり、博士第1号は2003年9月、開学の年に学部1期生として入学してきた修了生に授与された。

2011年度には修士（平和学）の学位が取得できるように博士前期課程の教育課程を整備し、続いて2013年度には博士（平和学）の学位取得も可能になった。最初の修士（平和学）の学位は、2014年3月修了生に授与された。

(4) 研究科教育の特色

国際学研究科の特色は、次の4点に集約できる。

① 学際的教育・研究に適した授業科目の編成
② 国際性、学際性、実際性の重視
③ 社会人や外国からの帰国者および留学生の受け入れを見据えた半年単位のセメスター制の導入
④ 昼夜開講制の実施

博士前期の教育課程は1998年度設置当初、全研究科共通科目群のほかに、国際社会の広範な学問領域を横断的に研究する「国際社会研究科目群」、世界各地域について多面的・多角的に研究する「地域研究科目群」、そして複数の専門分野にまたがる総合演習形式の「総合セミナー」から構成されていた。「国際社会研究科目群」は「国際社会研究」「経済政策研究」「経営政策研究」「社会文化研究」「言語文化研究」の5科目群に、「地域研究科目群」は「アジア研究」「アフリカ研究」「ヨーロッパ研究」「アメリカ研究」「日本研究」の5科目群に大別された。「総合セミナー」は「総合国際社会研究セミナー」と「総合地域研究セミナー」の2つからなっていた。2003年度、「地域研究科目群」の「アフリカ」を「アフリカ・中東」に変更し、2006年度には「特別講義」を加えた。その後2009年度には、人員削減等の影響や学部との連続性を考慮し、教育課程の大幅な改編を行った。歴史、理論、政策の基本的な3領域を念頭に、多彩で学際的な教育研究内容の授業科目を選定し、「国際関係」「公共政策」「経営政策」「社会文化」「言語文化」の5研究群、さらに各研究群科目による横断的研究としての「平和研究」「地域研究」からなる立体的な構造によって、学際的な国際研究に取り組む構成とした。併せて「国際研究特講」も加えた。2010年度には、専門基礎科目の充実を図り、「総合セミナー」を廃止して、「学術研究の進め方」と「学術研究のための基礎統計」を開設した。2011年度には、修士（平和学）の教育課程を整備するため、平和学コア科目を設けた。

博士後期課程は開設以来、「国際社会研究分野」と「地域研究分野」から構成され、社会人のための昼夜開講制、留学生の積極的な受け入れ、徹底的な個別研究指導などの特色を持っている。

3. 年表で見るこれまでのあゆみ

1994年度

1月	公開講座「みずみずしい感性と新しい知性の風が吹く」（延べ参加者数239名）(26～27日)
3月	『広島国際研究』創刊

1995年度

6月	日本平和学会1995年度春季研究大会開催（17～18日）
9月	国際学部国際学科の教職課程認定申請［中一種免・高一種免（英語）］(30日)
11月	公開講座「情報生活の近未来」・インターネット体験会 ※情報科学部との共催（19日）
1月	国際学部公開講座「広島で世界を考えよう～脱国境時代の到来～」(延べ参加者数263名)(16・18～19日)

1996年度

4月	国際学部国際学科の教職課程認定［中一種免・高一種免（英語）］(1日)
10月	国際学部公開講座「テニスの実技」(27日)
11月	国際学部公開講座「背面跳び」(3日)
1月	国際学部公開講座「CALLコース」「異文化体験コース」(11日)

1997年度

9月	国際学部公開講座「ダブルスゲームの楽しみ方」(14日)
	国際学研究科国際学専攻の教職課程認定申請［中専免・高専免（英語）］(30日)
10月	国際学部公開講座「親と子のテニス教室」(19日)
11月	国際学部公開講座「音で知るアフリカ」(広島国際会議場、講師：川田順造教授、ウィーン大学教授・マインツ大学併任教授のゲハルト・クービック氏)(5日)

1998年度

4月	国際学研究科（修士（国際学）、修士（学術））開設
	国際学研究科国際学専攻の教職課程認定［中専免・高専免（英語）］(1日)
11月	国際学部公開講座「ダブルスゲームに挑戦」(8日)
1月	国際学部公開講座「日本経済のこれから」(26日)

1999年度

8月	国際伝統音楽学会第35回世界大会開催
9月	国際学部国際学科の教職課程認定申請［中一種免・高一種免（英語）］※教職免許法改正に伴う再課程認定申請（30日）
1月	国際学部公開講座「近代日本黎明期の国際関係」(平和記念館メモリアルホール)(26～27日)

2000年度

4月	国際学部国際学科の教職課程認定［中一種免・高一種免（英語）］※教職免許法改正に伴う再課程認定(1日)
5月	日本アフリカ学会第37回大会学術大会および総会開催（27～28日）
1月	講演会「近代日本黎明期の国際交流文化」(25日)
3月	公開講座「親子で楽しむテニス」(18日)

2001年度

12月	国際学部公開講座「イスラムのものの見方・考え方—2001年『国連・文明間の対話年』にちなんで」(20日)

2002年度

6月	国際学部公開講座「世界の平和のために」(6月22日～7月13日)
9月	国際学部公開講座「日本と開発途上国とのかかわり」(6～28日)
10月	国際学部公開講座「英語学習」(18～31日)
	国際学部公開講座「広島と地方都市の生活」(13～28日)
	国際学部公開講演会 平成13年秋 紫綬褒章受章者 川田順造教授「時代と学問 一学問は世の中の役に立つか」(30日)
12月	国際学部公開講演会「生き残りをかけた大学改革」「アメリカ文化とスクールカウンセリング」(2日)
	国際学部公開講座「新しい世界へ」(4～20日)

1月	国際学部公開講座「世界と日本」(8～25日)
	国際学部公開講座「芸術と政治外交の国際学」(毛利敏彦教授「ペリー提督はなぜ日本に来たか」、齋藤稔教授「国際学研究における芸術文化 ―平和希求の理念とその造形表現をめぐって」)(29日)
2月	国際学部公開講座「広島市の都市再生」(大野喜久之輔教授「市街中心地の再生を目指して」、櫟本功教授「広島経済を斬る」)(3日)
	国際学部公開講座(5～13日)
3月	国際学部公開講座「世界と日本」(1～15日)

2003年度

6月	文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に採択
7月	国際学部公開講演会「文化の国・フランス、グローバリゼーションと個別化」(2日)
	広島平和研究所との協力による夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」を開講(以後毎年開催)(7月27日～8月7日)
9月	国際学研究科博士後期課程で最初の博士学位授与
1月	国際学部公開講座「持続可能な社会を築くために ―21世紀の戦争から持続する平和へ」(1月14日～3月10日)

2004年度

6月	国際シンポジウム「ジェンダーと国民国家：日本についての歴史的考察」)(10～12日)
7月	「広島市立大学における教員の任期に関する規程」を改正し、国際学部の教員のうち、教授(ただし、知的財産管理担当に限る)について任期制を導入(28日)
1月	国際学部公開講座「持続可能な社会を築くためにII ―21世紀の環境と開発：人類の共生をめざして」(12～26日)
3月	広島市立大学公開講座「地域の芸術・文化教育による広島市の活性化をめざして」(3月25日～4月20日)

2005年度

10月	広島市立大学国際シンポジウム「進化する国際ビジネス」(15日)
	国際ビジネス研究学会第12回全国大会(15～16日)
1月	国際学部公開講座「持続可能な社会を築くためにIII ―21世紀の市民と人権：より公正な社会をめざして」(18～22日)
3月	第1回卒論グランプリ発表
	広島市立大学市民講座「市民と地域 ―大学との連携を探る」(9～30日)

2006年度

4月	国際学部専門科目5プログラムに改編
1月	国際学部公開講座「広島から考える国際化 ―市民とつくる公開講座」開催(1月24日～2月14日)

2007年度

7月	文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」に採択
	パレスチナのオリーブをテーマとした現代美術展Keep Hope Alive開催(4～16日)
9月	シティカレッジ「文明の形態学 ―すまいとしぐさと世界観」(9月15日～10月20日)
11月	「社会人の学び直し英語eラーニング講座」の開設(11～1月)
1月	2007年度国際学部公開講座「国際理解を深めるワークショップ」開催(吉田晴彦准教授「あなたはなぜ国際協力に関わるの？ ―国際協力の心理学」、吉江貴文講師「アンデス諸国における先住民の今」、加藤千代教授「グローバル化と伝統文化 ―年中行事のゆくえ」)(12・26～27日)

2008年度

10月	シティカレッジ提供講座「アジア、アフリカの多様な世界 ―そこに生きる人々の生活と信仰」(10月29日、11月5・12・19・26日)
11月	広島市立大学国際学部公開講座「国際交流って楽しいもの？」開催(16日)
2月	シンポジウム「伝統産業を現代に活かす」(6日)

2009年度

8月	広島東洋カープ企業インターンシップ(カープアカデミー)開始
10月	シティカレッジ提供講座「未来へ歴史・文化を伝える」(10月28日～11月25日)
11月	広島市立大学国際学部公開講座「異文化理解って何ですか？ ―言葉から広がる世界」(15日)
	国際学部公開研究会「冤罪事件における報道機関の役割 ―『志布志事件』の取材体験を例に」(27日)
12月	特別講義「アフリカ・コンゴ民主共和国の現状とNGOの支援活動」(7日)
1月	講演会「グローバル環境における経営革新」(22日)
	シンポジウム「国際会計基準(IFRS)の導入と企業の対応」(28日)
2月	広島東洋カープアカデミー・インターンシップ報告会(9日)

2010年度

5月	国際学部公開講演会「人類としての良心：人権、倫理的価値と国際政治」(24日)
6月	国際学部公開講演会「アウシュビッツとヒロシマ」(15日)
7月	国際学部公開講演会「合衆国における動物法とそのグローバルな意義」(12日)
8月	市大英語eラーニング講座を市内各公民館で開催(8月1～10月31日)
10月	市大英語eラーニング講座を市内各公民会で開催(10月3日～1月23日)
11月	シティカレッジ提供講座「現代アジアの変化と連続性」(4・11・18・25日)
	開発協力・平和構築公開講座(8日)
	国際学部公開講座「多文化共生って何ですか？ ―学ぶ気持ちで世界が変わる」(14日)
	国際学部特別コロキアム「芸術と経営 ―芸術の力とは」(22日)
1月	上映会・シンポジウム等連続企画「表現の臨界点」(1月28日、2月1・5・13日)
2月	国際学部公開講座「地域企業の国際会計基準(IFRS)への取り組み」(3日)
	国際学部特別コロキアム「東洋文献研究所の中国コレクションと中国研究」(21日)

2011年度

4月	国際学研究科において「平和学」の修士号取得が可能に(1日)
7月	「From Seoul to Hiroshima」広島市立大学・西京大学校国際交流展(5～8日)
	市大英語eラーニング講座(7月31日～10月23日)
10月	市大英語eラーニング講座(10月2日～1月22日)
10月	シティカレッジ「東日本大震災と私たち ―広島から考える」(10月27日～11月24日)
11月	国際学部公開講座「多様な中東・イスラム世界を学び・感じ・つなぐ」(20日)
	特別講義「青年海外協力隊というおシゴト」(28日)
	特別講義「サムライ日本プロジェクトに学ぶ地域ブランド術」(28日)
12月	特別講義「アシアナ航空の競争戦略と顧客重視戦略」(19日)
1月	国際学部公開講座「岐路に立つ国際会計基準(IFRS)」(23日)
3月	震災復興特別シンポジウム「災害復興・平和構築と市民の力」(17日)
	日本NPO学会第14回年次大会開催(17～18日)
	ハワイ大学マノア校 Matsunaga Peace Institute 所長　講演会(30日)

2012年度

6月	海外学術交流協定大学推薦入試開始
	アジア政経学会西日本大会(9日)
7月	特別公開講座「国際協力講座」(6日)
	特別公開講座「安全な海外ボランティア・スタディツアー体験のために」(9日)
9月	韓国・西京大学校(海外学術協定校)短期留学プログラム開始
11月	国際学部特別公開講演会「第二次世界大戦期のヨーロッパにおける性暴力」(12日)
12月	公開講座「災害を生き抜く ―世界の人々の経験から私たちが学ぶこと」(18日)
1月	公開セミナー「国際会計基準(IFRS)―公正価値測定の理想と現実」(21日)

2013年度

4月	国際学研究科において「平和学」の博士号取得が可能に

4. 歴代教員一覧

（1）過去在職教員

（在職期間について、年度途中の着任・離任の場合は年月を、そうでない場合は年度を示す。また、専門分野は本学在職時のもの。）

青木　薫
教育経営学
教授
1994年度～2004年度

池田　慎太郎
日本政治外交史
講師→助教授→准教授
2003年度～2011年度

岩田　一成
日本語学・日本語教育学
講師→准教授
2008年度～2013年度

大野　喜久之輔
比較経済学、比較経済システム論、不動産経済学、ロシア研究
教授
1994年度～2002年度

加藤　千代
中国民俗学、口承文芸研究
教授
1994年度～2008年度

川田　順造
アフリカ研究（人類学）
教授
1997年度～2002年9月

齊藤　哲郎
中国近現代史、思想・学術史
助教授→教授
1994年度～2005年度

潮崎　智美
会計学
講師→助教授→准教授
2002年度～2013年度

荒井　貞光
スポーツ社会学
教授
1994年度～2005年11月

猪口　純路
マーケティング論、流通システム論
講師→准教授
2005年度～2011年度

大井　健二
美術史、創作と人間
助教授→教授
1994年度～2011年度

小川　一仁
組織の経済学、実験経済学
講師
2005年度～2006年度

金澤　寛太郎
メディア論
教授
1994年度～1997年度

姜　範錫
国際関係史
教授
1994年度～2003年度

齋藤　稔
美術史、芸術学
教授
1997年度～2002年度

篠田　知和基
比較神話学
教授
2001年10月～2007年度

新垣　修
国際関係論
教授
2012年度～2013年8月

今永　清二
歴史学
教授
1994年度～1997年12月

大野　亜由未
比較教育学
助教授→准教授
2002年10月～2011年9月

嘉指　信雄
哲学
助教授→教授
1994年度～2001年9月

上村　直樹
アメリカ政治外交史、国際政治学
助教授→教授
1994年度～2011年度

吉　沅洪
臨床心理学、異文化間心理学
講師→助教授→准教授
2000年度～2011年度

坂井　秀吉
経済発展論、開発経済学
教授
1995年度～2006年度

嶋矢　志郎
情報経済論、比較文明論
教授
1994年度～2001年3月

瀋　俊毅
環境経済学、応用計量経済学
講師→准教授
2008年度～2012年度

土井　悠子
イギリス文学
助手→講師→助教授→准教授→教授
1994年度～2009年度

富永　憲生
日本経済論、現代日本経済史
助教授→教授
1994年度～2012年度

仲　重人
公共選択
助教授→教授
1994年度～2004年8月

野崎　亜紀子
法哲学
講師→准教授
2004年度～2012年度

ファルーク，オマール
比較政治体制論
教授
1994年度～2011年度

ベンソン，ジョン
国際労働経済学
教授
1994年度～1996年度

ミハイロバ，ユリア
国際関係史（日本とロシア）
助教授→教授
1996年度～2012年度

百瀬　宏
国際関係学、国際関係史学
教授
2000年度～2004年度

鈴木　健人
国際政治学、米国外交史、安全保障論
助手→講師→助教授→准教授
1994年度～2008年度

櫟本　功
経済政策論
教授
1996年度～2002年度

友枝　啓泰
文化人類学、ラテンアメリカ研究
教授
1996年度～2004年度

西川　亮
西洋哲学
教授
1996年4月

東野　篤子
国際関係史、ヨーロッパの国際関係
講師→准教授
2005年度～2009年度

福村　満
国際経営論
教授
1994年度～2004年度

堀内　正樹
社会人類学
助教授→教授
1995年度～2001年度

武藤　三千夫
美学、ヨーロッパ美学史
教授
1999年4月～2003年度

森山　工
文化人類学
講師→助教授
1994年度～1999年度

田中　隆二
フランス文学、フランス語学、日仏交流史
教授
1994年度～2003年度

ドブリュー，フィリップ
国際企業比較論
教授
1994年度～1999年度

鳥澤　円
法と経済学
講師→助教授
2003年度～2006年9月

中島　潤
国際経営論、多国籍企業論
教授
1995年度～1999年度

平井　友義
国際政治
教授
1994年度～1999年度

藤本　黎時
イギリス地域文化、アイルランド文化・文学
教授
1995年度～1999年度

松村　幹男
言語・文化研究（英語）
教授
1995年度～1996年度

毛利　敏彦
日本政治外交史
教授
1996年度～2002年度

山本　雅
アメリカ文学
教授
1994年度～2007年度

横山　剛
臨床心理学
助教授
1994年度～1999年度

吉澤　昇
教育哲学、西洋思想
教授
1999年度～2002年9月

吉本　佳生
国際金融論
講師
1994年度～1997年度

リナート，キャロル
社会言語論
教授
1994年度～2011年度

ルディムナ，クリスチャン
フランス文化論
教授
2004年度～2013年度

（2）教員略歴

（2014年4月1日時点在職者）

教授 青木（あおき） 信之（のぶゆき）
1959年生まれ。大阪府出身。1987年、広島大学大学院教育学研究科教科教育学専攻博士課程前期修了。博士（教育学）。1994年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野は英語教育学。これまでの本学での主な役職は、語学センター長（2004～2005年度）、副学長（教務・学生担当）（2006～2007年度）、副学長（企画・研究担当）（2008～2009年度）、理事・副学長（企画・戦略担当）（2010～2012年度）、理事長・学長（2013年度～）。これまでの主な担当科目は「コミュニケーション技法論」「英語科教育法」。

教授 赤星（あかほし） 晋作（しんさく）
1952年生まれ。熊本県出身。1980年、広島大学大学院教育学研究科博士課程前期教育行政学専攻修了。博士（教育学）。2005年度に本学着任（教授）。専門分野は教育経営学、教師教育学。これまでの本学での主な役職は、附属図書館長（2010～2012年度）、副理事（学生担当）（2014年度～）。これまでの主な担当科目は「教育経営学」「アメリカ教育論」。

准教授 飯島（いいじま） 典子（のりこ）
1965年生まれ。東京都出身。1998年、一橋大学大学院社会学研究科修了。博士（社会学）。2009年度に本学着任（准教授）。専門分野は中国近代史、華僑論。これまでの主な担当科目は「国際関係史（中国）」「中国文化論」。

准教授 池田（いけだ） 寛子（ひろこ）
1972年生まれ。広島県出身。2005年、京都大学人間・環境学研究科博士後期課程修了。博士（人間・環境学）。2001年度に本学着任（講師→助教授→准教授）。専門分野はイギリス・アイルランドの文学。これまでの主な担当科目は「イギリス文化論」。

准教授 板谷（いたや） 大世（たいせい）
1965年生まれ。愛知県出身。慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程単位取得退学。修士（法学）。1994年度に本学着任（講師→准教授）。専門分野は東南アジア研究。これまでの主な担当科目は「開発政治論」「政治学」「東南アジア研究」。

教授 井上（いのうえ） 泰浩（やすひろ）
1961年生まれ。山口県出身。2001年、ミシガン州立大学大学院（米国）マスメディア学専攻博士課程修了。博士（マスメディア学）。2001年10月に本学着任（講師→助教授→教授）。専門分野はメディア研究。これまでの主な担当科目は「マスメディア論」「メディアリテラシー」。

講師 今江（いまえ） 秀和（ひでかず）
1972年生まれ。大阪府出身。2004年、甲子園大学大学院人間文化学研究科博士後期課程単位取得満期退学。修士（生涯発達）。2013年度に本学着任（講師）。専門分野は臨床心理学。これまでの主な担当科目は「心理学」「教育相談論」。

教授 岩井（いわい） 千秋（ちあき）
1956年生まれ。広島県出身。1984年、テキサス大学エル・パソ校大学院（米国）言語科学研究科修士課程修了。博士（学術）。1994年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野は応用言語学。これまでの本学での主な役職は、評議会評議員（2006～2009年度）、国際学部長・国際学研究科長（2010～2011年度）、副理事（国際交流担当）（2012年度）、理事・副学長（教育・研究担当）（2013年度～）。これまでの主な担当科目は「応用言語論」。

教授 宇野（うの） 昌樹（まさき）
1952年生まれ。宮崎県生まれ、東京都出身。社会科学高等研究院（フランス）博士課程中退。修士（社会学）。2002年度に本学着任（教授）。専門分野は文化人類学。これまでの本学での主な役職は、語学センター長（2006～2009年度）。これまでの主な担当科目は「エスニシティ論」。

准教授 卜部（うらべ） 匡司（まさし）
1976年生まれ。広島県出身。2007年、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期教育人間科学専攻修了。博士（教育学）。2012年度に本学着任（准教授）。専門分野は比較国際教育学。これまでの主な担当科目は「国際教育論」「教師論」。

教授 Wöhr（ヴェール，）, Ulrike（ウルリケ）
1962年生まれ。ドイツ・シュツットガルト出身。1996年、ハイデルベルク大学大学院（ドイツ）哲学部日本学専攻博士後期課程修了。Dr. phil.（哲学博士）。1995年度に本学着任（講師→助教授→教授）。専門分野は近現代日本のジェンダー史。これまでの主な担当科目は「日本研究」「ジェンダー論」。

准教授 王（オウ） 英燕（エイエン）
1977年生まれ。中国出身。2007年、京都大学大学院経済学研究科博士後期課程組織経営分析専攻修了。博士（経済学）。2009年度に本学着任（講師→准教授）。専門分野は組織行動学、人的資源管理論。これまでの主な担当科目は「経営組織論」「企業行動論」「人的資源管理論」。

教授 太田（おおた） 育子（いくこ）
1962年生まれ。広島県出身。2011年、スタンフォード大学大学院（米国）博士課程修了。J.S.D.（法学博士）。1994年度に本学着任（講師→助教授→教授）。専門分野は国際法、国際人権法。これまでの主な担当科目は「国際法」「国際人権法」。

教授 大東和（おおとうわ） 武司（たけし）
1951年生まれ。広島県出身。1980年、近畿大学大学院商学研究科商学専攻博士後期課程単位修得満期退学。商学修士。2000年度に本学着任（教授）。専門分野は多国籍企業論。これまでの本学での主な役職は、評議会評議員（2005～2009年度）、国際学部長・国際学研究科長（2006～2009年度）、過半数代表者（2010～2011年度）、国際学部副学部長・国際学研究科副研究科長（2012年度～）。これまでの主な担当科目は「多国籍企業論」「国際貿易論」。

准教授 大場（おおば） 静枝（しずえ）
1965年生まれ。神奈川県出身。2008年、ポワティエ大学大学院（フランス）人文社会科学研究科博士課程修了。博士（文学）。2014年度に本学着任（准教授）。専門分野はフランス文学、フランス地域文化論。これまでの主な担当科目は「フランスの文学と文化」「フランス文化論」。

教授 大庭（おおば） 千恵子（ちえこ）
1994年度に本学着任（講師→助教授→准教授→教授）。専門分野は国際関係史、東欧地域研究。これまでの主な担当科目は「民族国家論」「ヨーロッパ政治論」。

准教授 Carson（カーソン，）, Luke（ルーク）
1976年生まれ。アイルランド・ダブリン出身。2012年、ダブリンシティ大学大学院（アイルランド）教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。2014年度に本学着任

（准教授）。専門分野は異文化間コミュニケーション、心理学。これまでの主な担当科目は「異文化間コミュニケーション」。

准教授 柿木（かきぎ） 伸之（のぶゆき）
1970年生まれ。鹿児島県出身。上智大学大学院哲学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学。博士（哲学）。2002年度に本学着任（講師→准教授）。専門分野は哲学、美学。これまでの主な担当科目は「共生の哲学」。

准教授 金谷（かなや） 信子（のぶこ）
1962年生まれ。兵庫県出身。2005年、大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程修了。博士（国際公共政策）。2008年度に本学着任（准教授）。専門分野は非営利組織論、公共政策、社会福祉。これまでの主な担当科目は「非営利組織論」。

准教授 城多（きた） 努（つとむ）
1970年生まれ。東京都出身。エディンバラ大学（英国）スクール・オブ・マネジメント会計学専攻博士課程中退。修士（商学）。2005年10月に本学着任（講師→准教授）。専門分野は経営財務、公会計。これまでの主な担当科目は「財務管理論」「公会計論」。

教授 金（キム） 泰旭（テウク）
1970年生まれ。韓国ソウル出身。2003年、北海道大学大学院経済学研究科博士課程経営学専攻修了。博士（経営学）。2003年度に本学着任（講師→助教授→准教授→教授）。専門分野は経営戦略論、国際経営論、ベンチャー企業論、地域企業論。これまでの主な担当科目は「国際経営論」。

教授 金（キム） 栄鎬（ヨンホ）
1961年生まれ。東京都出身。2003年、明治学院大学大学院国際学研究科博士後期課程修了。博士（国際学）。2004年度に本学着任（助教授→准教授→教授）。専門分野は政治学、国際関係、現代韓国・朝鮮研究。これまでの主な担当科目は「国際関係史」「東北アジア政治論」「比較政治学」「ハングル」。

准教授 倉科（くらしな） 一希（いつき）
1971年生まれ。長野県出身。2004年、ニュージャージー州立ラトガース大学ニューブランズウィック校大学院（米国）修了。博士（歴史学）。2012年10月に本学着任（准教授）。専門分野はアメリカ外交史、国際関係史。これまでの主な担当科目は「国際関係史（アメリカ）」。

准教授 Gorman（ゴーマン）, Michael（マイケル）
1967年、米国ウィスコンシン州生まれ。2005年、タルサ大学大学院（米国）博士課程修了。博士（アメリカ文学）。2011年度に本学着任（准教授）。専門分野はアメリカ文学、文化研究。これまでの主な担当科目は「アメリカ文化論」「英米文学特講」。

教授 佐藤（さとう） 深雪（みゆき）
1953年生まれ。東京都出身。東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程後期中退。修士（文学）。1994年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野は日本文学、日本文化。これまでの主な担当科目は「日本文化史」「日本研究」。

講師 Shulatov（シュラトフ）, Yaroslav（ヤロスラブ）
1980年生まれ。ロシア・ハバロフスク出身。2005年、極東国立人文大学大学院（ロシア）博士後期課程歴史学専攻修了。博士（歴史学）。2010年、慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程政治学専攻修了。博士（法学）。2013年度に本学着任（講師）。専門分野は歴史学、政治学。これまでの主な担当科目は「国際関係史」「ロシア研究」「ロシア政治外交論」「ロシア語」。

准教授 城市（じょういち） 真理子（まりこ）
山口県出身。2009年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程文化表現論専攻修了。博士（文学）。2012年度に本学着任（准教授）。専門分野は美術史学（日本美術史）。これまでの主な担当科目は「日本美術史」「博物館資料論」。

教授 関村（せきむら） 誠（まこと）
1963年生まれ。岐阜県出身。1990年、ブルゴーニュ大学大学院（フランス）DEA取得課程（哲学）修了。1994年、東京藝術大学大学院美術研究科博士課程修了。博士（美術）。2006年、ブリュッセル自由大学大学院（ベルギー）博士課程修了。哲学博士。2004年度に本学着任（助教授→准教授→教授）。専門分野は美学、哲学。これまでの主な担当科目は「美学」「哲学」。

教授 曽根（そね） 幹子（みきこ）
1952年生まれ。広島県出身。2001年、安田女子大学大学院文学研究科博士課程前期教育学専攻修了。修士（文学）。1994年度に本学着任（助手→講師→助教授→准教授→教授）。専門分野はコミュニティスポーツ論、生涯スポーツ論。これまでの主な担当科目は「スポーツ文化経営論」「体育実技」。

准教授 高橋（たかはし） 広雅（ひろまさ）
1972年生まれ。北海道出身。2000年、東北大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士（経済学）。2003年度に本学着任（講師→助教授→准教授）。専門分野は理論経済学、行動経済学。これまでの主な担当科目は「マクロ経済学」「経済政策論」。

准教授 田川（たがわ） 玄（げん）
1965年生まれ。愛知県出身。2000年、一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。博士（社会学）。2003年度に本学着任（助教授）。専門分野は文化人類学、アフリカ研究。これまでの主な担当科目は「文化人類学」「アフリカ研究」。

教授 塚田（つかだ） 健一（けんいち）
1950年生まれ。東京都出身。1988年、ベルファスト・クイーンズ大学大学院（英国）社会人類学科博士課程修了。Ph.D.（社会人類学）。1994年度に本学着任（教授）。専門分野は民族音楽学、文化人類学。これまでの本学での主な役職は、評議会評議員（1996～1999年度）。これまでの主な担当科目は「音楽人類学」「アフリカ研究」。

教授 寺田（てらだ） 英子（ひでこ）
東京都出身。慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程単位取得満期退学。修士（商学）、修士（経済学）。1998年10月に本学着任（助教授→教授）。専門分野は交通経済学。これまでの主な担当科目は「経済学」「ミクロ経済学」「交通論」「財政学」「英語総合」「英語応用演習」「都市経済学」。

教授 中島（なかしま） 正博（まさひろ）
1950年生まれ。広島県出身。1982年、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校大学院（米国）博士課程水資源計画およびオペレーションズリサーチ専攻修了。Ph.D.（水資源計画）。1994年度に本学着任（教授）。専門分野は国際開発論、環境資源管理。これまでの本学での主な役職は、評議会評議員（2003年度）。これまでの主な担当科目は「開発と環境Ⅰ・Ⅱ」。

准教授 西田（にしだ） 竜也（たつや）
1969年生まれ。東京都出身。ハーバード大学大学院（米国）公共政策研究科博士課程国際安全保障専攻修了。博士（公共政策）。2010年度に本学着任（准教授）。専門分野は安全保障。これまでの主な担当科目は「国際安全保障論Ⅰ・Ⅱ」「HIROSHIMA and PEACE」。

教授 二村（ふたむら） 英夫（ひでお）
1954年生まれ。東京都出身。1983年、シカゴ大学大学院（米国）経済学研究科修了。修士（経済学）。1999年度に本学着任（教授）。専門分野は金融論、国際金融論。これまでの本学での主な役職は、評議会評議員（2006～2009年度）、国際学部副学部長・国際学研究科副研究科長（2010～2011年度）、国際学部長・国際学研究科長（2012年度～）。これまでの主な担当科目は「国際経済学入門」「金融論」「国際金融論」。

講師 古澤（ふるざわ） 嘉朗（よしあき）
1981年生まれ。愛知県出身。2011年、広島大学大学院国際協力研究科博士課程後期修了。博士（学術）。2014年度に本学着任（講師）。専門分野は国際関係論、紛争解決論。これまでの主な担当科目は「国際政治学」「紛争解決論」。

教授 山口 光明（やまぐち みつあき）

1962年生まれ。広島県出身。2002年、安田女子大学大学院文学研究科博士後期課程教育学専攻修了。博士（文学）。1994年度に本学着任（助手→講師→助教授→准教授→教授）。専門分野は健康心理学。これまでの主な担当科目は「健康心理学」「テニス」。

教授 湯浅 正恵（ゆあさ まさえ）

1962年生まれ。広島県出身。1995年、シェフィールド大学大学院（英国）国際学研究科博士課程修了。博士（国際学）。1994年度に本学着任（講師→助教授→准教授→教授）。専門分野は社会学。これまでの主な担当科目は「国際社会論」「社会学」。

教授 横山 知幸（よこやま ともゆき）

1961年生まれ。福岡県出身。1986年、広島大学大学院教育学研究科教科教育学専攻博士課程前期修了。教育学修士。1998年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野は翻訳研究。これまでの本学での主な役職は、語学センター長（2010年度～）。これまでの主な担当科目は「翻訳論」。

准教授 吉江 貴文（よしえ たかふみ）

1965年生まれ。長野県出身。2002年、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学修了。博士（文学）。2005年度に本学着任（講師→准教授）。専門分野は文化人類学。これまでの主な担当科目は「ラテンアメリカ研究」。

教授 吉田 晴彦（よしだ はるひこ）

1965年生まれ。大阪府出身。大阪大学大学院法学研究科博士後期課程中退。法学修士。1995年度に本学着任（講師→助教授→准教授→教授）。専門分野は国際関係論、国際協力論。これまでの主な担当科目は「国際関係論」「国際協力論」「平和と人権」。

教授 欒 竹民（ラン チクミン）

1952年生まれ。中国北京出身。1993年、広島大学大学院文学研究科博士課程後期文学専攻修了。博士（文学）。1994年度に本学着任（講師→助教授→教授）。専門分野は日本語学。これまでの本学での主な役職は、語学センター長（2002～2003年度）。これまでの主な担当科目は「言語比較論」。

講師 李 玲（リ レイ）

1983年生まれ。中国福建省出身。2013年、関西学院大学大学院博士課程後期課程商学専攻修了。博士（商学）。2013年度に本学着任（講師）。専門分野は国際マーケティング。これまでの主な担当科目は「マーケティング論」。

教授 渡辺 智恵（わたなべ ともえ）

1960年生まれ。広島県出身。1998年、バーミンガム大学大学院（英国）英語教授法修士課程修了。修士（MA in TESL/TEFL）。1994年度に本学着任（助手→講師→助教授→准教授→教授）。専門分野は英語教育学。これまでの主な担当科目は「通訳技法論」「CALL英語集中」「eラーニング英語」。

（3）在職期間一覧

（2014年度4月1日時点。年度途中の着任・離任の場合でも、その年度は在職期間として示す。）

氏名＼年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
青木　信之	1994																				2014
板谷　大世	1994																				2014
岩井　千秋	1994																				2014
太田　育子	1994																				2014
大庭　千恵子	1994																				2014
佐藤　深雪	1994																				2014
曾根　幹子	1994																				2014
塚田　健一	1994																				2014
中島　正博	1994																				2014
山口　光明	1994																				2014
湯浅　正恵	1994																				2014
欒　竹民	1994																				2014
渡辺　智恵	1994																				2014
富永　憲生	1994																		2012		
大井　健二	1994																	2011			
上村　直樹	1994																	2011			
ファルーク，オマール	1994																	2011			
リナート，キャロル	1994																	2011			
土井　悠子	1994															2009					
加藤　千代	1994														2008						
鈴木　健人	1994														2008						
山本　雅	1994													2007							
荒井　貞光	1994											2005									
齋藤　哲郎	1994											2005									
青木　薫	1994										2004										
仲　重人	1994										2004										
福村　満	1994										2004										
姜　範錫	1994									2003											
田中　隆二	1994									2003											
大野　喜久之輔	1994								2002												
嘉指　信雄	1994							2001													
嶋矢　志郎	1994						2000														
ドブリュー，フィリップ	1994					1999															
平井　友義	1994					1999															
森山　工	1994					1999															
横山　剛	1994					1999															
今永　清二	1994			1997																	
金澤　寛太郎	1994			1997																	
吉本　佳生	1994			1997																	
ベンソン，ジョン	1994		1996																		
ヴェール，ウルリケ		1995																			2014
吉田　晴彦		1995																			2014
坂井　秀吉		1995											2006								
藤本　黎時		1995										2005									
堀内　正樹		1995						2001													
中島　潤		1995				1999															
松村　幹男		1995	1996																		
ミハイロバ，ユリア			1996																2012		
友枝　啓泰			1996								2004										

氏名 ＼ 年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
櫟本　功			1996						2002												
毛利　敏彦			1996						2002												
西川　亮			1996																		
川田　順造				1997					2002												
齋藤　稔				1997					2002												
寺田　英子					1998																2014
横山　知幸					1998																2014
二村　英夫						1999															2014
武藤　三千夫						1999				2003											
吉澤　昇						1999			2002												
大東和　武司							2000														2014
吉　沅洪							2000											2011			
百瀬　宏							2000				2004										
池田　寛子								2001													2014
井上　泰浩								2001													2014
篠田　知和基								2001						2007							
宇野　昌樹									2002												2014
柿木　伸之									2002												2014
潮崎　智美									2002											2013	
大野　亜由未									2002									2011			
金　泰旭										2003											2014
高橋　広雅										2003											2014
田川　玄										2003											2014
池田　慎太郎										2003								2011			
鳥澤　円										2003			2006								
金　栄鎬											2004										2014
関村　誠											2004										2014
ルディムナ，クリスチャン											2004									2013	
野崎　亜紀子											2004								2012		
赤星　晋作												2005									2014
城多　努												2005									2014
吉江　貴文												2005									2014
猪口　純路												2005						2011			
東野　篤子												2005				2009					
小川　一仁												2005	2006								
金谷　信子															2008						2014
岩田　一成															2008					2013	
瀋　俊毅															2008				2012		
飯島　典子																2009					2014
王　英燕																2009					2014
西田　竜也																	2010				2014
ゴーマン，マイケル																		2011			2014
卜部　匡司																			2012		2014
倉科　一希																			2012		2014
城市　真理子																			2012		2014
新垣　修																			2012	2013	
今江　秀和																				2013	2014
シュラトフ，ヤロスラブ																				2013	2014
李　玲																				2013	2014
大場　静枝																					2014
カーソン，ルーク																					2014
古澤　嘉朗																					2014

5. 教育研究活動紹介

（1）教育

i. 全学共通系外国語科目の担当

国際学部は本学の全学共通系外国語科目のほとんどを担っている。英語科目に関しては、1996年度からコンピューターを使用した集中プログラムを開始し、2003年度からCALL英語集中を実施してきた。また、2006年度からは少人数・能力別クラスからなる「英語応用演習」の科目を開講した。

第２外国語科目では、開学時からあるドイツ語、フランス語、中国語、ハングルの４科目に加え、のちにロシア語、アラビア語、イタリア語、スペイン語を開講し、合計８科目のカリキュラムを備えた。また、2000年度からは留学生向けの日本語を開講した。

ii. 学部の構成 ―３系列から５プログラムへ

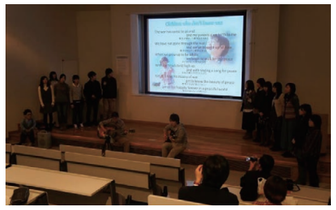
国際学部は開学時に国際文化、国際政治、国際経済の３つの系列科目群と英語・地域研究科目からなる教育研究体制で出発した。その後、2006年度に国際政治・平和、公共政策・NPO、多文化共生、言語・コミュニケーション、国際ビジネスの５つのプログラムで編成される教育研究体制に移行した。

また同年度には、２年次の「発展演習」を新たに開講することで、１年次の基礎演習、３年次の専門演習、４年次の卒論演習と併せて全学年の演習科目を整備した。３年次の専門演習、４年次の卒論演習は、学生が興味関心のある分野において特定の指導教員のサポートの下で研究を進めるゼミナールである。

iii. ゼミナール活動の例

○ 岩井千秋ゼミ

外国語、特に英語を中心に、言語が社会や国際交流に果たす役割について学習している。主なゼミのテーマは「広島市における言語サービス」、「グローバル化に伴う英語の機能と役割」、「映画を用いた語用論研究」など。また2009年度からは、近隣のおよそ８つの大学と連携して行う英語プレゼンテーションのイベント（Oral Presentation & Performance: OPP）にも参加している。「平和」を一つのコンセプトに、原爆詩の英訳の朗読、外国語の反戦歌、『はだしのゲン』の英語吹き替え（Dubbing）などに取り組み、その成果を多くの来場者の前で披露している。



「Anti-war Songs in the World」の発表

OPP イベント後に開催された他大学の学生との交流会

○ 金泰旭ゼミ

本ゼミの理念は「理論と実践の融合」。机上の勉強だけでなく、実際にプロジェクトを立ち上げ、学んだ理論を実践できる場を提供する。学内組織はもちろん、企業や行政などさまざまなアクターと連携しながら推進している。近年では「地域企業リノベーションプロジェクト」と題して、広島、京都、兵庫、北海道に位置する地域企業を対象に研究を進めている。研究の成果を可視化するために、書籍の出版（2011年、2013年、2014年）や企業への商品企画の提案（2012年にはパッビンス、現在は青きなこ入りのフィナンシェ）に取り組んでおり、ゼミ生は活動に対して楽しくかつ真剣に向き合っている。

株式会社やまだ屋での商品開発会議

○ **大東和武司ゼミ**

「多国籍企業の実際から学ぶ」の趣旨の下に、机上を離れ、2000年度より毎年8月後半に10日前後の日程で、富山大、高崎経済大、関西学院大などとともに、海外スタディツアーを行っている。他大学の学生と共有する時間が切磋琢磨の機会になっている。また、最低2カ国は訪問し、日本も含め少なくとも3カ国の文化・政治・経済の違いなどを多面的・複眼的に観察・理解できるようにしている。

Fuji Electric Semiconductor (Malaysia) Sdn. Bhd.（富士電機半導体マレーシア社）訪問（2010年8月）

○ **西田竜也ゼミ**

国際安全保障論の専門演習は、学生がそれぞれ持っている疑問を主体的に追求するところにそのねらいがある。例えば、「沖縄の米軍基地の負担を減らしつつ、日本の安全保障を維持することはどのようにすれば可能か」「中国の国力の伸張は国際政治システムにどのような影響をもたらすのか」「パレスチナ和平はどのような場合に進展するのか」といったテーマに、学生はイニシアティブを発揮して取り組んでいる。また、座学だけでなく、フィールドトリップにより、安全保障の問題をより身近に考える取り組みを実践している。

米軍海兵隊沖縄基地キャンプ・フォスターを訪問（2012年6月）

iv. プロジェクト等

○ **英語教育改革（2003年度～）**

「コロンブスの卵的発想による英語教育改革 ―ネットワーク型集中英語学習プログラムによる効果と効率の追求」（青木信之教授）が、平成15年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された。教育カリキュラムへ「ネットワーク型集中英語学習システム」を全学的に導入したほか、長期休暇中に英語力の維持・向上を希望する学生および大学院生を対象に「課外英語インテンシブプログラム」も実施している。

○ **英語eラーニング講座（2007年度～）**

システムや教材を独自に開発したネットワーク型英語学習プログラム「社会人の学び直し英語eラーニング講座」（青木信之教授・渡辺智恵准教授）が文部科学省の採択を受け、2007年度から広島市民を対象とした「インテンシブ英語学習プログラム」や「市大英語eラーニング講座」として、市内6カ所の公民館などで実施している。

○ **学生による社会貢献型自主プロジェクト「フィリピンの植林活動に対する支援」（2007年度）**

中島正博ゼミがフィリピン・ルソン島で、植林活動に関する社会調査と植林調査を実施。帰国後、広島県が主催した「国際貢献のための人材育成講座」において活動報告を行った。

○ **学生による社会貢献型自主プロジェクト「タイプロジェクト」（2009年度）**

中島正博ゼミがタイ南部の村でマングローブの植林活動に参加し、村人と交流した。タイでの活動を紹介するウェブサイトをゼミ生が作成している。

○ **東日本大震災ボランティア活動報告会（2011年度）**

2011年6月29日、吉沅洪准教授が被災者の心のケアについて報告。

○ **中国理解プロジェクト（2011年度～）**

「実際に中国語を使い、中国に行って実際の中国を知りたい」という学生の要望に応えるため、中国と関わりの深い教員（欒竹民教授・飯島典子准教授）の主催で、毎年スピーチ大会や中国へのスタディツアーを実施。スピーチ大会には、本学学生のほか、中国からの留学生や中国語を学ぶ社会人なども参加している。

v. 夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」

2012年度に「HIROSHIMA and PEACE」（以下「H&P」）は、開始から10周年という大きな節目を迎えた。H&Pは毎年夏に10カ国前後の国々から学生や大学院生が本学を訪れ、本学学生らと約10日間にわたって、「ヒロシマ」と幅広い視点から見る「平和」について学び語り合う夏期集中講座である。講義やディスカッションはすべて英語で行われ、平和記念式典への参列やフィールドトリップも行う。今ではH&Pは学内外に広く知られるようになり、H&Pに参加するために国際学部に入学してくる学生も見られる。また、海外からも例年20～30人程度の学生が、H&Pへの参加を希望するようになっている。

そもそもH&Pは、ハワイ大学マノア校との学術交流を活性化すべく企画された。世界に広島らしいメッセージを発信する授業を行い、留学生とともに英語で学べる機会を提供することを目的として、2003年度にH&Pがスタートしたのである。

2003年度 第1回 H&P

2011年度 第9回 H&Pでの授業風景

H&Pは単に、毎夏に授業を提供するだけのその場限りのプログラムではなく、終了後も世界中にネットワークを広げている。例えば、これまでの受講生はロンドンやカリフォルニアで同窓会を開いており、フェイスブックのH&Pコミュニティーへの参加者も現在では200人を超えている。

また、H&Pの内容も毎年、進化している。広島への原爆投下や核兵器の問題は依然としてプログラムの中核であるものの、内容はその時々の日本の社会状況や日本を取り巻く国際情勢に応じて変化させている。例えば近年では、アジアにおける日本の戦争責任の問題や領土問題、また2011年度以降は、東日本大震災に伴う福島の原発問題も取り上げるようになっている。

H&Pには毎年、本学国際学部学生および海外からの学生合わせて50人程度が参加する（参加者の推移は下記表を参照）。国際学部の学生は、H&Pで海外からの学生と積極的にディスカッションができるようになるために、夏の本番に向けて英語で授業を受け、4月からの英語準備プログラム（Preparatory English Program: PET）に参加して、英語による模擬授業も何度か経験する。また、日本語の使用が禁止される英語集中合宿（English Only Day: EOD）にも参加する。

これまでの本学からの参加者は、累計で253名にのぼる。

海外からの参加者については、2013年度は7カ国から11名（学部生５名、大学院生６名）が参加し、これまでの累計は2003年度から2013年度までの11年間で、海外在住の日本人を含む44カ国からの271名となっている。

国・地域別HIROSHIMA and PEACE（H&P）参加者数の推移

（単位：人）

年度 / 出身国・地域	2003〜2008	2009	2010	2011	2012	2013	計
アメリカ合衆国	54	5	4	12	11	2	88
欧州地域	31	6	5	6	5	5	58
韓国・中国	22	6	7	3	7	4	49
東南アジア地域	21	2	2		2		27
大洋州地域	3	2	3				8
南西アジア地域	2	1	1		2		6
中近東地域	1	2	1	1			5
サハラ以南アフリカ地域	2			1	2		5
ロシア		2					2
キューバ		2					2
海外在住日本人	13	4	1	2	1		21
海外からの参加者合計	**149**	**32**	**24**	**25**	**30**	**11**	**271**
広島市立大学生	132	24	24	26	24	23	253
合計	**281**	**56**	**48**	**51**	**54**	**34**	**524**
参加者出身国・地域（日本は含まず）	**25**	**16**	**11**	**7**	**11**	**7**	**44**

以上のように、H&Pは国際交流を行う諸大学からの学生受入プログラムであると同時に、世界各地からの参加者も増え、広島市立大学の看板プログラムの一つへと発展した。一方で、H&Pは新たな試練に直面している。予算や人員の面で引き続き厳しい状況が続く中、H&Pは他大学の類似プログラムとの競争にもさらされている。今後は他大学のプログラムとの差別化を図り、広島市立大学らしいプログラムを提供することが一層求められている。

vi. 国際交流

国際平和文化都市の「知」の拠点、平和を愛する「ヒロシマの心」の発信地を目指している国際学部にとって、国際交流は重要な要素の一つである。国際交流は、次世代の若者を育むための教育研究の質的向上、活性化、多様化、充実化を図る上で、必要かつ不可欠なものであると位置付け、開学から２年目にあたる1996年３月、本学と中国の西南師範大学（現・西南大学）との間の学術交流協定を締結した。これを皮切りに、現在までに本学が学術交流協定もしくは学生交流に関する覚書を結び交流を行っているのは、西南大学（中国）、ハノーバー専科大学（ドイツ）、ハワイ大学マノア校（米国）、オルレアン大学（フランス）、西京大学校（韓国）、アラヌス大学（ドイツ）、ベルリン・バイセンゼー芸術大学（ドイツ）、国際関係学院（中国）、梨花女子大学校（韓国）、レンヌ第２大学（フランス）、国連平和大学（コスタリカ）、上海大学（中国）の６カ国12大学となっている。

オルレアン大学にて

ハノーバー専科大学にて

ハワイ大学マノア校の学生たちと

これらの協定または覚書に基づいて、本学は学生の派遣留学や海外語学研修を積極的に支援している。また、派遣留学に加えて、短期研修プログラムも行っている。2012年度に協定校である韓国・西京大学校と短期研修プログラムに関する覚書を締結し、初回実施時には二十数名の学生が参加した。学生らは、ソウルに位置する西京大学校の美容芸術学科において、韓国語や美容に関する集中講義を受講した。同じく2012年度には中国の協定校（西南大学、国際関係学院）との協定内容をそれぞれ更新し、短期研修プログラムを設置した。この短期研修プログラムは、2005年度から実施していた中国スタディツアーが発展したもので、中国語の学習はもちろんのこと中国文化を体験する機会にもなり、さらに中国の大学生との交流や本音のぶつかり合いを通じて、若者同士の相互理解を促進できるプログラムとなっている。

2005年度中国スタディツアー（無錫開発区にて）

西京大学校短期留学プログラム

大学としての国際交流のほかに、国際学部独自の国際交流も実施している。例えば、若者同士の相互理解を促進し、国際感覚を培い、学習・研究の視野を広げるために、開学２年目から中国・北京大学への夏季語学短期留学を試み、３年連続して数十名の学生が参加した。また、アメリカのハワイ大学とオハイオ州立ケント大学、およびロシアのサンクトペテルブルク大学とハバロフスク市にある極東国立人文大学での短期研修も行った。2014年度には、ハワイ大学英語文化研修やモスクワ国立大学短期特別研修を実施し、いずれも国際学部卒業単位として認定する。

国際学部には、一般的な留学とは異なる国際交流プログラムもある。2008年度末に覚書を締結した、ドミニカ共和国での「広島東洋カープ企業インターンシップ」である。このインターンシップは、ドミニカ共和国にあるカープ球団の選手育成アカデミーに本学学生が半年間滞在して、スペイン語を磨き、発展途上国での生活を体験し、プロ野球球団での事務経験を積むこと等を目的としている。2014年８月現在で、参加者は累計１０名となり、発展途上国の文化、価値観、社会などを経験し、卒業後もさまざまな業界で活躍している。

カープアカデミーの選手とインターンシップの学生

ドミニカの子供たちとインターンシップの学生

国際交流はこうした学生同士の交流にとどまらず、協定校の教員との共同研究の形でも行っており、多くの研究成果を上げている。また、本学部の教員が協定校において公開講座や特別講義を行うと同時に、協定校からも研究者を招いて研究発表などを行うことによって、本学部の教育研究のレベル向上に寄与している。

（2）研究

i.『広島国際研究』と『広島市立大学国際学部叢書』

○『広島国際研究』

国際学部では開学以来、その研究成果を公開するために、研究紀要として『広島国際研究』を毎年１回発刊している。第１巻は開学年度である1994年度（1995年３月）に早くも発刊し、以後2013年12月時点で第19巻（2013年度分）までを発刊した。

国際学部の特徴である学際性を反映し、本誌には主に人文、社会科学分野など国際研究に関する幅広い研究成果が、論文または研究ノートという形で掲載されている。2013年度分までの掲載論文数は170本、研究ノート数は13本であり、学外からの投稿者は共同執筆も含めると延べ40名以上を占めている。

また、通常の大学紀要とは異なり、学内外の複数の査読委員による審査を経て論文の質を維持し、かつ学内教員の

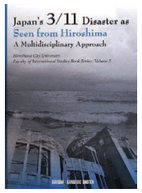
みならず、本学大学院生や学外研究者にも投稿の機会が開かれているのも大きな特徴である。実際、学外からの投稿は毎年のように寄せられ、研究の活性化と質の向上に貢献している。

現在では、紙媒体に加え電子媒体でも公開しており、インターネット上でその成果を閲覧することも可能となっている。

『広島国際研究』第１巻

○『広島市立大学国際学部叢書』

大学の使命は教育と研究にある。その成果は、学生や研究者といったアカデミックな世界に対してのみならず、広く社会に還元することも期待されている。そうした観点から、2008年度より、特定の研究課題に関する研究成果をまとめた『広島市立大学国際学部叢書』を刊行している。学部紀要が主に研究者を対象とし、また、その年々の最新研究を公開するために大学として発行する学術雑誌であるのに対し、こちらは特定のテーマに沿った共同研究を、国際学部教員を中心とするメンバーが、一般的な書籍という形で世に公開するためのものである。2013年度末時点で第５巻まで刊行しており、現在、第６巻の編集作業が進んでいる。



『広島市立大学国際学部叢書』第１～５巻

ii. 研究交流

国際学部は多様な研究分野を持つ教員で構成されており、開学当初より教員間の研究交流を推進する各種プログラムを実施してきた。その中でも外部から講師を招聘し教員を中心として行われる学習会「特別コロキアム」と、複数の教員の協働により現代的テーマでの学際的知を提供する市民向けの「公開講座」は、教員間の研究交流を推進する重要な役割を果たしている。

○ 特別コロキアム

特別コロキアムは、学部教員がコーディネーターとして、自らの専門分野で優れた業績を有する、もしくは最先端の研究を行っている外部講師を招聘し、1994年の開学以来今日まで、年３～７回程度開催している。それは教員が他分野の研究動向を知り、見識を高める重要な機会であると同時に、近年は本学の学部生や大学院生のみならず学外にも公開することで、さらに広範な知的交流の場ともなっている。

2013年度開催「特別コロキアム」一覧

開催日	タイトル	講師
2013年 5月21日	終わらない戦争 一日本軍「慰安婦」の過去と現在	ユン・ミヒャン／韓国挺身隊問題対策協議会代表、戦争と女性の人権博物館館長
2013年 9月19日	Making Capitalism More Responsible: Lesson from History for the Way Forward	マティアス・キッピング／ヨーク大学（カナダ）ビジネススクール教授
2013年 10月25日	東北アジア地域の外交安保問題の考察	金泰孝／成均館大学校（韓国）准教授
2013年 12月4日	日本の核軍縮外交と「核の傘」依存	黒崎輝／福島大学行政政策学類准教授
2013年 12月9日	ルワンダにおけるジェノサイドと和解	イヴ・カムロンジ／キガリ・ジェノサイド記念センター（ルワンダ共和国）副センター長
2013年 12月20日	何故オスロ合意は崩壊したか 一合意から20年後のパレスチナの現状	土井敏邦／ジャーナリスト
2014年 1月6日	広島市立大学での学びと会計人としての卒業後のキャリア	春木寛之／有限責任監査法人トーマツ公認会計士

○ 公開講座

開学年度に地域貢献の一環として始まった公開講座は、教員が互いの研究分野を知ると同時に、市民とともに学際的知を構築する場となってきた。講座の形態は年によって異なる。同日に複数名の教員が１つのテーマに沿ってそれぞれ講義をした年もあれば、国際学部の全教員がそれぞれの最新の研究成果を２週間にわたり講演した年もあった。

2003年度からは３年間にわたって「持続可能な社会を築くために」を共通テーマとすることで、多くの教員の研究を関連付け、年度を越えた学習機会を受講生に提供する特徴的な講座を実施した。初年度は「21世紀の戦争と平和」、次年度は「21世紀の環境と開発」、そして最終年度は「21世紀の市民と人権」をサブテーマに、総勢17名の講師が持続可能な社会のあり方を論じた。年間を通じて全５～７回にわたって開催する連続講義の後には、その年の講師全員が参加するディスカッションの回を設定し、それまでの講義を振り返るとともに、テーマを複眼的にとらえる学際的アプローチを受講者に経験してもらった。また2008年度以降は、広島国際会議場を会場に毎年11月に開催される「国際交流・協力の日」の事業の一環として、公開講座を行うようになっている。

現代社会の問題への学際的アプローチを特徴とする国際学部にとって、教員間の研究交流は今後も積極的に推進していかねばならない課題である。その研究交流の成果は、そのまま学生や地域に還元されることで、国際学部ならではの教育と地域貢献をさらに充実させることになるであろう。

2005年度国際学部公開講座「持続可能な社会をめざしてⅢ ―21世紀の市民と人権：より公正な社会を築くために」ディスカッションの様子（広島市まちづくり市民交流プラザ）

2011年度国際学部公開講座「多様な中東・イスラム世界を学び・感じ・つなぐ」講義風景（広島国際会議場）

情報科学部・情報科学研究科

1. 情報科学部長・情報科学研究科長のメッセージ

1970年代半ばに世界で初めて8 bit MPUを搭載したコンピュータが発売されてから約20年後の1994年4月、広島市立大学の開学と同時に、他大学には類を見ない学部構成の一つとして情報科学部が開設された。それから早くも20年の歳月が過ぎ去った。この間、情報科学の発展は素晴らしく、CPUの高速化、高機能化が行われ、またインターネットなどのインフラの整備も進み、コンピュータは列挙しきれないくらいのものに利用され、現代社会にとってなくてはならないものとなっている。この間、情報科学部は多くの優秀な人材を育成して社会へ送り出し、また、世界をリードする数々の研究成果を挙げるなど、広島地域をはじめ我が国、そして世界の発展に寄与してきた。広島市立大学を新設するにあたり、未来の世界情勢を予測し、情報科学部の設置を決めた方々と、開学以来本学部を支えてくださった教職員、地域の方々へ、心より感謝申し上げるとともに敬意を表したい。

開学時から「情報数理学科」、「情報工学科」、「知能情報システム工学科」、「情報機械システム工学科」の4学科構成として教育研究にあたってきたが、さまざまな社会的要請に応えるために、情報科学に関する研究開発を担う研究者および高度専門技術者の育成を目的に、1998年4月に情報科学研究科修士課程（2000年度より「博士前期課程」）を設置し、さらに、高度研究開発能力の育成・向上と実践的課題解決能力の育成を目的として、2000年4月に情報科学研究科博士後期課程を設置した。時代の変化に対応するため、「情報数理学科・情報数理学専攻」は、数学、情報処理論、プログラミングを基礎として、高度情報化社会を実現する方法論について、メディア処理技術とメディア表現技術の観点から教育研究する目的で、2003年4月に「情報メディア工学科・情報メディア工学専攻」へ名称を変更した。これにより、より広範囲の学生の受け入れと就職を可能とした。さらに、2007年度に、「情報工学科・情報工学専攻」、「知能工学科・知能工学専攻」、「システム工学科・システム工学専攻」、学部・学科を持たない「創造科学専攻」の3学科・4専攻の構成へと組織改編を行った。これを機に、従来の講座制から研究室制へ、また教員全員を大学院所属とし、学科別入試から一括入試へと入試制度も変更した。この改編に批判的意見も多いが、成否には今しばらくの観察と分析が必要である。

社会の変化、要請は学際領域へも及び、大学間連携事業「医療・情報・工学連携による学部・大学院連結型情報医工学プログラム構築と人材育成」の実施を機に、2012年4月、情報科学と医学の複合分野での人材育成を行う「医用情報科学科」を、創造科学専攻所属の教員を中心として新設した。

情報科学に関する社会の変化は激しく、常時、将来を予測しながらの迅速、的確な対応をとる必要がある。「システム工学科・システム工学専攻」では、世界的な高齢化の進行による諸問題を解決すべく、ロボット工学、福祉・介護分野の人材育成、研究を重視した対応を開始した。他の学科・専攻においても議論を重ねており、社会に必要とされ、感謝される情報科学部・研究科であり続けたいと思う。そのためには、教員個々の、あるいは組織としての教育力向上と研究力強化が不可欠である。

近い将来、交通事故ゼロの全自動走行システム、言語の壁をなくし自由に会話が楽しめる自動翻訳機、ロボットの社会進出による人間・ロボット共生社会、無医地区でも安心して受診できる遠隔診断システムや全自動健康チェックシステム、膨大なデータからの有用情報の抽出と活用などなど、さらなる発展が予想される。このような未来の社会を想像するだけでも夢は広がりワクワクしてくるが、それらを実現するのが情報科学である。一緒に頑張ろうではありませんか、みなさん。

情報科学部長・情報科学研究科長
矢野　卓雄

2. 概要

(1) 情報科学部設置の経緯

高度情報化社会の進展に伴い、社会の各領域において、情報を総合的にデザインし、具体的な課題の発見と解決を行い、独創的かつ先駆的な主張と活動を行うことが重要となってきた。こうした社会情勢を鑑み、情報科学の分野において、独創的な課題創造の上で、問題解決の方法を自主的に見出す能力と国際的視野を身に付けた、感性と人間性豊かな創造的な人材を育成することを目的として、1994年4月、広島市立大学の開学と同時に情報科学部が設置された。

(2) 学部・学科教育の特色

本学部の教育研究の特色は、次の5項目である。

① 理学、工学を統合する視点に立ち、数理的、論理的基礎からコンピュータ、さらには人工知能、ヒューマンインタフェースに至るまで、幅広く情報処理に関する専門性の高い教育研究を行う。

② 論理的思考やコミュニケーションの手段である言語（日本語およびコンピュータ利用言語）の充実した教育を行う。

③ 実験・演習による体験的個人指導を重視した教育を行う。

④ キャンパス情報ネットワークを構築し、コンピュータ資源を有効に活用する環境を整え、学習課題やレポートの提出に利用し、また、国内外の大学等との情報交換を行うなど、コンピュータ・ネットワークシステムを活用した教育研究を行う。

⑤ 教育研究に使用するコンピュータは学部構成員1人1台の利用環境を整備し、特に学生に対してはいつでも自由に利用できる環境を用意して教育を行う。

開学当初は、情報数理学科、情報工学科、知能情報システム工学科、情報機械システム工学科からなる4学科構成としていた。情報数理学科では、数理的手法によって情報科学の諸問題を解決し、新しい問題を発見できる人材育成を目的に、単に基礎理論だけでなく現実問題の工学的解決を数理的手法によって行うことのできる人材の育成を主眼とした。情報数理学講座、計算機構学講座、情報論理学講座、ソフトウェア工学講座、システム工学講座、認知機構学講座の6講座を設置し、数理、論理学、計算機構など、情報処理に関する基礎的、数理的な教育研究を行ってきた。

情報工学科では、コンピュータの学問・技術をよく理解し、コンピュータやその基本ソフトウェアを設計製作することができると同時に、新しい応用手段を開拓し、さらには新しいコンピュータを開発できる人材の育成を主眼とした。機能デバイス学講座、論理回路学講座、コンピュータシステム講座、プログラム工学講座、コンピュータアーキテクチャ講座、情報ネットワーク講座、情報物性講座の7講座を設置し、コンピュータの構成、情報ネットワーク、集積回路など、情報処理の中心的なツールであるコンピュータに関する教育研究を行ってきた。

知能情報システム工学科では、あらゆるシステムの知能化、高度化が進んでいる中、人間の知的能力・機能の解明を通じて高度情報処理のための知的手法の開発と実用化を図り、管理・運用できる人材の育成を主眼とした。知識工学講座、推論機構学講座、情報認識学講座、データベースシステム講座、自然言語処理学講座、知能システム講座、知能数理講座の7講座を設置し、人工知能、機械翻訳、音声認識など、情報処理の中心的課題である知能情報処理やそのシステムに関する教育研究を行ってきた。

情報機械システム工学科では、高度情報化機械を利用した新しい産業技術に基づいた工業の確立が望まれる社会的要請の中、情報化機械の基礎領域とその統合的かつ高度な応用の研究・開発や設計・生産、その運用などの領域で、主要な役割を果たす人材の育成を主眼とした。情報機械素子講座、知的制御理論講座、知能ロボット講座、設計工学講座、生体情報処理学講座、システムインタフェース講座、情報材料1講座、情報材料2講座の8講座を設置し、知能ロボット、マイクロメカニクスなど運動機能を含む情報システムや、人間とコンピュータとのインタフェースに関する教育研究を行ってきた。

卒業後の主な進路は、大学・官民研究機関などの教育研究者をはじめ、コンピュータおよびその関連企業における開発技術者、さらに、あらゆる産業分野の技術者などである。

(3) 情報科学研究科設置の経緯

21世紀は「情報技術」があらゆる活動の根幹となるとともに、新たな経済活動や文化の創造を推進する役割を担う、まさに高度情報通信社会の発展期となる。この高度情報通信社会を支える「情報技術」に関する先端的専門分野なら

びに情報科学と諸学問分野との学際分野において、我が国および世界に貢献するために、この分野を先導する学術研究とその人材育成が急務となっていた。

こうした社会的要請に応えるため、情報科学に関する学理の探求と科学技術の発展を推進するとともに、情報科学に関する研究開発を担う研究者および高度専門技術者を育成することを目的として、1998年4月に情報科学研究科修士課程（2000年度より「博士前期課程」）を設置した。

地球規模で進行している情報基盤のグローバル化、ボーダレス化に伴い、パラダイムシフトを予見し先導するための、国際的な視野と競争力を持つ高度な研究者・技術者の育成は必要不可欠である。このような新しいタイプの人材を育成するためには、従来の大学院博士課程における専門性を重視した教育に加え、専門にとらわれない幅広い視野、実践的なセンスおよび的確な判断力を養うことが重要である。このため、専門性を重視した教育に加えて、地域との幅広い領域にわたる実践的な共同研究を通して博士課程の学生が自ら課題を発掘し、その解決に努力する機会を持つことが必要である。このような新時代の要請に応えて、高度研究開発能力の育成・向上と大学の中だけでは得ることの困難な実践的課題解決能力の育成を目的として、2000年4月に情報科学研究科博士後期課程を設置した。

(4) 研究科教育の特色

情報科学研究科博士前期課程の教育研究の特色は、次のとおりである。

① 理学・工学を統合する視点に立った情報科学のカリキュラムにより、数理的、論理的基礎からコンピュータ、さらには人工知能、ヒューマンインタフェースに至る、情報科学に関する専門性の高い教育研究を行う。

② 科学技術の高度化と多様性に対応できるよう基礎から応用までの学識、技術の体系を修得できる授業科目を開設する。

③ 授業科目はセメスター制とし、おおむね1年次で修得できるよう履修時期を設定する。

④ 各専攻にはコア科目を設定するとともに、コア科目を中心とした幅広い専門知識を修得させるため、4専攻の教員が協力した教育を実施する。

⑤ 研究者、技術者としての重要な資質である創造性、自立性を養うため、自主プロジェクト演習を開設する。

⑥情報科学の最先端の事項を、学外の第一線の研究者を招き講義する授業科目を開設する。

⑦ マルチメディアネットワークを利用した教育研究を推進する。

また博士前期課程の構成は、情報数理学専攻、情報工学専攻、知能情報システム工学専攻、情報機械システム工学専攻からなる4専攻構成とした。情報数理学専攻（2003年4月から「情報メディア工学専攻」に名称変更）では、数学、情報処理論、プログラミングを基礎として、メッセージや情報を表現するためのメディアを活用し、高度情報化社会を実現する方法論について、メディア処理技術とメディア表現技術の観点から教育研究を行ってきた。メディア処理技術では、情報通信、画像処理、データベース、情報セキュリティなどの教育研究を行ってきた。メディア表現技術では、コンピュータ・グラフィックス、システム工学、ヒューマンインタフェースなどの教育研究を行ってきた。

情報工学専攻では、コンピュータのハードウェア、ソフトウェア、システムおよびネットワークを含む幅広い分野の教育研究を行ってきた。コンピュータハードウェア分野では、コンピュータの高性能化や次世代コンピュータを創成する上での基礎技術である半導体デバイス、コンピュータ回路に関する教育研究を行ってきた。コンピュータシステム分野では、ソフトウェア技術とハードウェア技術の壁を取り払うことにより実現される新しい情報の伝達・蓄積・認識・処理に関する教育研究を行ってきた。コンピュータネットワーク分野では、コンピュータを通信回線で結んだネットワークの基礎理論や基本的諸技術に関する教育研究を行ってきた。

知能情報システム工学専攻では、人間の知的活動を支援する知識処理システムに焦点を置いて、情報処理の基礎の上に、知識処理に共通の役割を果たす理論的基盤、現実世界との関わりにおける知的振る舞いの特徴的な部分である知識処理の基本要素技術、これらの各成分を組み合わせた知識処理の応用について、より高度な教育研究を行ってきた。そのため、知的振る舞いに共通で本質的な部分である知識処理の理論的基盤に関する知能数理分野、メディアの知的処理であるパターン認識や言語音声理解等のマルチメディア処理技術分野、知識処理の要素技術を組み合わせた統合的なシステム構築のための高度知識処理システム分野にわたる教育研究を行ってきた。

情報機械システム工学専攻では、人間、コンピュータおよび適用対象が有機的に結合したシステムを情報機械システムとしてとらえ、計算、記憶、推論などに基づく判断や操作の機能に加えて、視聴覚などの知覚や学習機能を有する新しい高機能システムを研究開発できる人材を育成するため、人間コンピュータ協調システム分野、設計や制御に関わる知的システム技術分野、それらを実現するための情報機械素子分野の3分野が連携して、人間・機械協調システムの情報技術とシステム理論、およびその応用に関する教育研究を行ってきた。

2007年度には、情報工学科・情報工学専攻、知能工学科・知能工学専攻、システム工学科・システム工学専攻、学部・学科を持たない創造科学専攻からなる3学科・4専攻の構成へと組織改編を行い、時代の変化に対応した優秀な人材育成と先端的研究を行ってきた。詳細については、「5. 教育研究活動紹介」において述べる。

3. 年表で見るこれまでのあゆみ

1994年度

9月	情報科学部情報数理学科、情報工学科、知能情報システム工学科、情報機械システム工学科の教職課程認定申請［中一種免・高一種免（数学）］(30日)
12月	公開講座「技術者のための情報科学ツアー」(延べ参加者数503名)(6～7日)

1995年度

4月	情報科学部情報数理学科、情報工学科、知能情報システム工学科、情報機械システム工学科の教職課程認定［中一種免・高一種免（数学）］(1日)
9月	情報科学部公開講座「21世紀をひらく情報科学最前線」(延べ参加者数308名)(26～27日)
11月	公開講座「情報生活の近未来」・インターネット体験会 ※国際学部合同（19日）

1996年度

9月	情報科学部公開講座「もっと身近に情報科学」(24～25日)
10月	第1回コンピューターオセロ大会（7日）
11月	情報科学部企業訪問ツアー（18日）
1月	ロボットコンテスト（24日）

1997年度

9月	情報科学研究科情報数理学専攻、情報工学専攻、知能情報システム工学専攻、情報機械システム工学専攻の教職課程認定申請［中専免・高専免（数学）］(30日)
10月	情報科学部公開講座「生活の中の情報科学」(広島国際会議場)(14～15日)

1998年度

4月	情報科学研究科情報数理学専攻、情報工学専攻、知能情報システム工学専攻、情報機械システム工学専攻の教職課程認定［中専免・高専免（数学）］(1日)
9月	情報科学部棟増築工事着手（30日）
10月	第3回コンピューターオセロ大会（9日）
	第5回実時間コンピュータシステムとアプリケーションに関する国際会議（27～29日）
12月	情報科学部の公開講座「作ってみよう簡単ロボット」(20日)
3月	情報科学部公開講座「あなたもホームページを作ってみませんか」(29日)

1999年度

9月	情報科学部情報数理学科、情報工学科、知能情報システム工学科、情報機械システム工学科の教職課程認定申請［高一種免（数学）］※教職免許法改正に伴う再課程認定申請（30日）
10月	知能情報システム工学科とデザイン工芸学科（芸術学部）が「第4回コンピュータオセロ大会」を共催(8日)
	本学で、電気・情報関連学会中国支部連合大会開催(23日)
3月	情報科学部公開講座「作ってみよう簡単ロボット」「あなたもホームページを作ってみませんか」(27～28日)
	情報科学部棟別館（地上6階建て、建築面積1,274㎡、延床面積5,892㎡）が完成（10日）

2000年度

4月	情報科学部情報数理学科、情報工学科、知能情報システム工学科、情報機械システム工学科の教職課程認定［高一種免（数学）］※教職免許法改正に伴う再課程認定（1日）
9月	情報科学部情報数理学科、情報工学科、知能情報システム工学科、情報機械システム工学科の教職課程認定申請［高一種免（情報）］(26日)
3月	公開講座「あなたもホームページを作ってみませんか」開催（26～27日）
	公開講座「ロボットをプログラミングしてコースをクリアしよう」開催（28日）

2001年度

4月	情報科学部情報数理学科、情報工学科、知能情報システム工学科、情報機械システム工学科の教職課程認定［高一種免（情報）］(1日)
9月	情報科学研究科博士後期課程で本学最初の博士学位授与
	財団法人広島県産業技術振興機構等の主催で広島地域の大学・企業・公設研究所等の研究開発担当者に本学の研究を紹介する「広島市立大学研究公開」を開催（28日）
10月	第6回コンピュータオセロ大会（16日）
3月	情報科学部公開講座「講演：未科学への挑戦 ―地震を電波でとらえてみたい」「講演：ネットワークソフトウェア ―縁の下の力持ち」(26日)
	情報科学部公開講座「ロボットをプログラミングしてコースをクリアしよう」(28日)

2002年度

5月	情報科学部公開講座「物理学概論」(23～29日)
6月	情報科学研究科の教員が「中国総合通信局長表彰」を受賞（1日）
10月	財団法人広島市産業振興センターとの共催により「広島市立大学研究公開」開催（9～11日）
11月	知能情報システム工学科とデザイン工芸学科（芸術学部）が「第7回コンピュータオセロ大会」を共催（15日）
2月	退任記念最終講演（2月27日～3月4日）
3月	情報科学部公開講座「コンピュータの内側 ―速さへの挑戦」「電磁界と生体」、実習「走行ロボットを自在に動かして迷路をクリアしよう」(26日)

2003年度

4月	情報科学部情報数理学科、情報科学研究科情報数理学専攻を、それぞれ「情報メディア工学科」、「情報メディア工学専攻」に名称変更
10月	情報科学部公開講座「科学概論」(8～27日)
	情報科学部公開講座「Linuxによるサーバの構築・管理」(8～16日)
11月	知能情報システム工学科とデザイン工芸学科（芸術学部）が「第8回コンピュータオセロ大会」を共催（14日）
	情報科学部公開講座「講演会『ナノ世界の大都市建設』、『知識工学からヒトの感性を探る』」(26日)
12月	情報科学部公開講座「今、地球が危ない」(1～22日)

2004年度

7月	スーパーサイエンスミュージアム第5回講座「毛利衛さんとのテレビ会議見学会」(22日)
	広島市立大学研究紹介 コンピュータ画像デモ体験会（22日）
	平成16年度広島市立大学情報科学部公開講座「LinuxにおけるC言語プログラム開発」(7月26日～8月6日)
9月	情報科学研究科情報メディア工学専攻、情報工学専攻、知能情報システム工学専攻、情報機械システム工学専攻の教職課程認定申請［中専免（数学）および高専免（数学・情報）］(27日)
	平成16年度情報科学部公開講座（9月29日～10月7日、10月13日～11月17日）
11月	知能情報システム工学科とデザイン工芸学科（芸術学部）が「第9回コンピュータオセロ大会」を共催（19日）
12月	電子情報通信学会12月情報ネットワーク（IN）研究会（16～17日）
2月	本学名誉教授・吉田典可先生による特別講演会「地域における理工系情報専門教育を考える」(8日)
3月	平成16年度情報科学部公開講座（5・28日）
	広島市立大学情報科学部共同研究会（8日）
	平成16年度広島市立大学情報科学部公開講座「Linuxによるサーバの構築・管理（集中講義）」(19・26日)
	Linuxによる情報セキュリティ研究会（25日）

2005年度

4月	情報科学研究科情報メディア工学専攻、情報工学専攻、知能情報システム工学専攻、情報機械システム工学専攻の教職課程認定［中専免（数学）および高専免（数学・情報）］(1日)
7月	シティカレッジ「科学概論」(7月6日～8月24日)
8月	平成17年度広島市立大学情報科学部公開講座「はじめてのLinux集中講義」(20～27日)
11月	産学官交流イベント「第3回リエゾンフェスタ ―IT技術の医療応用最前線」開催（8日）
	第10回コンピュータオセロ大会（25日）
	平成17年度広島市立大学情報科学部公開講座「講演会」(30日)
12月	平成17年度広島市立大学情報科学部公開講座「連続講義：基礎からの情報科学」(12～16日)

2006年度

5月	u-Japanフェスタinひろしま2006に参加（18～19日）
6月	広島市立大学情報科学部共同研究会（講演会）(26日)
7月	シティカレッジ「科学概論」(7月5日～8月23日)
8月	情報科学部公開講座　実習：基礎からのパソコン活用術「ブログをはじめよう！ ―インターネットによる情報発信」(26日)
9月	情報科学部公開講座　実習：基礎からのパソコン活用術「Outlook Express／Internet Explorerとさよならしよう！ ―迷惑メール／有害サイトへの一対処方」(2日)
	情報科学部情報工学科、知能工学科、システム工学科の教職課程認定申請［高一種免（数学・情報）］(26日)
	情報科学研究科情報工学専攻、知能工学専攻、システム工学専攻、創造科学専攻の教職課程認定申請［中専免（数学）および高専免（数学・情報）］(26日)
11月	情報科学部公開講座　講演会「地球規模環境破壊 ―熱くなる地球」「移動無線通信の光と影」(8日)
	知能情報システム工学科とデザイン工芸学科（芸術学部）が「第11回コンピュータオセロ大会」を共催（17日）
	The 8th IEEE Hiss ―次世代への種蒔き（25～26日）
12月	情報科学部公開講座　連続講義：情報科学の基礎 ―画像処理の基礎技術と応用「身近なコンピュータビジョン技術」「経験から学習するコンピュータ」「データを少なくするコンピュータ処理技術」(11～13日)
2月	「自主プロジェクト演習」「自主プロジェクト研究Ⅰ」研究成果発表会（22日）

2007年度

4月	情報科学部の教員情報科学研究科所属とする
	情報科学部を情報メディア工学科、情報工学科、知能情報システム工学科、情報機械システム工学科の4学科から情報工学科、知能工学科、システム工学科の3学科に再編（2007年度入学生より）(1日)
	情報科学研究科博士前期課程を情報メディア工学専攻、情報工学専攻、知能情報システム工学専攻、情報機械システム工学専攻から情報工学専攻、知能工学専攻、システム工学専攻、創造科学専攻に再編（2007年度入学生より）(1日)
	情報科学部情報工学科、知能工学科、システム工学科の教職課程認定［高一種免（数学・情報）］(1日)
	情報科学研究科情報工学専攻、知能工学専攻、システム工学専攻、創造科学専攻の教職課程認定［中専免（数学）および高専免（数学・情報）］(1日)
6月	情報科学研究科の教員が「中国総合通信局長表彰」を受賞（1日）
8月	情報科学部公開講座「高校生による情報科学自由研究」実施
9月	「広島市児童見守りシステム」の研究開発（実証実験）(9～12月)
	平成19年度広島市立大学情報科学部公開講座 実習：基礎からのパソコン活用術「CDから起動するLinuxで年賀状作成」(1日)
11月	情報科学部公開講座　講演会「コンピュータの進化の歴史と未来の姿」「リアルタイムシステム」(6日)
	知能情報システム工学科とデザイン工芸学科（芸術学部）が「第12回コンピュータオセロ大会」を共催（16日）
	リエゾンフェスタ2007・産学連携セミナー（20日）
12月	情報科学部公開講座　連続講義：情報科学の基礎「ディジタル通信とユビキタスネットワーク」「地上ディジタル放送の最新動向」「生活を支える次世代ネットワーク」「携帯電話のディジタル化と私達」(10～13日)
2月	情報科学研究科「自主プロジェクト演習」「自主プロジェクト研究Ⅰ」研究成果発表会（28日）

2008年度

8月	情報科学部公開講座「高校生による情報科学自由研究（5日）」
	JST支援事業「平成20年度サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（SPP）」の一環として本学教員による公開講座を開催（30日）
	情報科学部公開講座　実習：パソコン活用術（8月30日、9月6日）
11月	情報科学部公開講座「いろいろな平均 ―行きは時速40kmで帰りは時速60kmなら、往復の平均は時速50km？」「携帯電話でしゃべって翻訳 ―音声と言語の情報処理最前線」（6日）
	知能情報システム工学科とデザイン工芸学科（芸術学部）が「第13回コンピュータオセロ大会」を共催（18日）
	The 10th IEEE Hiss ―未来への飛躍（21～23日）
12月	情報科学部公開講座　連続講義（3～4・10～11日）
2月	情報科学研究科「自主プロジェクト演習」「自主プロジェクト研究Ⅰ・Ⅱ」研究成果発表会（26日）
3月	インテレクチャル・カフェ広島 ―若手研究者を核とした「知」の融合（24日）

2009年度

6月	情報科学研究科研究講演会「CD-Rの発明と新商品企画」（24日）
7月	「ひろしまコンピュータサイエンス塾 ―情報科学ってスゴイ！！」（独立行政法人科学技術振興機構平成21年度「未来の科学者養成講座」採択事業）（7月26日～3月14日）
8月	情報科学部公開講座「高校生による情報科学自由研究」
9月	情報科学部公開講座　実習：パソコン活用術「フリーソフトでCGモデリングに挑戦！」（5・12日）
10月	平成21年度電気・情報関連学会中国支部第60回連合大会（17日）
	シティカレッジ提供講座「未来へ歴史・文化を伝える」（10月28日～11月25日）
11月	情報科学部公開講座　講演会「アナログとディジタルの間」「身近になりつつある高速度カメラの世界」（5日）
12月	情報科学部公開講座「連続講義：くらしの中のICT（情報通信技術）」（2～3日）
12月	第8回ITSシンポジウム2009（10～11日）
2月	第2回地域メディア研究会「自治体デジタルサイネージに関して」（8日）
	情報科学研究科「自主プロジェクト演習」研究成果発表会（23日）

2010年度

4月	広島大学および広島工業大学との連携による「情報医工学プログラム」開始
6月	小学生やその保護者、小学校教員を対象とした「ひろしまコンピュータサイエンス塾」を開講（独立行政法人科学技術振興機構　平成22年度「未来の科学者養成講座」採択事業）（6月20日～3月13日）
7月	インテレクチャル・カフェ広島 ―若手研究者を核とした「知」の融合（1日）
	情報科学部公開講座「高校生の情報科学自由研究」（7～8月）
9月	情報科学部公開講座　実習：パソコン活用術「フリーソフトで3次元コンピュータグラフィックスに挑戦」（4・11日）
	小学校高学年と保護者を対象とした学生による自主プロジェクト「走れ！！未来の科学者たち」を開催（25日）
11月	パソコンお悩みなんでも相談室（5～6・8～9日）
	情報科学部公開講座　講演会「サウンドデザインとその評価」「『見る』ためのコンピュータ ―画像認識で世の中はこう変わる」（10日）
	平成22年度第2回水素エネルギー利用開発研究会・講演会（25日）
12月	情報科学部公開講座「連続講義：情報科学の医療・福祉分野への応用」（9～10日）
2月	情報科学研究科「自主プロジェクト」研究成果発表会（22日）
3月	平成22年度第3回水素エネルギー利用開発研究会・講演会（16日）

2011年度

6月	ひろしまコンピュータサイエンス塾（12～17日）
7月	情報科学部公開講座「高校生による情報科学自由研究」（7～8月）
	水素エネルギー利用開発研究会・講演会（26日）
8月	情報科学部公開講座　連続講義（8月7日、10月29日）
	連続講義「安全・安心な市民生活を実現するための情報通信技術の利活用」（7日）
	教育システム情報学会（8月31日～9月2日）
10月	シティカレッジ「東日本大震災と私たち ―広島から考える」（10月27日～11月24日）
	連続講義「安全・安心な市民生活を実現するための情報通信技術の利活用」（29日）
11月	パソコンお悩みなんでも相談室（5～8日）
	情報科学部公開講座　講演会「ディジタルテレビのひみつ」「脳で動くコンピュータ」（8日）
	水素エネルギー利用開発研究会・講演会（29日）
2月	情報科学研究科「自主プロジェクト」研究成果発表会（21日）
3月	水素エネルギー協会・水素エネルギー利用開発研究会合同講演会（9日）
	言語処理学会第18回年次大会（13～16日）

2012年度

4月	情報科学部に「医用情報科学科」を新設（1日）
	情報科学研究科の教員が「文部科学大臣表彰」を受賞（9日）
6月	情報科学研究科の教員が「中国総合通信局長表彰」を受賞（1日）
	情報科学部医用情報科学科の教職課程認定申請［高一種免（情報）］（18日）
6月	ひろしまコンピュータサイエンス塾（6月24日～3月10日）
	情報科学部公開講座「連続講義：情報科学最前線」（24日）
7月	公開講座「高校生による情報科学自由研究」（7～8月）
8月	情報科学部公開講座「連続講義：情報科学最前線」（5日）
11月	情報科学部講演会「スーパーコンピュータと科学技術の進歩」「ホログラフィによる3D原子イメージング」（7日）

2013年度

4月	広島大学・広島工業大学・広島国際大学との連携による「臨床情報医工学プログラム」がスタート
	情報科学部医用情報科学科の教職課程認定［高一種免（情報）］（1日）
6月	情報科学部公開講座「社会貢献」（23日）
7月	「ひろしまコンピュータサイエンス塾」開講
	情報科学部公開講座「高校生による情報科学自由研究」（7～8月）
	情報科学部公開講座「パソコン活用術：Androidプログラミング」（31日）
8月	情報科学部公開講座「社会貢献」（4日）
	情報オリンピック日本委員会との共催でプログラミングとアルゴリズムの高校生向け講習会「レギオ」を開催（9・19日）
9月	2013年度リエゾンフェスタ（18日）

4. 歴代教員一覧

（1）過去在職教員

（在職期間について、年度途中の着任・離任の場合は年月を、そうでない場合は年度を示す。また、専門分野は本学在職時のもの。）

相澤　輝昭
自然言語処理
教授
1995年度～2005年度

會見　忠則
分子遺伝学
助手
1994年度～1999年1月

青木　広宙
特任准教授
2011年12月～2012年度

浅田　尚紀
画像情報処理
教授
1995年度～2012年度

新井　紀子
証明論、計算の複雑さ
助手
1994年度～2000年12月

生駒　哲一
知的制御理論
助手
1995年度～1997年度

伊藤　史朗
代数学
教授
1994年度～2012年度

岩松　雅夫
情報物性
助教授
1995年度～1999年度

大場　充
ソフトウェア工学
教授
1994年度～2013年度

小田垣　雅人
生体医工学
助教→講師
2007年度～2011年度

嵩　忠雄
情報工学
教授
1998年4月～2002年度

神原　利彦
ロボットプランニング
助手
1996年度～2003年度

天野　晃
パターン認識
助教授
1995年度～2001年度

有川　正俊
データベースシステム
助教授
1994年度～1998年度

磯道　義典
人工知能論、社会システム論、ゲーム理論、情報理論
教授
1994年度～2004年度

岩切　一幸
人間工学
助手
1999年2月～1999年度

上田　祐彰
学習システム
助手→講師→准教授
1995年度～2010年10月

沖田　豪
システム制御工学
教授
1995年度～2002年度

越智　裕之
論理回路設計CAD
助教授
1994年度～2004年3月

加藤　博一
ヒューマンインタフェース
助教授
1999年度～2002年度

栗山　繁
システムインタフェース
助教授
1994年度～1997年度

天野　橘太郎
通信工学、信号処理工学
教授
1994年度～2002年度

安　昌俊
通信システム
助教→講師
2007年度～2009年度

市村　匠
ソフトコンピューティング
助手→講師
1997年5月～2009年度

岩瀬　弘和
認知科学
助手
1996年度～1999年9月

大槻　説乎
知識工学、教育情報工学
教授
1996年度～2002年度

小田　亮太郎
特任助教
2010年6月～2011年度

鍵　絵里子
分子分光学
助手
1998年度～2001年度

辛島　光彦
認知機構学
助手
1994年度

甲本　卓也
情報理論
講師
2001年度～2004年3月

情報科学部・情報科学研究科

小島　英春
特任助教
2010年度～2011年度

坂本　政祐
計算機工学
助手
1996年11月～2003年度

佐野　学
制御工学
教授
1994年度～2012年度

白濱　弘幸
論理回路学
助手
1995年度～1997年度

高山　毅
コンピュータシステム
助手
1995年7月～1997年度

橘　啓八郎
計算制御システム、情報通信システム、経営情報システム
教授
1994年度～2004年度

田村　秋雄
計算機支援設計、CAGD、電子回路
教授
1994年度～2002年度

津田　孝夫
基本ソフトウェア（ベクトル化・並列化コンパイラなど）、モンテカルロ法、磁力線再結合
教授
1996年度～2002年度

寺田　和夫
半導体デバイス学
教授
1994年度～2013年度

小松　壽
自然言語の形式意味論
助教授
1994年度～2000年9月

佐々木　克実
特任助教
2010年5～7月、9～11月

清水　將吾
データ工学
助手
2003年1月～2006年7月

末原　憲一郎
生物化学工学
助手
1996年10月～2005年9月

竹内　敏己
コンピュータシステム
助手
1994年度～1995年7月

田中　久弥
生体工学
講師
2002年度

ダリボ，イスマエル
特任助教
2010年12月～2011年8月

寺内　衛
集積回路工学、科学教育
助教授→准教授
1998年度～2012年度

得重　仁
情報理論
助手
2001年1月～2003年度

小守　良雄
情報数理学
助手
1996年度～1997年度

佐藤　聡
データベースシステム
助手
1996年度～2000年度

蔣　勝平
設計工学
講師
1994年度～1998年7月

高橋　茂
電波サイエンス、情報工学
助手→助教
2005年度～2007年10月

竹内　俊文
生体機能関連化学
教授
1994年度～2001年11月

田中　良幸
制御工学
助手
2001年5月～2002年9月

陳　春祥
情報ネットワーク
助手
1994年度～1997年4月

寺内　睦博
知能システム
助手
1994年度～2000年度

土橋　宣典
コンピュータグラフィックス
助手
1997年度～2000年4月

中野　幸夫
大気環境化学
助手→講師→准教授
2003年度～2010年9月

長藤　かおり
精度保証システム
助手
2000年度～2002年9月

中村　一美
生体工学
助手
2001年10月～2002年度

中村　隆志
システム工学
助手
1994年度

中村　学
知識工学
助手
1997年10月～2005年9月

中村　泰明
画像工学
教授
1994年度～2006年9月

任　福継
機械翻訳
助教授
1994年度～2000年度

ハイダル，アリ
情報機械素子
助手
1995年度～1997年10月

生岩　量久
ディジタル放送
教授
2004年7月～2012年度

早見　武人
生体情報工学
助手
2003年度～2006年4月

疋田　真一
制御工学、人間工学
助手→助教
2002年7月～2013年9月

開　和生
最適化計算
助手
1994年度～2002年7月

廣瀬　英雄
情報数理学
教授
1995年度～1997年度

ブーセラマ，ファウジ
インテリジェントシステム
助教授
1994年度～2000年9月

藤野　清次
パラレル・コンピューティング
教授
1994年度～2000年12月

細田　陽介
情報数理学
助手
1994年度～1995年度

堀居　賢樹
情報物性工学、情報デバイス工学
教授
1994年度～2007年度

正岡　元
特任助教
2010年8月～2011年度

間島　利也
グラフ・ネットワークアルゴリズム
助手
1997年10月～2001年度

松井　淳
生物有機化学
助手
1994年度～1999年度

松浦　義則
数値シミュレーション
助手
1995年度～2004年度

三澤　秀明
生体情報工学
特任助教
2012年11月～2013年度

三好　哲也
人間工学
助教授
1999年10月～2001年度

椋木　雅之
メディア情報処理
助教授→准教授
2002年9月～2008年度

向谷　博明
制御工学
助手
1998年度～2001年度

村田　厚生
人間工学、認知科学、生体情報工学
助教授→教授
1994年度～2005年度

村山　優子
情報ネットワーク
講師
1994年度～1997年度

森末　道忠
計算機工学、エレクトロニクス工学、非線形理論
教授
1996年度～2002年度

山田　憲嗣
生体計測工学
助手
2003年1月～2003年度

吉川　祐樹
論理設計とテスト
助教
2007年度～2010年度

吉田　典可
情報工学、電子工学
教授
1995年度～2002年度

李　仕剛
ロボットビジョン
助教授
1995年度～2000年度

刘　少英
形式的仕様記述
助教授
1994年度～1999年度

林　涯
計算機構学
助手
1994年度～1995年度

（2）教員略歴　（2014年4月1日時点在職者）

准教授 青山（あおやま） 正人（まさと）
1969年生まれ。大阪府出身。1996年、岡山大学大学院自然科学研究科博士課程修了。博士（工学）。1996年度に本学着任（助手→講師→准教授）。専門分野は人間医工学、医用画像診断支援。これまでの主な担当科目は「ディジタル信号処理」。

准教授 Adams（アダムス）, Rolf（ロルフ）
1960年生まれ。ドイツ・ラインラント＝プファルツ州生まれ。1992年、カールスルーエ大学大学院（ドイツ）コンピュータ・サイエンス専攻博士課程修了。理学博士。1994年度に本学着任（助教授→准教授）。専門分野はオブジェクト指向技術。これまでの主な担当科目は「プログラミング言語」「プログラミング言語特論」「外書購読演習Ⅰ・Ⅱ」。

助教 厚海（あつうみ） 慶太（けいた）
1978年生まれ。茨城県出身。2007年、広島市立大学大学院情報科学研究科博士後期課程単位取得退学。修士（情報工学）。2007年度に本学着任（助教）。専門分野は計測制御工学。これまでの主な担当科目は「システム工学実験Ⅰ」「情報科学基礎実験Ｃ」「外書購読演習Ⅱ」「一般情報処理Ａ」。

教授 石田（いしだ） 賢治（けんじ）
1960年生まれ。山口県出身。1989年、広島大学大学院工学研究科博士課程後期修了。工学博士。1997年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野は情報ネットワーク。これまでの主な担当科目は「情報ネットワーク」「情報ネットワーク特論」。

教授 石光（いしみつ） 俊介（しゅんすけ）
1965年生まれ。山口県出身。1990年、豊橋技術科学大学大学院工学研究科博士課程前期生産システム工学専攻修了。博士（工学）。2007年度に本学着任（准教授→教授）。専門分野は音響工学。これまでの主な担当科目は「音響システム工学」「人間工学」「パターン認識」「認知科学」「生体信号処理」。

教授 石渡（いしわた） 孝（たかし）
1950年生まれ。神奈川県出身。1978年、東京工業大学大学院理工学研究科博士課程化学専攻修了。理学博士。1994年度に本学着任（教授）。専門分野は分子科学。これまでの本学での主な役職は、評議会評議員（2001～2007年度）、副学長（企画・研究担当）（2004～2005年度）。これまでの主な担当科目は「基礎化学」「地球環境論」。

准教授 市原 英行（いちはら ひでゆき）

1972年生まれ。香川県出身。1999年、大阪大学大学院応用物理学専攻博士後期課程修了。博士（工学）。1999年12月に本学着任（助手→准教授）。専門分野はディペンダブルコンピューティング、VLSI設計自動化。これまでの主な担当科目は「システムLSI設計」「計算機工学」。

助教 稲木 雅人（いなぎ まさと）

1978年生まれ。静岡県出身。2005年、東京工業大学大学院理工学研究科集積システム専攻博士後期課程単位修得退学。博士（工学）。2008年度に本学着任（助教）。専門分野はLSI自動設計。これまでの主な担当科目は「情報科学基礎実験A」「基礎演習」。

助教 稲葉 通将（いなば みちまさ）

1985年生まれ。愛知県名古屋市出身。2012年、名古屋大学大学院情報科学研究科博士後期課程修了。博士（情報科学）。2012年度に本学着任（助教）。専門分野は知的対話システム、データマイニング。これまでの主な担当科目は「解析学I演習」「情報科学基礎実験B」。

助教 井上 伸二（いのうえ しんじ）

1962年生まれ。広島県出身。2013年、広島大学大学院工学研究科博士課程後期情報工学専攻修了。博士（工学）。1994年度に本学着任（助手→助教）。専門分野はコンピュータネットワーク。

教授 井上 智生（いのうえ ともお）

1965年生まれ。埼玉県出身。1990年、明治大学大学院工学研究科博士前期課程電気工学専攻修了。博士（工学）。1999年5月に本学着任（助教授→教授）。専門分野はディペンダブルコンピューティング。これまでの本学での主な役職は、社会連携センター長（2009～2012年度）、副理事（社会連携担当）（2010～2012年度）、副理事（入学試験・就職担当）（2013年度～）、キャリアセンター長（2014年度～）。これまでの主な担当科目は「CADシステム」。

准教授 井上 博之（いのうえ ひろゆき）

1965年生まれ。広島県出身。2000年、奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。2007年10月に本学着任（講師→准教授）。専門分野はコンピュータネットワーク。これまでの主な担当科目は「コンピュータ基礎」「情報工学実験I・II」「マルチメディア情報通信特論」「ネットワーク設計I演習」「一般情報処理B」「情報と企業」「技術英語」。

助教 岩垣 剛（いわがき つよし）

1977年生まれ。大阪府出身。2004年、奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。2011年8月に本学着任（助教）。専門分野はVLSI設計自動化。これまでの主な担当科目は「基礎演習」「情報科学基礎実験A」「LSI設計演習II」。

教授 岩城 敏（いわき さとし）

1960年生まれ。北海道出身。1997年、北海道大学工学研究科博士課程前期電気工学専攻修了。博士（工学）。1997年度に本学着任（教授）。専門分野はロボット工学。これまでの主な担当科目は「ロボティクスI・II」。

准教授 岩田 一貴（いわた かずのり）

1976年生まれ。愛知県出身。2005年、京都大学大学院情報学研究科博士後期課程システム科学専攻修了。博士（情報学）。2005年度に本学着任（助手→助教→講師→准教授）。専門分野は数理工学。これまでの主な担当科目は「確率統計」「離散数学」「基礎演習」「情報科学基礎実験B」「知能ロボット特論」。

准教授 岩根 典之（いわね のりゆき）

1959年生まれ。山口県出身。1986年、広島大学大学院環境科学研究科修士課程修了。博士（情報工学）。1994年6月に本学着任（助手→助教授→准教授）。専門分野はソフトウェア工学、学習科学、教育工学。これまでの主な担当科目は「一般情報処理」「学生実験（ハードウェア、yacc/lex、コンパイラ、ネットワーク、CG、強化学習）」「技術英語」「eラーニング英語」「人工知能」「学習理論」「学習システム特論」「コンパイラ」「オペレーティングシステム」。

准教授 内田 智之（うちだ ともゆき）

1966年生まれ。熊本県出身。1994年、九州大学大学院総合理工学研究科博士課程情報システム学専攻修了。博士（理学）。1994年度に本学着任（助教授→准教授）。専門分野は知能情報学（グラフアルゴリズム）。これまでの主な担当科目は「グラフ理論概論」「線形代数学」「計算量理論特論」「アルゴリズム論」。

准教授 大田 知行（おおた ともゆき）

1976年生まれ。広島県出身。広島市立大学大学院情報科学研究科博士後期課程情報科学専攻中退。博士（情報工学）。2002年度に本学着任（助手→助教→講師→准教授）。専門分野はネットワークソフトウェア。これまでの主な担当科目は「ネットワークソフトウェア演習」「情報工学実験I・II」。

講師 岡本 勝（おかもと まさる）

1979年生まれ。広島県出身。2009年、広島大学大学院工学研究科博士課程後期複雑システム工学専攻修了。博士（工学）。2007年度に本学着任（助教→講師）。専門分野は教育工学、統計科学。これまでの主な担当科目は「情報セキュリティ」「一般情報処理B」「知識工学特論」。

講師 岡山 友昭（おかやま ともあき）

1982年生まれ。静岡県出身。2010年、東京大学大学院情報理工学系研究科数理情報学専攻博士課程修了。博士（情報理工学）。2014年度に本学着任（講師）。専門分野は数値解析。これまでの主な担当科目は「解析学I」「解析学I演習」「線形代数学I」「線形代数学I演習」。

准教授 小野 貴彦（おの たかひこ）

1970年生まれ。長野県出身。1999年、東北大学大学院情報科学研究科博士課程後期3年の課程修了。博士（情報科学）。2004年11月に本学着任（助手→講師→准教授）。専門分野は制御工学、人間工学。これまでの主な担当科目は「メカトロニクスII」「常微分方程式」「ディジタル制御」「システム推定学特論」。

講師 小畑 博靖（おばた ひろやす）

1977年生まれ。広島県出身。2002年、広島市立大学大学院情報科学研究科博士前期課程情報工学専攻修了。博士（情報工学）。2003年度に本学着任（助手→講師）。専門分野は情報ネットワーク。これまでの主な担当科目は「情報工学実験I・II」「ネットワーク設計II」。

教授 角田 良明（かくだ よしあき）

1955年生まれ。広島県出身。1983年、広島大学大学院工学研究科博士課程後期システム工学専攻修了。工学博士。1998年度に本学着任（教授）。専門分野はネットワークソフトウェア、アドホックネットワーク。これまでの本学での主な役職は、評議会評議員（2005～2006年度）。これまでの主な担当科目は「プロトコル設計」「ソフトウェア工学」「ネットワークソフトウェア特論」。

講師 神尾 武司（かみお たけし）

1971年生まれ。愛知県出身。1999年、静岡大学大学院電子科学研究科博士課程電子応用工学専攻修了。博士（工学）。1999年度に本学着任（助手→助教→講師）。専門分野は計算機工学、ソフトコンピューティング。これまでの主な担当科目は「通信工学I」「電子回路I」。

講師 上土井 陽子（かみどい ようこ）

1967年生まれ。広島県出身。1994年、広島大学大学院工学研究科博士課程後期システム工学専攻修了。博士（工学）。1994年度に本学着任（助手→講師）。専門分野は情報工学。これまでの主な担当科目は「最適化アルゴリズム」「分散システム」「オートマトンと形式言語」。

講師 川端 英之（かわばた ひでゆき）

1969年生まれ。広島県出身。1994年、京都大学大学院工学研究科情報工学専攻修士課程修了。博士（工学）。1994年度に本学着任（助手→講師）。専門分野は情報工学。これまでの主な担当科目は「コンパイラ」「数値計算プログラミング」「プログラミング言語特論」。

助教 川本 佳代（かわもと かよ）

1965年生まれ。広島県出身。国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程教育方法学専攻単位取得満期退学。修士（教育学）。1994年度に本学着任（助手→助教）。専門分野は教育工学。これまでの主な担当科目は「情報社会論」「教職実践演習」「システム工学実験」。

教授 北上 始（きたかみ はじめ）

1952年生まれ。北海道出身。1976年、東北大学大学院工学研究科博士前期課程電子工学専攻修了。博士（工学）。1994年度に本学着任（教授）。専門分野はデータ工学、生命情報学。これまでの主な担当科目は「情報科学概論」「データベース」「データマイニング」「知識ベース特論」。

教授 北村 俊明（きたむら としあき）

1955年生まれ。京都府出身。1983年、京都大学大学院工学研究科情報工学専攻博士後期課程研究指導認定退学。博士（工学）。2002年度に本学着任（教授）。専門分野は情報工学。これまでの主な担当科目は「コンピュータシステムⅡ」「オペレーティングシステム」。

助教 串田 淳一（くしだ じゅんいち）

1978年生まれ。石川県出身。2006年、立命館大学大学院理工学研究科フロンティア理工学専攻単位取得満期退学。博士（工学）。2012年度に本学着任（助教）。専門分野は進化的計算。これまでの主な担当科目は「線形代数学Ⅰ演習」「基礎演習」。

助教 窪田 昌史（くぼた あつし）

1969年生まれ。北海道出身。京都大学大学院工学研究科情報工学専攻博士後期課程研究指導認定退学。博士（情報学）。1998年度に本学着任（助手→助教）。専門分野はシステムソフトウェア。これまでの主な担当科目は「並列コンピュータ」。

准教授 黒木 進（くろき すすむ）

1964年生まれ。福岡県出身。1990年、東京大学大学院工学系研究科博士前期課程計数工学専攻修了。博士（工学）。1999年9月に本学着任（助教授→准教授）。専門分野はマルチメディアデータベース。これまでの主な担当科目は「データ構造とアルゴリズムⅡ」。

助教 黒澤 義明（くろさわ よしあき）

1968年生まれ。愛知県出身。1994年、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了。修士（人間・環境学）。1994年度に本学着任（助手→助教）。専門分野は自然言語処理。これまでの主な担当科目は「知能工学実験」。

講師 桑田 精一（くわた せいいち）

1962年生まれ。広島県出身。1993年、早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程物理学及応用物理学専攻修了。博士（理学）。1995年度に本学着任（助手→講師）。専門分野は理論物理学。これまでの主な担当科目は「量子・統計力学」。

講師 香田 次郎（こうだ じろう）

1973年生まれ。大阪府出身。神戸大学大学院自然科学研究科博士課程後期課程分子集合科学専攻中退。博士（工学）。2001年度に本学着任（助手→講師）。専門分野は生物工学。これまでの主な担当科目は「基礎生化学」「分子生物学」「生体センサ工学」。

講師 河野 英太郎（こうの えいたろう）

1967年生まれ。広島県出身。2012年、首都大学東京大学院システムデザイン研究科博士後期課程経営システムデザイン専攻修了。博士（工学）。1996年度に本学着任（情報処理センター助手→情報科学研究科助教→同講師）。専門分野はネットワークソフトウェア、情報ネットワーク。これまでの主な担当科目は「一般情報処理A・B」「ネットワークソフトウェア演習」「基礎演習」。

准教授 小嵜 貴弘（こさき たかひろ）

1971年生まれ。岐阜県出身。1996年、金沢大学大学院工学研究科修士課程機械システム工学専攻修了。博士（工学）。1996年度に本学着任（助手→助教授→准教授）。専門分野は制御工学。これまでの主な担当科目は「現代制御理論」「数値計算法」。

情報科学部・情報科学研究科

助教 小作 敏晴（こさく としはる）

1969年生まれ。石川県出身。1994年、金沢大学大学院工学研究科博士課程前期機械システム工学専攻修了。修士（工学）。1997年度に本学着任（助手→助教）。専門分野は機械工学。これまでの主な担当科目は「情報科学基礎実験C」「システム工学実験Ⅰ・Ⅱ」。

助教 児島 彰（こじま あきら）

1965年生まれ。兵庫県出身。1996年、京都大学大学院工学研究科情報工学専攻博士課程単位取得満期退学。修士（工学）。1996年度に本学着任（助手→助教）。専門分野はシステムソフトウェア、コンピュータアーキテクチャ。これまでの主な担当科目は「情報工学実験Ⅰ・Ⅱ」「情報科学基礎実験A」「コンピュータアーキテクチャA」。

教授 小林 康秀（こばやし やすひで）

1953年生まれ。広島県出身。1979年、九州大学大学院工学研究科博士前期課程電気工学専攻修了。博士（工学）。1995年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野はシステム制御工学。これまでの本学での主な役職は、評議会評議員（2008～2009年度）、情報科学部副学部長・情報科学研究科副研究科長（2010～2011年度）。これまでの主な担当科目は「ディジタル制御」。

講師 齋藤 夏雄（さいとう なつお）

1973年生まれ。千葉県出身。2002年、東京大学大学院数理科学研究科数理科学専攻博士課程修了。博士（数理科学）。2004年度に本学着任（助手→助教→講師）。専門分野は代数幾何学。これまでの主な担当科目は「解析学Ⅰ」「線形代数学Ⅰ・Ⅱ」「情報代数」「情報数学特論Ⅰ」。

助教 齊藤 充行（さいとう みつゆき）

1977年生まれ。群馬県出身。2006年、茨城大学大学院理工学研究科博士後期課程生産科学専攻修了。博士（工学）。2007年度に本学着任（助教）。専門分野は制御工学。これまでの主な担当科目は「システム工学実験Ⅱ」。

教授 佐藤 学（さとう まなぶ）

1953年生まれ。東京都出身。1976年、東京理科大学理学部応用数学科卒業。博士（理学）。2007年度に本学着任（教授）。専門分野は数理統計学。これまでの主な担当科目は「線形代数学Ⅰ・Ⅱ」「線形代数学Ⅰ演習」「教科教育法（数学）Ⅰ・Ⅱ」「統計数学特論」「確率統計」「数学演習Ⅰ・Ⅱ」。

助教 佐藤 康臣（さとう やすおみ）

1964年生まれ。広島県出身。広島大学大学院工学研究科情報工学専攻博士課程後期単位取得退学。工学修士。1994年度に本学着任（助手→助教）。専門分野はソフトウェア工学。これまでの主な担当科目は「情報科学基礎実験C」「プログラミングⅠ演習」。

教授 式田 光宏（しきだ みつひろ）

1964年生まれ。千葉県出身。1990年、成蹊大学大学院工学研究科博士課程前期課程電気工学専攻修了。博士（工学）（名古屋大学）。2014年度に本学着任（教授）。専門分野はマイクロ理工学。これまでの主な担当科目は「制御工学」「ディジタル信号処理」「バイオメカニクス」「マイクロ医用工学特論」。

准教授 島 和之（しま かずゆき）

1968年生まれ。福岡県出身。1993年、大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了。博士（工学）。2004年度に本学着任（助教授→准教授）。専門分野はソフトウェア工学。これまでの主な担当科目は「プログラミングⅠ」「プログラミングⅠ演習」「オブジェクト指向技術」「システム工学実験」「ソフトウェア工学」「一般情報処理B」「ファイルとデータベース」。

講師 新 浩一（しん こういち）

1972年生まれ。富山県出身。京都大学大学院工学研究科電気工学専攻博士後期課程研究指導認定退学。博士（工学）。2008年度に本学着任（助教→講師）。専門分野は電波工学。これまでの主な担当科目は「確率統計」「線形代数学Ⅰ演習」「情報工学実験Ⅰ・Ⅱ」「一般情報処理B」「数学演習Ⅰ」。

准教授 末松（すえまつ） 伸朗（のぶお）

1964年生まれ。福岡県出身。1990年、九州大学大学院理学研究科博士前期課程物理学専攻修了。博士（工学）。1994年度に本学着任（助手→准教授）。専門分野はパターン認識、機械学習。これまでの主な担当科目は「パターン認識」「プログラミングⅡ」「プログラミングⅡ演習」。

助教 鈴木（すずき） 祐介（ゆうすけ）

1977年生まれ。東京都出身。2007年、九州大学大学院システム情報科学府情報理学専攻博士後期課程修了。博士（理学）。2004年10月に本学着任（助手→助教）。専門分野は知能情報学、計算学習理論。これまでの主な担当科目は「プログラミングⅠ演習」「基礎演習」。

准教授 砂山（すなやま） 渡（わたる）

1973年生まれ。大阪府出身。1999年、大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程中退。博士（工学）。2003年10月に本学着任（助教授→准教授）。専門分野はテキストマイニング。これまでの主な担当科目は「ヒューマンインタフェース」。

准教授 関根（せきね） 光弘（みつひろ）

1961年生まれ。東京都出身。1989年、広島大学大学院理学研究科博士課程後期数学専攻修了。理学博士。1994年度に本学着任（助教授→准教授）。専門分野は位相幾何学。これまでの主な担当科目は「線形代数学Ⅰ・Ⅱ」「幾何学概論」「応用幾何学」「グラフ理論」「情報数学特論Ⅱ」。

准教授 双紙（そうし） 正和（まさかず）

1968年生まれ。福岡県出身。1993年、東京大学大学院理学系研究科情報科学専攻修士課程修了。博士（工学）。2007年6月に本学着任（准教授）。専門分野は情報セキュリティ。これまでの主な担当科目は「情報セキュリティ概論」。

助教 高井（たかい） 博之（ひろゆき）

1963年生まれ。兵庫県出身。1992年、摂南大学大学院工学研究科修士課程電気・電子工学専攻修了。修士（工学）。1994年度に本学着任（助手→助教）。専門分野は電子情報工学。これまでの主な担当科目は「システム工学実験」。

准教授 高野（たかの） 知佐（ちさ）

1970年生まれ。兵庫県出身。2008年、首都大学東京大学院システムデザイン研究科博士後期課程修了。博士（工学）。2008年度に本学着任（准教授）。専門分野は情報ネットワーク。これまでの主な担当科目は「通信トラヒック特論」。

教授 高橋（たかはし） 健一（けんいち）

1954年生まれ。広島県出身。1979年、名古屋工業大学大学院工学研究科修士課程情報工学専攻修了。工学博士。1994年度に本学着任（教授）。専門分野は知識処理。これまでの主な担当科目は「人工知能」「推論機構」。

准教授 高橋（たかはし） 賢（さとし）

1967年生まれ。神奈川県出身。1992年、東京電機大学工学研究科情報通信工学専攻修了。博士（工学）。2005年度に本学着任（助教授→准教授）。専門分野は無線通信工学。これまでの主な担当科目は「情報通信システム特論」「通信方式」。

助教 高橋（たかはし） 雄三（ゆうぞう）

1969年生まれ。神奈川県出身。産業医科大学大学院医学研究科博士課程生体情報系専攻単位修得後退学。博士（工学）。2000年度に本学着任（助手→助教）。専門分野は人間工学。これまでの主な担当科目は「情報科学基礎実験C」。

准教授 高橋（たかはし） 隆一（りゅういち）

1954年生まれ。千葉県出身。1981年、東京工業大学大学院修士課程修了。博士（学術）。1994年度に本学着任（助教授→准教授）。専門分野はプロセッサ設計技術、学習デザイン。これまでの本学での主な役職は、過半数代表者（2012～2013年度）。これまでの主な担当科目は「情報工学実験（City-1）」「ディジタル合成工学特論」。

教授 高濱（たかはま） 徹行（てつゆき）

1960年生まれ。兵庫県出身。京都大学大学院工学研究科電気工学第二専攻博士課程研究指導認定退学。博士（工学）。1998年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野は自然コンピューティング。これまでの主な担当科目は「機械学習」「数理計画法」「人工知能」。

教授 竹澤（たけざわ） 寿幸（としゆき）

1961年生まれ。栃木県出身。1989年、早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。工学博士。2007年11月に本学着任（教授）。専門分野は音声言語情報処理、自然言語処理。これまでの本学での主な役職は、社会連携センター長、副理事（社会連携担当）（ともに2013年度～）。これまでの主な担当科目は「音声言語情報処理特論」「自然言語処理」。

准教授 田中（たなか） 公一（こういち）

1958年生まれ。広島県出身。1990年、大阪市立大学大学院理学研究科後期博士課程物理学専攻修了。理学博士。2000年11月に本学着任（助教授→准教授）。専門分野は半導体光物性。これまでの主な担当科目は「物理学」。

教授 田中（たなか） 輝雄（てるお）

1965年生まれ。新潟県出身。九州大学大学院理学研究科博士課程数学専攻中退。博士（理学）。1994年度に本学着任（助教授→准教授→教授）。専門分野は計画数学、確率過程論。これまでの主な担当科目は「解析学Ⅰ・Ⅱ」「最適化手法」。

講師 谷川（たにがわ） 一哉（かずや）

1976年生まれ。広島県出身。2004年、広島市立大学大学院情報科学研究科博士後期課程情報科学専攻修了。博士（情報工学）。2004年度に本学着任（助手→助教→講師）。専門分野はコンピュータアーキテクチャ。これまでの主な担当科目は「コンピュータシステム特論」「情報工学実験」「情報科学基礎実験」。

講師 谷口（たにぐち） 和弘（かずひろ）

1973年生まれ。鳥取県出身。2008年、大阪大学大学院基礎工学研究科機能創成専攻修了。博士（工学）。2012年度に本学着任（講師）。専門分野はメディカルロボティクス、介護福祉ロボティクス。これまでの主な担当科目は「ロボティクスⅠ」「メカトロニクスⅠ」。

准教授 田村（たむら） 慶一（けいいち）

1975年生まれ。山口県出身。九州大学大学院システム情報科学府博士後期課程単位取得満期退学。博士（情報科学）。2002年度に本学着任（助手→助教→講師→准教授）。専門分野はデータ工学。これまでの主な担当科目は「知識ベース特論」「知能工学実験Ⅱ」「データベース」「プログラミングⅢ」「プログラミングⅢ演習」。

助教 辻（つじ） 勝弘（かつひろ）

1970年生まれ。愛知県出身。1996年、福井大学大学院工学研究科博士前期課程情報工学専攻修了。修士（工学）。1996年度に本学着任（助手→助教）。専門分野は機能デバイス。これまでの主な担当科目は「プログラミングⅠ演習」「情報科学基礎実験D」。

助教 常盤（ときわ） 達司（たつじ）

1980年生まれ。福岡県出身。2009年、九州工業大学大学院生命体工学研究科脳情報専攻博士後期課程修了。博士（工学）。2012年度に本学着任（助教）。専門分野は医用生体工学。これまでの主な担当科目は「生体信号処理」「プログラミングⅡ」「プログラミングⅡ演習」「生体計測工学特論」「脳情報工学実習」「医用プログラミング」。

教授 中田（なかた） 明夫（あきお）

1969年生まれ。広島県出身。1997年、大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻情報工学分野博士後期課程修了。博士（工学）。本学での在籍期間は1997年4月～2000年3月（助手）、および2007年4月～（教授）。専門分野は情報科学。これまでの主な担当科目は「オートマトンと形式言語」。

准教授 中野（なかの） 靖久（やすひさ）

1960年生まれ。東京都出身。1988年、東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。

1994年度に本学着任（助教授→准教授）。専門分野は視覚情報工学。これまでの主な担当科目は「一般情報処理Ａ」。

助教 中山 仁史（なかやま まさし）
1982年生まれ。山口県出身。2010年、広島市立大学大学院情報科学研究科博士後期課程情報科学専攻修了。博士（情報科学）。2014年度に本学着任（助教）。専門分野は音声信号処理。これまでの主な担当科目は「システム工学実験Ⅰ」。

准教授 永山 忍（ながやま しのぶ）
1977年生まれ。神奈川県出身。2004年、九州工業大学大学院情報工学研究科博士後期課程情報システム専攻修了。博士（情報工学）。2005年度に本学着任（助手→助教→講師→准教授）。専門分野は論理設計。これまでの主な担当科目は「論理回路」。

准教授 難波 英嗣（なんば ひでつぐ）
1972年生まれ。広島県出身。2001年、北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了。博士（情報科学）。2002年10月に本学着任（講師→准教授）。専門分野は自然言語処理。これまでの主な担当科目は「知的情報検索特論」「情報検索」「データ構造とアルゴリズム」。

准教授 西 正博（ひし まさひろ）
1972年生まれ。広島県出身。1999年、大阪大学大学院工学研究科通信工学専攻博士後期課程修了。博士（工学）。1999年度に本学着任（助手→助教授→准教授）。専門分野は無線通信、電波伝搬、電波応用。これまでの主な担当科目は「通信工学特論」「確率統計」「コンピュータ基礎」。

准教授 八方 直久（はっぽう なおひさ）
1968年生まれ。岡山県出身。広島大学大学院理学研究科博士課程後期物性学専攻単位取得満期退学。博士（理学）。1996年度に本学着任（助手→講師→准教授）。専門分野は半導体物性。これまでの主な担当科目は「基礎物理学」「電気磁気学」「物理化学実験」。

講師 馬場 雅志（ばば まさし）
1968年生まれ。広島県出身。2004年、広島大学大学院工学研究科博士課程後期修了。博士（工学）。1995年1月に本学着任（助手→講師）。専門分野はコンピュータグラフィックス。これまでの主な担当科目は「コンピュータグラフィックスⅠ」「一般情報処理Ａ」「コンピュータグラフィックス特論」。

教授 林 朗（はやし あきら）
1950年生まれ。山口県出身。1991年、テキサス大学オースティン校大学院（米国）自然科学研究科計算機科学専攻博士課程修了。博士（計算機科学）。1994年度に本学着任（教授）。専門分野は機械学習、パターン認識。これまでの本学での主な役職は、評議会評議員（2008～2009年度）、副理事（入学試験担当）（2010～2012年度）。これまでの主な担当科目は「情報基礎数学」「最適化理論」「知能ロボット特論」。

准教授 原 章（はら あきら）
1974年生まれ。大分県出身。2002年、東京工業大学大学院総合理工学研究科物理情報システム創造専攻博士後期課程修了。博士（工学）。2002年度に本学着任（助手→講師→准教授）。専門分野は進化的計算論。これまでの主な担当科目は「一般情報処理Ｂ」「知能工学実験Ⅰ」「情報システム」「推論方式特論」。

教授 日浦 慎作（ひうら しんさく）
1972年生まれ。兵庫県出身。1997年、大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。2010年度に本学着任（教授）。専門分野は画像情報処理。これまでの本学での主な役職は、情報科学部副学部長・情報科学研究科副研究科長（2012年度～）。これまでの主な担当科目は「コンピュータ基礎」「画像情報処理」。

講師 廣門 正行（ひろかど まさゆき）
1969年生まれ。福岡県出身。1998年、東京大学大学院数理科学研究科博士課程数理科学専攻修了。博士（数理科学）。1999年度に本学着任（助手→講師）。専門分野は代数幾何学。これまでの主な担当科目は「情報数学特論Ⅰ」「教科教育法（数学）」「情報代数」「解析学Ⅰ・Ⅱ」「線形代数学Ⅰ・Ⅱ」。

情報科学部・情報科学研究科

教授 弘中 哲夫（ひろなか てつお）
1965年生まれ。山口県出身。1993年、九州大学大学院総合理工学研究科情報システム学専攻博士後期課程修了。博士（工学）。1994年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野はコンピュータアーキテクチャ。これまでの主な担当科目は「コンピュータシステム特論」「コンピュータシステムⅠ」。

教授 樋脇 治（ひわき おさむ）
1963年生まれ。福岡県出身。1992年、九州大学大学院工学研究科博士後期課程電子工学専攻修了。博士（工学）。1994年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野は生体工学。これまでの主な担当科目は「生体情報工学」。

准教授 福島 勝（ふくしま まさる）
1961年生まれ。東京都出身。東京工業大学大学院理工学研究科化学専攻満期退学。理学博士。1997年度に本学着任（助教授→准教授）。専門分野はレーザー分光。これまでの主な担当科目は「化学概論」「化学物理」「電気・電子材料」。

准教授 福田 浩士（ふくだ ひろし）
1973年生まれ。鳥取県出身。2001年、豊橋技術科学大学大学院工学研究科博士後期課程電子・情報工学専攻修了。博士（工学）。2007年度に本学着任（講師→准教授）。専門分野は生体情報工学。これまでの主な担当科目は「プログラミングⅡ」「電気回路」。

教授 藤坂 尚登（ふじさか ひさと）
1957年生まれ。大阪府出身。1983年、慶應義塾大学大学院工学研究科博士前期課程計測工学専攻修了。博士（工学）。1997年10月に本学着任（助教授→准教授→教授）。専門分野は電気・電子工学。これまでの主な担当科目は「電気回路」「電子回路Ⅱ」「論理回路」。

准教授 藤原 久志（ふじわら ひさし）
1966年生まれ。栃木県出身。1994年、大阪大学大学院工学研究科博士後期課程応用物理学専攻単位取得退学。博士（工学）。1994年度に本学着任（助手→講師→准教授）。専門分野は情報科学の自然科学（物理・化学・生物）研究への応用。これまでの本学での主な役職は、過半数代表者（2014年度～）。これまでの主な担当科目は「物理・化学実験」「機能性材料」。

講師 藤原 真（ふじわら まこと）
1962年生まれ。広島県出身。1992年、電気通信大学大学院電気通信学研究科博士後期課程電子物性工学専攻修了。博士（工学）。1994年度に本学着任（助手→講師）。専門分野はナノ材料、質量分析、Ｎ体シミュレーション。これまでの主な担当科目は「プログラミングⅠ」「プログラミングⅠ演習」「物理学」「物理化学実験」「情報科学基礎実験Ｄ」「ナノ情報通信材料特論」。

准教授 舟阪 淳一（ふなさか じゅんいち）
1970年生まれ。京都府出身。1999年、奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程情報システム学専攻修了。博士（工学）。1999年10月に本学着任（助手→講師→准教授）。専門分野はネットワークアプリケーション。これまでの主な担当科目は「プログラミングⅠ・Ⅱ」「プログラミングⅠ演習」「ネットワーク設計Ⅱ」「ネットワーク設計Ⅱ演習」「情報ネットワーク」。

准教授 古川 亮（ふるかわ りょう）
1970年生まれ。大分県出身。1997年、奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。1997年度に本学着任（助手→講師→准教授）。専門分野はコンピュータビジョン、コンピュータグラフィックス。これまでの主な担当科目は「コンピュータグラフィックスⅡ」「数学演習Ⅰ」「知能工学演習」「パターン認識」「プログラミング演習」。

教授 前田 香織（まえだ かおり）
1959年生まれ。広島県出身。1982年、広島大学総合科学部総合科学科卒業。博士（情報工学）。1994年6月に本学着任（情報科学部助手→情報処理センター講師→情報処理センター助教授→情報科学研究科教授）。専門分野は情報工学。これまでの本学での主な役職は、情報処理センター長（2010～2012年度）、副理事（情報担当）（2011年度～）、附属図書館長（2013年度～）。これまでの主な担当科目は

「マルチメディア通信」「ネットワーク設計Ⅰ」。

教授 増谷（ますたに） 佳孝（よしたか）

1968年生まれ。徳島県出身。1997年、東京大学大学院工学系研究科精密機械工学専攻修了。博士（工学）。2010年、同大学院医学系研究科生体物理医学専攻にて論文博士（医学）。2014年度に本学着任（教授）。専門分野は医用画像工学。これまでの主な担当科目は「医用画像処理」。

教授 松原（まつばら） 行宏（ゆきひろ）

1964年生まれ。広島県出身。1989年、広島大学大学院工学研究科博士課程前期情報工学専攻修了。博士（工学）。2003年度に本学着任（教授）。専門分野は知識工学、教育工学。これまでの主な担当科目は「オートマトンと形式言語」「論理回路」「感性情報処理」「教職実践演習」。

特任助教 松本（まつもと） 眞理子（まりこ）

1965年生まれ。広島県出身。2014年、新潟大学大学院自然科学研究科博士課程後期修了。博士（工学）。2014年度に本学着任（特任助教）。専門分野は生体医工学（ブレイン・コンピュータ・インタフェース）。これまでの主な担当科目は「臨床情報医工学」。

准教授 三村（みむら） 和史（かずし）

1969年生まれ。兵庫県出身。1999年、大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程物理系専攻修了。博士（理学）。2004年度に本学着任（准教授）。専門分野は情報理論、統計物理。これまでの主な担当科目は「情報理論」「確率統計」。

准教授 宮﨑（みやざき） 大輔（だいすけ）

1977年生まれ。東京都出身。2005年、東京大学大学院情報理工学系研究科博士課程コンピュータ科学専攻修了。博士（情報理工学）。2008年10月に本学着任（講師→准教授）。専門分野はコンピュータビジョン。これまでの主な担当科目は「コンピュータグラフィックスⅠ・Ⅱ」「知能工学実験Ⅱ」「画像応用数学特論」。

准教授 宮原（みやはら） 哲浩（てつひろ）

1960年生まれ。福岡県出身。九州大学大学院総合理工学研究科情報システム学専攻博士後期課程退学。博士（理学）。1996年度に本学着任（助教授→准教授）。専門分野は知能情報学（機械学習）。これまでの主な担当科目は「推論方式特論」「計算論」「数理論理学」「記号処理プログラミング」。

准教授 村田（むらた） 佳洋（よしひろ）

1975年生まれ。奈良県出身。2003年、奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。2007年10月に本学着任（准教授）。専門分野は組み合わせ最適化。これまでの主な担当科目は「データ構造とアルゴリズム」「確率統計」「ソフトコンピューティング」。

助教 目良（めら） 和也（かずや）

1972年生まれ。和歌山県出身。2003年、東京都立科学技術大学大学院博士後期課程修了。博士（学術）。1996年度に本学着任（助手→助教）。専門分野は感情情報処理、自然言語処理、音声言語処理。これまでの主な担当科目は「基礎演習」「一般情報処理Ｂ」「情報科学基礎実験Ｂ」。

助教 森（もり） 康真（やすま）

1968年生まれ。滋賀県出身。1994年、北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程情報処理学専攻修了。修士（情報科学）。1994年度に本学着任（助手→助教）。専門分野は知識情報処理。これまでの主な担当科目は「基礎演習」「情報科学基礎実験Ｂ」。

教授 矢野（やの） 卓雄（たくお）

1950年生まれ。愛媛県出身。1979年、名古屋大学大学院農学研究科博士後期課程食品工業科学専攻修了。農学博士。1994年度に本学着任（教授）。専門分野は生物工学、食品工学。これまでの本学での主な役職は、情報科学部長・情報科学研究科長（2012年度～）。これまでの主な担当科目は「心の健康・身体の健康」「生物学概論」「生物工学」。

教授 吉田（よしだ） 彰顕（てるあき）

1950年生まれ。山口県出身。1975年、大阪大学大学院基礎工学研究科修士課程修了。工学博士。1999年度に本学着任（教授）。専門分野は電波科学。これまでの主な担当科目は「情報通信方法特論」。

教授 若林（わかばやし） 真一（しんいち）

1956年生まれ。山口県出身。1984年、広島大学大学院工学研究科博士課程後期システム工学専攻修了。工学博士。2003年度に本学着任（教授）。専門分野は情報工学。これまでの本学での主な役職は、副学長（教務・学生担当）（2008～2009年度）、理事・副学長（教育・研究担当）（2010～2012年度）、理事・副学長（企画・戦略担当）（2013年度～）。これまでの主な担当科目は「論理回路」「論理設計」「電子回路」「論理回路・システム特論」。

（3）在職期間一覧

（2014年度4月1日時点。年度途中の着任・離任の場合でも、その年度は在職期間として示す。）

氏名＼年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
アダムス，ロルフ	1994																				2014
石渡　孝	1994																				2014
井上　伸二	1994																				2014
岩根　典之	1994																				2014
内田　智之	1994																				2014
上土井　陽子	1994																				2014
川端　英之	1994																				2014
川本　佳代	1994																				2014
北上　始	1994																				2014
黒澤　義明	1994																				2014
佐藤　康臣	1994																				2014
末松　伸朗	1994																				2014
関根　光弘	1994																				2014
高井　博之	1994																				2014
髙橋　健一	1994																				2014
髙橋　隆一	1994																				2014
田中　輝雄	1994																				2014
中野　靖久	1994																				2014
林　朗	1994																				2014
弘中　哲夫	1994																				2014
樋脇　治	1994																				2014
藤原　久志	1994																				2014
藤原　真	1994																				2014
前田　香織	1994																				2014
森　康真	1994																				2014
矢野　卓雄	1994																				2014
大場　充	1994																			2013	
寺田　和夫	1994																			2013	
伊藤　史郎	1994																		2012		
佐野　学	1994																		2012		
堀居　賢樹	1994													2007							
中村　泰明	1994												2006								
村田　厚生	1994											2005									
磯道　義典	1994										2004										
橘　啓八郎	1994										2004										
越智　裕之	1994									2003											

氏名＼年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
天野　橘太郎	1994								2002												
田村　秋雄	1994								2002												
開　和生	1994								2002												
竹内　俊文	1994							2001													
新井　紀子	1994						2000														
小松　壽	1994						2000														
寺内　睦博	1994						2000														
ブーセラマ，ファウジ	1994						2000														
藤野　清次	1994						2000														
任　福継	1994						2000														
松井　淳	1994					1999															
刘　少英	1994					1999															
會見　忠則	1994				1998																
有川　正俊	1994				1998																
蒋　勝平	1994				1998																
栗山　繁	1994			1997																	
村山　優子	1994			1997																	
陳　春祥	1994			1997																	
竹内　敏己	1994	1995																			
細田　陽介	1994	1995																			
林　涯	1994	1995																			
辛島　光彦	1994																				
中村　隆志	1994																				
桑田　精一		1995																			2014
小林　康秀		1995																			2014
馬場　雅志		1995																			2014
浅田　尚紀		1995																	2012		
上田　祐彰		1995															2010				
相澤　輝昭		1995										2005									
松浦　義則		1995									2004										
沖田　豪		1995							2002												
吉田　典可		1995							2002												
天野　晃		1995						2001													
李　仕剛		1995					2000														
岩松　雅夫		1995				1999															
生駒　哲一		1995		1997																	
白濵　弘幸		1995		1997																	
高山　毅		1995		1997																	
ハイダル，アリ		1995		1997																	
廣瀬　英雄		1995		1997																	
青山　正人			1996																		2014
河野　英太郎			1996																		2014
小嵜　貴弘			1996																		2014
児島　彰			1996																		2014
辻　勝弘			1996																		2014
八方　直久			1996																		2014
宮原　哲浩			1996																		2014
目良　和也			1996																		2014
末原　憲一郎			1996									2005									
神原　利彦			1996							2003											
坂本　政祐			1996							2003											
大槻　説乎			1996						2002												
津田　孝夫			1996						2002												

氏名＼年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
森末　道忠			1996						2002												
佐藤　聡			1996				2000														
岩瀬　弘和			1996			1999															
小守　良雄			1996	1997																	
石田　賢治				1997																	2014
小作　敏晴				1997																	2014
福島　勝				1997																	2014
藤坂　尚登				1997																	2014
古川　亮				1997																	2014
中田　明夫				1997		1999								2007							2014
市村　匠				1997												2009					
中村　学				1997								2005									
間島　利也				1997				2001													
土橋　宣典				1997			2000														
角田　良明					1998																2014
窪田　昌史					1998																2014
高濱　徹行					1998																2014
寺内　衛					1998														2012		
嵩　忠雄					1998				2002												
鍵　絵里子					1998			2001													
向谷　博明					1998			2001													
岩切　一幸					1998	1999															
市原　英行						1999															2014
井上　智生						1999															2014
神尾　武司						1999															2014
黒木　進						1999															2014
西　正博						1999															2014
廣門　正行						1999															2014
舟阪　淳一						1999															2014
吉田　彰顕						1999															2014
加藤　博一						1999			2002												
三好　哲也						1999		2001													
高橋　雄三							2000														2014
田中　公一							2000														2014
得重　仁							2000			2003											
長藤　かおり							2000		2002												
香田　次郎								2001													2014
甲本　卓也								2001		2003											
田中　良幸								2001	2002												
中村　一美								2001	2002												
大田　知行									2002												2014
北村　俊明									2002												2014
田村　慶一									2002												2014
難波　英嗣									2002												2014
原　章									2002												2014
疋田　真一									2002											2013	
椋木　雅之									2002						2008						
山田　憲嗣									2002	2003											
田中　久弥									2002												
小畑　博靖										2003											2014
砂山　渡										2003											2014
松原　行宏										2003											2014
若林　真一										2003											2014

氏名＼年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
中野　幸夫										2003							2010				
清水　將吾										2003			2006								
早見　武人										2003			2006								
小野　貴彦											2004										2014
齋藤　夏雄											2004										2014
島　和之											2004										2014
鈴木　祐介											2004										2014
谷川　一哉											2004										2014
三村　和史											2004										2014
生岩　量久											2004								2012		
岩田　一貴												2005									2014
高橋　賢												2005									2014
永山　忍												2005									2014
高橋　茂												2005		2007							
厚海　慶太														2007							2014
石光　俊介														2007							2014
井上　博之														2007							2014
岩城　敏														2007							2014
岡本　勝														2007							2014
齊藤　充行														2007							2014
佐藤　学														2007							2014
双紙　正和														2007							2014
竹澤　寿幸														2007							2014
福田　浩士														2007							2014
村田　佳洋														2007							2014
小田垣　雅人														2007				2011			
吉川　祐樹														2007			2010				
安　昌俊														2007		2009					
稲木　雅人															2008						2014
新　浩一															2008						2014
髙野　知佐															2008						2014
宮﨑　大輔															2008						2014
日浦　慎作																	2010				2014
小田　亮太郎																	2010	2011			
小島　英春																	2010	2011			
ダリボ，イスマエル																	2010	2011			
正岡　元																	2010	2011			
佐々木　克実																	2010				
岩垣　剛																		2011			2014
青木　宙人																		2011	2012		
稲葉　通将																			2012		2014
串田　淳一																			2012		2014
谷口　和弘																			2012		2014
常盤　達司																			2012		2014
三澤　秀明																			2012	2013	
岡山　友昭																					2014
式田　光宏																					2014
中山　仁史																					2014
増谷　佳孝																					2014
松本　眞理子																					2014

5. 教育研究活動紹介

情報科学部・情報科学研究科では、高度情報化社会を支える情報通信技術（ICT）に関する研究開発を担う研究者および専門技術者を養成するため、以下の教育目標を定めて教育を行ってきた。

- ○ 学生が興味・関心、適性に基づいて専門分野を選択できる仕組みの提供
- ○ 情報科学に必要な基礎学力の育成
- ○ 情報通信技術を活用できる技能の養成
- ○ 専門分野に関する体系的な知識の修得
- ○ 体験的・総合的学習を重視した教育プログラムの実施
- ○ 知識や学力の多様化した学生への効果的な教育の実施

教育研究を担う組織として1994年の開学時は28講座を開設し、2007年度の改組に伴い32研究室に再編した。その後の研究室の統合を経て、2013年度末時点では30研究室の体制となった。開学時からの講座、ならびに研究室の変遷を以下に示す。また2007年度の改組以降は、学部一括で学生を募集し、2年次前期まで共通のカリキュラムで教育（学部共通教育）を実施したのち、2年次前期終了時に学科配属を行っている（2013年度以降は1年次後期終了時に学科配属を実施）。

講座・研究室の変遷

1994年度	→	2003年度	→	
情報数理学科	→	**情報メディア工学科**	→	
情報数理学 講座	→	電波メディア 講座	→	A1
計算機構学 講座	→	知的メディア工学 講座	→	A2
情報論理学 講座	→	情報セキュリティ 講座	→	A3
ソフトウェア工学 講座	→	→	→	A4
システム工学 講座	→	→	→	A5
認知機構学 講座	→	→	→	A6
情報工学科	→	→	→	
機能デバイス学 講座	→	→	→	B1
論理回路学 講座	→	→	→	B2
コンピュータシステム 講座	→	→	→	B3
プログラム工学 講座	→	→	→	B4
コンピュータアーキテクチャ 講座	→	→	→	B5
情報ネットワーク 講座	→	→	→	B6
情報物性 講座	→	→	→	B7
知能情報システム工学科	→	→	→	
知識工学 講座	→	→	→	C1
推論機構学 講座	→	→	→	C2
情報認識学 講座	→	→	→	C3
データベースシステム 講座	→	→	→	C4
自然言語処理学 講座	→	→	→	C5
知能システム 講座	→	→	→	C6
知能数理 講座	→	→	→	C7
情報機械システム工学科	→	→	→	
情報機械素子 講座	→	→	→	D1
知的制御理論 講座	→	→	→	D2
知能ロボット 講座	→	→	→	D3
設計工学 講座	→	→	→	D4
生体情報処理学 講座	→	→	→	D5
システムインタフェース 講座	→	→	→	D6
情報材料1 講座	→	→	→	D7
情報材料2 講座	→	→	→	D8

2007年4月に改組

2007年度	2008年度	2012年度	2013年度
情報工学専攻／学科	→	→	**情報工学専攻／学科**
D4 コンピュータデザイン 研究室	→	→	コンピュータデザイン 研究室
B2 論理回路システム 研究室	→	→	論理回路システム 研究室
B5 コンピュータシステム 研究室	→	→	コンピュータシステム 研究室
B3 コンピュータアーキテクチャ 研究室	→	→	コンピュータアーキテクチャ 研究室
B4 ネットワークソフトウェア 研究室	→	→	ネットワークソフトウェア 研究室
B6 情報ネットワーク 研究室	→	→	情報ネットワーク 研究室
A1 環境メディア 研究室	→	→	環境メディア 研究室
新 インターネット工学 研究室	→	→	インターネット工学 研究室
知能工学専攻／学科	→	→	**知能工学専攻／学科**
C1 知識工学 研究室	→	→	知識工学 研究室
C4 データ工学 研究室	→	→	データ工学 研究室
C6 知能システム 研究室	→	→	知能システム 研究室
A2 機械学習 研究室	→	→	機械学習 研究室
C3 画像メディア工学 研究室	→	→	画像メディア工学 研究室
新 コンピュータグラフィックス 研究室	→	→	コンピュータグラフィックス 研究室
C5 言語音声メディア工学 研究室	→	→	言語音声メディア工学 研究室
C2 知的メディア工学 研究室	→	→	知的メディア工学 研究室
D3 パターン認識 研究室	→	→	パターン認識 研究室
新 数理情報 研究室			
システム工学専攻／学科	→	→	**システム工学専攻／学科**
A5 機械制御 研究室	→	→	機械制御 研究室
D2 知的制御システム 研究室	→	→	知的制御システム 研究室
D1 通信・信号処理 研究室	→	→	通信・信号処理 研究室
A4 サービス指向ソフトウェア 研究室	→	→	サービス指向ソフトウェア 研究室
新 人間工学 研究室	→	→	人間工学 研究室
新 ロボティクス 研究室	→	→	ロボティクス 研究室
D6 システムインタフェース 研究室	→	→	システムインタフェース 研究室
C7 数理科学 研究室	→	→	数理科学 研究室
新 計画数学 研究室	→	→	
創造科学専攻	→	**創造科学専攻／医用情報科学科**	**創造科学専攻／医用情報科学科**
B1 集積回路デバイス 研究室	→	→	集積回路デバイス 研究室
B7 電子光システム 研究室	情報物性工学 研究室	→	情報物性工学 研究室
D5 生体理工学 研究室	→	→	生体理工学 研究室
D7 光システム計測 研究室	→	→	光システム計測 研究室
D8 バイオシステム工学 研究室	→	→	バイオシステム工学 研究室

（1）情報工学科と情報工学専攻

情報工学科および情報工学専攻では、コンピュータとネットワークに関するハードウェア技術およびソフトウェア技術を広範囲に教育研究している。これらの技術をベースに、コンピュータとネットワークの融合技術、情報環境に対応できる人材を育成している。

i. コンピュータコース（分野）・研究室紹介

コンピュータのハードウェア、ソフトウェアなどに関する基礎的な知識を学び、システムソフトウェア、システムLSI、組込みシステムなどの高度情報化社会を支える情報システムおよび新しいコンピューティング環境に対応できる人材を育成している。

○ コンピュータデザイン

私たちの日常生活に浸透するコンピュータシステム／サービスは、大規模複雑化ゆえにその信頼性の確保が困難となっている。本研究室はそのような課題を解決するためのディペンダブル（頼りになる）・コンピューティング・システムとその設計法を探求している。

○ 論理回路システム

コンピュータのハードウェアとソフトウェアは論理回路・論理設計の理論に基づいて統一的に議論することができる。本研究室では論理回路学とVLSI設計技術に基づいて、コンピュータに関する最先端の研究課題に取り組んでいる。

○ コンピュータシステム

膨大な計算を行うスーパーコンピュータから、自動車や携帯電話、家電製品に使われる組込みシステムまで、各種のコンピュータシステムを利用する基盤となるハードウェア・ソフトウェアの基礎技術を研究している。

○ コンピュータアーキテクチャ

速くて使いやすい新しいコンピュータを作る研究をしている。ハードウェアに可変構造のデバイスを利用した新しいアーキテクチャの研究や、そのハードウェアが使いやすくなるようなソフトウェアについて研究している。

ii. ネットワークコース（分野）・研究室紹介

インターネット、モバイル通信、デジタル放送などに関する基礎的な知識を学び、いつでもどこでも利用可能なユビキタスネットワークなどの情報ネットワークおよび次世代のメディア協調型情報ネットワーク社会に対応できる人材を育成している。

○ ネットワークソフトウェア

各モバイル端末が端末そのものの機能だけでなくデータ中継機能の役割も果たし、無線だけでネットワークを構成するアドホックネットワーク、センサーネットワークなどに適用するネットワークソフトウェア技術の研究開発を行い、登下校時の児童の見守り、地域社会における口コミ情報の伝搬、災害時の安否情報の伝達などに応用している。

○ 情報ネットワーク

情報ネットワークに関わる基盤技術、そのシステムおよびネットワーク全体を対象としたさまざまな技術について教育研究している。例えば、通信サービスの高度化・高信頼化、高速衛星回線用プロトコル、自律分散制御・ネットワーク性能評価、効率的な情報交換を実現するネットワークアプリケーション、電波応用・無線通信等である。

○ 環境メディア

電波による宇宙・地球環境の観測、地震と電波の関係、テレビ放送波によるヒト検知、瀬戸内海上電波伝搬、船舶安全航行ネットワーク、心地よい音響環境、フーリエ音響学の研究を行っている。

○ インターネット工学

世界に広がるインターネットを研究材料とする。特にインターネットにおけるモバイル通信など新たな通信手順の設計、コンテンツ流通、映像・音声の伝送、広域センサーネットワークの研究を行っている。

３年次授業「情報工学実験Ⅰ・Ⅱ」

情報工学実験ⅠおよびⅡでは、ロボットカーのプログラミングやAndroidタブレットのアプリ作成等を含むカリキュラムで構成され、コンピュータやネットワークの仕組みについて実践的に学んでいる。

情報工学実験Ⅰ

情報工学実験Ⅱ

コミュニティネットワーキングの研究開発

スマートフォンやタブレットなどのモバイル端末だけで構成されるモバイルアドホックネットワークの特性を生かせば、地域社会における情報の地産地消を実現するコミュニティネットワーキングを構築できる。ネットワークソフトウェア研究室（旧プログラム工学講座）では、児童見守りシステムおよび口コミ情報伝搬システムを研究開発し、それぞれ2007年および2013年に広島市立矢野南小学校区でのモデル事業、および「ひろしま菓子博2013」での実証実験を実施し、学生の教育に生かしてきた。

児童見守りシステムの表示画面

「ひろしま菓子博2013」実証実験の様子

（2）知能工学科と知能工学専攻

知能工学科では、知識基盤社会における人間の知的なコミュニケーション行動や情報行動を支援する、高度な知能情報システムの技術者および研究者を育成するために、知能ソフトウェアコースと知能メディアコースの2コースを設置している。また、両コースに共通な教育として、コンピュータグラフィックス、データベース、ディジタル信号処理、最適化理論、情報理論、数理論理学、グラフ理論概論などが開設されている。

また知能工学専攻では、人間の知的なコミュニケーション行為や情報行為を支援する知能情報処理およびシステム化に焦点を当て、情報処理の基礎技術の上に知能情報処理に関する基礎理論、知識基盤社会において特徴的な知能情報処理の基本要素技術、これらの各成分を組み合わせた知能情報処理の応用について、より高度な教育研究を行っている。具体的には、知識基盤社会におけるさまざまな形態のコミュニケーションに対応する知能情報処理の理論的基礎の上に、人間とコンピュータとのコミュニケーションの実現に向けた知能メディア分野、人間の知的な情報行為やコミュニケーション行為に適合した知的なシステムを構築することを目指した知能ソフトウェア分野の２分野で構成される。

i. 知能ソフトウェアコース（分野）・研究室紹介

○ 知識工学

人工知能やVRの技術を基に、学校や企業での教育や学習活動を支援するための知的学習支援システムやeラーニングの研究を行っている。また、ヒトの感性と知識を結びつける感性工学の研究も行っている。

○ データ工学

文字・数値、テキスト、音声、画像などで表現されるデータを用いて、人間の知識創造活動を支援する情報システムの構築に挑戦している。特に、ビッグデータやデータベースからの知識発見、マルチメディアデータ処理、分散並列処理、視覚的な情報コミュニケーション、情報マネジメントなどに注目している。

○ 知能システム

生物の進化や昆虫の群行動などに基づく自然コンピューティング、脳神経系に基づくニューラルネットワークなどに関する研究を中心に、知的モデルや計算アルゴリズムの提案、知的システムの構築などを行っている。

○ 機械学習

機械学習とは、人間が自然に行っている学習と同様の機能をコンピュータ上で実現するための技術である。機械学習手法を用いた特徴的パターンの発見や、データマイニングへの応用について研究を行っている。

ii. 知能メディアコース（分野）・研究室紹介

○ 画像メディア工学

原爆ドームの立体表示や被爆資料の仮想展示、そして医用画像からの病変検出や絵画の解析と生成など、画像メディアに関する「見る（診る）技術」と「見せる（魅せる）技術」の研究を行っている。

○ コンピュータグラフィックス

映画やゲームでおなじみのコンピュータグラフィックス。ここでは、三次元計測のデジタル処理により魅力的な映像を制作するための技術の開発に取り組んでいる。

○ 言語音声メディア工学

人と機械や、異なる言語を話す人同士での自然で豊かなコミュニケーションを実現するために、音声で対話するCGキャラクターや機械翻訳、大規模な文書集合から必要な情報を言語で検索する技術などに取り組んでいる。

○ 知的メディア工学

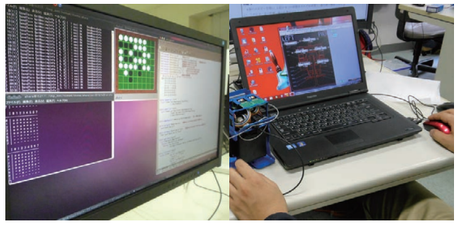
テキスト、画像、データなどのさまざまなメディアにおける知識の獲得、知識を適用した知識情報処理の手法の開発や応用、コンピュータが自分で協調して学習を行うマルチエージェントの研究を行っている。また、データを圧縮したり、通信で起こる誤りを訂正したりするための、より効率的な技術について研究している。物理的な手法を系統的に適用することによって、情報科学に新しい視点を開くことを目指している。

○ パターン認識

パターン認識とはデータに潜む規則性を見つけ出すことであり、文字認識や音声認識に応用されている。ここではビデオ、環境音、テキストなどの（時）系列データを対象に、データに潜む規則性を計算機に自動発見させる機械学習の研究を行っている。

多彩な実験授業（3年次）

知能工学科では、3年次にロボット実験、人工知能実験、コンピュータグラフィックス実験、データマイニング実験を通して知能情報処理に必要とされる技能を習得する。



情報工学実験Ⅱ

コンピュータオセロ大会

知能工学科とその前身となる知能情報システム工学科では、3年次の学生実験として、コンピュータ同士がオセロゲームを対戦するプログラムを作成する「AI&CG：コンピュータオセロ」を実施した。また、実験において作成したオセロプログラムの強さと美しさを競い合うコンピュータオセロ大会を1996年から2011年までに計16回開催した。実験ではコンピュータで知的処理を実現する技術と情報を分かりやすく表現する技術を学び、オセロの思考部分と表示部分を作成したが、大会に向けて自由な発想で熱心にオセロプログラムを作成する学生の姿が見られた。

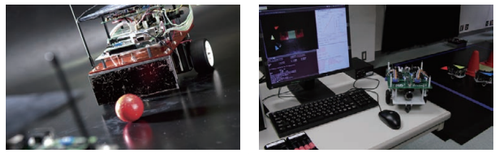
コンピュータオセロ大会の様子

（3）システム工学科とシステム工学専攻

システム工学科は2007年度の学部再編で設置され、情報科学やシステム工学の基礎的な知識を適切に応用し、高度な創造性が要請される現代社会の複雑な問題解決に挑戦し、効率・環境・安全などの多様な価値観の下でもシステム全体の調和と協調を図った創造的な解決策を提案できる技術者、研究者の育成を目指している。制御・メカトロニクスコースと通信・インタフェースコースの2コースが設置され、学科共通の科目と各コースに適合した専門科目が開設されている。制御・メカトロニクスコースでは、デジタル家電や生産工場での制御機器、各種ロボット、福祉機器などがより使いやすく高度な機能を発揮するためのシステム化技術を学び、人類が快適で理想的な社会を作るための人にやさしいシステムを開発する、幅広い視野を持った人材を育成している。通信・インタフェースコースでは、ネットワークで結合された大規模で複雑なシステムが互いに協調して動作するためのデジタル通信、高信頼化、組込みソフトウェア開発などのシステム化技術を学び、ユビキタス社会を実現させることのできる幅広い視野を持った人材を育成している。

またシステム工学専攻は、2007年度の研究科再編で設置され、広範な価値観の下でシステム全体の高機能化と協調を図る広い視野を持った研究開発能力を身に付けた人材の育成を目的としている。制御・メカトロニクス分野、通信・インタフェース分野、情報数理分野の3分野が設置されている。情報数理分野は、数理システム、システム最適化、確率過程などの情報数理の基礎事項を修得させ、数学と工学の立場からの複眼的視点で現象をとらえ、解析する能力を養成し、高度なシステム開発に必要な数理的能力を身に付けさせる教育を行っている。

研究活動の特色としては、「人間・コンピュータ・情報システムの調和を図りユビキタス社会の実現」を目指している。大規模・複雑システムとそれらを利用する人間全体を一つのシステムとしてとらえ、それぞれの固有技術や特性を理解するだけでなく、それらを有機的に統合し、効率、環境、安全等のより広範な価値観の下で、システム全体の協調と調和を図る幅広い視野で研究を行っている。



システム工学科3年次実験授業で製作した移動ロボット

i. 制御・メカトロニクスコース（分野）・研究室紹介

○ 機械制御

筋肉運動の解析と機械への応用、福祉機器への応用を目的とした空気圧システムの開発、各種システムのモデリング、シミュレーション、開発を行っている。

○ 知的制御システム

制御と生体計測をキーワードに、自動車の全自動後退駐車システム、視線情報を用いた安全運転支援システム、ドライバーの運転訓練システム、救急車で傷病者を迅速かつ安全に搬送するための総合システムなど、人と環境にやさしいシステムの研究・開発に取り組んでいる。

ii. 通信・インタフェースコース（分野）・研究室紹介

○ 通信・信号処理

地上波デジタル放送関連、次世代モバイル通信など新しい情報通信システムに関する研究、単電子デバイスを使った新しいフィルタ回路の提案など、ナノエレクトロニクス分野に関する研究を主に行っている。

○ サービス指向ソフトウェア

ソフトウェアを設計するための基礎技術、機器に組み込まれたシステムを効率よく設計する技術、システム設計の最適化を自動的に行う技術や、セキュリティなどの研究を行っている。

○ 人間工学

道具、機械、環境などをヒトに適したものに設計する人間工学、メカトロニクス、音響工学・認知科学分野で有用なパターン認識などの教育を展開し、基礎科目で学んだ知識に基づき、ヒトの音響・視覚情報に対する感じ方の研究やインタフェースの研究を行っている。

○ ロボティクス

テレビゲーム、携帯電話、楽器、家具など日常生活のさまざまな道具と連動するロボットシステムとその要素技術（移動ロボット、物体操作、メカトロニクス、ネットワーク等）の研究開発を進めている。また、医療介護福祉ロボットの応用開発にも取り組んでいる。

○ システムインタフェース

コンピュータを活用して、人間の創造力や発想力を高め、人間の知的作業を支援するシステムを構築し、インターネット上の情報発見やコミュニケーションの促進、オンライン学習環境の構築と学習効果の増幅を目指した研究を行っている。

○ 数理科学（情報数理分野）

スポーツ、医療、自然現象などに関する確率過程論、代数多様体を研究対象とする代数幾何学、因子分析法の数理的基礎に関する数理統計学、数理システムと空間配置の幾何学など、各教員が個々の分野の研究に取り組んでいる。

車椅子ロボット・全自動後退駐車システムの研究開発

将来的には2.5人に1人が65歳以上の高齢者になるという超高齢化社会に対応するため、車椅子ロボット、全自動後退駐車システムなどの研究・開発を行っている。車椅子ロボットは、介護施設や病院などで目的地を指示すれば、廊下などの障害物や走行可能な領域をセンサーが検出し、人や物などの走行中の障害物も自動的に回避しながら、要介護者が何もしなくても安全に目的地へ移動できるシステムである。全自動後退駐車システムは、車が駐車場などへ入った際、ボタン一つで駐車可能なスペースを割り出し、ハンドルを自動制御しながらその位置へ後退駐車するシステムで、素早く安全に駐車できるため、特に高齢者や女性ドライバーの助けになることが期待されている。

開発中の車椅子ロボット

（4）医用情報科学科と創造科学専攻

医用情報科学科の設置経緯・特徴

2009年度から文部科学省の支援により、大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム「医療・情報・工学連携による学部・大学院連結型情報医工学プログラム構築と人材育成」事業（以下「情報医工学プログラム」と呼ぶ）を、広島大学、広島工業大学と連携して遂行している。そのこともあり、医用情報科学の教育研究を強化すべく本学科を設置し、2012年度から新入生を受け入れている。なお、2013年度からは、より実践的教育を行う「臨床情報医工学プログラム」が始まり、本学科の教育に取り入れられている。（後述コラム参照）

医用情報科学科には、医療への応用を見据えた情報科学、電子工学、生体工学、生物工学に関する知識と技術を学び、医工学領域に貢献できる人材を育成する医用情報コースと、情報科学、電子工学、自然科学の学際・融合領域に関する知識と技術を学び、「はかる（計測）」と「つくる（ものづくり）」に貢献できる人材を育成する光・電子計測コースがある。

本学科では、豊かで安心・安全な社会の実現を目指して、情報通信技術（ICT）に関する基礎知識を習得し、その基盤の上に医用情報、生体情報、光・電子計測といったICT融合領域の専門知識・技術を学ぶことで、医療、生命、環境といった現代社会に係る諸問題に既存の学問体系の枠を超えて取り組むことのできる人材の育成を目指している。

創造科学専攻の設置経緯・特徴

創造科学専攻は、2007年度に学部改編が行われた際に、自然科学の基礎科目を担当していた研究室を集めて設置した。本専攻では「ものづくり」の視点から、情報科学と物理学、化学、生物学などの自然科学の学際・融合領域の教育研究を行っている。それによって最新のコンピュータ利用技術と、それを応用展開すべき幅広い科学技術に精通し、時代の変化に柔軟に対応できる「生きる力」を備えた人材を育成している。

研究領域は多岐にわたり、半導体デバイスの研究、ナノ構造物質の作成と理論的解析、生体情報処理機構の解明と応用、環境問題発生機構の解明、未来エネルギー開発など、新領域の創成にチャレンジしている。また自然科学全般の知識を学ぶ創造科学特論、各研究室の専門領域の知識を学ぶ自然科学系の科目、情報科学系の専門知識を学ぶ情報科学系の科目などを履修し、各研究室で専門領域の研究を行っている。

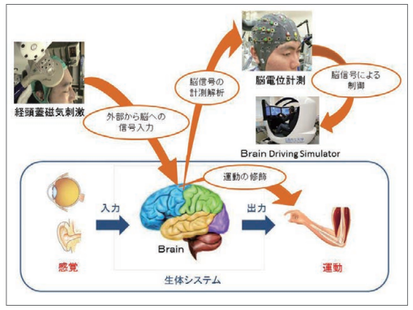
i. 医用情報コース（分野）・研究室紹介

○ バイオシステム工学

エネルギー、環境、食糧、生命科学など現代社会が直面している諸問題に対して、微生物からヒトまで広く生物を対象として、生命現象の解明とICTへの応用、ICTのバイオテクノロジーへの活用など、ICTと生命科学が連携した領域の研究を行っている。

○ 生体理工学

人間の脳機能をシステムとして理解する研究を行っている。下図のように、脳に入力される視覚や体性感覚等の感覚情報と、脳から出力される運動指令信号との連関について、脳電位等を計測・解析することにより、脳機能システムのダイナミックな動作原理を追究している。また、これらの研究成果を応用展開することにより、脳機能の診断、治療、リハビリを行う機器の開発や、自動車の安全性や快適性を向上させる技術の開発にも取り組んでいる。



ii. 光・電子計測コース（分野）・研究室紹介

○ 集積回路デバイス

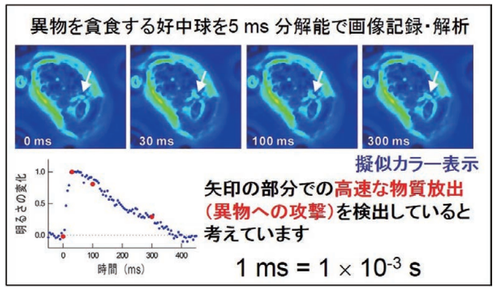
ICT社会を支える集積回路およびそれを構成するトランジスタなどの半導体デバイスを対象として、デバイス構造と性能の関係を説明するために必要な情報科学と物理学を基に、デバイス自体とそれを組み合わせた回路に関する改良と新原理提案を含む研究を行っている。

○ 情報物性工学

医療機器のための光・電子センサー材料やコンピュータに関わる新素材を探求・創製することを目的とし、物性的見地から、主に「多孔質シリコン」「半導体量子ドット」「磁性半導体」などに関する研究を行っている。

○ 光システム計測

産業用高速度カメラの画像（200コマ／秒以上）を、コンピュータを利用して長時間（60分以上）連続記録する装置を開発している。この装置を各種光学顕微鏡と組み合わせることで、白血球系の細胞である好中球の貪食（異物の取り込みと処理）の記録・解析に応用している。下図は、貪食中に生じる開口放出と呼ばれる異物への攻撃を5ms時間分解能で観測した様子である。こうした計測法開発による基礎医学研究への貢献を目指している。



2013年度から臨床情報医工学プログラムを開始

臨床医学・医療分野の発展とその社会貢献には旧来の医療系研究の手法だけでは不十分で、飛躍的に進歩している情報学・工学分野との連携が必須である。情報科学部・情報科学研究科では、2013年度に広島大学・広島工業大学・広島国際大学と連携し、臨床情報医工学プログラムを開設した。本プログラムでは学士課程、大学院課程における医療系・情報系・工学系の異分野が融合した教育研究の展開から、「臨床情報医工学」の確立を目指している。カリキュラムでは、医療系、医情報系、医工学系、医療理工学系の内容を含んだ講義を提供するとともに、豊富な臨床実習や特別演習による能動的学修環境を提供し、臨床現場での実践力を備えた人材を育成している。

共通科目

○ 早期医療体験実習
○ 臨床情報医工学特別演習

実際の医療施設等での実習により目標を明確にし、合同合宿研修等により能動的に問題解決する能力を養う。

医情報系科目 ― 広島市立大学担当

○ 医用情報科学
○ 生体信号処理
○ 医用プログラミング

医療と情報科学の融合領域について学ぶとともに、生体信号処理や医用画像処理といった医用情報処理について学ぶ。

医療系科目 ― 広島大学担当

○ 医歯薬保健学Ⅰ
○ 医歯薬保健学Ⅱ
○ 医療系実習

医歯薬保健学の基礎的事項を広く学び、医療と情報系・工学系の関係についても学ぶ。また、医療現場での実習を通して、知識を経験として得ることができる。

医工学系科目 ― 広島工業大学担当

○ 医療機器の原理と構造
○ 医用電子工学
○ 臨床医工学実習

電気・電子回路の基礎知識を学び、学んだ知識が実際にどのような機器に利用されているか知ることができる。さらに実験を通して医療機器の設計や動作について学ぶ。

医療理工学系科目 ― 広島国際大学担当

○ 保健医療学概論
○ 診療技術論
○ 医療理工学演習

医療職種、医療倫理、チーム医療、生命システムについての基礎を学ぶ。また、臨床放射線科学、臨床工学、臨床検査学、救急医療について講義・演習を通して学ぶ。

芸術学部・芸術学研究科

1. 芸術学部長・芸術学研究科長のメッセージ

広島市立大学芸術学部は、中四国・九州地方で初の４年制公立芸術系専門学部として、周囲の豊かな自然の中、創作・研究に専念できる理想的な環境と最新の設備を備え、1994年に創設された。その後、博士前期課程、後期課程を開設し、学部創設後９年の歳月を費やし初の博士号取得学生を輩出している。全国の芸術系大学でもまだ博士後期課程の前例が少ない中、最短で最高学府としての組織体制づくりを行った。また2010年４月には法人化し、現在も引き続きより高度な学部、研究科を目指して組織改革に取り組んでいる。この開学20周年という節目に、当時の教職員や広島市民の大学創立の志を今一度真摯に受け止め、創作・研究の質を高め、芸術を通して地域や社会に貢献していくことに努め、さらに次世代に繋げていくという意志を心新たにする機会にしたいと思う。

芸術学部・研究科の教育研究目的は、創作活動の基本となる基礎実技の修得を重視し、古典研究を重視しつつ現代の視点に立って社会に即した先端表現を推進するとともに、理論の習熟を基にした創作を探究し、地域文化振興と国際文化交流等、社会における文化芸術の振興において指導的な役割を果たすことのできる人材を育成するとしている。開学以来この方針に沿い、さらには常に変化し続ける現代社会にも対応していくための組織改正も行いながら、学生の育成に努めている。

開学20周年を迎えた今、初期の学生たちは30代の後半を迎えており、社会でのさまざまな経験を積んだ上で精神的にも技術的にも充実した時期を迎え、ここを巣立った卒業・修了生は、作家やデザイナーとして、また学芸員や教員など専門性を生かした幅広い分野で活躍している。その姿が後輩たちの目標となり、広島市立大学芸術学部の豊かな伝統を築いている。

また法人化前後には大学の社会連携と国際化が一層推進されることとなり、2007年度に社会連携センター、2013年度には国際交流推進センターが設置されている。芸術学部では1997年に広島市の姉妹都市でもあるドイツ・ハノーバーにあるハノーバー専科大学と学術交流協定を締結したのを皮切りに、以後、中国、ドイツ、韓国、フランス等の新たな学術交流協定校との間で学生交換留学事業や教員の交換授業を行い、またその他の海外の芸術系大学との国際間共同プロジェクトを開催するなど、教育研究における国際化を推進してきた。また広島市を中心とする中四国・九州地方では、地域での芸術プロジェクトや展覧会の開催等、学外における実践的な教育研究としての社会連携事業を行い、一定の評価を得るまでに成長してきたと考えている。

私たちは日本各地の寺社や美術館等に残る仏像、障壁画、庭園やその他の古美術に触れる時、日本の長い歴史の中で培われた芸術作品の中に人間の恒久の営みを体感し、豊かな心の安らぎや深淵な精神を得ることができる。また海外の優れた古典芸術に出会う時には、風土の多様性とそれぞれの文化の深さを知り、他民族への畏敬の念を覚えるものである。さらに、新しい世界を開拓しようとする現代の優れた芸術表現に出会うときには、人間の持つ可能性に新たな希望を見出すことができる。芸術学部教員も、また本学部で学び、巣立っていく学生たちも、このような芸術に畏敬の念と憧れを抱き、自分でも精一杯の創作・研究活動に携わりながら、人々の希望や心の豊かさの創出に寄与することができる人材になりたいと願い、日々努力している。

芸術学部では今後もこのような創作・研究姿勢を堅持し、深く、多様性があり、また現代社会にも対応する教育研究を実践する機関として、地域や世界に貢献できる人材輩出のために一層の努力を重ねていきたいと考えている。

芸術学部長・芸術学研究科長
前川　義春

2. 概要

（1）芸術学部設置の経緯

1987年、広島市は新大学設立に向けて「広島国際情報工科大学（仮称）整備のモデルプラン」（設置の基本構想、学部・学科構成、附属機関等）を策定した。このモデルプランの中では、国際学部および情報学部の２学部による大学設立計画案であったが、その後実施されたモデルプランの検討・調査の過程で文化面における特色の弱さが指摘され、翌1988年に発表された検討・調査結果の中で、新たに芸術学部の設置が提案された。そこでは広島市に必要な芸術学部設置の基本的な考え方と必要性に関して以下のように提言されており、今日の芸術学部が掲げる基本理念の基礎となっている。

（1）創造性開発の必要性

現在の社会経済環境は、様々な局面において大きく変化しつつあるが、大きな変化のひとつは、急速な経済成長と国際化・情報化を背景とする人々の価値観・目的の変化であり、人間性の回復と文化的・精神的豊かさを求め、自己実現をめざす創造的な時代が到来すると考えられる。

それは、「ものまね、均一」から「他にない、個性」が価値あるものとされる変化でもあり、文化、産業等の各方面及び個人、社会、地域、都市等あらゆるレベルにおいて、その存立基盤を確固としたものとし、新しい時代を切り拓く創造性が求められている。

創造性は、“新しいものを造り出す能力”と定義されるが、今日新しいものを造り出す能力を育てる創造性開発がますます必要となっている。

（2）文化の薫り高い人間性豊かな都市環境創造の必要性

科学技術の進歩は人類に多大の恩恵をもたらしたが、その反面、核兵器の出現にみるような人類の脅威となる問題も生み出した。また、資源・環境問題や人間疎外などの問題も深刻化している。このような科学技術の進歩に伴う問題に対して、広島市は人間性豊かな文化環境都市として発展することを目標としており、科学技術の間違った発達に警告するとともに、あるべき科学技術と人間社会の関係を回復する場所としての役割を果たす必要がある。

新基本計画※では、以上の考え方に基づき、都市像として「国際平和文化都市」を掲げ、文化の薫り高い人間性豊かな都市環境の創造を目指し、広島の文化を創生していくことが方向づけられている。

（3）広島の文化をつくりあげる拠点の必要性

都市の歴史を見ていくと、文化の薫り高い都市がつくられ、活発な文化活動が展開されているときには、その核に大学・アカデミー等の高等教育機関があり、それが重要な役割を果たしている。しかし、広島市をはじめ、中・四国地方には、芸術関係の高等教育機関が少なく、芸術文化の核となり、文化の礎となるような高等教育機関の存在が求められている。

（参考）「広島の文化都市像を求めて」広島市文化懇談会提言、昭和56年３月

本調査研究で提案を行う芸術学部は、以上の課題を受け、具体化するものであり、広島の文化をつくりあげる拠点としての役割を担うものである。

『広島市立大学（仮称）創設に向けて』（1988年）、pp. 20-21
※1978年に広島市が策定した「広島市新基本計画」を指す。

(2) 学部・学科教育の特色

芸術学部は「美術、デザイン、工芸に関する創造、表現およびその応用の技術と理論を教育研究し、地域連携と国際交流を視野に入れ、先見性・創造性・独創性に富む卓越した人材育成」を行うことを教育研究上の目的としている。そのため、創作活動の基本となる基礎実技をしっかりと修得し、多様な技術を総合的に学んだ上で、地域社会や国際交流でもアートを通して活躍できる能力を育んでいくことを教育方針としており、以下のような教育を行っている。

① 創作活動を続けるための基礎実技を重視し、自己の表現を追求する創作活動を続けていくために必要な観察力と造形力を養う基礎実技の修得を重視した教育。

② 独自の表現方法と出会うために、過去から現在に至るさまざまな分野の素材や技術を学ぶことができる、多角的で総合的な教育。

③ 地域と国際を軸に芸術の社会的役割を学べるよう、地域社会との連携や海外との学術交流などを通して、芸術の社会的な役割を知り、社会の中で表現活動を行う実践的な機会を提供する教育。

(3) 芸術学研究科設置の経緯

わが国の社会的状況は、世界の社会変化と連動して、経済主導の時代から、人間の存在を問い直し地球的視野で新たな指針を探求すべき、文化の時代、地球環境の時代を迎えている。このことから、わが国の伝統ある芸術文化は、人の心、精神性を見つめ直す重要な役割を担っている。

しかし、この激しい社会情勢の変化を前に、日本の固有文化は危殆に瀕しており、21世紀に向けて美術、デザイン、工芸の貴重な文化の継承を担う人材の育成は重要な課題となっている。また、社会の急速な国際化や技術革新による表現メディアの急進展に伴って、芸術自体の領域の拡大、多様化が進んでおり、美術、デザイン、工芸の分野においても、これらの変化に対応し、新しい表現に果敢に取り組む能力を有する人材の育成が社会的要請となっている。特に現代のデザイン分野においては、デザインの対象物はそれ自身では成り立たず、ほかの物との関係、人の心理や身体性との関係、そして人間社会、人工環境や自然環境等さまざまな関係が複雑に絡み合って成立しており、今日のデザインの諸課題を解決するためには、より幅広い知識と深い洞察力を持つ専門家の養成が不可欠となっている。

こうしたことを背景に、また「芸術創造活動を自ら行う芸術家」の育成や「地域文化振興のため」の人材養成という21世紀に向けての課題（報告『21世紀に向けた文化政策の推進について』1994年6月、文化政策推進会議）に応え、高度な教育研究を実践するため、1998年4月に芸術学研究科修士課程（2000年度より「博士前期課程」）を設置した。2000年4月には博士後期課程を設置し、博士前期課程の内容をさらに進化させるとともに、各研究領域を横断する創作研究や理論的研究をより深める総合的な研究を行っている。

(4) 研究科教育の特色

芸術学研究科では「高度な文化芸術の創造・発展に貢献することを理念とし、美術、デザイン、工芸に関する卓越した創作・研究能力を培い、地域文化振興と国際文化交流において指導的な役割を果たす、理論を踏まえた高度な専門性を有する人材の育成」を教育研究上の目的としている。このため、本研究科では大学院の設置の趣旨および必要性の下に、以下の能力を修得することを教育研究の特色としている。

① 近年、急速な縮退を危惧されている日本独自の伝統的な美術、工芸等の芸術文化に対し、古典研究を重視することにより貴重な伝統の継承を行うとともに、現代の視点に立って新たな美術・工芸等の創造に寄与すべく、21世紀を展望した美術、工芸の教育研究を行う。

② 技術革新により多様に展開される新素材、新技法への研鑽を深めるとともに、急発展を遂げつつあるコンピュータを基にした多岐にわたる表現メディア、特に映像メディアへの研究に取り組み、新たな造形表現の創出のための研究を行う。

③ 現代社会の国際化と地域化、多様化と個性化という新しい変革にも対応する芸術領域の研究として、これまでの既成の領域にとらわれない自由な芸術表現研究や理論研究を進め、常に新たな時代を創造する研究を行う。

④ 理論の習熟を基にした創作を探究し、創造、表現およびその応用に必要な高度な技術と理論の教育研究を行う。

⑤ 地域文化振興と国際文化交流等、社会における文化芸術の振興において指導的な役割を果たすことのできる人材を育成する教育研究を行う。

⑥ 本学の芸術学部は、単科大学が多い芸術系大学の中で、国際学部、情報科学部との3学部構成という特色を生かし、これまで教員の共同研究等、他学部との連携による教育研究を実施してきたところであり、大学院においても、引き続き国際学研究科および情報科学研究科との連携を図り、学際的な教育研究を実施する。

⑦ 全人的人間形成を目指した教育を通じて、豊かな学識を養い、論理的な思考力を鍛えることにより、創作作品を通しての感性的な自己表現のみならず、著作物等を通しての文章表現など、多様な表現力を有する芸術家の養成を行う。

3. 年表で見るこれまでのあゆみ

1994年度	
4月	初代学部長に山下恒雄教授（デザイン工芸学科）が就任（1日）
9月	芸術学部美術学科の教職課程認定申請［中一種免・高一種免（美術）］、デザイン工芸学科の教職課程認定申請［中一種免・高一種免（美術）および高一種免（工芸）］（30日）
10月	アジア大会スペースライティングアート（バルーンアートの制作と大学のライトアップとレーザーショウ）（広島市立大学、西風新都地区）（2～16日）
1995年度	
4月	広島市市民局　広島市印鑑登録カードおよび改ざん防止用紙デザイン
4月	芸術学部美術学科の教職課程認定［中一種免・高一種免（美術）］、デザイン工芸学科の教職課程認定［中一種免・高一種免（美術）および高一種免（工芸）］（1日）
6月	第14回全国都市緑化ひろしまフェア　マーク・ロゴ・キャラクター・デザインマニュアル制作
7月	「東条アートドキュメント'95」（兵庫県加東郡東条ライスセンター）（7月23日～9月2日）
8月	広島国際アートフェスティバル'95に参加：世界学生美術交流展（広島国際会議場）（16～23日）
9月	広島市経済局農林水産部農政課　ひろしまそだち特産化事業　マーク・ロゴ・デザインマニュアル制作
12月	「歴史的建造物と芸術の共振1 ―都市の成熟と芸術の役割」（広島市南区・広島大学学校教育学部旧図書館）（11～23日）
2月	「広島市立大学芸術展」（広島県立美術館県民ギャラリー）（11～16日）
3月	芸術学部第1工房棟（延べ床面積2,094㎡／3D工房、版画工房、染工房、印刷工房、空間造形工房、漆工房、織工房）完成
1996年度	
4月	広島県安芸郡川尻町（現在の呉市川尻町）に野呂山芸術村開設、現代写実絵画研究所開設）（1日）
5月	第2工房棟（木彫工房、石彫工房）、第3工房棟（木工機械室、金属実習室、金工機械室）、第4工房棟（プラスチック塗装実習室、彫金実習室、鍛造実習室、鍛金実習室）完成（第2～4工房と延べ床面積2,794㎡）（芸術学部工房棟完成）
7月	芸術学部公開講座開設（以後、毎年開催）（広島市立大学）（7～8月）
10月	西南師範大学（中国重慶市）より学術交流で滞在中の李白玲助教授による講演会　「現代中国花鳥画の世界」（広島市立大学）（20日）
12月	「カーデザイナー小林平治の夢とロマン」展（広島市交通科学館）（12月5日～1月19日）
12月	西南師範大学「李白玲助教授作品展」（広島市立大学芸術資料館）（9～13日）
1月	芸術学部公開講座「歴史的建造物と芸術の共振2～都市の成熟と芸術の役割」（広島市南区・旧陸軍糧秣支廠倉庫）（4～15日）
2月	広島市立大学芸術展（広島県立美術館）（11～16日）
1997年度	
4月	今井昭吾（珠泉）教授（美術学科日本画専攻）が学部長に就任（1日）
5月	広島県第13回「海の祭典」マーク・ロゴ・デザインマニュアル制作

9月	芸術学研究科絵画専攻・彫刻専攻の教職課程認定申請［中専免・高専免（美術）］、芸術学研究科造形計画専攻の教職課程認定申請［中専免・高専免（美術）および高専免（工芸）］（30日）
10月	ハノーバー専科大学（ドイツ）ペーター・トゥーマ教授と学生たちが来学し学術交流（21～29日）
2月	第１回「広島市立大学芸術学部芸術学部卒業制作展」（広島県立美術館県民ギャラリー、広島市立大学）（10～15日）
3月	広島県しまなみ海道'99マーク・ロゴ・デザインマニュアル制作
	本学の「ユニバーシティ・アイデンティティ」デザインシステムマニュアル制定

1998年度

4月	芸術学研究科絵画専攻・彫刻専攻の教職課程認定［中専免・高専免（美術）］、芸術学研究科造形計画専攻の教職課程認定［中専免・高専免（美術）および高専免（工芸）］（1日）
6月	世界音楽祭オーガスト・イン・ヒロシマ　マーク・キャラクターアートディレクション
7月	FNS27時間テレビで３～５万個の空き缶を使った「空き缶アート」を制作（広島市立大学芸術学部棟エントランス）（18～19日）
9月	「都市の成熟と芸術の役割 ―歴史的建造物と芸術の共振NO.3」（広島県佐伯郡大野町・サントリー株式会社宮島工場内倉庫）（9月23日～10月2日）
2月	第２回「広島市立大学芸術学部卒業制作展」（広島県立美術館県民ギャラリー、アステールプラザ）（9～14日）
3月	全国健康福祉祭り広島大会　マスコットキャラクターアートディレクション

1999年度

4月	紙屋町地下街デザイン実施計画・デザイン総合監修
5月	「広島におけるライトレールのデザインとその未来展」（広島市立大学芸術資料館）（24～31日）
8月	ドイツ・ハノーバー専科大学（FHH）との学術交流協定に基づく学生交換事業を開始（初回の交換学生として本学からFHHに３名を派遣、FHHから本学に２名を受入）（2～6日）
9月	「第11回全国生涯学習フェスティバル広島」に公開講座の受講者が制作した作品（日本画、油絵、石彫、テラコッタ、ロボット等）を展示（東広島市）（30日）
9月	芸術学部美術学科の教職課程認定申請［中一種免・高一種免（美術）］、芸術学部デザイン工芸学科の教職課程認定申請［中一種免・高一種免（美術）および高一種免（工芸）］※教職免許法改正に伴う再課程認定申請（30日）
10月	知能情報システム工学科（情報科学部）とデザイン工芸学科が「第４回コンピュータオセロ大会」を共催（広島市立大学）（7～11日）
11月	筆塚建立（広島市立大学芸術学部第１工房棟裏スペース）（5日）
	大歳克衛・清水秀夫　退任記念展（広島市立大学芸術資料館）（15～21日）
2月	第３回「広島市立大学芸術学部卒業制作・修了作品展」（広島県立美術館県民ギャラリー、アステールプラザ、広島市立大学）（8～13日）
3月	宇品橋開通（12日）
	鷹野橋歩道橋開通

2000年度

4月	細井良雄教授（美術学科彫刻専攻）が学部長に就任（1日）
	芸術学研究科博士後期課程開設。これに伴い修士課程を博士前期課程と改称
	芸術学部美術学科の教職課程認定［中一種免・高一種免（美術）］、芸術学部デザイン工芸学科の教職課程認定［中一種免・高一種免（美術）および高一種免（工芸）］※教職免許法改正に伴う再課程認定（1日）
1月	広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科２・３年テーマ制作展「水」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（24～25日）
2月	第４回「広島市立大学芸術学部卒業制作・修了制作展」（広島県立美術館県民ギャラリー、アステールプラザ、広島市立大学）（6～11日）

2001年度

4月	「Art Crossing Hiroshima project 2001Spring」（広島市立大学オープン・エア・スペース他市内各所）（11～24日）
7月	広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科３年テーマ制作展「自己テーマ」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（16～17日）
8月	21世紀における被爆地での実験的考察　人間の五感に訴える被爆の疑似体験をテーマに企画展「ヒロシマの妖精」を開催（広島市中区・旧日本銀行広島支店）（1～15日）
10月	映像企画展「Actual Movement」（広島市中区・旧日本銀行広島支店）（16～24日）
1月	広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科２年テーマ制作展「フェイス」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（23～24日）
2月	第５回「広島市立大学芸術学部卒業制作・修了制作展」（広島市現代美術館、広島市立大学）（5～10日）

2002年度

6月	平成14年度指定研究「日本画制作の現場」八木幾朗 展（広島市立大学芸術資料館）（3～13日）
7月	「広島の都市像 ―<まち>を展示する」（広島市現代美術館）（2～10日）
	綿引道郎と教え子達展（三次市教育会館）（2～10日）
8月	市民団体「レトロバス復元の会」発足（28日）
9月	龍谷大学と共催で「チベットシンポジウム」を開催（龍谷大学大宮学舎本館）（13～14日）
10月	倉橋アートドキュメント　臨界域（広島県安芸郡倉橋町・現呉市）（5～31日）
	平成14年度国際学術研究A「アジアにおける東洋画研究」韓国調査（20～26日）
	「特定研究報告展 ―倉島重友・堀研」（広島市立大学芸術資料館）（10月31日～11月6日）
1月	「広島市立大学における教員の任期に関する規程」を改正、芸術学部美術学科彫刻専攻の教員のうち助手について任期制を導入（22日）
	広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科３年テーマ制作展　３年「分野別テーマ」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（24～19日）・２年テーマ制作展「フェイス」（広島市立大学）（24～19日）
	ハノーバー専科大学からの留学生４名による「GO4（ゴーフォー）」展（広島市まちづくり市民交流プラザ）（1月29日～2月3日）
2月	第６回「広島市立大学芸術学部卒業制作・修了制作展」（広島市現代美術館、広島市立大学）（4～9日）
3月	芸術学研究科博士後期課程で最初の博士学位授与

2003年度

4月	大井健次教授（デザイン工芸学科）が学部長に就任（1日）
	平成15年度指定研究「模写による県内文化財研究と保存」（4月1日～3月31日）
5月	ハノーバー専科大学デザイン＆メディア学部教員による交換授業（12～16日）
6月	平成15年度指定研究「日本画制作の現場」片桐聖子展（広島市立大学芸術資料館）（3～14日）
9月	「東広島市現代美術プログラム　白市DNA」（東広島市高屋町白市地区）（9月20日～10月13日）
	「表象都市 metamorphosis広島 ―芸術実験展示プロジェクト2003」展（旧日本銀行広島支店、平和大通り）（9月27日～10月26日）
10月	本学部教員２名によるハノーバー専科大学での交換授業（ドイツ・ハノーバー）（27～30日）
11月	平成15年度国際学術研究A「アジアにおける東洋画研究」中国調査（9～14日）
	知能情報システム工学科（情報科学部）とデザイン工芸学科が「第８回コンピュータオセロ大会」を共催（広島市立大学）（14日）
	講演「現代日本の写実絵画について」（西南師範大学美術学院、中国重慶市）（25～30日）
	指定研究「次世代へのメッセージ　前進する工芸展 ―美術工芸教育における大学間研究ネットワークの構築」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（11月29日～12月7日）
12月	シンポジウム「映像による被爆体験の継承 ―いま、ヒロシマは何をすべきか（広島市立大学講堂大ホール）基調講演映画監督：新藤兼人（6日）
1月	広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科２・３年テーマ制作展３年「生命」（広島市まちづくり市民交流プラザ）・２年「アース」（広島市立大学）（14～16日）
2月	第７回「広島市立大学芸術学部卒業制作・修了制作展」（広島市現代美術館、広島市立大学）（4～9日）
3月	横川レトロバス完成（28日）

2004年度

4月	平成16年度継続指定研究「模写による県内文化財研究と保存」（4月1日～3月31日）

5月	ハノーバー専科大学デザイン＆メディア学部教員３名による交換授業（17～21日）
6月	平成16年度広島市立大学市民講座「展覧会をつくる」（広島市立大学芸術資料館）（6月30日～9月28日）
7月	「音戸アートスケープ Genius Loci: 2004」（広島県安芸郡音戸町・現呉市）（7月31日～8月29日）
9月	北村西望生誕地現代彫刻プロジェクト「interdependence. ―Cのかたち―」（長崎県南高郡南有馬町）（20～26日）
	市民講座「展覧会をつくる」―手の中の日本の美―武士のおしゃれ金工展 SAMURAI'S DANDYISM（広島市立大学芸術資料館）（9月25日～10月23日）
10月	本学部教員３名によるハノーバー専科大学での交換授業（ドイツ・ハノーバー）（11～13日）
	平成16年度指定研究「日本画制作の現場」河嶋淳司展（広島市立大学芸術資料館）（16～25日）
11月	知能情報システム工学科（情報科学部）とデザイン工芸学科が「第9回コンピュータオセロ大会」を共催（広島市立大学）（19日）
	野田弘志　退任記念展「究極のリアリズムを追求する」（広島市立大学芸術資料館）（22～28日）
	指定研究「次世代へのメッセージ　前進する工芸展―美術工芸教育における大学間研究ネットワークの構築（広島市まちづくり市民交流プラザ）（11月29日～12月7日）
1月	第２回広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科３年テーマ制作展「時」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（20～23日）
2月	第８回「広島市立大学芸術学部卒業制作・修了制作展」（広島市現代美術館、広島市立大学）（8～13日）

2005年度

4月	平成17年度継続指定研究「模写による県内文化財研究と保存Ⅱ」（4月1日～3月31日）
7月	市民講座「展覧会をつくる2005」（広島市立大学芸術資料館）（7月13日～10月23日）
	「さえきアートキャンパス」財団法人広島市未来都市創造財団主催（佐伯区民文化センター）（以後毎年）（28～29日）
	モントリオール、ハノーバー、広島の高校生の参加による被爆60周年企画「ピースサイトHiroshima2005」を開催（広島市平和大通り）（21～27日）
8月	ハノーバー専科大学留学生による芸術作品展示「LAND LIEBE」（広島市立大学芸術資料館）（1～14日）
	第１回「光の肖像」展 ―被爆者たち、それを受け継ぐ者たちの眼差し―　平成17年度特定研究（広島市立大学芸術資料館）（1～14日）
	広島市立大学・ニュルンベルク美術大学アートプロジェクト「―KHORA―」（広島市立大学学内および周辺地域の里山に作品を点在させて開催）（8月29日～10月16日）
9月	公開講座「広島アニメーションアカデミー」（第１回「山村浩二とアニメーションの世界」）（広島市立大学）（11日）
	「キッズキャンパス2005」―児童絵画をもとにした大型彫刻の制作、自然と触れ合い芸術家と共に描く（広島市立大学芸術学部、広島大学病院霞キャンパス、広島市安佐南動物園）（20・25日）
10月	「キッズキャンパス2005展・わくわくアートワークショップ」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（8～10日）
	キッズキャンパス2005（広島市立大学・広島市立大学芸術資料）（9月20・25日、10月8～10日）
	市民講座「展覧会をつくる2005　白と黒の展覧会」（広島市立大学芸術資料館）（17～23日）
11月	平成17年度指定研究「日本画制作の現場」斉藤典彦展（広島市立大学芸術資料館）（4～15日）
12月	公開講座「広島アニメーションアカデミー」（第２回メディアはひっこしをする ―ひとこま漫画からアニメーションまで、古川タクの体験的メディア論）（広島市まちづくり市民交流プラザ）（3日）
1月	第３回広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科３年テーマ制作展「共生」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（18～23日）
2月	第９回広島市立大学芸術学部芸術学研究科卒業・修了作品展（広島市現代美術館、広島市立大学）（7～12日）
	公開講座「広島アニメーションアカデミー」（第３回「伊藤有壱／iToon・伊藤有壱　―つくろう！クレイアニメーション）（広島市現代美術館）（19日）
3月	公開講座「広島アニメーションアカデミー」（第４回「伊藤有壱／実践的アニメーション制作講座」）（広島市現代美術館）（26日）

2006年度

4月	平成18年度継続指定研究「模写による県内文化財研究と保存Ⅱ」（4月1日～3月31日）
	公開講座「広島アニメーションアカデミー」（第５回「村田朋泰／俺の路／不安の遊び」村田朋泰）（広島市立大学）（22日）
6月	公開講座「広島アニメーションアカデミー」（第６回「私の生き方 ―制作秘話より」松本零士）（広島市立大学）（3日）
	市民講座「展覧会をつくる2006」（広島市立大学）（21日）
7月	市民講座「広島アニメーションアカデミー」（第７回「プロダクションでのアニメーション制作」西尾大介）（広島市立大学）（29日）
	広島市立大学―ニュルンベルグ美術大学アートプロジェクトKHORA（ドイツ・ニュルンベルク）（7月31日～9月16日）
	第２回「光の肖像」展 ―被爆者たち、それを受け継ぐ者たちの眼差し―　平成18年度特定研究（広島市立大学芸術資料館）（7月31日～8月9日）
8月	だて噴火湾アートビレッジ　協力（伊達市以降毎年）（10～11日）
	爆心地復元３次元CG作品上映会（19日）
9月	アニメーションアカデミー全日程終了（第8回・最終回「私と広島とアニメーション」木下小夜子）（広島市立大学）（9日）
	大塚かぐや姫プロジェクト（広島市安佐南区大塚寺谷・中東地区）（20～30日）
	「キッズキャンパス2006」―親子で楽しむ造形あそび（広島市立大学）（23日）
10月	フランス大使館文化部との共催によりフランス留学フェア（芸術分野）を開催（9～14日）
	「時を越えて ―受け継ぐ心と技― 模写による県内文化財の保存継承　研究成果発表展」（広島市立大学芸術資料館）（9～14日）
11月	市民講座　展覧会をつくる2006「銅版画 夢・人・愛　瑛九展」（広島市立大学芸術資料館）（3～30日）
	第２回北村西望生誕地現代彫刻プロジェクト「FROM LIFE」（長崎県南島原市南有馬町）（3～30日）
	特定研究「広島市立大学と韓国・漢陽（ハンナン）大学との金属工芸分野での国際交流展」（韓国ソウル・ギャラリーWooduk）（7～17日）
11月	平成18年度指定研究「日本画制作の現場」海老洋展（広島市立大学芸術資料館）（14～25日）
	知能情報システム工学科（情報科学部）とデザイン工芸学科が「第11回コンピュータオセロ大会」を共催（広島市立大学）（14～25日）
12月	可部駅前広場モニュメント完成（2日）
	三原捷宏　退任記念展（広島市立大学芸術資料館）（18～24日）
1月	「キッズキャンパス2006展・わくわくアートワークショップ」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（22～23日）
	第４回芸術学部デザイン工芸学科３年生テーマ制作展「身体」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（24～28日）
2月	第10回広島市立大学芸術学部卒業修了作品展（広島市現代美術館、広島市立大学）（6～11日）

2007年度

4月	若山裕昭教授（デザイン工芸学科）が学部長に就任（1日）
	平成19年度継続指定研究「模写による県内文化財研究と保存Ⅱ」（4月1日～3月31日）
	旧中工場アートプロジェクト（広島市吉島地区）（1～22日）
	社会人向け工芸・版画技能講座の開設（金工・染織・版画・漆）
5月	広島市下水道デザインマンホール（2012年度まで5期に渡る）
9月	「大塚かぐや姫プロジェクト」実施（広島市安佐南区大塚寺谷・中東地区）（9月4日～10月15日）
	放影研アートプログラム2007（公益財団法人放射線影響研究所）（10～29日）
	市民講座「展覧会をつくる2007」大伴昌司と少年マガジンの世界（広島市立大学芸術資料館）（9月19日～11月21日）
	「キッズキャンパス2007」（広島市立大学）（23日）
10月	知能情報システム工学科（情報科学部）とデザイン工芸学科が「第12回コンピュータオセロ大会」を共催（広島市立大学）（2日）
	「広島市行政課題解決のための研究公開イベント」開催（8～13日）

11月	芸術学部教員作品展2007（広島市立大学芸術資料館）（15～24日）
	平成19年度指定研究「日本画制作の現場」宮いつき展（広島市立大学芸術資料館）（15～24日）
	磯江毅展（広島市立大学芸術資料館）（11月25日～12月7日）
12月	「キッズキャンパス2007展・わくわくアートワークショップ」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（22～23日）
1月	第5回広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科3年テーマ制作展」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（23～27日）
	五日市コイン通り「金持神モニュメント」完成（25日）
2月	広島アートプロジェクト2008「CAMP BERLIN」（広島市立大学、ベルリン・バイセンゼー美術大学）（1～10日）
	第11回広島市立大学芸術学部芸術学研究科卒業・修了展（広島市現代美術館、広島市立大学）（5～11日）
	CAMPベルリン報告会＆旧中工場アートプロジェクトカタログ出版記念会（広島市立大学）（18日）

2008年度

4月	平成20年度継続指定研究「模写による県内文化財研究と保存Ⅱ」（4月1日～3月31日）
5月	社会人向け工芸・版画技能講座（金工・染織・版画・漆）
	ARMS into ART「銃を鍬へ」プロジェクト ―モザンビークアーティスト講演会（29日）
6月	広島市食育推進計画マスコットキャラクター制作
	ザ・広島ブランド　ロゴマーク・デザインマニュアル制作
7月	第3回「光の肖像」展 ―被爆者たち、それを受け継ぐ者たちの眼差し― 平成20年度特定研究（広島市立大学芸術資料館）（7月31日～8月10日）
8月	第12回平和美術展「光の肖像展1・2」（廿日市市文化スポーツ振興事業団　はつかいち美術ギャラリー）（1～24日）
	Rebuild ―Hiroshima Peace Memorial by your message　一人ひとりの祈りで再生される「産業奨励館（原爆ドーム）」（8月5日～12月31日）
	キッズキャンパス2008（広島市立大学）（24日）
9月	大塚かぐや姫プロジェクト（広島市安佐南区大塚寺谷・中東地区）（9月8日～10月15日）
10月	市民講座「展覧会をつくる2008」ウィンターフェスト ―光とともに― （広島市立大学芸術資料館）（10月15日～11月19日）
	「キッズキャンパス2008 ―文香釜窯だし・野外アート活動」（広島日野自動車株式会社研修センター）（19日）
	シティカレッジ提供講座「アジア、アフリカの多様な世界 ―そこに生きる人々の生活と信仰」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（10月29日、11月5・12・19・26日）
11月	知能情報システム工学科（情報科学部）とデザイン工芸学科が「第13回コンピュータオセロ大会」を共催（広島市立大学）（18日）
	広島アートプロジェクト2008サテライト企画 CAMPベルリンアーカイヴ展（広島市立大学芸術資料館）（1～16日）
	広島アートプロジェクト2008「汽水域」（広島市立大学、広島市吉島地区）（1～16日）
	ウィンターフェスト　ひかり　あかり　いのり　ふわり　メッセージ2008（広島市立大学芸術資料館）（24～29日）
12月	第6回テーマ制作展「コミュニケーション」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（8～21日）
	萬來舎から学ぶ ―広島の芸術と都市計画（広島市立大学芸術資料館）（8～21日）
	シンポジウム：イサム・ノグチと谷口吉郎から学ぶ ―広島の芸術と都市計画を考える（広島市立大学芸術資料館）（13日）
	広島市立図書館・広島市立大学附属図書館連携記念事業展示会「イサム・ノグチと広島」（20日）
1月	第6回広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科3年テーマ制作展（広島市まちづくり市民交流プラザ）（21～25日）
	「キッズキャンパス2008展・わくわくアートショップ」講演会「愛知県児童総合センターの取り組み」田嶋茂典氏（広島市まちづくり市民交流センター）（24～25日）
2月	第12回広島市立大学芸術学部卒業・修了作品展（広島市現代美術館、広島市立大学）（3～8日）
3月	特定研究　2009年地域連携プロジェクト「ウィンターフェスト・プロジェクト」報告書制作（31日）

2009年度

4月	平成21年度継続指定研究「模写による県内文化財研究と保存Ⅱ」（4月1日～3月31日）
	指定研究「文化財学、保存修復に関する研究、教育プログラム導入に関する調査・研究」（4月1日～3月31日）
	経済観光局関連事業「銅蟲の商品開発に関する共同研究」（2001年度まで）（4月1日～3月31日）
	都市ギャラリープロジェクト「みどりの家といきものキャラバン」（広島駅新幹線口周辺）
5月	社会人向け工芸・版画技能講座（金工・染織・版画・漆）
7月	The 76th IETF Hiroshima-Japan マーク・ロゴ・キーヴィジュアル制作
8月	「キッズキャンパス2009」―うごく（広島市現代美術館、広島市立大学）（1・16日）
	アートイベント「Crossing Happy and Art『障がい者アートから、幸せへの提案』」（広島市紙屋町地下街シャレオ中央広場）（16日）
9月	広島アートプロジェクト2009「いざ、船内探検！吉報丸」展（広島市吉島地区）（5～23日）
10月	大塚かぐや姫プロジェクト（広島市安佐南区大塚寺谷・中東地区）（1～9日）
	シティカレッジ提供講座「未来へ歴史・文化を伝える」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（10月28日～11月25日）
11月	ウィンターフェスト・プロジェクト「暖・談・団　極寒に生きるアイヌ・イヌイットの文化と生活」（広島市立大学芸術資料館）（11月26日～12月1日）
12月	広島城「浅野長晟肖像画」復元模写　広島市文化財団委託
1月	第7回芸術学部デザイン工芸学科3年テーマ制作展「記憶」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（20～24日）
	キッズキャンパス2009展・わくわくアートショップ「メタモルフォシス ―へんか」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（23～24日）
2月	ワークショップ「オーラル・ヒストリーと戦後美術の理解」（広島市立大学）（26日）
	都市ギャラリープロジェクト（都市を丸ごとギャラリー化し芸術空間を創造するプロジェクト）（広島市紙屋町地下街シャレオ）（2月20日～5月19日）
3月	第13回広島市立大学芸術学部卒業修了作品展（広島市現代美術館、広島市立大学）（3～7日）

2010年度

4月	平成22～24年度継続指定研究「模写による県内文化財研究と保存Ⅱ」（4月1日～3月31日）
	社会人向け工芸・版画技能講座（金工・染織・版画・漆）
	都市ギャラリープロジェクト「七色の軌跡 つながる未来」（広島市紙屋町地下街シャレオ、広島市立幟町小学校）（12月18日～6月12日）
	児童犯罪危険回避システム（CGやVR技術を応用した鉄道模型による地域の児童犯罪に対する危機回避シュミレーションシステムを開発）（4月20日～1月27日）
5月	ハノーバー専科大学の教員によるワークショップを実施（広島市立大学）（18～20日）
	「都市ギャラリープロジェクト」の一環として日韓小学生の交流会開催（19日）
6月	「湯来芸術村構想アーティストロッヂ」（広島市・国民宿舎湯来ロッジ）（6月6日～8月1日）
	ワークショップ「彫刻家とつくろう」（広島市・国民宿舎湯来ロッジ）（19日）
7月	己斐小学校に制作した慰霊碑の除幕式（広島市己斐小学校）（31日）
8月	光の肖像展 in London　キングストン大学共催（The Brunei Gallery, SOAS）平成22年度日本学術振興会科学研究費（8月5日～10月8日）
	「廣島から広島　ドームが見つめ続けた街」展（広島県立美術館）（8月5日～9月20日）
	キッズキャンパス2010「あそび」（広島市現代美術館、広島市立大学芸術学部）（22・29日）
	手島守之輔・伊藤守正<ふたりの被爆画学生>展（広島市立大学芸術資料館）（22・29日）
9月	広島アートプロジェクト2010（広島市立大学芸術資料館、中区吉島公民館敷地内）（4～20日）
	ichidai ichi開催（紙屋町シャレオ空き店舗）（4～20日）
	広島アートプロジェクト2010（広島市立大学芸術資料館、中区吉島公民館敷地内）（9月10日～12月26日）
	「現代美術と宮島　変容する場　Between Scrap and Build」第1期（広島県廿日市市宮島町）（23～26日）
	「あさみなみ芸術化構想 2010」大塚かぐや姫プロジェクト、西風新都中央線沿彫刻作品設置、「安佐南区役所」芸術計画（9月13日～10月15日）

10月	ダムしゃべる 一温井ダムでの映像展示（安芸太田町大字加計）（22～28日）
11月	中嶋健明<鉄道模型ワンダーランド>展2010（広島市立大学芸術資料館）（6～19日）
	「時を超えてII 平安絵巻の雅」一広島市立大学特定研究・模写による県内文化財研究と保存継承報告展示（広島市立大学芸術資料館）（6～19日）
12月	閃灼炎焦生　片岡脩と山下新治　平和ポスターをつくりつづけたデザイナーたち（広島市立大学芸術資料館）（17日）
	庄原ナイトアッププロジェクト（庄原市市役所庁舎）（12月24日～1月15日）
1月	「現代美術と宮島　変容する場　Between Scrap and Build」第2期（広島県廿日市市宮島町）（9～10日）
	第8回広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科3年テーマ制作展「季節」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（12～16日）
	キッズキャンパス2010展・わくわくアートショップ（広島市立大学）（15～16日）
3月	第14回広島市立大学芸術学部卒業・修了作品展（広島市現代美術館、広島市立大学）（3～8日）
	「現代美術と宮島　変容する場　Between Scrap and Build」第3期（広島県廿日市市宮島町）（19～21日）
	芸術学部公開研究会「文化再生と都市課題」（25日）

2011年度

4月	前川義春教授（美術学科彫刻専攻）が学部長に就任（1日）
	社会人向け工芸・版画技能講座（金工・染織・版画・漆）
	中区役所関連事業　中区まちづくりマスコットキャラクター「なかちゃん」着ぐるみ立体デザイン検討・制作」（4月1日～8月31日）
	教育委員会関連事業「高大連携講座」毎年継続
	模写による県内文化財研究 と保存継承
	全市関係局シンボルマークおよび公共デザイン制作（随時実施）
7月	「From Seoul to Hiroshima」広島市立大学・西京大学校国際交流展（広島市立大学芸術資料館）（7月25日～9月23日）
7月	「Crossing Over」公開制作・講演会（広島市立大学）（5～8日）
	「ピースアクションinヒロシマ」においてデザイン工芸学科視覚造形分野の2年生13人が作品を展示（広島県立総合体育館アリーナ）（25日）
8月	広島アートプロジェクト2011「半農半芸＋ちょっと漁」イベント（プロジェクト実施は2011年4月1日～2012年3月31日）（尾道市百島）（5日）
	「キッズキャンパス2011」一たいわ（広島市現代美術館／広島市立大学）（21・28日）
	市民局関連事業「アフィニス夏の音楽祭2011広島」におけるアステールプラザの空間演出サポート（広島アステールプラザ）（22～26日）
	「神石高原アートプロジェクト 仙養ケ原石彫シンポジウム2011」（広島県神石郡神石高原町）（8月22日～9月11日）
	「縁がわ」プロジェクト・ワークショップ開催し、東北の街へ贈るベンチを制作（広島市立大学、広島市内）（8月27～28日、9月3～4日）
10月	「光の肖像」展 一まなざしの彼方一（三次市三良坂平和美術館）（10月7日～11月3日）
	シティカレッジ「東日本大震災と私たち一広島から考える」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（16日）
	堀研　イタリアの風スケッチ展（広島市立大学芸術資料館）（10月26日～11月1日）
11月	対馬アートファンタジア2011（長崎県対馬市）（11月5日～12月11日）
	有福一昭氏講演会・ワークショップ「木をつくろう」（広島市立大学）（18日）
	今年もダム、しゃべる 一温井ダム一（安芸太田町大字加計）（12日）
12月	YESTERDAY'S TOMORROW 日本の伝統美 一日本画・漆　広島市立大学芸術学部日本画・漆の若手作家による合同発表展（はつかいち美術ギャラリー第1・2展示室）（3～25日）
	服部等作　退任記念展　ヒマラヤと天空の玉座をめぐる・人の姿とモノのカタチ（広島市立大学芸術資料館）（8～14日）
	キッズキャンパス2011展・わくわくアートワークショップ、講演会「こどもの城造形事業部の活動について」・ワークショップ「木をつくろう」有福一昭氏（広島市立大学）（17～21日）

1月	「method 広島市立大学芸術学部若手教員作品展」（廿日市市はつかいち美術ギャラリー第1・2展示室）（7～22日）
	第9回芸術学部デザイン工芸学科3年テーマ制作展2012「地」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（12～16日）
	国際漆芸文化学術交流「日中現代漆芸考察」（広島市立大学小ホール）（26日）
3月	第15回広島市立大学芸術学部卒業・修了作品展（広島市現代美術館、広島市立大学）（3～8日）
	庄原市観光協会との共催のワークショップ「しょうばらサーカス2012」を開催（国営備北丘陵公園北入口エントランスセンター国兼）（3～8日）
	メディア造形分野が広島テレビ主催の音楽イベント「MUSIC CUBE」に映像作品を提供（3月3・11・17日、4月1日）

2012年度

4月	社会人向け工芸・版画技能講座（金工、染織、版画、漆）
	市民局関連事業「銅蟲ランプの制作」
	都市整備局関連事業「安佐動物公園の壁画制作」
	縁がわプロジェクト「広島から東北へ」（広島市立大学および広島市内で市民参加の制作、作品は被災地東北に提供）
	猿猴橋の親柱復元に関する研究（4月17日～1月31日）
	DepART！（旧加藤海運倉庫）（21～30日）
5月	広島市中区イメージキャラクター「なかちゃん」着ぐるみ制作
	広島市立特別支援学校校章のデザイン制作
6月	特定研究「広島市工芸作家招待展 一金属・染色・漆造形一」による韓国大邱広域市との文化交流（韓国・大邱市ファッションジュエリーセンター）（16～24日）
	芸術学研究科造形芸術専攻の教職課程認定申請［中専免・高専免（美術）および高専免（工芸）］（18日）
7月	「光の肖像」展　IN TOKYO（東京・永井画廊）（2～20日）
8月	サン・アンド・スターの落とし子展（広島宇品中央6号県営上屋）（10～18日）
	「キッズキャンパス2012」一ちから（広島市立大学）（19・26日）
8月	「仙養ヶ原シンポジウム」芸術学部教員・学生が参加（広島県神石郡神石高原町）（8月20日～9月9日）
	「神石高原アートプロジェクト 仙養ケ原シンポジウム2012　石舞台と風の宴」（広島県神石郡神石高原町）（8月20日～9月9日）
	西京大学校との国際交流展「衣・食・住　ソウル 一広島」（韓国ソウル・西京大学校）（8月28日～9月10日）
9月	花の季台自治会 大塚伴南社会福祉協議会／花の季台誘導サイン制作（広島市安佐南区大塚）
10月	対馬アートファンタジア2012（長崎県対馬市）（10月6日～11月10日）
	庄原市観光協会との共催のワークショップ「しょうばらサーカス2012秋」を開催（国営備北丘陵公園北入口エントランスセンター国兼）（10月6～7日、11月10日）
	シティカレッジ「創作と人間」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（10月26日～11月1日）
11月	都市整備局関連事業「安佐動物公園の公式ロゴマークデザイン」（11月1日～1月31日）
	甦る地域文化資源展一広島市立大学日本画専攻による光洋寺襖絵および広島城・浅野長晟像の制作を中心に（7～14日）
	キッズキャンパス2012展・わくわくワークショップ（広島市立大学）（17～20日）
	彫刻分野における地域文化材保護についての研究（11月19日～3月31日）
12月	市民局関連事業「折り鶴に託された思いを昇華させるための取組」のロゴマークデザイン補修（12月1日～1月31日）
	広島市立図書館・広島市立大学連携事業　企画展「キッズキャンパスと美術教育」、講演会「子どもと美術 一キッズキャンパスの実践から」（広島市中央図書館）（1～24日）
	庄原市観光協会との共催のワークショップ「しょうばらサーカス2012」（国営備北丘陵公園北入口エントランスセンター国兼）（22日）
1月	第10回芸術学部デザイン工芸学科3年テーマ制作展「FACE」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（23～27日）
3月	第16回広島市立大学芸術学部卒業・修了作品展（広島市現代美術館、広島市立大学）（2～7日）
	安佐南区役所関連事業「安佐南さわやかあいさつ運動」の基本方針、シンボルデザイン等の作成（6～31日）

3月	広島市安佐動物公園　広島市立大学芸術学部共同壁画プロジェクト　動物公園内レストハウス横壁画（5.2×2m）完成（18～24日）

2013年度

4月	社会人向け工芸・版画技能講座（金工・染織・版画・漆）
	特定研究「芸術学部入試制度施策課題の検証と実践的対応」
	芸術学研究科造形芸術専攻の教職課程認定［中専免・高専免（美術）および高専免（工芸）］（1日）
7月	視覚造形自主テーマ制作展「Progress」（旧日本銀行広島支店）（7月20～25日、8月3～6日）
	林勝美作レリーフ修繕に関する研究（7月23日～10月31日）
	広島市安佐動物公園　広島市立大学芸術学部共同壁画プロジェクト　動物公園内キリン舎横壁画（9×7m）・野外ステージ下（0.7×11m）完成（7月30日～8月31日）
8月	「光の肖像」展2013（広島市共催、広島国際会議場）（3～6日）
	平和ポスター展「Pray for Peace」（旧日本銀行広島支店）（3～8日）
	「キッズキャンパス2013」―ひらめき（広島市現代美術館・広島市立大学）（18・25日）
	「神石高原アートプロジェクト 仙養ケ原シンポジウム2013　石舞台と風の宴」（広島県神石郡神石高原町）（8月19日～9月15日）
9月	『国吉康雄作品模写プロジェクト』公益財団法人 福武教育文化振興財団の助成で制作実施（2～16日）
9月	広島市安佐動物公園　広島市立大学芸術学部共同壁画プロジェクト　動物公園内クロサイ舎（4×28m）完成（6～20日）
10月	「対馬アートファンタジア2013」（長崎県対馬市）（10月5日～11月24日）
	国吉祭 YASUO KUNIYOSHI Art Fes.2013において講演会「国吉に挑んで ―国吉康雄作品模写中秘話」で芸術学部教員・学生が登壇（13日）
	広島市立大学芸術学部新任教員展（広島市立大学芸術資料館）（21～27日）
	はつかいち×メソッド　～山をくだって海にでる～（廿日市市はつかいち美術ギャラリー第1・2展示室）（10月24日～11月10日）
11月	堀研　退任記念展（広島市立大学芸術資料館）（5～11日）
	若山裕昭　退任記念展（広島市立大学芸術資料館）（15～21日）
	キッズキャンパス2013展・わくわくアートワークショップおよび講演会「手で見る北斎～触察の旅」岩崎清氏（広島市立大学芸術学部）（11月29日～12月3日）
12月	「時を超えてⅢ」―広島市立大学特定研究・模写による県内文化財研究と保存継承報告展示（広島市立大学芸術資料館）（4～8日）
	友安一成　退任記念展（広島市立大学芸術資料館）（11～17日）
1月	第11回芸術学部デザイン工芸学科3年テーマ制作展「エコロジー」（広島市まちづくり市民交流プラザ）（22～26日）
3月	第16回広島市立大学芸術学部卒業・修了作品展（広島市現代美術館、広島市立大学）（2～7日）

4. 歴代教員一覧

（1）過去在職教員

（在職期間について、年度途中の着任・離任の場合は年月を、そうでない場合は年度を示す。また、専門分野は本学在職時のもの。）

池田　為明
インダストリアル・デザイン
教授
1994年度～1999年2月

礒江　毅
油絵
教授
2005年度～2007年9月

磯野　清夫
漆芸
教授
1994年度～2004年度

今井　昭吾（珠泉）
日本画
教授
1994年度～1999年度

内山　昭太郎
映像情報造形
教授
1999年4月～2000年12月

加治屋　健司
美術史
准教授
2007年度～2013年度

倉島　重友
日本画
助教授→教授
1994年度～2009年度

友安　一成
油絵
助教授→教授
1994年度～2013年度

服部　等作
立体造形
教授
2000年度～2011年度

堀　研
油絵
助教授→教授
1994年度～2013年度

山中　雪人
日本画
教授
1994年度～1999年度

綿引　道郎
彫刻
教授
1994年度～2007年度

植草　正勝
彫刻
助教授→教授
1994年度～2008年6月

大井　健次
現代表現、視覚造形
教授
1994年度～2010年度

梶原　正朗
彫刻
助教
2008年度～2010年度

佐々木　正
日本画
助手→講師→助教授→准教授
1994年度～2008年8月

西田　俊英
日本画
教授
2000年度～2011年度

藤本　哲夫
染織造形
教授
2005年度～2010年度

三原　捷宏
油絵
教授
1994年度～2006年度

若山　裕昭
金属造形
助教授→教授
1994年度～2013年度

王　培
日本画
助教
2010年度～2013年度

潮　隆雄
テキスタイル・デザイン
教授
1995年度～2004年度

大歳　克衛
油絵
教授
1994年度～1999年度

北田　克己
日本画
助教授→教授
2000年度～2012年度

清水　英夫
視覚造形
教授
1994年度～1999年度

野田　弘志
油絵
教授
1995年度～2004年度

細井　良雄
彫刻
教授
1994年度～2002年度

山下　恒雄
金属造形
教授
1994年度～1997年4月

和田　拓治郎
彫刻
助手
2003年度～2006年度

（2）教員略歴 （2014年4月1日時点在職者）

講師 秋山 隆（あきやま たかし）
1975年生まれ。広島県出身。2000年、広島市立大学大学院芸術学研究科博士前期課程修了。修士（芸術）。2007年度に本学着任（助教→講師）。専門分野は彫刻（木彫）。これまでの主な担当科目は「彫刻実習Ⅰ」「構成演習Ⅰ」「構成実習Ⅱ（平面・立体）」「実材制作実習Ⅱ」。

教授 伊東 敏光（いとう としみつ）
1959年生まれ。千葉県出身。1987年、東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。芸術学修士。1994年度に本学着任（助手→講師→助教授→教授）。専門分野は彫刻。これまでの主な担当科目は「彫刻研究BⅠ・BⅡ」。

准教授 今村 雅弘（いまむら まさひろ）
1966年生まれ。広島県出身。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程単位取得退学。修士（芸術学）。2013年度に本学着任（准教授）。専門分野は日本画。これまでの主な担当科目は「日本画実習Ⅰ」。

准教授 Worthen, Charles（ウォーゼン, チャールズ）
1958年生まれ。米国マサチューセッツ州ボストン出身。1986年、ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン大学院（米国）修士課程彫刻専攻修了。修士（彫刻）。2005年度に本学着任（准教授）。専門分野は芸術教育。これまでの主な担当科目は「彫刻」。

教授 海老 洋（えび よう）
1965年生まれ。山口県出身。1995年、東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻単位取得退学。修士（芸術学）。2009年度に本学着任（准教授→教授）。専門分野は絵画（日本画）。これまでの主な担当科目は「日本画実習Ⅱ」「構成実習Ⅱ（平面）」「材料実習Ⅱ（金属材料）」「彫刻実習」「基礎演習」「構成演習」「日本画研究Ⅰ・Ⅱ」。

教授 鰕澤 達夫（えびさわ たつお）
1958年生まれ。東京都出身。1988年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。芸術学修士。1994年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野は現代美術。これまでの主な担当科目は「現代美術論」。

教授 及川 久男（おいかわ ひさお）
1954年生まれ。岩手県出身。1984年、東京藝術大学大学院美術研究科修士課程デザイン専攻修了。芸術学修士。1994年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野はデザイン。これまでの主な担当科目は「視覚造形」。

准教授 大塚 智嗣（おおつか ともつぐ）
1967年生まれ。千葉県出身。東京藝術大学大学院美術研究科漆芸専攻修了。修士（芸術学）。2002年度に本学着任（講師→准教授）。専門分野は漆造形。これまでの主な担当科目は「造形実習ⅠA・ⅡA・ⅢA・ⅠB・ⅡB・ⅢB」「漆造形演習」。

教授 大矢 英雄（おおや ひでお）
1954年生まれ。東京都出身。1981年、東京藝術大学大学院美術研究科（油画技法材料）修了。芸術学修士。2000年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野は油絵。これまでの主な担当科目は「油絵研究Ⅰ・Ⅱ」「創作総合研究Ⅰ・Ⅱ」「特別造形総合演習Ⅰ・Ⅱ」。

准教授 笠原 浩（かさはら ひろし）
1964年生まれ。新潟県出身。1990年、東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。芸術学修士。2000年度に本学着任（講師→助教授→准教授）。専門分野はデザイン（映像）。これまでの主な担当科目は「造形実習Ⅰ～Ⅳ」「コンピュータ・アート」。

教授 倉内 啓（くらうち ひろし）
1961年生まれ。岡山県出身。1987年、京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻修了。芸術学修士。1994年度に本学着任（助手→講師→助教授→准教授→教授）。専門分野は染織工芸。これまでの主な担当科目は「造形研究」「造形実習Ⅰ～Ⅲ」「創作と人間」「染織造形実習」。

准教授 諏訪 敦（すわ あつし）
1967年生まれ。北海道出身。1992年、武蔵野美術大学大学院造形研究科修士課程美術専攻油絵コース修了。修士（造形）。2008年10月に本学着任（講師→准教授）。専門分野は美術、油絵。これまでの主な担当科目は「油絵実習ⅠB・ⅢB」「基礎演習」「デッサン実習Ⅱ」。

講師 釣谷 幸輝（つりたに こうき）
1967年生まれ。富山県出身。1994年、金沢美術工芸大学大学院美術工芸研究科修士課程絵画専攻修了。修士（芸術）。2014年度に本学着任（講師）。専門分野は版画。これまでの主な担当科目は「版画制作実習Ⅰ・Ⅱ」。

助教 土井 満治（どい みつはる）
1979年生まれ。広島県出身。広島市立大学大学院芸術学研究科博士後期課程総合造形芸術専攻彫刻領域満期退学。修士（芸術）。2011年度に本学着任（助教）。専門分野は彫刻。これまでの主な担当科目は「デッサン実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」。

教授 中嶋 健明（なかじま たけあき）
1950年生まれ。東京都出身。1975年、東京藝術大学大学院芸術学研究科工芸専攻修了。修士（芸術学）。1994年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野は映像制作。これまでの本学での主な役職は、評議会評議員（2006～2009年度）。これまでの主な担当科目は「図法及び製図」「コンピュータ・アート」「メディアと社会」。

教授 永見 文人（ながみ ふみと）
1962年生まれ。山口県出身。1987年、東京藝術大学大学院美術研究科工芸専攻修了。芸術学修士。1994年度に本学着任（助手→講師→助教授→准教授→教授）。専門分野は金属造形。これまでの主な担当科目は「造形実習」「基礎演習」「総合演習C」「教職実践演習」。

講師 中村 圭（なかむら けい）
1975年生まれ。大分県出身。2003年、広島市立大学大学院芸術学研究科博士後期課程修了。博士（芸術）。2011年度に本学着任（講師）。専門分野はビジュアル・コミュニケーション・デザイン。これまでの主な担当科目は「デザイン工芸概論」「プレゼンテーション技法概説」「造形実習ⅠA・ⅠB」。

講師 野田 睦美（のだ むつみ）
1971年生まれ。京都府出身。2004年、京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程終了。博士（美術）。2012年度に本学着任（講師）。専門分野は芸術、染織、現代織物。これまでの主な担当科目は「造形実習ⅡA・ⅡB」「描出演習Ⅰ」「古美術研究」。

助教 藤江 竜太郎（ふじえ りゅうたろう）
1978年生まれ。広島県出身。2004年、広島市立大学大学院芸術学研究科博士前期課程造形計画専攻修了。修士（芸術）。2012年度に本学着任（助教）。専門分野は立体造形。これまでの主な担当科目は「材料技法演習」。

准教授 藤田 敏彰（ふじた としあき）
1959年生まれ。香川県出身。1985年、東京藝術大学大学院美術研究科漆芸専攻修了。芸術学修士。2014年度に本学着任（准教授）。専門分野は漆芸。これまでの主な担当科目は「造形実習ⅡA」。

教授 前川 義春（まえかわ よしはる）
1955年生まれ。福井県出身。1982年、東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。1991年、ミュンヘン造形美術大学大学院（ドイツ）彫刻科修了。芸術学修士。1994年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野は彫刻。これまでの本学での主な役職は、評議会評議員（2009年度）、芸術学部副学部長・芸術学研究科副研究科長（2010年度）、芸術学部長・芸術学研究科研究科長（2011年度～）。これまでの主な担当科目は「彫刻実習Ⅳ」「創作と人間」。

准教授 前田 力（まえだちから）

1971年生まれ。千葉県出身。2000年、東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻日本画修士課程修了。修士（美術）。2014年度に本学着任（准教授）。専門分野は日本画。これまでの主な担当科目は「日本画実技」。

講師 松尾 真由美（まつお まゆみ）

1965年生まれ。香川県出身。カーネギーメロン大学芸術大学院（米国）美術専攻修士課程修了。芸術学修士。2007年度に本学着任（助教→講師）。専門分野は美術。これまでの主な担当科目は「油絵実習Ⅰ～Ⅳ」「構成実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」。

教授 南 昌伸（みなみ まさのぶ）

1956年生まれ。広島県出身。1983年、東京藝術大学大学院美術研究科工芸専攻（鍛金）修了。芸術学修士。1994年度に本学着任（講師→助教授→教授）。専門分野は金属工芸、金属造形。これまでの本学での主な役職は、芸術学部副学部長・芸術学研究科副研究科長（2011年度～）。これまでの主な担当科目は「工芸材料概説」「造形実習」「造形計画演習」「金属造形演習」。

准教授 森永 昌司（もりなが しょうじ）

1959年生まれ。広島県出身。1988年、東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。芸術学修士。1994年度に本学着任（助手→講師→准教授）。専門分野は油彩画。これまでの主な担当科目は「油絵研究Ⅰ・Ⅱ」「デッサン概論」「油彩画材料論」。

准教授 柳 幸典（やなぎ ゆきのり）

1959年生まれ。福岡県出身。1990年、イェール大学大学院（米国）修士課程修了。修士（芸術学）。2005年度に本学着任（助教授→准教授）。専門分野は現代美術。これまでの主な担当科目は「造形実習Ⅰ～Ⅳ」。

助教 山浦 めぐみ（やまうら めぐみ）

1981年生まれ。広島県出身。2008年、広島市立大学大学院芸術学研究科博士後期課程総合造形芸術専攻（日本画）修了。博士（芸術）。2014年度に本学着任（助教）。専門分野は日本画。これまでの主な担当科目は「デッサン実習Ⅰ～Ⅲ」「卒業制作」。

助教 湯浅 ひろみ（ゆあさ ひろみ）

1977年生まれ。広島県出身。広島市立大学大学院芸術学研究科博士後期課程総合造形芸術専攻絵画領域油絵単位取得退学。修士（芸術）。2014年度に本学着任（助教）。専門分野は絵画（油絵）。これまでの主な担当科目は「デッサン実習Ⅰ～Ⅲ」「油絵実習Ⅰ～Ⅳ」「卒業制作」「古美術研究」。

教授 吉井 章（よしい あきら）

1949年生まれ。広島県出身。1977年、東京藝術大学大学院美術研究科絵画専門課程油絵専攻（修士課程）修了。芸術学修士。1994年度に本学着任（助教授→教授）。専門分野は油絵実技、デッサン実技、教職関係。これまでの本学での主な役職は、芸術資料館館長（2008～2009年度）。これまでの主な担当科目は「油絵実習Ⅰ～Ⅳ」「教職実践演習C」「創作と人間」。

教授 吉田 幸弘（よしだ ゆきひろ）

1960年生まれ。埼玉県出身。1984年、東京藝術大学美術学部卒業。芸術学士。1994年度に本学着任（講師→助教授→准教授→教授）。専門分野はデザイン。これまでの本学での主な役職は、副理事（広報担当）（2010年度～）、芸術資料館長（2013年度～）。これまでの主な担当科目は「コンピュータ・アート」「造形実習Ⅰ～Ⅳ」。

教授 藁谷 実（わらや みのる）

1956年生まれ。千葉県出身。1983年、東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻（日本画）修了。芸術学修士。1994年度に本学着任（講師→助教授→教授）。専門分野は日本画。これまでの主な担当科目は「日本画実習」「日本画入門」「創作と人間」。

（3）在職期間一覧

（2014年度4月1日時点。年度途中の着任・離任の場合でも、その年度は在職期間として示す。）

氏名＼年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
伊東　敏光	1994																				2014
鰕澤　達夫	1994																				2014
及川　久男	1994																				2014
倉内　啓	1994																				2014
中嶋　健明	1994																				2014
永見　文人	1994																				2014
前川　義春	1994																				2014
南　昌伸	1994																				2014
吉井　章	1994																				2014
吉田　幸弘	1994																				2014
森永　昌司	1994																				2014
藁谷　実	1994																				2014
友安　一成	1994																			2013	
堀　研	1994																			2013	
若山　裕昭	1994																			2013	
大井　健次	1994																2010				
倉島　重友	1994															2009					
植草　正勝	1994														2008						
佐々木　正	1994														2008						
綿引　道郎	1994													2007							
三原　捷宏	1994												2006								
磯野　清夫	1994										2004										
細井　良雄	1994								2002												
今井　昭吾（珠泉）	1994					1999															
大歳　克衛	1994					1999															
清水　英夫	1994					1999															
山中　雪人	1994					1999															
池田　為明	1994				1998																
山下　恒雄	1994			1997																	
潮　隆雄		1995									2004										
野田　弘志		1995									2004										
内山　昭太郎						1999	2000														
大矢　英雄							2000														2014
笠原　浩							2000														2014
北田　克己							2000												2012		
西田　俊英							2000											2011			
服部　等作							2000											2011			
大塚　智嗣									2002												2014
和田　拓治郎										2003			2006								
柳　幸典												2005									2014
藤本　哲夫												2005					2010				
礒江　毅												2005		2007							
秋山　隆														2007							2014
松尾　真由美														2007							2014
加治屋　健司														2007						2013	
諏訪　敦															2008						2014
梶原　正朗															2008		2010				
ウォーゼン，チャールズ																2009					2014
海老　洋																2009					2014

氏名＼年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
王　培																	2010			2013	
土井　満治																		2011			2014
中村　圭																		2011			2014
野田　睦美																			2012		2014
藤江　竜太郎																			2012		2014
今村　雅弘																				2013	2014
釣谷　幸輝																					2014
藤田　敏彰																					2014
前田　力																					2014
山浦　めぐみ																					2014
湯浅　ひろみ																					2014

5. 教育研究活動紹介

（1）芸術学部の教育

芸術学部は美術学科とデザイン工芸学科の２学科からなり、美術学科は３専攻、デザイン工芸学科は７分野で構成されている。自己の表現を追求する創作活動を続けていくために必要な観察力と造形力を養う基礎実技の修得を重視し、多様な技術修得のため、過去から現在に至るさまざまな分野の素材や技術を学ぶことができる多角的で総合的な教育を行っている。また地域社会との連携や海外との学術交流などを通して、芸術の社会的な役割を知り、社会の中で表現活動を行う実践的な機会を提供している。

i. 美術学科

実践的カリキュラムによって、創作者としての感性と技術を養い、美術を通じて社会に貢献できる人材を育成している。

日本画、油絵、彫刻の３専攻からなる美術学科は、高い制作能力と創造性を持った美術家を養成するため、徹底した基礎実技指導と、学生個々の感性や資質を重視した個別指導を、学部４年間を通じて段階的に行っている。各専攻の実技実習（専門科目）は、課題ごとにさまざまな専門技術と知識を必要とするため、実習を通して専門的な造形力が身に付く構成となっている。また実習以外でも、専門基礎科目として西洋・東洋・日本美術史、現代美術、写真（映像）、アートマネジメント、デザイン、絵画、彫刻等々を、必修または選択によって学び、専門分野にとどまらない横断的な芸術表現とその可能性を研究することができる。そして卒業年次には、学部での創作研究の集大成として卒業制作を行い、美術家としての第一歩を踏み出すこととなる。

美術学科は、高い専門性と横断的な見識を併せ持つ学部教育によって、開学20周年を迎えた今日、社会で活躍する作家や教員を数多く輩出している。

○ 日本画専攻

日本画専攻の実技教育は、絵画的造形力と専門的技術といった基礎の充実から、独創性のある表現に至るようデッサン、古典模写、日本画制作といった実習を通して段階的な指導を行っている。また、写生旅行や古美術研究旅行等によるスケッチ取材や文化財の実地見学の体験を通じ、見る力や考え表現する力を涵養し、創作の幅を広げている。近年では、作風の異なる専任教員を採用し、学生の多様性に応じている。卒業生は、院展、創画会展や他の公募展において入選や受賞をするなど活躍しており、個展、グループ展も全国的に行っている。

材料実習Ⅰ

日本画実習Ⅰ

特別演習（裏打ち技法）

卒業制作

○ 油絵専攻

油絵制作に必要な基礎的なデッサン力の充実と、専門的技術および知識を修得するために、デッサン実習と油絵実習を各学年で段階的に行っている。油絵や絵画芸術を理解し思考を深めるために、油絵以外の絵画技法である古典技法や版画技法の授業と実践も重視し、創作力の向上を図ってきた。

開学以来の油絵表現の本筋を追究する基本理念は堅持しながらも、近年は、変転激しい現代に柔軟に対応できる創作力と発想を養うカリキュラムを取り入れ、幅広く活躍が期待できる作家、研究者、教育者の育成に努めている。

デッサン実習

古美術研究

授業風景

油絵実習

○ 彫刻専攻

彫刻制作に必要な立体的造形力と専門技術を身に付けるため、塑造実習と、木・石・金属・テラコッタの実材実習を段階的に行っている。また、彫刻論演習や古美術研究旅行などを通じて古典から現代に至る多様な芸術表現を学ぶことにより、技術と思考の両面から彫刻芸術を探求している。

近年では、時代の要求に対応できる創作力の強化を図るため、2009年度よりアメリカ人彫刻家が専任教員に加わり、ミクストメディアを実材実習に加え、さらに、国際交流プログラムを教育に取り入れるなど、彫刻を通じて国際舞台で活躍できる人材の育成に努めている。

実材制作基礎演習

彫刻実習Ⅱ

実材制作実習Ⅲ

卒業制作

ii. デザイン工芸学科

確かな造形表現のための基礎を重視しながら、創造的な活動および表現のできる能力を育てている。

デザイン工芸学科は、社会と生活に関わる造形芸術の総合的な教育と研究を行うために、創造力、造形力を身に付け、確かな造形表現が行えるよう基礎教育を重視しながら、今日的な社会における新しい表現と、長い歴史に培われた造形表現の双方を検証して、より専門的な造形表現へと展開していける学科である。７つの分野を設け、幅広い表現を展開する専門領域において柔軟に対応し、創造的な活動および表現のできる能力を育て、新たな時代の形成と社会に貢献していける人材の育成を行っている。

デザイン工芸学科では1994年の開学当初、1、2年次を共通基礎実習期間とし、3年次から6分野に分かれて専門的教育を受ける形態を取ってきたが、2000年度より学部教育での専門性をより高めるため、1年次を共通基礎実習期間とし、2年次から各分野に分かれて専門的教育を受ける形態とした。また2003年度には、メディア造形分野を新たに加え７分野の専門教育を行うこととなった。1年次の共通基礎に加え、2年次の描出演習、形体演習を行い、3年次の

テーマ制作については各分野共通の合同授業とすることで、横断的な教育を行っている。

造形実習Ⅰ

描出演習Ⅱ

形体演習Ⅱ

テーマ制作

○ 現代表現分野

現代美術から空間デザイン・都市デザインの領域において、先端的表現の実践と理論構築を通じ、現代の要請に応える表現者の育成を行っている。表現者として必要なプレゼンテーションの方法やポートフォリオ、アーティストブックの制作を学び、現場で活躍するキュレーター等による講義を通じて、アートマネジメントの基礎も学ぶ。また、豊富な活動と経験を有する教員により、個々の学生に応じた作品制作の指導を行うとともに、近年では実際のアートプロジェクトを教材とした実践的な教育も行っている。

プレゼンテーション風景

造形実習Ⅱ

造形実習Ⅲ

卒業制作

○ 視覚造形分野

私たちは普段の生活において、五感による知覚のうち80%以上を視覚に頼っている。視覚造形は、その視覚に訴えて何らかの情報を伝えようとする分野であり、プレゼンテーションを含め、あらゆる造形の基礎であるイメージを表現し伝えることを重視する。そして描くことからそれぞれの表現への発展プロセスを学ぶことによって、より高い表現力を身に付け、ものをつくる上で企画し計画すること、そのコンセプト＆ワークによって創作性の向上を図り、これからの社会に柔軟に対応していくことができる人材の育成を目的としている。近年では、グラフィックデザインに力を入れている多くの企業資料館・施設等の研修訪問を行うとともに、地域社会の要請に応え、地域と連携した多くの実践型教育にも積極的に取り組んでいる。

授業風景

造形実習Ⅲ

造形実習Ⅲ

卒業制作

○ 立体造形分野

3D空間の中でのモノづくりを、企画立案からデザイン計画、造形まで、実物の制作を通じて一貫して行っており、機能と造形、生活の中で「ヒト―モノ―環境」と関わる道具やシステムを学ぶ。卒業生はゲーム、ファッション、プロダクトのデザイナーとして幅広く社会で活躍している。また、広島市の多くの公共デザインに関わったり、さらに近年は学外にも発表の場を設け、地域に出向きワークショップ等の実践を行っている。

造形実習Ⅱ

造形実習Ⅱ

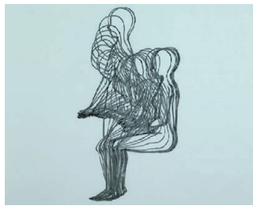
造形実習Ⅲ

卒業制作

○ メディア造形分野

ICT時代の到来とともに、デザイン工芸学科内にメディア造形分野を新設したのは2003年度。コンピュータを利用した造形表現をその専門性として、各種ソフトウェアの技術習得から始め、さまざまなデバイスやハードウェアの特性を利用した実習を中心に、メディアアート表現を幅広く実践している。造形表現においてコンピュータの使用が一般化した近年では、動画像表現（映像表現）を主なメソッドとして、コマーシャル映像やアートアニメーション表現を中心に展開する人材の輩出に努めている。

2015年度から「映像メディア造形」と改称することを予定している。


造形実習Ⅱ

造形実習Ⅲ

卒業制作

卒業制作

○ 金属造形分野

金属造形に必要な造形力、専門知識、技術を身に付けるため、手仕事を中心とした伝統技術や、現代における金属加工の実際を学びながら段階的に課題制作を行っている。また、学科共通の古典研究、総合表現研究、テーマ研究を通して、優れた古典と現代のさまざまな表現を学び、テーマに基づく制作の実践を行うなど、技術と思考の両面から金属造形を探求している。

開学以来、確かな技術と客観的な思考力を高めるため、分野カリキュラムの見直しを行ったり外部講師による効果的な講義や演習を取り入れ、幅広い視点から現代における金属工芸、金属造形のあり方を思考できる創造性豊かな人材の育成を行っている。

造形実習Ⅱ

造形実習Ⅱ

造形実習Ⅲ

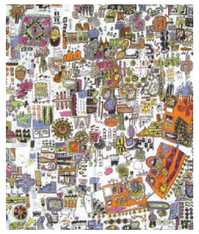
卒業制作

○ 染織造形分野

染織に関わる素材についての基礎知識を学び、染・織特有の表現法を通して染織造形の基礎を段階的に習得する。その後、課題を通じて技術・素材・知識に対する専門性を深め、個々の創作に対する意識の向上と創作表現に必要な技法の質的向上を目指している。また「テーマ制作」や「ブランド企画」および「古美術研究」等の特色あるプログラムで表現や思考の幅を広げ、自己表現の確立に努めている。近年、現代社会における染・織・繊維造形のあり方を広い視野からとらえ、新しい染織の表現や可能性を追究できるデザイナーや作家を輩出している。

造形実習

造形実習Ⅱ


造形実習Ⅲ

卒業制作

を行いながら、地元工芸諸職と連携したものづくりプログラムを取り上げるなど、社会との関わりを体験しながらの教育も積極的に行っている。

造形実習Ⅱ

造形実習Ⅱ

造形実習Ⅲ

卒業制作

○ 漆造形分野

漆造形工房では、漆制作に必要な造形力と専門技術を身に付けるため、道具の仕立てから、キュウ漆や蒔絵、螺鈿（らでん）、彫漆などの加飾技法、乾漆造形を習得する。また古典研究や保存修復研究、国内外の漆研修を実施することで、現代における漆芸術を探究している。近年では広島の伝統文化である宮島轆轤（ろくろ）技術の習得や広島産漆復興のための植栽

（2）芸術学研究科の教育

1998年4月に、「絵画専攻」「彫刻専攻」「造形計画専攻」の3専攻をもって修士課程（2000年度より「博士前期課程」）を開設し、2000年4月には「総合造形芸術専攻」の1専攻をもって博士後期課程を開設した。本研究科がこれまで社会に送り出してきた多くの優秀な人材は、地域社会はもとより、国内外でも高い評価を受けるまでに成長し、美術、デザイン、工芸の分野において社会的に大きな貢献を果たしている。

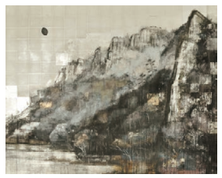
芸術学研究科では、古典研究を重視しつつ現代の視点に立って、伝統的な文化芸術を継承・発展・創造する専門的人材を育成する教育研究を行いながら、新しい素材や技法への研鑽を深め、電子メディア社会に即した先端表現を推進している。また理論の習熟を基にした創作を探究し、創造、表現およびその応用に必要な高度な技術と理論の教育研究を行うとともに、地域文化振興と国際文化交流等、社会における文化芸術の振興において指導的な役割を果たすことのできる人材を育成している。

2013年4月には、大学を取り巻く情勢の変化やそれに伴う現代社会のニーズに対応するため、博士前期課程の「絵画専攻」「彫刻専攻」「造形計画専攻」の3専攻を「造形芸術専攻」の1専攻に統合し、博士後期課程の「総合造形芸術専攻」までの一貫した教育研究体制を構築。併せて芸術理論研究分野を新設する改組を行った。これにより、博士後期課程のみならず博士前期課程においても、領域の専門性をさらに高めると同時に領域の横断を容易にし、従来の領域だけにとらわれない自由な芸術表現の可能性を広げ、その中から新しい創作者の育成を目指す教育体制とした。

博士前期課程造形計画研究Ⅱ

博士前期課程造形計画研究Ⅱ

博士前期課程造形計画研究Ⅱ


博士前期課程日本画研究Ⅱ

博士前期課程彫刻研究ＢⅡ

博士前期課程彫刻研究ＢⅡ

博士学位審査のための提出作品

博士後期課程創作総合研究Ⅱ

博士学位論文発表風景

（3）芸術学部および芸術学研究科の研究

芸術学部および芸術学研究科では、創作活動を通して積極的に研究活動を繰り広げてきたが、その成果発表としては各教員による個展の開催や、グループ展の参加によるものが主となる。それと同時に学内の特定研究費、文部科学省および独立行政法人日本学術振興会から交付される科学研究費、各種団体助成金、受託研究等を通して、美術に関わるさまざまな分野の研究を組織的に行ってきた。以下に、これらの公的な研究費、助成金を得て行った20年間の主だった研究成果を紹介する。

○ 空間造形・演出が景観に及ぼす影響と効果についての実験および考察

期間：1994年10月2～16日
会場：広島市立大学（広島市安佐南区）

広島市安佐南区の大塚地区における空間構成要素の調査と解析を基に、造形表現およびその形態と色彩を研究した。本学から近い広島広域公園で開催された第12回アジア競技大会の会期に合わせ、大学構内の傾斜地にエアーオブジェを配し、日中は形態、夜間は照明による色彩について実験を行った。3DCGによる景観シミュレーションや、地域住民へのアンケートなども実施し、景観への視覚的効果や影響について多角的に検討した。

○ 時空間における光の創造性の実験および考察
―創造と人、人と自然―

期間：1994年10月2～16日
会場：広島市立大学（広島市安佐南区）

第12回アジア競技大会の会期中に、本学と、大会会場の広島広域公園、そして選手村があった新興住宅団地「A.CITY」の3つの地区を結ぶ、レーザー／特殊ライトによるスペース・ライティング・アートを実施した。これらの地区の景観形成に関する方向付け、地域とのコミュニケーション、アジアへの文化芸術分野としての発信といった課題を設定し、光の演出効果による創造的実験を行った。

○ 作品展示「子供の造形的創造力の可能性」

期間：1994年10月2～16日
会場：広島市立大学国際学部エントランスロビー（広島市安佐南区）

5～12歳の児童29名とともに造形ワークショップを行い、作品の制作と展示会を開催した。海岸で気になる「もの」を拾い集め、並べたり積み上げたりしながら発想し、創作に取り組んだ。流木、石、貝殻などの自然が創り出した不思議な形態、美しい色彩などに素直な目を向け、「もの」の持つ特徴を自由に構成していく子供たちとその作品は、造形表現の限りない可能性を感じさせてくれた。

○ 都市の成熟と芸術の役割 ―歴史的建造物と芸術の共振

期間：1995年12月11～23日
1997年1月4～15日
1998年9月23日～10月2日
会場：広島大学学校教育学部旧図書館（広島市南区）、旧陸軍糧秣支廠倉庫（広島市南区）、サントリー株式会社宮島工場内倉庫（広島県佐伯郡大野町）

広島市に残された歴史的建造物を舞台に芸術作品の展示を行うことで、歴史と向き合う契機を創出するとともに、独自の表現を模索する目的を持った実験的研究を実施した。都市の発展に伴い、過去を踏まえた未来への思考が希薄になっている現状を鑑みての試みであった。芸術文化に携わる方々を招いてのパネルディスカッションやコンサートも開催し、市民への美術普及にも広く取り組んだ。

○ 野呂山芸術村の活動

期間：1996年4月～現在
会場：野呂山芸術村（広島県呉市）

野呂山芸術村は本学教員を中心として「地域の文化を本格的な芸術に根差したものに進展させること」を目標に掲げ、呉市川尻町に設立された。研究会や作品の講評会をその主な活動として開催し、画家、学生、評論家や愛好家が全国より参集する会合となっている。本学卒業生も交流員を務めるなどして文化交流を深めている。

○ 広島におけるライトレールのデザインとその未来展

期間：1999年5月24～31日
会場：広島市立大学芸術資料館（広島市安佐南区）

本学教員とドイツ人客員研究員による、路面電車の未来について検証する展覧会を開催した。広島市中心部には路面電車が走っており、戦後の復興期には重要な役割を担い、今もなお市民の交通手段として活躍している。一方で都市計画上、車やバスが優先されつつある現状も問題視されている。こうした課題について、2つの新型モデルによる車体バリエーションの拡大などを提案した。

○ 日独双方向的な芸術教育の実践的研究

期間：1999年～現在
会場：広島市立大学(広島市安佐南区)、ハノーバー専科大学(ドイツ)

本学の学術交流協定大学であるドイツ・ハノーバー専科大学との、国際文化交流を目的とした共同研究を実施した。隔年ごとで相互に教員派遣を行い、レクチャーやワークショップなどを通じて思想や背景の異なる芸術教育を学生に提供している。1999年より継続されているプログラムであり、国内外で活躍できる独創的な視点を持った人材の育成を目指している。

○ 宇品橋デザイン実施計画およびライトアップ計画

期間：2000年3月（竣工）

元安川および京橋川の合流入口部に架かる宇品橋（広島市南区）について、橋梁全体の造形デザインと夜間のライトアップ計画を実施した。コンピューター・グラフィックスを用いての景観シミュレーションと1/100スケールの模型を製作し、造形検討を行った。宇品橋は2000年3月に開通し、全長639.5m、幅員23.8mである。

○ 鷹野橋交差点横断歩道橋デザイン基本計画およびデザイン総合監修

期間：2000年3月（竣工）

鷹野橋交差点（広島市中区）における、横断歩道橋のデザイン基本計画および交通島、東西の橋下公園のデザインについて総合監修を行った。コンピューター・グラフィックスによる景観シミュレーションと1/50スケールの模型を製作し、造形検討を行った。エレベーターを備えた横断歩道橋は2000年3月に開通し、全長65m、幅員4m、全高13.5m（エレベーターシャフト）である。

○ ヒマラヤをとりまくチベット文化圏と少数民族のデザイン・工芸文化に関する国際学術調査

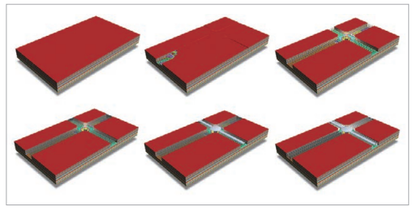
期間：2000～2018年（終了予定）

少数民族の伝統文化の衰退と消滅危機に直面する少数民族チベット人の造形（工芸・美術）と表現（芸能・祭祀）芸術について、35次にわたる国際学術調査を国内外5カ国の研究分担者と科学研究費（2000～2013年度）の下に推進し、2014年度から第5期4カ年計画を展開中である。成果は、日本初の未踏地での工芸調査実施、国際会議での世界初3D立体画像記録公開、ワークショップ・公開講座実施、リポジトリーでの発信により、公開中である。

○ 紙屋町地下街デザイン実施計画・デザイン総合監修

期間：2001年4月（竣工）

地下街「紙屋町シャレオ」（広島市中区）の空間・環境デザインや造形の展開、デザイン計画やアートワークの実施を行うための基本コンセプト構築に関し、総合的に監修を行った。「Energy from/to Underground」「積層」「掘る・刳る・彫る・湧く・呼吸する」といったキーワードを挙げ、地上と地下のエネルギーの循環と融合による都心の新しい顔の創出、活力や歴史文化のエネルギーの重層と表現行為を象徴的にイメージ化した。



○ Art Crossing Hiroshima project 2001 spring

期間：2001年4月11～24日
会場：広島市立大学オープン・エア・スペース（広島市安佐南区）、広島市立大学芸術資料館（広島市安佐南区）、紙屋町シャレオ（広島市中区）、旧日本銀行広島支店（広島市中区）

アートが広島という都市といかに関わり、活性化の起爆剤となりうるのか、という主題の下、広島市内の4つの場所と、それらの場をつなぐアストラムラインという公共交通を加えた会場で現代美術展を開催した。機能の全く異なる4つの場において、33名のアーティストたちによる多様な美術表現が交差し、広島の過去と現在、そして未来への思考を促し、都市と現代美術の新たな関係を模索する試みとなった。

○ 日本画制作の現場

期間：2002～2005年（Ⅰ期）
2006～2007年（Ⅱ期）
会場：広島市立大学芸術資料館（広島市安佐南区）

日本画分野における重要な作家6名を2期にわたって招聘し、創作に関する公開制作、展覧会、シンポジウムなどを開催することで創作者の内面に迫り、芸術活動への理解を深める教育的研究を行った。研究主題には、教育支援として芸術資料館での企画を通じた多様な美術体験の機会を拡充すること、教育拠点として芸術資料館の可能性を探究することが提示された。

○ 前進する工芸

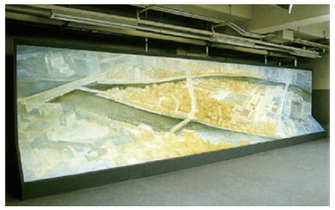
期間：2003年11月29日～12月7日
会場：広島市まちづくり市民交流プラザ・ギャラリー（広島市中区）

美術工芸作品の展覧会「前進する工芸」は、全国の主要芸術系大学において工芸・美術教育に携わる作家45名の参加により、多様化し続ける工芸分野の現在を示すことを目的に開催された。芸術系大学間のネットワークを拡大し、他分野との連携による研究を展開するなど、従来とは異なる領域との接点を模索することを目指した。さまざまな手法と題材による作品は、学生や市民に工芸の新たな一面を提示した。

○ 表象都市metamorphosis広島 ―芸術実験プロジェクト2003―

期間：2003年9月27日～10月26日
会場：旧日本銀行広島支店（広島市中区）、平和大通り（広島市）

美的文化と環境をテーマに、21世紀における環境美学の視点から企画した、展覧会とシンポジウムの2つの部門構成による芸術実験を行った。被爆という体験を持つ広島で、芸術という創造行為の表象について考察する研究であり、国内外からアーティストや研究者が多数参加した。パネルディスカッションでは、ドイツ人美学者の講演をはじめ、若手作家による討論コーナーなど活発な交流がなされた。



○ シンポジウム「映像による被爆体験の継承 ―いまヒロシマは何をすべきか」

期間：2003年12月5日
会場：広島市立大学講堂大ホール（広島市安佐南区）

色あせていく被爆体験の記憶を、映画・映像の力で継承する方法論をテーマにシンポジウムを開催した。

基調講演	**「映画『原爆の子』から『ヒロシマ』へ」**
講師	新藤兼人（映画監督）

シンポジウム	**「映像による被爆体験の継承 いま、ヒロシマは何をすべきか」**
コーディネーター	清川徹（NHK広島放送局アナウンサー）
パネリスト	新藤兼人（映画監督） 藤本黎時（広島市立大学学長） 田邊雅章（映像プロデューサー） 中嶋健明（研究代表者／猿楽町復元CG制作およびCG総監修）
司会進行	安納知里（NHK広島放送局）

○「猿楽町再現」および「HG０（ヒロシマ・グランドゼロ）」

期間：2004年5月～2006年3月

最新の電子技術によって、広島への原爆投下の記憶を再現し、つなぎとめていく試みを実践した研究。被爆した証言者たちへの綿密な聞き取り調査を基に、再現されたCGを証言者に見てもらって検証し、さらなる修正を加えていく作業を継続的に行った。再現映像では、被爆前の市民生活をとらえた「猿楽町再現」（現・大手町一丁目および紙屋町二丁目）と、原爆ドームを含む細工町（現・大手町一丁目）の周囲を主題とした「ヒロシマ・グランドゼロ」を製作した。再現されたデータや映像は2005年8月5日放送のTBSテレビ放送50周年・戦後60年特別企画『“ヒロシマ”…あの時、原爆投下は止められた…いま、明らかになる悲劇の真実』（ナビゲーター：筑紫哲也ほか）の中で使用された。

○ 横川レトロバス復元

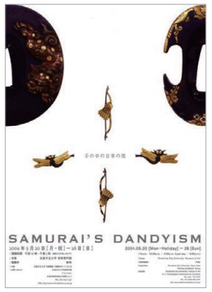
期間：2004年3月（完成）

横川レトロバスは、1905年に横川（現・広島市西区）から可部（現・広島市安佐北区）までを走行した日本最初の乗り合いバスである。「レトロバス復元の会」発足に始まり、本学教員の制作統括の下、本学工房にて総日数231日をかけ完成した。復元したバスは市民イベント時にお披露目され、横川駅前広場から太田川河川敷沿いに可部まで、当時の道のりをなぞるようにパレードを行った。バスは現在、「かよこバス」として横川駅前広場の格納庫に展示されている。

○ 展覧会をつくる2004「SAMURAI'S DANDYISM」

期間：2004年9月20～26日
会場：広島市立大学芸術資料館（広島市安佐南区）

市民講座「展覧会をつくる」において、一般公募の受講者による刀装具の金工細工を中心とした作品展を開催した。市民が主体となって企画立案から運営までを手がけるプログラムであり、展覧会の開催に至る全過程に携わった。大学の本来の機能であり最も重要な「教育」という活動を社会においても実践し、地域との連携や文化拠点としての役割、生涯学習に貢献する可能性について検証した。



○ 光の肖像展

期間：2004年～現在
会場：SOAS ブルネイ・ギャラリー（英国）、広島国際会議場（広島市中区）、広島県立美術館（広島市中区）、三良坂平和美術館（広島県三次市）、はつかいち美術ギャラリー（広島県廿日市市）、ほか

2004年から取り組んでいる、油絵専攻の実践的研究「光の肖像」展プロジェクト。広島の原爆被爆者の方々を取材して肖像画を描き、被爆の体験談を含んだ履歴書とともに展示するというもので、風化が危惧される被爆体験の継承と絵画芸術を合わせ、絵画にどのような力があるのかを探究、その可能性を検証する試みである。現在までに100を超える作品が完成し、国内外の8会場で展覧会を行っている。

○ キッズキャンパス

期間：2005年～現在
会場：広島市立大学芸術資料館（広島市安佐南区）、広島市現代美術館（広島市南区）、広島市立中央図書館（広島市中区）、ほか

子供たちの創造性の育成を目標とした「キッズキャンパス」は、広島日野自動車株式会社の協賛の下、2005年から幼児や児童を対象に毎年開催している美術講座である。教員と学生が多様なプログラムを企画運営しており、制作のプログラムでは取り組みやすさと専門性の高さを両立させ、鑑賞や対話のプログラムは広島市現代美術館や広島市中央図書館などと連携した実践的な内容となっている。

○ 広島市立大学・ニュルンベルク美術大学アートプロジェクト　KHORA

期間：2005年8月29日～10月16日
2006年8月2日～9月18日
会場：広島市立大学および広島市安佐南区大塚地区（2005年）、ニュルンベルク美術大学およびニュルンベルク市立動物園（ともにドイツ）（2006年）

海外の美術大学と同一テーマでの共同プロジェクトを行うことにより、地域の特色を再発見するなど、芸術と地域が相互作用によってより豊かに成熟していく方法を探る実践的研究である。これまで芸術分野における国際間の共同研究と地域研究は個別に行われることが多く、これを関連付けて総合的に行うことにより、国際的な視野で地域創造ができる基盤づくりと新たな芸術領域の可能性を探ることを目的とした。両大学から10名の学生、教員が参加し、公開制作、シンポジウム、作品展示を行った。

○ 大塚かぐや姫プロジェクト

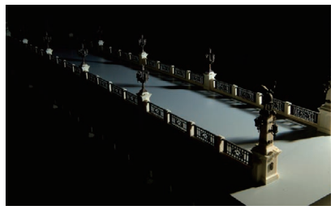
期間：2006～2011年
会場：広島市安佐南区大塚寺谷・中東地区

本学の位置する広島市安佐南区大塚寺谷・中東地区の広大な竹林を舞台に、間伐材を使用して造形作品の制作や、竹のさまざまな性質を生かすことによる創作素材としての可能性について研究するプロジェクトを行った。「人にやさしい竹林」を蘇らせるために、地元住民との協働によって間伐整備を進めた。地元のお祭りに合わせて展示発表したほか、学内の各種イベント時にも実験的な作品を展示し、鑑賞してもらった。

○ 猿猴橋の復元

期間：2008年5～11月

猿猴橋（広島市東区）は、広島駅付近を流れる猿猴川に架かっていた橋が、1926年に鉄筋コンクリートの永久橋として架け替えられた、日本で有数の装飾橋である。竣工当初は広島一の華麗な橋と謳われ、日本橋に次ぐ豪華な橋となった。その後、第二次世界大戦中は金属供出により金属部分を軍に没収され、さらに1945年には被爆している。この橋を建立当時の姿に戻すため、2008年5月、まずコンピューター・グラフィックスで復元し、同年11月に1/35の模型を製作。現在は橋全体の復元に向け、地元住民と協働している。



○ あさみなみ芸術化構想
―西風新都中央線芸術計画／安佐南区役所芸術計画

期間：2011年～現在
会場：広島市安佐南区西風新都中央線沿道および安佐南区役所（広島市安佐南区）

文化芸術の導入による地域創造を目的とした「あさみなみ芸術化構想」を実施。本学近郊の西風新都中央線沿道に、教員や卒業生による石彫作品やコンクリート素材の彫刻などの大型作品を設置した。また安佐南区役所では、屋内外に学生や大学院生の彫刻および工芸作品を長期展示している。毎年度これらの作品を入れ替えながら展示を継続することで、普段の生活の中で芸術に触れる機会を提供している。

芸術学部・芸術学研究科

○ 神石高原アートプロジェクト
仙養ヶ原石彫シンポジウム

期間：2011年～現在
会場：仙養ヶ原ふれあいの里（広島県神石郡）

彫刻専攻と立体造形分野の教員・学生らが約3週間、神石郡神石高原町仙養ヶ原に滞在し、公開制作と作品展示を行うプロジェクトである。2012～2013年は「石舞台と風の宴」をテーマに掲げて開催した。彫刻専攻の学生らは仙養ヶ原で産出される玄武岩を使用した石彫作品と、神楽の公演ができる「石舞台」の制作、立体造形分野の学生らは自由な素材と高原の風をコンセプトにした「風の宴」の作品づくりに取り組んだ。

○ 対馬アートファンタジア

期間：2011年～現在
会場：長崎県対馬市

対馬アートファンタジアは、日本や韓国をはじめ多国籍のアーティストが参加する、国際的なアートプロジェクトである。長崎県対馬市と連携し2011年から3カ年計画で行っている、滞在制作を中心とした実践研究として、地域と美術の有機的な関係を模索している。本学教員や学生も多数参加し、地元住民との交流による作品制作やワークショップなど、対馬全土で活動を繰り広げている。

○ 広島アートプロジェクト2012「ART BASE 百島」

期間：2012年11月4～24日
会場：ART BASE 百島（広島県尾道市）

広島県尾道市の離島・百島において、閉校となった中学校の校舎を再活用したアートセンター「ART BASE 百島」を文化芸術活動の拠点として実施している地域連携事業である。改修した校舎内のギャラリーや島内の施設を利用して現代美術の展覧会を開催するなど、アーティストと地元住民とが協働で、耕作放棄地や廃屋などの再生に取り組んでいる。

○ Sons and Daughters of the Sun and Star

期間：2012年6月16日～7月7日、8月10～18日
会場：フォートワース・コンテンポラリー・アーツ（米国）（6～7月）、広島市宇品中央6号県営上屋（広島市南区）（8月）

アメリカのテキサス・クリスチャン大学芸術学部との滞在制作による交流プロジェクトを行った。教員と学生からなる両大学の研究チームが互いの大学に滞在し、協働しながら10日間の作品制作に取り組み、研究成果として開催した展覧会が「Sons and Daughters of the Sun and Star」である。制作環境の変化、創作背景の共有、異国間コミュニケーションなど、さまざまな意味で実践的な研修内容となった。

○「光洋寺」襖絵制作および研究発表展「甦る地域文化資源」

期間：2012年2～4月（調査研究／制作）
2012年11月7～14日（展示）
会場：旧日本銀行広島支店（広島市中区）

社会連携事業の一環として、広島市南区向洋にある光洋寺の本堂正面の襖絵4面について調査研究を行い、現存する襖絵に代わる新作襖絵を制作した。日本画研究室と大学院博士前期課程の学生によって、壮麗な孔雀の姿が描かれた。また同年中に、本作品とともに、日本画研究室教員と大学院生が手掛けてきた模写30点とドキュメントを展示する「甦る地域文化資源」展を、旧日本銀行広島支店で開催した。

○ しょうばらサーカス

期間：2012年3月3日～2014年3月8日
会場：広島県庄原市

しょうばらサーカスは、広島県庄原市において地元行政や住民とともにアートイベントやワークショップを開催し、小さな子供から大人まで、アートを探し、育て、楽しむことのできる環境づくりを目指すプロジェクトである。文化の地産地消を目標に、持続的なプロジェクトとして実施した。

○ 衣・食・住　ソウル―広島

期間：2012年8月28日～9月10日
会場：西京大学校（韓国）

現代美術の展覧会「衣・食・住　ソウル―広島」は、教員や学生、卒業生など若手作家が、韓国ソウルにある西京大学校芸術学部と共同で制作発表を行う文化交流事業である。本学より21名の作家が2週間ソウルに滞在し、芸術教育や文化を体験しながら構想を練り、都市のアイデンティティーなど生活の中で実感、経験したことを反映しながら創作に取り組んだ。

○ 動物園ビジュアル環境再生に伴う公共美術の研究

期間：2013年3月～現在
会場：広島市安佐動物公園（広島市安佐北区）

広島市安佐動物公園の広い敷地の中に点在する飼育舎に壁画を制作し、動物公園内のビジュアル環境再生を手掛かりに環境と平面造形について考察しながら、公共美術造形のあり方を研究している。壁画のデザイン、制作とも教員と学生、動物園スタッフが連携して行い、環境と芸術に関する知見を深めている。これまでにキリン舎、レストハウス横、野外ステージ、サイ舎などの壁画を完成させており、今後も園内の壁画をさらに増やしていく予定である。

○ 基町プロジェクト

期間：2014年4月1日～現在
会場：基町住宅地区（広島市中区）

基町プロジェクトは、創造的な文化芸術事業や地域交流を通じて、基町の魅力づくりや基町住宅地区の活性化を行うことを目的とする、広島市立大学と広島市中区の共同プロジェクトである。2014年5月には、現地に活動拠点「M98」が開設された。また、プロジェクトの推進および拠点運営のために2名の非常勤特任教員を置き、継続的な活動が実施できる体制を整備した。

広島平和研究所

1. 広島平和研究所長のメッセージ

なにやら、おかしなことになっていると皆さんは思いませんか。日本は「平和国家」であり、戦後日本は「平和外交」を展開してきましたよね。どの国にも引けを取らないほど、平和外交を展開してきました。それなのに今、日本を取り巻く東アジアの環境は、世界で最も危険な地域の一つになっています。戦争を仕掛けなければ、そして他国の戦争に参加しなければ、平和が守られるとは限りません。平和は、手出しをせずに、じっと待っているだけでは、やってきません。

平和は創造するものだと考えたことはありませんか。今から200年以上も前に、イマヌエル・カントが著した『永遠の平和のために』(1795年）は、世界中で広く読み継がれている書です。彼は次のように考えました。もともと国際社会は、アナキーな世界である。そこでの平和の条件とは、第一に、国家の政体は共和政であるべきで、第二に、国際社会は国際法で秩序が維持されるべきで、そして第三に、世界連合を創造すべきである。こうして「永遠の平和」の条件が整うと考えたのです。

さて、それから200年が経ちました。国際法も整備され、国際連合も設立され、そして世界の半数以上の国が民主制の国になりました。ところがこの間、たくさんの人が戦争の犠牲になりました。20世紀だけで、なんとその数は1億人以上だと推計されています。しかも驚くことに、戦争の犠牲者数をはるかに上回る数の人たちが、政府の手で殺戮されています。

さらに、戦争は減少したものの、代わって内戦が増加しています。ここで私たちは立ち止まり、考えるでしょう。戦争はけしからん。しかし、人間の安全、人権の尊重という視点に立てば、戦争は人類最大の殺人マシーンではなかったのです。戦争はけしからんけど、独裁国家の存在も、これまたけしからんということになります。ところが独裁国家に対して、権力の集中を止める方法はあるのでしょうか。こうした国家での内戦の発生を予防する方法はあるのでしょうか。それとも、何も外国のことにまで関わる必要はなく、主権尊重、内政不干渉といった伝統的な国際関係原則に基づいて、悲劇を見放し、放置すべきでしょうか。それが一番手っ取り早く、楽な話には違いありませんが。

なぜ戦争は勃発するのでしょうか。なぜ核兵器廃絶が実現しないのでしょうか。なぜ世界各地で武力紛争が絶えず、多くの人々が貧困に苦しんでいるのでしょうか。なぜ国際平和の状態であっても多くの国で政府は国民を虐げ、人権を侵害するのでしょうか。平和と人間の安全保障とは、いったいどのような関係にあるのでしょうか。

日本を取り巻く東アジアをはじめ、世界では今まさに、これまで以上に平和創造への取り組みが喫緊の課題として私たちに突きつけられています。平和創造にも人間の安全保障にも多くの課題があり、さまざまな障害が横たわっています。広島平和研究所は、こうしたたくさんの「なぜ」の解明に取り組むという使命の下、1998年に広島市立大学の附置機関として開設されました。広島平和研究所は、被爆地で平和を模索し、平和を創造するための学術研究機関として重要な役割を担っているのです。ヒロシマの負の遺産を背負い、未来に向けて永遠の平和と人間の普遍的安全保障の条件を探求する歩みを止めてはいけません。広島市立大学の開学20周年という節目にあらためて気を引き締め、これからも平和研究所所員は一丸となって、研究にまい進していく所存であります。

広島平和研究所長
吉川　元

2. 概要

(1) 広島平和研究所開設の経緯

世界初の核兵器による被爆を体験した「広島」は、戦後70年近くにわたり「ノー・モア・ヒロシマ」のメッセージを発信し続けてきた。平和を望む世界中の人々にとって象徴的な存在として知られる国際平和文化都市「広島」にとって、核兵器廃絶と世界の恒久平和の実現に貢献するために、国際的に高度な研究水準を誇りうる平和研究機関を持つことは、長年の夢であり、課題であった。研究所開設の計画は1980年代にまでさかのぼる。1981年に広島平和文化センターの平和問題調査会において「国際的平和研究機関の誘致」を議題にすることが決定されたのち、翌1982年の第2回国連軍縮特別総会と平和記念式典での「平和宣言」において、当時の荒木武・広島市長が「平和と軍縮に関する国際的な研究機関」を広島に設けるよう提唱した。このとき構想されたのは国立の研究機関であり、1983年から1989年まで、広島市は継続して国に対して要望を出している。この間、広島平和文化センター内に作られた平和関係施設調査研究委員会で国立平和研究所を広島に設置する構想が練られ、1990年には、この調査研究委員会と前述の平和問題調査会が合同で「平和に関する国際的な研究機関設置基本構想」案を策定した。平和研究所を国立ではなく、広島市立として設置することを決定するのは、1991年のことである。この年、広島市企画関係者会議において、市の平和に関する学術研究機能については広島市立大学に附置研究所を設置し、実践機能については広島平和文化センターを拡充・強化して対応することが決まった。これにより、同年7月に「広島市立大学（仮称）設立準備委員会」が策定した「広島市立大学（仮称）基本構想」に、「国際平和研究所」の設置が盛り込まれた。

1994年4月の本学開学後は、学内外の識者からなる「国際平和研究所（仮称）設置準備委員会」および同専門委員会が学内に設置され、これらの委員会により研究所開設の具体的な議論がなされ、1998年2月に「広島平和研究所（仮称）基本構想」が策定された。同年4月、明石康・元国連事務次長を初代所長に迎え、専門研究員1名および職員・嘱託職員とともに、本学の附置機関として「広島平和研究所」(英称：Hiroshima Peace Institute、略称：HPI ）が開設された。開設時には広島市中区大手町二丁目の民間ビル内に研究所が置かれた。

1998年4月1日の開所式。左から平岡敬広島市長、田中隆荘学長、明石康初代所長（1998年4月2日付中国新聞、写真提供：中国新聞社）

本研究所の設立理念は、以下の3点である。

① 広島の歴史的な体験を世界の人々に伝え、理解と共感を得るための知的な枠組みを構築していく。

②「消極的平和」にとどまらず「積極的平和」の達成を目指して、地球規模の諸問題の解決に貢献していく。

③ 平和研究の発展に寄与しつつ、「広島から発信する平和学」を構築して、新しいパラダイムを模索していく。

本研究所は開設以降、福井治弘・カリフォルニア大学サンタバーバラ校名誉教授・南山大学教授を第2代所長（2001年4月～2005年3月）に、浅井基文・明治学院大学教授を第3代所長（2005年4月～2010年3月）に迎え、上記の理念に基づき研究活動を進めてきた。設立1年目に所長を除き3名まで増えた研究員は、2013年度までに最大時で12名を数え、現在は11名の研究員が在籍している（2014年4月時点)。2010年10月には研究所の運営体制の強化を目的として、副所長の職を新たに設け、本研究所の研究員である水本和実教授が就任した。そして2013年4月には吉川元・上智大学教授を第4代所長に迎え、さらなる研究活動の発展と組織運営の強化を図っている。また、2004年7月には中区大手町四丁目に、2013年1月には本学キャンパスの情報科学部棟別館に移転し、研究のみならず本学の教育にも積極的に取り組んでいる。

現在の事務室の様子

(2) 研究の特色

i. 研究課題と研究体制

本研究所は、世界初の核兵器による被爆を体験した都市としての歴史を背景に、学術研究活動を通じて、核兵器廃絶に向けての役割を担うとともに、地球社会が直面する諸問題の解決にも寄与し、世界平和の創造、平和の維持および地域社会の発展に貢献する国際的な平和研究機関を目指している。

前述の「広島平和研究所（仮称）基本構想」では、3つの研究群と5つの研究領域が設定された。

核問題研究群 ―― A　原爆被害・核廃絶研究
平和秩序研究群 ― B　紛争分析・安全保障問題研究
　　C　開発・環境研究
　　D　平和思想・平和文化研究
情報系平和研究群 ― E　情報系平和研究

開設後、専門研究員と有識者がこれら研究群および領域の中から、

① 核廃絶を目指す軍縮のプロセスとそれに関わる一連の問題に関する研究
② 北東アジアにおける緊張緩和、信頼醸成、軍縮とそれに関わる一連の問題に関する研究
③ 国連の平和維持活動と人道援助に関わる一連の問題に関する研究
④ 軍縮データベース構築の可能性に関する研究

の4分野を当面取り組むべきテーマとして選定した。このほか「中長期的な取り組みを検討すべき研究テーマ」として、

① 軍縮の検証技術の問題に関する研究
② 地域紛争における予防外交の総合的アプローチに関する研究
③ 紛争後の平和構築に関する研究
④ 平和のための世論形成に関する研究
⑤ 平和と人権に関する研究
⑥ 小火器の問題、軍備登録制度に関する研究
⑦ 冷戦後の世界における民主化の課題に関する研究
⑧ 国際的な核被害に関する研究

が示された。

こうしたテーマについて、他研究機関や有識者を交えたプロジェクト研究や各研究員の個人研究によって研究が進められていたが、核兵器をめぐる政策を中心とした世界情勢の変化や平和学の発展を反映し、のちに以下の3つの領域が主要研究課題として設定された。

①「核」に関する諸問題の研究
②「平和」に関する理論的および実証的研究
③ 東アジアの平和に関する研究

そして2014年度からは、さらに厳しい対立状況に向かいつつある東アジアの国際環境をめぐる現状と、平和と安全を保障する地域体制を構築するための中長期的展望を踏まえつつ、広島平和研究所の研究課題を、次の2つの柱に再構成することとなった。

① 核・軍縮研究
② 平和・人間の安全保障研究

第1の柱の「核・軍縮研究」は、本研究所の開設以来、その中核をなす研究課題である。この研究分野は、国際法学、国際関係論、国際政治学、安全保障論、歴史学、市民社会論の分析手法によって、核兵器廃絶へ向けた課題を学際的に分析するとともに、その処方を提示することを目指す。

第1の柱に関連した中期のサブテーマとして、被爆都市・広島の復興を多面的かつ構造的に分析する「広島復興の国際比較研究」を掲げる。原爆投下で破壊された広島が「平和」をキーワードに再生する過程を、広島内外の他の復興事例と比較研究することで、戦争や内戦、自然災害、あるいは大規模な放射線災害などの破壊を受けた諸地域が復興を目指す上での促進要因と阻害要因、あるいは課題を提示し、平和復興と平和構築に生かすことを目指す。核軍縮が破綻すれば破壊と復興という課題が生じる。復興には人間の安全保障の視点が不可欠である。その意味で、第1、第2の柱ともつながりのあるテーマである。

第2の柱の「平和・人間の安全保障研究」は、本研究所のこれまでの平和研究の蓄積を基に、新たな研究プロジェクトとして立ち上げるものである。特にアジアを主要テーマに置くこととする。アジアで紛争が多発し、しかも核開発が進む要因は、権力政治が支配的なアジア特有の国際政治構造（国際要因）および脆弱国家特有の人間の安全を保障しない非民主的なガヴァナンス（国内要因）にあると考えられる。それ故に、本研究課題では、アジアの国際平和と核開発に向けて、アジア諸国の国家統治のあり方、およびアジア特有の国際政治の仕組みと動向を分析することを主眼とする。分析手法は主として、比較ガヴァナンス論、紛争原因論、アジア国際関係（国際政治）研究、アジア地域国際機構の研究である。本研究課題はまた、アジアの平和および核廃絶に向けた平和研究の基礎研究であると同時に、核兵器開発の予防に関する基礎研究としても位置付けられるものである。

ii. 平和研究所の人員構成

上記に示した新たな研究の柱の中核となる人員構成（現職、2014年4月時点）は、次のとおりである。

① 核・軍縮研究

国際関係論、平和研究	吉川元教授
国際政治・国際関係、核軍縮、安全保障、原爆被爆	水本和実教授
核兵器の歴史・文化	ロバート・ジェイコブズ准教授
朝鮮半島の国際関係・核問題	孫賢鎮准教授
日本の戦争史・戦後史、日本・フィリピン関係	永井均准教授
広島・長崎両市の戦後復興史	桐谷多恵子講師
アメリカ史、グローバル・ヒバクシャ論	高橋博子講師

② 平和・人間の安全保障研究

国際関係論、平和研究	吉川元教授
東南アジア政治、国際関係（東南アジア民主化動向）	ナラヤナン・ガネサン教授
戦争犯罪、戦争史	田中利幸教授
憲法学、人権論、地方自治論（比較ガヴァナンス論）	河上暁弘准教授
社会学、北東アジア問題（北東アジア社会政治動向）	金美景准教授
国際人道法、フィリピン（東南アジア社会政治動向）	永井均准教授
戦後復興史、国際関係学（平和構築論）	桐谷多恵子講師
ドイツ近現代史、平和思想・平和運動史	竹本真希子講師

広島に位置する学術的平和研究機関として本研究所に期待される役割は、学術研究、大学における教育、社会における教育、被爆体験の継承と被爆の実相の伝達を目指す広島平和文化センターや広島平和記念資料館への協力、県や市の平和行政や平和政策への貢献など多様であり、本研究所はそうした諸活動に積極的に取り組んでいる。平和研究の発展に寄与することを目的として、国内外の平和研究機関と積極的に連携してネットワークを構築するほか、講演会、公開講座、シンポジウム、出版活動などを通じて、学術研究の成果を広く公開し、積極的に社会に還元している。また教育や社会活動を通じて、核兵器・核廃絶に関してだけでなく、恒久平和の実現に向かって国内外にメッセージを発信し続けている。

現在も来所者を迎えるこの施設名板は開設当時の広島市長・平岡敬氏による揮毫

<参考資料>
広島市立大学（1998）『広島平和研究所（仮称）基本構想』

3. 年表で見るこれまでのあゆみ

1981年度

5月	（財）広島平和文化センター第１回平和問題調査会において「国際的平和研究機関の誘致」を議題とすることを決定

1982年度

6月	第２回国連軍縮特別総会において市長が「平和と軍縮に関する国際的な研究機関」を広島に設けるよう提唱
8月	平和記念式典での「平和宣言」において市長が「平和と軍縮に関する国際的な研究機関」を広島に設けるよう提唱

1983年度

12月	昭和59年度の国への要望事項として国際的な平和研究機関の設置を取り上げる（以降平成元年12月まで要望）

1984年度

5月	国立による国際的な平和研究機関の設置を検討するため（財）広島平和文化センター内に「平和関係施設調査研究委員会」を設置
3月	（財）広島平和文化センター理事会において平和関係施設調査研究委員会が「国立平和研究所広島設置の構想（案）」について報告

1985年度

9月	平和関係施設調査研究委員会において1985年３月の報告の実現に向けワーキンググループを編成することを決定
3月	平和関係施設調査研究委員会ワーキンググループにより構想案を作成

1987年度

8月	平和記念式典に出席した中曽根首相に対し「国際的な平和研究機関の設置」について要望
2月	第３回国連軍縮特別総会において市長が「平和と軍縮に関する国際的な研究機関」の広島設置を要望

1988年度

8月	平和記念式典での「平和宣言」において市長が「平和と軍縮に関する国際的な研究機関」を広島に設けるよう要請

1989年度

8月	平和記念式典での「平和宣言」において市長が「平和と軍縮に関する国際的な研究機関」を広島に設けるよう提唱

1990年度

5月	平和問題調査会・平和関係施設調査研究委員会ワーキンググループ合同会議を開催し「平和に関する国際的な研究機関設置基本構想」案を策定
8月	平和記念式典での「平和宣言」において、市長が「平和に関する国際的な研究機関」の設置を推進することを宣言

1991年度

7月	広島市企画関係者会議において、平和に関する学術研究機能については市立大学に附置研究所を設置し、実践機能については（財）広島平和文化センターの拡充・強化で対応することに決定
	平和に関する学術研究機能を含む「広島市立大学（仮称）基本構想」を策定

1994年度

4月	広島市立大学開学
9月	学内に国際平和研究所（仮称）設置のためのワーキンググループを設置

1995年度

11月	ワーキンググループにおいて「国際平和研究所（仮称）の設置準備へ向けて」を作成、学長に提出
1月	国際平和研究所（仮称）設置準備委員会（委員長：平山郁夫氏）および同専門委員会を設置し、第１回設置準備委員会開催（27日）

1996年度

4月	第２回設置準備委員会開催
11月～12月	第３回設置準備委員会（持ち回り形式）開催
12月	第４回設置準備委員会開催

1997年度

7月	第５回設置準備委員会開催、基本構想とりまとめ
2月	第６回設置準備委員会開催
	「広島平和研究所（仮称）基本構想」策定

1998年度

4月	広島平和研究所開設（1日）
5月	研究フォーラム「CTBT交渉の経過と問題点」(29日)
7月	研究フォーラム「『核全廃論』の検討」「NPT体制と非核兵器国の安全保障」「核軍縮と日本の安全保障」(1日)
	広島平和研究所開設記念シンポジウム「世界における軍縮問題 ―21世紀に向けて」を開催（9日）
8月	第１回核不拡散・核軍縮に関する緊急行動会議の開催（30～31日）
12月	研究フォーラム「積極的安全保障と消極的安全保障について」「南アジアの核と日本の『核の傘』問題」「核軍縮へ：今問われていること」(4日)
	シンポジウム「第１回北東アジアにおける平和の追求」(9～11日)
	広島平和研究所と財団法人日本国際問題研究所の共催により「第２回核不拡散・核軍縮に関する東京フォーラム」を広島国際会議場で開催（18日）
	研究フォーラム「東京フォーラム記念講演」(20日)
2月	明石康初代所長退任

1999年度

4月	核不拡散・核軍縮に関する東京フォーラム（第３回会合）(9～10日)
5月	EU大使特別講義（26日）
7月	シンポジウム（ワークショップ）朝鮮半島における協力に関するワークショップ（2～3日）
	核不拡散・核軍縮に関する東京フォーラム（第４回会合）(23～25日)
	研究フォーラム「核軍縮に関する講演会」(28日)
9月	東京フォーラムに関する国際シンポジウム（18日）
10月	シンポジウム「ヨーロッパの戦後和解」(7日)
12月	シンポジウム「第２回北東アジアにおける平和の追求」(15～17日)
3月	研究フォーラム「ニュージーランドの非核政策」「日本の非核安保戦略」(14日)
	研究フォーラム「NPT再検討会議の見直しと課題」(28日)

2000年度

7月	シンポジウム「21世紀の核軍縮の課題」(29日)
12月	研究フォーラム「東ティモール問題への取り組みと今後」(4日)

2001年度

4月	福井治弘新所長就任（1日）
5月	研究フォーラム「化学兵器の処理問題」(7日)
7月	シンポジウム「どうなる、核廃絶の『明確な約束』？ ―核の現状と日本の課題」(28日)
10月	研究フォーラム「アメリカ中枢同時テロの背景を探る ―『イスラム原理主義』の世界観とそのユーラシアにおける浸透」(2日)
	研究フォーラム「中国軍近代化への対応における日米協調」(25日)
12月	研究フォーラム「アフガン情勢とイスラム世界」(21日)
1月	研究フォーラム「民生核技術からの核拡散のリスク」(15日)

2002年度

5月	研究フォーラム「比較観点から見るアルメニア人殺戮とホロコースト ―イデオロギー、戦争、そして革命と現代大量虐殺の原因」(30日)
6月	研究フォーラム「東チモールにおける平和構築 ―国連平和維持活動と国連ボランティアの役割」(6日)
7月	研究フォーラム「テロリズムに対する戦争に代わる非暴力的市民行動」(9日)
8月	シンポジウム「原爆投下をめぐる『記憶』と『和解』 ―平和構築における広島の新たな役割を探る」(3日)
10月	連続市民講座「東北アジアの記憶と未来 ―21世紀の相互理解に向けて」(10月9日～12月11日)
11月	研究フォーラム「国家テロと人権 ―20世紀アジアの諸戦争における米国、日本ならびに市民」(12日)
12月	研究フォーラム「90年代の国際協調の範囲と限界」(16日)

2月	研究フォーラム「紛争解決・予防と市民社会の役割」（24～25日）
	研究フォーラム「対人地雷 ―現代軍事作戦のモデルと平和活動家に対する挑戦」（28日）

2003年度

5月	研究フォーラム「ブッシュの予防戦争ドクトリン ―ある外交『柔術』の事例から」（22日）
8月	シンポジウム「空からの恐怖 ―ヒロシマから見る無差別攻撃」（2日）
	研究フォーラム「核不拡散、大量破壊兵器およびテロ ―どうなるレジームの影響力」（22日）
10月	連続市民講座「市民が直面する戦争 ―21世紀の平和構築に向けて」（10月1日～12月3日）
11月	研究フォーラム「北朝鮮 ―いったい何の枢軸か？」（14日）
3月	研究フォーラム「北朝鮮問題をどうみるか」（19日）

2004年度

4月	研究フォーラム「忘れられたヒロシマ ―原爆開発に果たしたカナダの役割」（14日）
5月	研究フォーラム「内戦後の社会における『平和』とは ―グアテマラの事例から」（6日）
7月	平和研究所が広島三井ビルディングから大手町平和ビルへ移転（ともに広島市中区大手町）（1日）
	シンポジウム「エノラ・ゲイの閃光 ―戦争と破壊の象徴：1945-2004」（31日）
10月	連続市民講座「戦争と平和 ―文化・思想・運動からのアプローチ」（10月15日～12月15日）
	研究フォーラム「イラクへの『人道的空爆』と『精密爆撃』―1920年代英軍空爆と2003～4年米軍空爆の比較分析」（29日）
12月	研究フォーラム「日本と東南アジア ―可能性と限界」（10日）
3月	シンポジウム（公開ワークショップ）「NPT体制の再検討 ―広島・長崎からの提言」（19日）
	福井治弘所長退任

2005年度

4月	浅井基文所長就任（1日）
	研究フォーラム「金正日の支配下の北朝鮮 ―体制固めから組織的不調和へ」（25日）
6月	研究フォーラム「市民平和運動の活性化を考える ―広島市民に問われているもの」（4日）
7月	国際学部との協力により夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」開催（7月27日～8月6日）
	シンポジウムおよび講演会「ヒロシマと平和憲法」（27～28・30日）
9月	連続市民講座「いま広島・長崎の経験にどう向き合うか ―被爆体験と現在の核問題」（9月26日～12月12日）
10月	研究フォーラム「ヨーロッパにおける戦争と平和の歴史」（6日）
12月	研究フォーラム「国際的連帯の政治学」（13日）

2006年度

6月	連続市民講座「人類は核兵器と共存できるのか ―決別への道筋を問う」（6月8日～7月13日）
7月	研究フォーラム「戦争の記憶と平和構築 ―ヴェトナム帰還米兵の『ミライ（ソンミ）平和公園プロジェクト』をめぐって」（31日）
9月	研究フォーラム「広島・長崎への原爆投下に関する米国人の見方とその背景」（6日）
10月	連続市民講座「日韓の相互理解と平和構築へ向けて」（10月31日～11月28日）
2月	研究フォーラム「温暖化の“発見”とは何か」（19日）

2007年度

5月	研究フォーラム「憲法9条の現在的意義 ―軍隊のない諸国を訪ねて」（18日）
	連続市民講座「世界の平和思想と実践 ―その多様性と普遍性を探る」（5月24日～6月21日）
7月	研究フォーラム「軍事力が正義を行わない時 ―米国が責任をとるべきイラクにおける国際的犯罪」（18日）
8月	シンポジウム「逆風の中、再び核軍縮を進めよう ―中央アジアの経験を東アジアへ」（5日）
9月	研究フォーラム「オーストラリアは核兵器廃絶にとって妨げか、それとも廃絶に貢献できるのか？」（26日）
11月	連続市民講座「日本と韓国・朝鮮の相互理解と平和構築へ向けて」（1～29日）
12月	研究フォーラム「写真展『ザ・ファミリー・オブ・マン』（1955）に見る冷戦期の芸術と原爆」（6日）
3月	プロジェクト研究報告会「希薄な戦争責任感 ―その問題点の検討」（7日）

2008年度

5月	研究フォーラム「ドキュメンタリー映画『最後の原爆』 ―体験者の物語を継承するための映像の力」（14日）
6月	連続市民講座「被爆体験を見つめて ―『原爆の絵』が語りかけていること」（6月6日～7月4日）
7月	研究フォーラム「ベトナム反戦運動とイラク反戦運動 ―運動規模、認知度、ならびに影響力から見た比較分析」（16日）
8月	シンポジウム「広島からの核兵器廃絶提言 ―みんなの力で2010年NPT会議を動かそう」（2日）
11月	連続市民講座「アメリカの戦争と核兵器」（11月7日～12月5日）

2009年度

4月	研究フォーラム「原爆投下の違法性を米国の公的機関で問う可能性と『核兵器条約』の必要性」（17日）
6月	連続市民講座「憲法第9条の原点と現点」（6月12日～7月10日）
7月	研究フォーラム「アトミカリア ―核の時代を象徴する物から見えるもの」（27日）
9月	研究フォーラム「日本国憲法の地方自治原理における地方自治特別法制度の意義 ―広島平和記念都市建設法施行60周年を踏まえて」（16日）
10月	連続市民講座「ドイツ現代史を読みなおす ―『ベルリンの壁』開放から20年」（2～30日）
12月	シンポジウム「ヒロシマは核兵器廃絶をめざす ―2010年NPT再検討会議を前に」（5日）
2月	研究フォーラム「核兵器禁止モデル条約 ―核兵器のない世界に向けての道筋」（4日）
3月	研究フォーラム「東アジアにおける日本の平和構築活動 ―国連平和維持活動、人間の安全保障、平和監視」（4日）

2010年度

4月	連続市民講座「2010年NPT再検討会議をみる視点」（9～28日）
7月	研究フォーラム「核兵器使用の違法性・犯罪性をめぐって ―禁止条約締結への努力と今後の展望」（1日）
	シンポジウム「核兵器廃絶に向けて私たちは何をすべきか ―2010年NPT再検討会議を終えて」（31日）
12月	広島市立大学「平和インターンシップ」事業　シリーズ講座「広島の平和思想を伝える」第2回講演会（4日）
1月	連続市民講座「改憲論と憲法の『実行』」（1月7日～2月4日）
3月	浅井基文所長退任

2011年度

5月	連続市民講座「広島で長崎を考える」（5月27日～6月24日）
9月	研究フォーラム「“Hiroshima: After Aftermath” ―エリン・オハラ・スラヴィック作品展に向けて」（15日）
10月	連続市民講座「核エネルギーと日本社会 ―歴史と展望」（10月19日～11月16日）
11月	シンポジウム「問われる被爆地・被ばく国の役割 ―3・11原発事故を受けて」（19日）

2012年度

5月	連続市民講座「民主化運動の現在」（5月25日～6月8日）
6月	研究フォーラム「和解の外交？ ―元日本軍士官の中国訪問と1950年代の記憶の政治」（15日）
7月	シンポジウム「北東アジアの非核化へ向けて ―広島・長崎から核のない世界をめざす」（28日）
10月	連続市民講座「沖縄近現代史における平和の模索」（10月19日～11月16日）
12月	研究フォーラム「2013年のアメリカ経済・金融政策の展望 ―出口のない不毛地帯」（5日）
1月	中区から安佐南区の大学キャンパス内に移転

2013年度

4月	吉川元所長就任（1日）
5月	連続市民講座「いま、人権と平和を考える」（5月24日～6月21日）
6月	第1回核・軍縮研究会「1945～46年の米国における原爆の認識：新たな世界を創造した核兵器」「核軍縮をめぐる最近の状況」（27日）
9月	第2回核・軍縮研究会「『ひろしまレポート ―核軍縮・核不拡散・核セキュリティを巡る動向：2010～2012年―』について」（26日）
	シンポジウム「共に生きよう ―多文化共生と在日韓国人」（共催：駐広島大韓民国総領事館）（29日）
10月	第1回人間の安全保障研究会「フィリピンのBC級戦犯裁判をめぐって」（17日）

11月	第３回核・軍縮研究会「『ひろしまレポート』の意義と課題 ―規範形成のための影響力の観点から」(28日)
12月	シンポジウム「広島・長崎の記憶　世界と共に考える次世代継承の道」(7日)
	研究フォーラム「北朝鮮の核開発問題と国連の対応」(13日)
12月	第２回人間の安全保障研究会「The Role of Civil Society in Democracies and Democratic Transitions in Southeast Asia」(19日)
1月	研究フォーラム「中東の民主化と紛争予防 ―シリア問題とイラン核交渉の前進を中心に」「シリア内戦に向き合うために」(22日)
2月	連続市民講座「ビキニ水爆被災再考 ―被災60年を迎えて」(2月14日～3月14日)

4. 歴代教員一覧

(1) 過去在職教員

(在職期間について、年度途中の着任・離任の場合は年月を、そうでない場合は年度を示す。また、専門分野は本学在職時のもの。)

明石　康
国際関係論
教授
1998年4月～1999年2月

秋山　信将
国際政治、日本の対外政策
助手→講師
1998年9月～2004年6月

浅井　基文
日本政治外交論、国際関係論
教授
2005年度～2010年度

金　聖哲
朝鮮半島問題、国家暴力、東アジアの国際関係
助教授→准教授→教授
2003年10月～2012年7月

シェラー，クリスチャン P.
民族紛争、紛争解決
教授
2002年1月～2012年度

佐藤　義明
国際法、アメリカ法、憲法
助手→講師
2005年10月～2007年度

東郷　育子
国際政治、人権・人道問題
講師
1998年7月～2004年6月

ハントリー，ウェイド L.
国際安全保障、東アジア地域関係
助教授
2003年1月～2004年8月

福井　治弘
比較政治学、国際関係論
教授
2001年度～2004年度

(2) 教員略歴

(2014年4月1日時点在職者)

教授 Ganesan, Narayanan（ガネサン, ナラヤナン）
1958年、マレーシア・クラン生まれ。1989年、ノーザン・イリノイ大学大学院（米国）政治学専攻博士課程修了。博士（政治学）。2004年1月に本学着任（助教授→教授）。専門分野は東南アジアの比較政治学・国際関係論。これまでの主な担当科目は「International Relations of East Asia」「Development Issues in Southeast Asia」「International Relations of Southeast Asia」。

准教授 河上 暁弘（かわかみ あきひろ）
1972年生まれ。富山県出身。2005年、専修大学大学院法学研究科博士後期課程修了。博士（法学）。2008年度に本学着任（講師→准教授）。専門分野は憲法学、地方自治論。これまでの主な担当科目は「法学（日本国憲法）」。

教授 吉川 元（きっかわ げん）
1951年生まれ。広島県出身。1982年、一橋大学大学院博士後期課程単位取得退学。博士（法学）。2013年度に本学着任（教授）。専門分野は国際関係論、平和学。これまでの本学での主な役職は、平和研究所所長（2013年度～）。これまでの主な担当科目は「国際関係と平和」。

准教授 金 美景（キム ミキョン）
1963年生まれ。韓国釜山出身。1998年、ジョージア大学大学院（米国）社会学専攻博士課程修了。博士（社会学）。2005年10月に本学着任（講師→准教授）。専門分野は東アジアの歴史認識・和解・平和。これまでの主な担当科目は「Peace and Security in East Asia」。

講師 桐谷 多恵子（きりや たえこ）
1981年生まれ。神奈川県出身。2009年、法政大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程修了。博士（国際文化）。2010年度に本学着任（講師）。専門分野は国際文化、戦後広島・長崎の復興史。これまでの主な担当科目は「平和研究Ⅰ・Ⅱ」「広島からの平和学」。

准教授 Jacobs, Robert A.（ジェイコブズ, ロバート）
1960年、米国フロリダ州マイアミ生まれ。2004年、イリノイ大学大学院（米国）歴史学専攻博士課程修了。博士（歴史学）。2005年10月に本学着任（講師→准教授）。専門分野は核技術の歴史と文化。これまでの主な担当科目は「American Culture」。

准教授 孫 賢鎮（ソン ヒョンジン）
1971年生まれ。韓国釜山出身。2006年、神戸大学大学院法学研究科博士課程後期課程公共関係法専攻修了。博士（法学）。2014年度に本学着任（准教授）。専門分野は国際法。これまでの主な担当科目は「朝鮮半島の国際関係及び核問題」。

講師 高橋 博子（たかはし ひろこ）
1969年生まれ。兵庫県出身。2003年、同志社大学大学院博士後期課程修了。博士（文化史学）。2002年11月に本学着任（助手→助教→講師）。専門分野はアメリカ史、グローバル・ヒバクシャ。これまでの主な担当科目は「平和研究」。

講師 竹本 真希子（たけもと まきこ）
1971年生まれ。茨城県出身。2007年、カール・フォン・オシエツキー大学大学院（ドイツ）政治学専攻博士課程修了。博士（政治学）。2005年7月に本学着任（助手→助教→講師）。専門分野はドイツ史、平和思想・平和運動史。これまでの主な担当科目は「歴史学」。

教授 田中 利幸（たなか としゆき）
1949年生まれ。福井県出身。西オーストラリア大学大学院（オーストラリア）アジア研究学部博士課程修了。Ph.D。2002年度に本学着任（教授）。専門分野は戦争史、戦争犯罪。これまでの主な担当科目は「市民と戦争Ⅰ・Ⅱ」。

准教授 永井 均（ながい ひとし）
1965年、米国カリフォルニア州生まれ。立教大学大学院文学研究科博士課程後期課程満期退学。博士（文学）。2002年度に本学着任（助手→講師→准教授）。専門分野は日本近現代史、日本・フィリピン関係史。これまでの主な担当科目は「平和と人権Ａ」「日本近現代史Ⅰ・Ⅱ」。

教授 水本 和実（みずもと かずみ）
1957年生まれ。広島県広島市出身。1989年、タフツ大学フレッチャー法律外交大学院（米国）修士課程修了。法律外交修士（M.A.L.D.）。1998年度に本学着任（助教授→准教授→教授）。専門分野は国際関係（核軍縮）。これまでの本学での主な役職は、平和研究所副所長（2010年10月～）。これまでの主な担当科目は「広島からの平和学」「現代軍縮・平和論Ⅰ・Ⅱ」「平和と人権Ａ」「平和研究Ⅰ・Ⅱ」。

（3）在職期間一覧

（2014年度4月1日時点。年度途中の着任・離任の場合でも、その年度は在職期間として示す。）

氏名＼年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
水本　和実					1998																2014
秋山　信将					1998						2004										
東郷　育子					1998						2004										
明石　康					1998																
シェラー，クリスチャン P.								2001											2012		
福井　治弘								2001			2004										
高橋　博子									2002												2014
田中　利幸									2002												2014
永井　均									2002												2014
ハントリー，ウェイド L.									2002		2004										
ガネサン，ナラヤナン										2003											2014
金　聖哲										2003									2012		
金　美景												2005									2014
ジェイコブズ，ロバート A.												2005									2014
竹本　真希子												2005									2014
浅井　基文												2005					2010				
佐藤　義明												2005		2007							
河上　暁弘															2008						2014
桐谷　多恵子																	2010				2014
吉川　元																				2013	2014
孫　賢鎮																					2014

5. 研究教育活動紹介

（1）研究

広島平和研究所の研究員は本研究所の設立理念に基づき、平和研究の発展と広島からの核廃絶および恒久平和の達成を目指して、日々研究を行っている。研究領域は政治学、国際学、歴史学、社会学、法学、平和学など多岐にわたり、研究員同士が相互に議論を行うことで、学際的な研究が可能となっている。また日本、アメリカ、北東アジア、東南アジア、ヨーロッパなど、さまざまな地域を扱うことでグローバルな視野を提供している。同時に安全保障や国際関係論、文化・思想など、「平和」を議論するために重要となる広範な領域を網羅している。

i. プロジェクト研究

本研究所の研究員は、国内外の研究者や有識者とともにプロジェクト研究を実施し、各自の研究分野に関して議論を重ねている。その成果は報告書や論文、または図書として公開している。研究テーマは、核軍縮、東アジアの国際政治、グローバル・ヒバクシャ、平和博物館と多岐にわたっている。

プロジェクト研究一覧

実施期間	プロジェクト名
2000～01年度	21世紀の核軍縮
2000～01年度	新介入主義の正統性と合理性
2001～03年度	東アジアの信頼醸成メカニズム
2002～03年度	市民に対する軍暴力
2002～03年度	集団殺戮と集団暴力に関する比較研究
2003～04年度	東アジアの核軍縮の展望
2004年度	1954年ビキニ核実験による被ばく状況の実相
2004～05年度	北東アジアの対立と強調 ―国内・地域間の連携分析
2004～05年度	ミャンマー・ピース・イニシアチブ
2005～06年度	「呵責」の政治学 ―北東アジアにおける集合的記憶
2005～06年度	日米の芸術と大衆文化に表れた原爆と核戦争
2005～06年度	集団殺戮と集団暴力に関する比較研究Ⅱ
2005～06年度	空爆と市民 ―20世紀の歴史
2006～07年度	相互依存的な二つのコリア ―朝鮮半島の平和に向けて
2007～08年度	広島反核平和運動の総合的分析 ―1945年～60年
2007～08年度	東南アジアにおける二国間主義と多国間主義
2009年度	北東アジアの文化および集合的記憶
2009～10年度	東アジアにおける国家暴力と政治変動
2010年3月	戦後「平和憲法」理論の形成・展開・課題（ミニプロジェクト）
2010年3月	1980年代初頭のドイツにおける平和運動と平和思想（ミニプロジェクト）
2010年度	アルフレド・ブニエの思想と行動 ―「寛容が生みだす平和」の事例研究
2010年度	東アジアにおける国家暴動と政治変動
2010年度	グローバル・ヒバクシャ ―地球上のヒバクシャに関する考察とそのコミュニティ間の「つながり」を築くプロジェクト
2010～11年度	占領体制下の広島・長崎の復興問題に関する研究
2010～12年度	戦後「平和憲法」理論の形成・展開・課題 ―憲法学者：小林直樹とオーラル・ヒストリー
2011～12年度	日朝の対双的アイデンティティが両国関係に及ぼす影響
2011～12年度	第一次世界大戦の経験とドイツの平和主義 ―1918年から1925年を中心に
2011～12年度	東南アジアにおける民主化への移行と定着に見る組織的市民活動
2012～13年度	平和博物館から見る自治体の「平和」とヒバク情報
2013年度	Bilateral Overhangs in East Asian International Relations
2013～14年度	広島からの平和学の発信と平和事典作成のための基礎調査

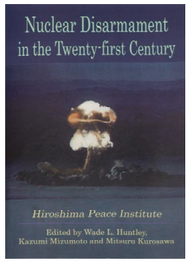
※2010年4月以降は、広島市立大学特定研究費（平和関連研究費）課題として実施。

プロジェクト研究による研究成果の一例

○ プロジェクト研究の成果例
『21世紀の核軍縮 ―広島からの発信』

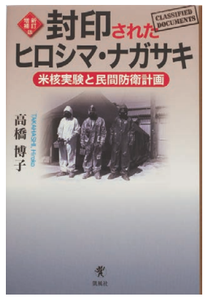
「21世紀の核軍縮」プロジェクトは、本研究所の初期の重要な研究成果の一つである。研究所開設から4カ月後の1998年8月に始まった「核不拡散・核軍縮に関する東京フォーラム」は、日本政府が提唱し、（財）日本国際問題研究所と広島平和研究所の共催で開催した。フォーラムでは、同年5月のインド・パキスタンによる核実験を受けて、南アジアを含むグローバルな核不拡散体制を堅持・強化し、世界的な核軍縮を一層促進するための方途を検討し、具体的提言を得ることを目的とした。4回の会合を経て、核不拡散・核軍縮に関する主要提言を盛り込んだ報告書をまとめた。報告書は共同議長を務めた明石初代所長らにより、まず小渕恵三首相に手渡され、小渕首相は報告書を生かして世界の核軍縮に向けて努力することを約束した。また、報告書は米国・ニューヨークの国連本部でアナン国連事務総長にも手渡され、国連の正式文書として全加盟国に配布された。ニューヨーク・タイムズ紙は東京フォーラムの報告書について、米国や核保有国の責任を厳しく問う内容だととらえ、大きく報じている。

「21世紀の核軍縮研究会」は、この「核不拡散・核軍縮に関する東京フォーラム」の成果と課題を引き継ぎ、2000年4月24日から5月19日までニューヨークで開かれた核不拡散条約（NPT）再検討会議の結果を踏まえながら、21世紀の核軍縮のあり方について広く検討したものである。研究会は原則として月1回の会合を開き、メンバーが交代で自分の専門領域に関する報告を行うほか、ジャーナリストや実務家、NGO関係者ら幅広い分野の専門家に「研究協力者」として報告や討議への参加を依頼した。また、海外の専門家にも定期的に研究会の報告や討議への意見やコメントを求めた。研究の成果は2002年9月、『21世紀の核軍縮 ―広島からの発信』として法律文化社から出版した。また、英語版は『Nuclear Disarmament in the Twenty-first Century』として、2004年に出版した。



ii. 個人研究

上記のプロジェクト研究以外にも、研究員は個人研究の成果を積極的に公開し、平和研究の発展に貢献している。ロバート・ジェイコブズ准教授が冷戦期前半のアメリカ合衆国における「核の文化」を取り上げた『The Dragon's Tail』は2010年にアメリカで出版され、注目された。さらに2013年には本研究所の研究員である高橋博子講師の監訳により、『ドラゴン・テール』として日本でも出版された。このほか、高橋講師が『封印されたヒロシマ・ナガサキ ―米核実験と民間防衛計画』（凱風社、2008年、新訂増補版2012年）で第2回日本平和学会平和研究奨励賞を、永井均准教授が『フィリピンBC級戦犯裁判』（2013年）で第25回アジア・太平洋賞特別賞を受賞するなど、本研究所の研究は国内外で高い評価を得ている。



iii. HPI研究フォーラム・研究会の開催

本研究所は、主に広島県近郊の研究者やマスコミ関係者を対象として、より専門的な議論を行うために各種研究会を開催している。年に4回程度「HPI研究フォーラム」を開くほか、2013年度からは「核・軍縮研究会」と「人間の安全保障研究会」を月1回のペースで交互に開催している。これにより、他大学・研究機関の研究者や地元メディア、広島県および広島市といった自治体の関係者とともに、刻々と変化する世界情勢の中、広島がどのような役割を担っていくべきかについて議論を重ねている。

iv. 研究成果の発信

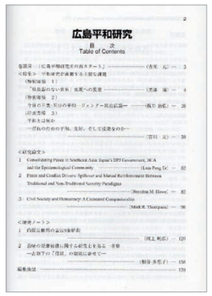
○ ニューズレター『Hiroshima Research News』

開設当初より公刊しているニューズレター『Hiroshima Research News』は、日英2カ国語で研究成果を世界に発信するものである。ニューズレターは年に3回発行し、2013年11月までに通算47号を数えている。核問題や時事問題、平和学、広島の平和運動の歴史などに関して、本研究所の研究員や国内外の専門家が論稿を寄せ、議論を展開している。また、後述する国際シンポジウムや連続市民講座の報告記事も掲載しており、平和研究所主催の行事を振り返ることができる。さらに今後の行事予定などの最新情報も提供している。『Hiroshima Research News』は日本国内および世界各国の主要な平和研究機関に送付されているほか、関連分野の研究者や広島市内の関係者、広島市民にも届けられている。同時に、広島市の一部の施設で入手可能であるのに加えて、本研究所のウェブサイトからダウンロードすることもできる。

ニューズレター『Hiroshima Research News』通巻46号

○ 広島平和研究所紀要『広島平和研究』

2013年10月、広島平和研究所紀要『広島平和研究』の創刊号を電子ジャーナルとして公開した。紀要の発行により、本研究所の研究成果をこれまでより一層、目に見える形で公開することが可能となった。紀要は電子版に加えて、同年11月に印刷版としても出版した。



紀要『広島平和研究』創刊号の表紙（左）と目次（右）

v. 他研究機関との交流

2012年に長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）と研究協定を結び、国際シンポジウムの共同開催などにより広島と長崎の連携を深めながら核廃絶に向けて提言を行っている。また、日本国内の平和研究機関や韓国の済州平和研究所など海外の平和研究所との交流により、核兵器廃絶と平和研究に関する世界的なネットワークを構築している。

（2）教育・社会貢献

i. 広島市立大学での開講科目

本研究所は核兵器や「平和」に関する研究成果を、本学の学部や大学院における教育活動に還元している。学部では「平和と人権A（ヒロシマと国際平和）」「広島からの平和学：実践の方法」「平和インターンシップ」「平和研究Ⅰ・Ⅱ」、そして夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」「Advanced HIROSHIMA and PEACE」といった、広島・長崎両市が普及に努めている「広島・長崎講座」の認定を受けて本学が開講している講義を担当するほか、個々の研究員の研究分野を生かし、「法学」「歴史学」などの科目も担当している。

大学院国際学研究科では「国際世界と平和」「現代軍縮・平和論Ⅰ・Ⅱ」「日本近現代史Ⅰ・Ⅱ」「Peace and Security in East Asia Ⅰ・Ⅱ」「市民と戦争Ⅰ・Ⅱ」「Development Issues in Southeast Asia Ⅰ・Ⅱ」を担当し、オムニバス形式の「平和学概論」「広島と核」「広島と世界」でも講義を行っている。

○ 特色あるプログラム①
「平和研究Ⅰ・Ⅱ」―平和研究の最先端を学ぶ

本研究所研究員によるオムニバス形式の講義「平和研究Ⅰ」（前期）および「平和研究Ⅱ」（後期）は、本研究所の研究の特色を最も生かした形で研究成果を教育に還元している科目といってよい。国際学部2年生を対象として開講されるこの科目では、研究員がそれぞれの専門分野について最先端の研究内容を分かりやすく講義する。講義は英語または日本語で行われ、受講生は原爆や核問題、国際政治の重要なトピックス、世界の「平和」に関する議論について広く学ぶことができる。

「平和研究Ⅱ」の講義内容（2013年度後期）

	担当研究員	テーマ
第1回	水本和実	現代の核をめぐる諸問題
第2回	水本和実	生物・化学兵器の諸問題
第3回	田中利幸	原子力と広島
第4回	ロバート・ジェイコブズ	米国は冷戦をいかに戦ったか
第5回	竹本真希子	西ドイツの反核運動
第6回	竹本真希子	ドイツ統一と平和運動
第7回	永井均	東京裁判の研究
第8回	ナラヤナン・ガネサン	3度のインドシナ戦争とASEAN ―その地域発展への影響
第9回	河上暁弘	法と平和（1） 憲法政策としての平和
第10回	河上暁弘	法と平和（2） 戦争の違法化と世界連邦論
第11回	桐谷多恵子	原爆文学について
第12回	桐谷多恵子	戦後史における被爆者
第13回	高橋博子	核兵器の情報統制
第14回	金美景	日本の平和主義

○ 特色あるプログラム②
「広島からの平和学：実践の方法」と「平和インターンシップ」―広島の被爆体験を平和活動の実践へ

広島における平和の取り組みは、被爆体験を出発点としつつ、世界の多様な課題にも目を向けてきた。「広島からの平和学：実践の方法」（前期）および「平和インターンシップ」（後期）は、広島の平和の取り組みに関心を持つ学部1、2年生を対象とし、広島の経験を生かして平和活動を実践するための知識や具体的な方法論を学ぶことを目的とする。広島には、広い意味での平和をテーマに設置された資料館、施設、史跡、モニュメントが数多くあり、市民や来訪者に対

する発信機能を果たしているが、それらは個別に存在し、体系的に理解する機会は少ない。そこで、大学のカリキュラムの中でそれらを結び付け、実際に現地に足を運ぶことで、それらが果たしている平和の実践・発信機能について理解を深めることが、これらの科目のねらいだ。「広島からの平和学：実践の方法」では、被爆体験の継承や平和の実践活動を行っている学外の専門家による講義を受けて、平和の理論と実践について学び、「平和インターンシップ」では、広島平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館、広島市郷土資料館、広島市現代美術館、広島城、広島市文化財団文化科学部、広島原爆養護ホームなど、広島市にある資料館、美術館や平和や戦争、原爆被爆などについて学べる施設、史跡等に足を運び実際に見学しながら、平和に関する問題を多角的に学ぶ。両科目は広島平和文化センター主催の市民向け平和講座「ヒロシマ・ピースフォーラム」と連携しており、本学の学生以外にも平和に関心を持つ一般市民が参加することから、受講生は世代を越えさまざまな人々とヒロシマや平和について議論することとなる。最終レポートでは、自ら参加可能な実践活動案に関する提言をまとめる。これにより、学外の実践者や多様な市民との交流・意見交換を伴う、キャンパスでは体験できない方法で、「平和」を学ぶことができる。

平和インターンシップの様子：原爆投下の第１報を発した中国軍管区司令部地下通信室（広島城内）の見学（2012年秋）

ii. 研究者・市民に向けて

本学における教育活動に加え、広島市内外への研究成果の公開と啓蒙活動も、本研究所が担う重要な役割の一つである。国際シンポジウムやワークショップ、連続市民講座、研究フォーラムなどさまざまな取り組みにより、核廃絶や恒久平和の実現に向けて、有識者やマスコミ、NGO、市民との情報交換を行っている。

○ 国際シンポジウム・ワークショップ

国際シンポジウム（2013年度）

本研究所では、開設時からほぼ毎年国際シンポジウムを開催し、本研究所にとって最重要課題である核兵器廃絶を中心に、国内外の専門家とともにヒロシマがどうあるべきか、そして世界がどのようにして核廃絶に向かうべきかについて議論している。2008年からは中国新聞社ヒロシマ平和メディアセンターとの共催事業としてシンポジウムを開催している。さらに2012年からは長崎大学核兵器廃絶研究センターが共催者に加わった。これにより、長崎との連携を深めつつ、広く社会に向けて核軍縮・廃絶に関する提言を行っている。

過去の国際シンポジウム・ワークショップの一覧

開催年度	テーマ
1998年7月9日	開設記念シンポジウム 世界における軍縮問題 ―21世紀に向けて
1998年8月30日～ 1999年7月25日	核不拡散・核軍縮に関する東京フォーラム
1998年12月9～11日	北東アジアにおける平和の追求
1999年7月2～3日	朝鮮半島における協力に関するワークショップ
1999年9月18日	東京フォーラムに関する国際シンポジウム
1999年10月7日	ヨーロッパの戦後和解
1999年12月15～17日	北東アジアにおける平和の追求
2000年7月29日	21世紀の核軍縮の課題 ―核兵器のない時代は来るのか？「約束」から「実行」へ
2001年7月28日	どうなる、核廃絶の「明確な約束」？ ―核の現状と日本の課題
2002年8月3日	原爆投下をめぐる「記憶」と「和解」 ―平和構築における広島の新たな役割を探る
2003年8月2日	空からの恐怖 ―ヒロシマから見る無差別爆撃
2004年7月31日	エノラ・ゲイの閃光 ―戦争と破壊の象徴　1945～2004
2005年3月19日	NPT体制の再検討 ―広島・長崎からの提言（公開ワークショップ）
2005年7月30日	ヒロシマと平和憲法 ―私たちはその精神をどう活かすか
2007年8月5日	逆風の中、再び核軍縮を進めよう ―中央アジアの経験を東アジアへ
2008年8月2日	広島からの核兵器廃絶提言 ―みんなの力で2010年NPT会議を動かそう
2009年12月5日	ヒロシマは核兵器廃絶をめざす ―2010年NPT再検討会議を前に
2010年7月31日	核兵器廃絶に向けて私たちは何をすべきか ―2010年NPT再検討会議を終えて
2011年11月19日	問われる被爆地・被ばく国の役割 ―3・11原発事故を受けて
2012年7月28日	北東アジアの非核化へ向けて ―広島・長崎から核のない世界をめざす
2013年12月7日	広島・長崎の記憶 ―世界と共に考える次世代継承の道
2014年8月2日	信頼醸成から核廃絶へ ―2015年NPT再検討会議に向けて

○ 連続市民講座

連続市民講座（広島市まちづくり市民交流プラザにて）

「連続市民講座」は2002年度から開催している。2005年度までは年度ごとに１つのテーマを設定し、全10回の講座を行っていたが、2006年度からは前・後期で別のテーマを取り上げ、それぞれ５回程度の講義を行っている。核兵器をめぐる問題以外にも、憲法問題、エネルギー問題など、刻々と変化する世界の政治や社会を理解する上で喫緊の課題を取り上げ、さまざまな観点から「平和」な社会を構築するための基本的知識を提供している。また戦争と平和をめぐる文化や記憶の問題など、「ヒロシマ」という枠組みを越えて、広く人間の歴史や社会を根本から扱うテーマも取り上げている。広島市まちづくり市民交流プラザで開催される講座には、毎回定員を上回る応募があり、学内外の講師と市民受講者の間で活発な議論を行っている。

過去の連続市民講座一覧

開催年度	テーマ
2002年度	東北アジアの記憶と未来 ―21世紀の相互理解に向けて
2003年度	市民が直面する戦争 ―21世紀の平和構築に向けて
2004年度	戦争と平和 ―文化・思想・運動からのアプローチ
2005年度	いま広島・長崎の経験にどう向き合うか ―被爆体験と現在の核問題
2006年度前期	人類は核兵器と共存できるのか ―決別への道筋を問う
2006年度後期	日韓の相互理解と平和構築へ向けて
2007年度前期	世界の平和思想と実践 ―その多様性と普遍性を探る
2007年度後期	日本と韓国・朝鮮の相互理解と平和構築へ向けて
2008年度前期	被爆体験を見つめて ―「原爆の絵」が語りかけていること
2008年度後期	アメリカの戦争と核兵器
2009年度前期	憲法第９条の<原点>と<現点>
2009年度後期	ドイツ現代史を読みなおす ―「ベルリンの壁」開放から20年
2010年度前期	2010年NPT再検討会議をみる視点
2010年度後期	改憲論と憲法の「実行」
2011年度前期	広島で長崎を考える
2011年度後期	核エネルギーと日本社会 ―歴史と展望
2012年度前期	民主化運動の現在
2012年度後期	沖縄近現代史における平和の模索
2013年度前期	いま、人権と平和を考える
2013年度後期	ビキニ水爆被災再考 ―被災60年を迎えて
2014年度前期	緊張する東アジア国際関係 ―何が東アジア平和の障害となっているのか

iii. 地域貢献

本研究所の研究員は、「平和首長会議」をはじめとする広島市の平和行政および国際交流事業に協力しているほか、広島平和記念資料館の資料調査研究会や展示検討委員会、広島県の「国際平和拠点ひろしま構想」タスクフォース、広島県・JICAのカンボジア支援事業に参加するなど、地域における取り組みに積極的に貢献している。

第３章　学生の課外活動

1. 大学祭

広島市立大学の大学祭「市大祭」は、開学初年度の1994年度から毎年2日間にわたって開催されている。第1回は12月、第2、3回は11月の開催で、第4回から第20回までは10月下旬の開催となっている。

実行委員会は主に1、2年生を中心に構成され、2年連続で携わる学生も少なくない。第1回開催は開学初年度で学生が1学年しかいなかったこともあり、わずか15名で構成されていた実行委員会も、近年では40～50名程度と大きくなっている。また、第16回（2009年度）からはポスターコンテストと称してポスターとパンフレットのデザインを公募制にしている。大学祭当日はフリーマーケットやクラブ・サークルのブース、ステージなどで盛り上がる。

（1）これまでの大学祭

過去20年間に開催された「市大祭」のパンフレットの表紙、テーマ、開催日、実行委員長を振り返る。

第1回（1994年度）

「プロローグ」
12月17日（土）・18日（日）
慶田　竜也

第5回（1998年度）

「ワタシ・ミセル」
10月24日（土）・25日（日）
内河　智美

第2回（1995年度）

「50&1/2（HALF & HALF）」
11月18日（土）・19日（日）
大橋　倫子

第6回（1999年度）

「祭、情熱、ラテン」
（キャッチフレーズ：血湧き、肉踊る）
10月30日（土）・31日（日）
坂本　千春

第3回（1996年度）

「フェスティバル ナンバー スリー」
11月2日（土）・3日（日）
大橋　倫子

第7回（2000年度）

「月と太陽　～二つのカオをもつ祭～」
10月28日（土）・29日（日）
尾上　朝美

第4回（1997年度）

「独創性」
（キャッチフレーズ：今が大事）
10月18日（土）・19日（日）
内河　智美

第8回（2001年度）

「みる」
10月27日（土）・28日（日）
河野　慎太郎

第9回（2002年度）

「carpe diem ～今を生きる～」
10月26日（土）・27日（日）
内海　智紗子

第10回（2003年度）

「熱狂的瞬間」
10月25日（土）・26日（日）
竹内　あゆみ

第11回（2004年度）

「railway」
10月30日（土）・31日（日）
川本　拓也

第12回（2005年度）

「夢砲」
10月29日（土）・30日（日）
川本　拓也

第13回（2006年度）

「㊞」
10月28日（土）・29日（日）
沖本　昌和

第14回（2007年度）

「Film」
10月27日（土）・28日（日）
三木　佑亮

第15回（2008年度）

「笑日和」
10月25日（土）・26日（日）
品川　達哉

第16回（2009年度）

「Canvas」
10月24日（土）・25日（日）
中尾　友治

第17回（2010年度）

「RUN RUN RUN!!」
10月23日（土）・24日（日）
森川　裕介

第18回（2011年度）

「三原色」
10月29日（土）・30日（日）
馬庭　広規

第19回（2012年度）

「ImAgIne」
10月27日（土）・28日（日）
石塚　心平

第20回（2013年度）

「環」
10月26日（土）・27日（日）
加藤　智也

(2) 大学祭の20年を振り返って

第1回大学祭実行委員長

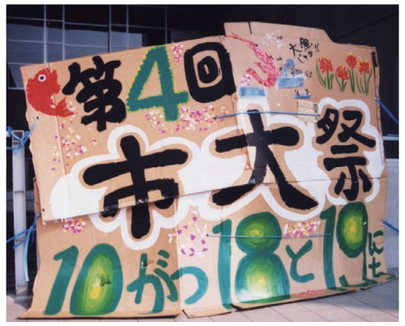
慶田 竜也

開学20周年、心よりお祝い申し上げます。私が第1期生として入学した時期は、第12回アジア競技大会目前の4月でした。当時は、在校生や近年卒業した皆さんは想像できないと思いますが、市大付近のあちこちで工事が行われており、「ただ今開拓真最中」という雰囲気を十二分に漂わせている環境でした。

私の大学祭との関わりは、当時親しくさせてもらっていた職員の方からの「大学祭をやってくれないか？」との要請を引き受けたのが始まりです。何せ本学初の大学祭であった上、18年間の人生でこのように大きな行事を任された経験がなかったので、全てが手探りでした。まずは実行委員会のメンバーを集め、大学祭準備をスタートさせました。近年の実行委員会の方々は驚くかもしれませんが、立ち上げ直後のメンバーは、わずか10名弱でした。今、振り返ってみると、実績がないところからのスポンサー集め、試行錯誤の企画立案、機材・資材の手配などなど、さまざまな困難がありましたが、仲間と新しい事を始めるときは何かワクワクとしたエネルギーがみなぎっていて、一つ一つ困難を乗り越えプランが具現化されていくと、さらにエネルギーが膨らんでいくというサイクルがありました。そして、準備完了、いざ本番を迎えます。

本番になって予想外に直面する問題も多々ありましたが、メンバーの皆とともに臨機応変に対処していき、2日間は本当にあっという間に過ぎていきました。しかし、20年経った今でも頭にパッと思い浮かぶのは、学生やお客様、実行委員会のメンバーの喜ぶ姿です。準備が大変だった分、本番を無事に終えることができた感動もひとしおでした。(大学祭の後片付けがすごく大変だった記憶もぽつりぽつりと浮かんできますが…。)

大学祭での経験は、今では私の大きな財産になっています。あれから20年。パイロットになった私は、仕事でたまに上空から市大を眺めては、在校生の皆さんを応援しています。さまざまな経験を与えてくれた市大に感謝するとともに、今後のさらなる発展を祈っております。あらためて、開学20周年おめでとうございます。



第20回大学祭実行委員長

加藤 智也

2013年10月25日、私たちは第20回の大学祭を翌日に控えていました。広島市立大学の大学祭「市大祭」は近年、毎年のように雨に見舞われていましたが、この年の秋は台風が多く発生しており、大学祭の直前の週も、台風が広島に接近していました。

準備したテントやエントランスが台無しになったり、キャンパス中庭に設営したステージでも器具が設置できないなど、本当に開催できるかと不安になりました。しかし、それでも諦めずにあらゆる対策を練って、無事に市大祭を開催できました。

第20回市大祭のテーマは「環」。これまでの19年間の大学祭があって、今回の20回目の市大祭を迎えられる。その過去と現在を結ぶ「環」。そして、市大祭を成功に導けるよう市大生全員が一丸となる、人と人とのつながりの「環」。そんな想いを込めました。

私は大学祭実行委員長としての経験を経て、地道に積み重ねてきたことは、ちょっとやそっとでは揺るがないこと、一人では無理でも仲間で協力し合えば、大きな事を成し遂げられることを学べました。これからも市大祭は毎年開催されていきますが、毎回毎回、実行委員会のメンバーも違えば、内容も違います。今後市大祭に関わる人たちには、自分たちにとってたった一度しかない市大祭を、思いっきり楽しんでほしいと思います。

2. クラブ・サークル

クラブ・サークル活動は、学生生活を彩る重要な要素となっている。ここでは、開学からの20年間に活動歴のある団体一覧を示し、さらに活動歴の長い団体のうち6団体をコラムで紹介する。（以下に掲載する団体は、本学に正式登録されたクラブもしくはサークルとして、過去の大学案内に掲載されている団体である。また、分離・統合や大きな名称変更等を経た団体は別団体として掲載する。）

文化系

団体名＼年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
Music Art Club（軽音）	1994																			2013
陶芸部	1994																			2013
演劇部	1994																			2013
Table Game 研究会	1994																			2013
マンドリン・ギター部	1994																			2013
CREATIVE（創作活動）	1994		1996		1998															2013
写真部	1994					1999		2001			2004		2006							2013
吹奏楽部	1994							2001												2013
版画部	1994													2007						
農学部	1994													2007						
映画研究会	1994											2005								
料理研究会「鉄人」	1994				1998															
茶道部	1994	1995																		
管弦楽団	1994																			
クイズ研究会	1994																			
マルチ・コミュニケーション	1994																			
電子音楽部		1995																		2013
上田宗箇流茶道部		1995																		2013
市大新聞部		1995			1998							2007								
吹奏楽・管弦楽部		1995					2000													
つれた会		1995			1998															
放送・通信研究会		1995			1998															
樹脂部		1995		1997																
服飾部		1995	1996																	
ビリヤード部		1995	1996																	
将棋部		1995																		
たきび		1995																		
HCU ESS		1995																		
旅行研究会「旅の宿」		1995																		
ビリヤード		1995																		
映像研究会		1995																		
茶道部表千家			1996																	2013
裏千家茶道部			1996																	2013
麻雀倶楽部桃源郷			1996	1997																
ボランティアクラブPIONEER			1996	1997																
彫金			1996																	
Focus on Asia Club（国際交流）					1998														2012	
しゃみせん友の会					1998							2007								
美術部					1998					2002										
コンピュータクラブ					1998															

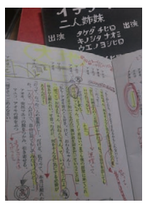
団体名＼年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
マスコミ・レジャー研究会						1999				2003										
マルチメディアの会						1999														
オカリナサークル							2000			2003										
コーラス部								2001	2002											
郷								2001												
アカペラサークル									2002											
ロボット研究会										2003		2005								
ねっこ広島（環境ボランティア）											2004									2013
マスコミ研究会											2004									2013
山菜部											2004									
Sign（手話愛好会）												2005								2013
国際学部学生自治会MORE												2005			2008					
ヒスとりあん												2005	2006							
写真・映像部												2005								
LINUXコミュニティ（学生）グループ												2005								
自主制作映画研究会													2006							2013
熊猫（パンダ）会（中国語・中国文化）													2006							2013
地中海地域研究会															2008					
石膏デッサン研究会																2009				2013
チャン（韓国語・韓国文化）																2009				
落語研究会　落花生																	2010			2013
Pret-a-Porter（ファッション）																	2010			2013
S2（平和活動）																	2010			2013
にっこり（韓国語・韓国文化）																	2010			2013
口笛サークル“ピューと吹く口笛部”																	2010			
天文研究会																		2011		2013
Mr. Children 同好会																		2011		
アカペラサークルregalo																			2012	2013
HIF(Hiroshima City University International Friendship)（国際交流）																			2012	2013
公募倶楽部																			2012	2013

演劇部（1994年度創部）

2014年の春に52回目の公演を行った演劇部は、1994年の設立当初から年2回以上の公演を欠かさず行ってきました。また、設立当初から「今までにない舞台」を目標に活動しています。まだ開学して間もないころは、他大学の演劇部や本学の軽音楽部などとの交流を通じて新しいアイデアを養い、現在ではオリジナル作品やダンスを交えた舞台を作っています。裏方においても、近年では使われていないビル、部屋、屋敷に木材とパイプを組んでリアルなセットを作っており、高い評価を受けています。

部員たちは、学内外問わず積極的に演劇に関わっています。たとえば2014年2月には、アステールプラザで行われた演劇ワークショップ事業「演劇引力廣島」の第11回プロデュース公演「デンキ島 〜松田リカ編〜」に、役者やスタッフとして参加しました。

一から作品を作り、舞台に情熱をかけることのできるのが、市大演劇部です。これからも演劇部は広島市立大学の名を背負い、学内外問わず活躍の場を広げていきます。



マンドリン・ギター部（1994年度創部）

マンドリン・ギター部はその名のとおり、マンドリンやギターといった楽器で編成されるオーケストラのクラブで、年に2回の定期演奏会など大小さまざまな演奏会を開催するべく、日夜練習に取り組んでいます。マンドリンオーケストラはマンドリン、マンドラ、マンドロンチェロ、それにコントラバスにギターという楽器で編成されており、これら聞き慣れない名前の楽器はおおよそ、一般的なオーケストラのヴァイオリン、ヴィオラ、チェロなどに相当し、前者が撥弦楽器、後者が擦弦楽器であるという違いがあります。

現在では毎年秋に、県立広島大学・安田女子大学・広島工業大学と本学の4大学合同で、春にはそれに広島女学院大学・広島修道大学・広島大学・鳥取大学・岡山大学を加えて、総勢100名を超える9大学合同で演奏会を開催するなど、他大学との交流がとても活発です。また、社会人団体に所属して演奏活動を継続したり楽器製作や作曲に携わるなど、音楽関係者として活躍するOB・OGとの交流も盛んで、縦横のつながりがとても広いのも市大マンドリン・ギター部の特色です。

上田宗箇流茶道部（1995年度創部）

上田宗箇流とは、広島ゆかりの戦国武将・上田宗箇が開いた武家茶道流派です。本学では初め、流派の混在した茶道部が創設されましたが、学生たちの要望もあり後に3つの流派に分かれました。その中の1つが、この上田宗箇流茶道部です。

本学の学生会館内にある和室は、上田宗箇流15代家元・宗源宗匠の設計によるものです。また、常備されている茶器の中には、宗源宗匠のアドバイスを受けて用意されたものも多くあります。このように、開学よりも前から、本学は上田宗箇流の家元と深い関わりを持っています。

上田宗箇流茶道部は学外での活動も活発で、広島の名勝・縮景園でのお茶会に参加したり、8月6日の原爆記念日には広島平和記念式典でお茶会を手伝っています。2010年ノーベル平和賞受賞者世界サミットでもお茶会を催し、多くの外国人の方をもてなしました。またその際、外国人の方の忘れ物を届けたところ大変喜んでもらえ、ただお抹茶をたてることだけがおもてなしではないことを学びました。このほか2013年にはマツダスタジアムや安佐動物公園でお茶会を催すなど、引き続き盛んな活動を続けています。

歴史と誉れあるこの上田宗箇流茶道部を、さらに発展させていきたいと思っています。

体育系

団体名 ＼ 年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
サッカー部	1994																			2013
トライアスロン部	1994																			2013
剣道部	1994																			2013
弓道部	1994																			2013
アーチェリー部	1994																			2013
硬式テニス部	1994																			2013
空手道部	1994																		2012	
スキー部	1994								2002											
スキー同好会	1994				1998															
エスキーテニス部	1994		1996																	
RUGBY FOOTBALL Club	1994	1995																		
バトピンポン	1994	1995																		
市大野球団	1994	1995																		
Quee's	1994	1995																		
バスケットボール部	1994																			
ATOM	1994																			
ノスタルジア	1994																			
Ultimate Frisbee	1994																			
テニス同好会	1994																			
男子バスケットボール部		1995																		2013
女子バスケットボール部		1995																		2013
バドミントン部		1995																		2013
futsal's		1995					2000													
体操部		1995		1997																
男女バレー部		1995	1996																	
陸上同好会		1995	1996																	
ソフトボール		1995																		
Motor Touring Club		1995																		
COUNTRY'S		1995																		
市大応援団＆チアリーディング		1995																		
ラグビー部			1996																	2013
軟式野球部			1996																	2013
ワンダーフォーゲル部			1996																	2013
水泳部			1996																	2013
競技ダンス部			1996										2006							
ソフトテニス部			1996				2000													
ゴルフ部			1996																	
ダンス部MECCA			1996																	
男子バレーボール部				1997																2013
女子バレーボール部				1997																2013
陸上競技部				1997																2013
AGROSS				1997		1999														
武産合氣道部					1998								2006							
少林寺拳法部						1999														2013
FC海人（うみんちゅ）（サッカー）								2001												2013
stroke（テニスサークル）								2001				2005								
アウトドア愛好会								2001	2002											
ブザービーター（バスケットサークル）									2002						2008					
Edinburgh（ビリヤード愛好会）									2002				2006							
フリスク（Flysk）									2002	2003										
市大ダンスサークル									2002											
市大ダンス部										2003										2013

団体名 ＼ 年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
ボード部										2003	2004									
市立大学フットサルサークル										2003	2004									
T.A.S（ソフトテニスサークル）											2004									2013
テコンドー部											2004							2011		
I.T.O（筋トレサークル）											2004									
女子ソフトボール部												2005		2007						
広島市立大学スカイサークル												2005								
TENSION（硬式テニス）													2006							2013
けんだぁーま（けん玉）													2006					2011		
SPLIT（ボウリング）													2006		2008					
卓球サークル													2006							
合氣道部														2007						2013
卓球部														2007						2013
ダイヤモンドダスト（テニス・スキー・スノーボード）														2007					2012	
羽美豚豚（バドミントン）														2007			2010			
MACHADO（サーフィン・スノーボード）															2008					2013
CLUB KEIBA（乗馬）															2008					
HAND BALL（ハンドボール）															2008					
REXER（ソフトボール）															2008					
カープ応援サークル　スコット団																2009				2013
和田KG'Z（軟式野球）																2009	2010			
クラブ・ホース（乗馬）																2009				
NIT（フットサル）																	2010			2013
CLUTCH TIMES（バスケットボール）																	2010	2011		
Olive（フットサル等）																		2011		2013

トライアスロン部（1994年度創設）

トライアスロン部の誕生は、開学元年の1994年。「MTB×BMX」という自転車の部を始めた学生たちと、水泳部を立ち上げようとしていた学生たちが一緒になって発足させたのが、現在のトライアスロン部の始まりでした。

初期のころは真剣に競技をするというよりも、とにかく「スポーツを楽しむ」ことを目的に活動していた団体でしたが、創部3年目には日本学生トライアスロン選手権（インカレ）に出場する選手を輩出し、以来、毎年継続的にインカレ出場選手を輩出しています。

現在は、キャンプや合宿、大学祭での出店、卒業祝賀会など、競技以外の活動も活発に行っています。地域との交流を目的として2001年に本学学生たちが始め、大学周辺で毎年開催している「西風新都駅伝」は、2014年3月に14回目を数えました。トライアスロン部の部員はこの実行委員会でも活躍しています。またトライアスロン部では、OB・OGを交えて年齢層を超えた交流も行っています。

軟式野球部（1994年度に市大野球団として創部、1996年度に現在の団体名に改称）

大会の運営からグラウンド整備まで自分たちの手で、というスタンスで開学初年度に創部されました。ユニフォームは創部時から変わっておらず、当時の先輩方の「野球がしたい」というひたむきな思いを受け継いでいます。（下の写真のうち左端が初期の、中央が現在の写真です。）

広島市立大学軟式野球部は広島・岡山両県の大学からなる中国地区大学軟式野球連盟に加盟しています。近年では同連盟主催の春季・秋季リーグ戦を勝ち抜いて西日本大学軟式野球選手権大会に出場しており、現在も西日本選手権、全日本選手権への出場を目指して、日々練習に励んでいます。

最近はボランティア活動にも力を入れており、2013年には広島東洋カープから直々に依頼を受けて、8月6日の「ピースナイター」開催に協力することができました。

また、歴代の選手、マネージャーたちが20年間、練習後に通い続けているお好み焼き屋さん「こばやし」は、お店の方が「お母さん」としていつもみんなのことを気遣ってくれ、今では市大野球部の憩いの場所となっています。

市大野球部がこうして競技やさまざまな活動を継続できるのも、すばらしい伝統を守ってくださったOB・OGの方々と、いつも支えてくださる方々のおかげです。現役の私たちもこの伝統を守り、後輩たちへつなげていきたいです。

陸上競技部（1995年度に陸上同好会として創部、1997年度にクラブに昇格）

山の斜面にある広島市立大学のキャンパスの最も高い位置に、トラック・フィールドがあります。大学全体を見渡せるそこでは、陸上競技部の部員たちが毎日のように汗を流しています。開学2年目に陸上競技部の前身である陸上同好会が創立された当時の部員数は、たった1名だったといいます。しかし月日の流れとともに徐々に部員数が増え、2014年4月現在、部長をはじめとする部員数は39名。そのうち3名は他大学から市大陸上競技部に所属し、活動しています。

部員数の増加と同時に、活動の幅も広がりました。1998年からは毎年、陸上競技部主催で、地域の方々や子どもたちが参加する「市大記録会」を本学グラウンドで行っており、その活動が認められ新聞で取り上げられた年もありました。近年では広島市・県や中四国地方での大会で、多くの部員が優勝をはじめ好成績を収めています。部としても、中国四国学生駅伝競走大会や2012年に優勝した錦川清流駅伝競走大会で年々記録を伸ばしており、個人、団体ともに成績は右肩上がりです。今後とも市大陸上競技部の活動に、ぜひ注目してみてください。

第４章　附属施設

1. 附属図書館

(1) 概要

附属図書館は、学生・教職員の学習・教育・研究の支援を行う総合図書館として、開学と同時に開館した。

館内では、図書・雑誌・新聞・視聴覚資料（DVD、ビデオ、LD等）が利用できる。これらのうち、新聞を除く資料のデータはすべてコンピュータで集中管理されており、OPAC（コンピュータ目録）により図書館のウェブサイトで検索でき、利用者は必要な資料を迅速に入手できる。

館内は自然光を取り入れ利用者の気持ちが安らぐ空間設計となっており、館内のLAN環境の整備により、ウェブ情報と所蔵資料を活用しながら学習できる。2014年10月にはグループ学習等ができるラーニングコモンズを設置し、学習支援の場としての機能を強化する予定だ。また、市立図書館所蔵の図書を取り次ぐなど、市民に開放された図書館となっている。

○ 構造：鉄筋コンクリート造４階建（語学センターと併設）

○ 延床面積：4,757㎡

図書館外観

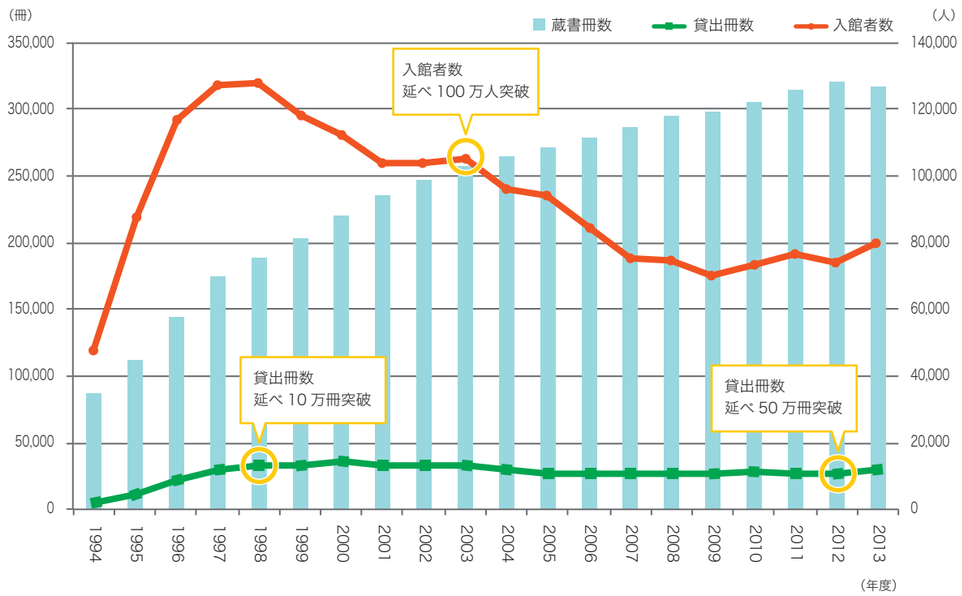
閲覧席

(2) 統計

【2013年度の実績等】

○ 蔵書冊数：316,781冊（研究室保管分含む）　○ 貸出冊数：29,681冊　○ 入館者数：79,451人

これまでの蔵書冊数、貸出冊数、入館者の推移



(3) これまでのあゆみ

1993年度	3月	竣工
1994年度	4月	開館（職員５名でスタート）
1996年度	3月	図書館２階書架を設置（10月より開放）
1998年度	2月	広島市立大学附属図書館報『知恵の樹』創刊
1999年度	10月	図書館システムをリプレース 図書館ウェブサイトを開設
2003年度	4月	学部生の貸出可能冊数を５冊から10冊に増加
	11月	近隣中学校からの職場体験学習の受入を開始
	1月	試験期間中のみ20時までの開館時間延長を開始
2004年度	10月	図書館システムをリプレース インターネットコーナーを設置
2005年度	10月	学外者への図書貸出サービスを開始
2006年度	4月	図書館１階書庫に書架を設置（7月より開放）
2007年度	5月	図書館ガイダンスを開始
	6月	レファレンスカウンターを設置
	1月	就職関係図書コーナーおよび市大コーナーを設置
2008年度	4月	開館時間を９時から８時45分に変更 図書館ミニガイダンスを開始 電子ジャーナルを導入 広島県大学共同リポジトリ（HARP）公開を開始
	9月	広島市立図書館連携事業を開始（図書館間の定期連絡便「メールカー」による相互貸借サービスおよび展示会・講演会の共催）
2009年度	10月	図書館システムをリプレース 無線LANのアクセスポイントを増加 電子掲示板（デジタルサイネージ）を設置 ブラウジングコーナー、視聴覚資料コーナー等をリニューアル
	11月	いちだい知のトライアスロン※助走編実施（試験的実施）
2010年度	4月	いちだい知のトライアスロンを実施 広島平和研究所情報資料室の図書の学内利用を開始 附属図書館携帯電話対応ウェブサイトを開設 コメント大賞表彰式を開催（以後、毎年開催）
	5月	いちだい知のトライアスロン出張講座を開始（以後、広島市内の各美術館および広島市映像文化ライブラリーにおいて開催し、現在は毎年４回程度開催）
2011年度	4月	広島市立大学・広島県立図書館間の相互貸借を開始
	10月	除却図書譲渡事業を開始（その一環として一般市民も対象とする「いちだいBOOKリユース市」を開始）
	6月	学生図書館サポーター制度を導入 いちだいブックハンティングを開始
	1月	広島平和研究所の大学キャンパス移転に伴い、同研究所情報資料室の資料を本館へ移管・受入
2013年度	4月	平和研コーナーを設置 本学教員によるトークイベント＠図書館を開始
	10月	ビブリオバトル＠広島市立大学を開催

※いちだい知のトライアスロン…本学全体で取り組んでいる読書、映画鑑賞、美術鑑賞推進事業

書架

ブラウジングコーナー

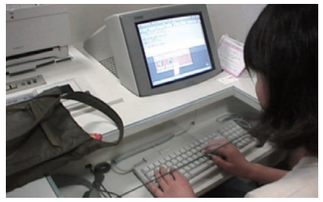
館内の特別展示

「教員によるトークイベント＠図書館」

2. 語学センター

(1) 概要

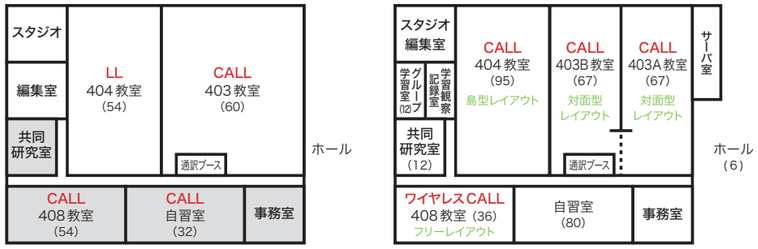
語学センターは、21世紀へ向けて国際化、情報化が加速することをにらみ、本学の教育研究活動の特色として挙げられた語学教育の充実を目指して、開学と同時に図書館棟の4階フロアに開設された。CALL（Computer Assisted Language Learning）教室を中心に最新鋭の機器を備え、時代とともに変化していく教員や学生、学内外からの多様なニーズにも柔軟に対応しうる学習環境とサポートを提供し、必要な外国語学習教材を整備しながら今日まで発展してきた。



1998年度以前の自習室ブース。2004年度更新時、パソコンOSがMacintoshからWindows XPに

CALL教室の主な機能

語学センターフロア図



1995年度
（白い部分は開学時設置。グレー部分は1995年度設置）

2014年度

※カッコ内は学生用PC数

(2) これまでのあゆみ

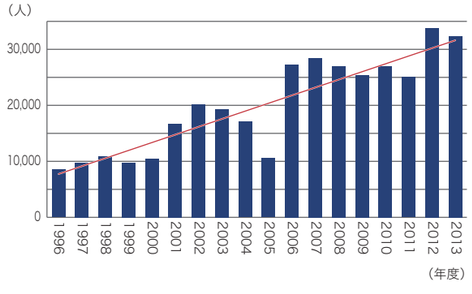
語学センターでは、5年ごとにフロアの2分の1ずつ、設備の更新を行っている。開学当時はCALL教室の黎明期で、CALL教室とLL（Language Laboratory）教室が1部屋ずつという構成だった。開学時から、外国語の実践的運用能力を育成する施設として通訳訓練ブースが設置されており、今日でも通訳訓練の授業で活用されている。

1990年代後半以降のパソコンやインターネットの爆発的普及・発展に伴い、教育現場でのデジタル機器利用の需要も急増し、本センターの教室も外国語授業の枠を超えて、多目的利用が可能な設備へと進化していった。現在では、2教室連動機能による120名以上の一斉授業や、ノートパソコンを使用するゼミ、学生席を自由に配置できるワイヤレスCALL教室でのディベート授業などが可能である。また、自習支援の要となる自習室は情報のオンライン化に伴い、現在では外国語の自習だけではなく、さまざまな授業の課題や卒業論文の作成、授業登録、就職活動、留学情報収集などにも多く利用されている。

1998年度の自習室。ブース数が45台と今より少なく、ゆったりとしたレイアウトであった

2011年度の自習室。個室のような感覚を与える作りのブースは80台に増え、より集中できる環境に

自習室年間使用者数の推移（延べ）

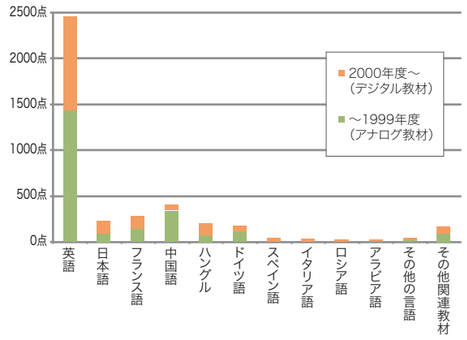


自習室以外の教室や設備を積極的に学生に利用させていることも開設時からの特徴で、模擬授業の練習やグループ学習での学生利用も多い。また、学内の他部署による活用も増加し、図書館のガイダンスや交換留学の選抜試験も毎年実施されている。

(3) 外国語学習用教材

開学時より教員の推薦や学生の要望を参考にしながら、外国語学習用教材の整備を行っている。2000年度以降メディアがほぼデジタル化されたが、アナログ教材も利用できる環境を現在でも維持している。定期刊行誌は、NHK外国語講座のテキストや、英語、中国語の学習雑誌を中心に幅広くそろえている。

所有する外国語学習用教材数



自習室内の定期購読雑誌棚

1998年度以前の編集室にはテレビ局と同様のアナログ編集卓があり、多くの学生が利用した。現在はパソコンで編集を行っている

(4) ネットワーク型集中英語学習プログラム

1996年度、英語担当教員が語学センター自習室を利用して「ネットワーク型集中英語学習プログラム」を開講した。1998年度からはプログラム受講者を対象としたTOEIC団体受験を開始し、主に語学センターで実施している。「ネットワーク型集中英語学習プログラム」は2002年度に授業としても開講し、現在では情報科学部1、2年生は語学センター教室で、それ以外の学生は自習室や自宅で受講している。2008年度からは、大学の休暇期間を利用して、語学センターにおいて市民講座としても開講している。

(5) 広報活動

語学センターは開学時より多くの視察を受け入れており、毎年の各種オープンキャンパス行事、高校進路指導担当教員対象大学説明会、中学・高校視察（2013年度9件）に対応している。本センターの動向を内外に発信する『語学センター ニューズレター』第1号は1995年度に刊行し、これまでに48号を発行。独自のウェブサイトは2002年度に開設し、学内限定ページでは学生の自習室利用や外国語学習に役立つ情報の提供を行っている。

市民講座の閉講式（2009年度）

知のトライアスロン講演風景（2010年度）

オープンキャンパス（2004年度）

(6) 映画鑑賞と知のトライアスロン

2004年度から第2外国語担当教員が推薦した映画の鑑賞イベントを実施しており、2009年度からは、本学附属図書館を中心として実施している「いちだい知のトライアスロン」（p.163参照）の一環として開催する映画上映会となった。年に2度、特定のテーマに沿った映画が選定され、教員による講演も行っている。

3. 情報処理センター

(1) 概要

情報処理センターは、大学の情報基盤であるHUNET（Hiroshima City University Information Network）システムの運用・管理を担う施設として設置された。開学当初は地域のネットワーク接続拠点としても重要な役割を果たし、その後の情報通信技術の進展やそれを使う社会の変化に合わせて、先進的なネットワークシステムの整備に努め、教育や研究の支援のためのネットワークサービスの向上を図っている。

(2) あゆみ

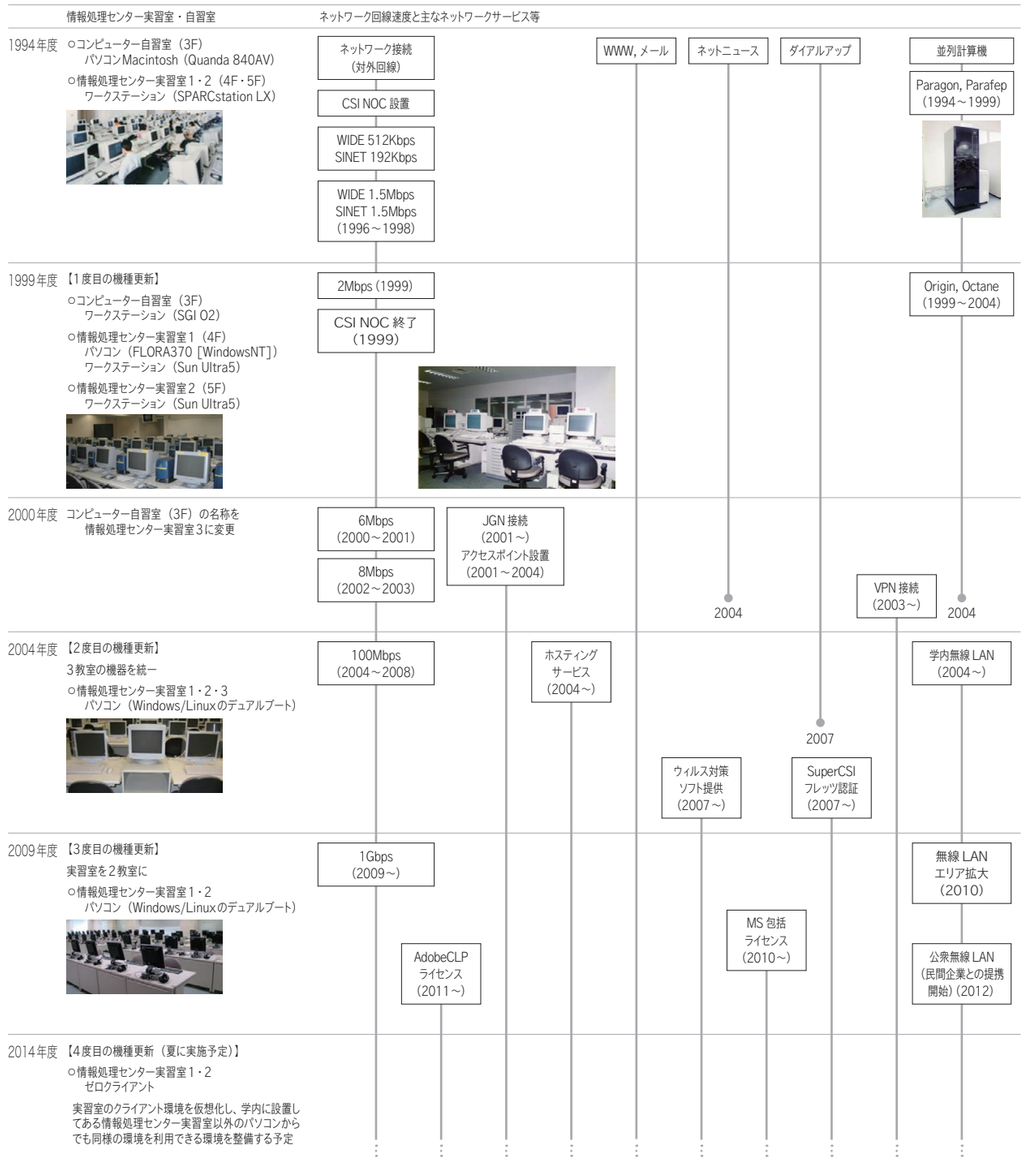
地域のインターネットの担い手として	1994年度		中国・四国インターネット協議会（CSI）が構築していた地域ネットワークの拠点として西広島NOC（Network Operations Center）を本学に設置（1999年まで）
		9月	インターネット関連研究プロジェクト「WIDEプロジェクト」が構築しているWIDEインターネットの広島NOCを本学に移設（WIDEとの接続は512Kbps）
		10月	第12回アジア競技大会広島のウェブサイトを開設
	1995年度	4月	通商産業省と文部省による学校教育の情報化を目指した「100校プロジェクト」で、中四国地域の指定校11校が本学を拠点としてインターネットを利用
		8月	広島市のウェブサイトを運用
			広島被爆50周年記念平和記念式典のインターネット中継をCSIと共に技術支援
	2001年度	6月	研究プロジェクト「マメdeがんすプロジェクト」でインターネットを用いた南アフリカからの日食中継実験を実施
		8月	セキュリティ対策機器（ファイアウォール）を導入
時代に応じた情報基盤の整備	2004年度	10月	大学情報サービスシステムを導入（教務・庶務・教員情報公開等の諸手続きのオンライン化）
			遠隔教室を整備（他大学との遠隔授業の開講が可能となり2005年以降、慶応義塾大学・京都大学との3大学合同授業を開講）
			e-learningシステムを導入
			ホスティングシステムを導入
			学内無線LAN環境を整備
	2007年度	6月	国際学部・芸術学部・講義棟等へネットワーク利用認証を導入
	2009年度	10月	デジタルサイネージを導入
			財務会計システムの導入支援
	2010年度	5月	学内無線LAN環境提供エリアを拡大
		10月	全学ウェブサイトをリニューアル（CMSおよびモバイル端末用コンテンツ自動変換システム導入）
	2011～2012年度		電気錠システムおよびWeb所在表示システムの導入支援
	2011年度	10月	国立情報研究所（NII）が運用する「学術認証フェデレーション」（通称「学認」）に参加
	2012年度	9月	公衆無線LANの提供開始（民間企業との共同研究契約締結）
		10月	事務局システム（仮想環境および大学ファイル共有システム）を導入
	2013年度	11月	サテライトキャンパスのネットワークを整備
	2014年度	10月	全学向けネットワークサービスサーバ群、基幹ネットワークスイッチ等をデータセンターに移設（予定）
			教育システムを仮想化、学生のメール環境をクラウド化（予定）

【アジア競技大会のウェブサイト】
競技結果などをリアルタイムで掲載し、国内外の閲覧者に喜ばれた。写真などのデータのやりとりは、携帯電話などのモバイル端末が普及していない当時、本学教員が競技会場と大学を行き来しての地道な作業により行った

【100校プロジェクト】
中四国地域の小・中学校でインターネットを利用するための機器が、本センターに設置されていた

【日食中継実験の様子】
市内9校の小学校などで、南アフリカの日食をインターネット経由で鑑賞した（井口明神小学校にて）

(3) ネットワークサービスおよび情報処理センター実習室・自習室環境の変遷



【年表用語解説】
- **ダイアルアップ**：電話線を利用してインターネットに接続するサービス
- **ネットニュース**：ホームページ等が普及していないころ、ニュースグループを作成してそのジャンルについての意見交換などを行っていたシステム
- **VPN 接続**：自宅や出張先など学外ネットワークからでも学内限定ネットワークサービス等を利用可能にするサービス
- **SuperCSI フレッツ認証**：特定の回線を契約している場合、大学をプロバイダとして利用できるサービス
- **ホスティングサービス**：研究室や教職員単位で必要に応じてバーチャルドメインを取得し、ウェブサイトやメール、DNS などを運用できるサービス
- **MS 包括ライセンス**：マイクロソフト社との契約により大学所有のパソコンや個人所有のパソコンでOS やOffice を利用できるサービス
- **AdobeCLP ライセンス**：Adobe 社とのメンバーシッププログラム
- **JGN**：情報通信研究機構が運営する研究開発向けネットワーク（現在まで JGN → JGN2 → JGN2Plus → JGN-X と移行している）

4. 芸術資料館

(1) 概要

広島市立大学芸術資料館は、開学と同じく1994年に開館した。「科学と芸術を軸に世界平和と地域に貢献する国際的な大学」という建学理念をふまえ、作品の収集・保存、展示・公開、調査・研究、教育・普及活動を行っているほか、企画展や学部・大学院の研究発表展、公開講座の実施や、国内外の美術館への作品貸出を通じて、大学の研究成果や芸術資料館のコレクションを一般に公開している。

(2) 収蔵作品

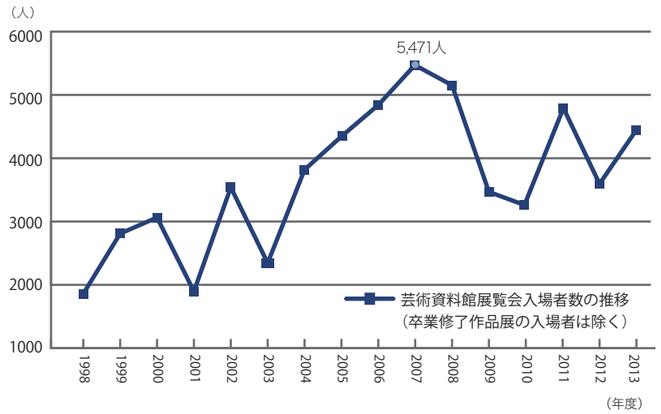
平山郁夫、野田弘志、淀井敏夫、イサム・ノグチ他、国内外の作家の作品1,238点（2013年度末時点）を収蔵している。特に、国内外のデザイナーズチェアは67点と、まとまった数を収蔵している。同時に、研究成果としての作品群、卒業制作優秀賞い上げ作品、被爆者の肖像画「光の肖像」シリーズを収蔵するなど、幅広い分野での収集も行っている。

分類	点数
東洋画	11
模写東洋画	27
日本画	28
油絵	13
光の肖像	100
版画	261
デッサン、下図	18
彫刻	20
彫刻ガンダーラ	5
金工	177
染織	8
漆工	26
木工	3
陶磁器	103
テキスタイル	16
デザイナーズチェア	67
照明	14
家具	11

分類	点数
工業製品	62
ポスター	106
写真	2
古書	43
建築模型、図面	6
手紙	1
記録	1
学生作品（日本画）	31
学生作品（油絵）	19
学生作品（彫刻）	15
学生作品（デザイン）	17
学生作品（工芸）	12
修士作品（日本画）	8
修士作品（油絵）	2
修士作品（彫刻）	2
修士作品（デザイン）	2
修士作品（工芸）	1
計	1,238

(3) 入館者数の推移

芸術資料館の入館者数は、研究成果発表や国際交流の活性化に伴って展覧会実施回数が増えたことにより、増加傾向にある。2013年度末時点、1994年の開館以来の延べ入館者数は、58,715人である。



(4) これまでに開催した主な展覧会（企画展を中心に）

1996年度	12月	西南師範大学助教授 李白玲作品展
1998年度	12月	西南師範大学助教授 陳航作品展
1999年度	5月	広島におけるライトレールのデザインとその未来展
2000年度	10月	浅野陽 陶芸展
	11月	20世紀の家具展
2001年度	4月	Art Crossing Hiroshima project 2001 spring
2002年度	6月	八木幾朗 展
2003年度	6月	片桐聖子 展
2004年度	9月	SAMURAI'S DANDYISM　―手の中の日本の美―　武士のオシャレ金工展 市民講座 展覧会をつくる 2004
	10月	河嶋淳司 展　―心の深層をテーマとした初期作品「超心理学」シリーズ―
2005年度	8月	「光の肖像」展　―被爆者たち、それを受け継ぐ者たちの眼差し―
	10月	白と黒の展覧会　―子供の眼差し 作家の眼差し― 市民講座 展覧会をつくる 2005
	11月	斉藤典彦 展　―Shaman Moon から in her garden へ―
2006年度	10月	時を越えて　―受け継ぐ心と技―　模写による県内文化財の保存継承
	10月	銅版画　夢・人・愛　瑛九展 市民講座　展覧会をつくる2006
2007年度	8月	卒展10周年記念卒業生選抜展　―活躍する卒業生―　日本画 油絵 彫刻
	11月	図解・大伴昌司の脳世界 大伴万博EXPO´07　―怪奇と調和― 市民講座　展覧会をつくる2007
	11月	宮いつき 展
	11月	磯江毅 展
2008年度	11月	植草正勝追悼 展
	11月	ウィンター・フェスト　ひかり　あかり　いのり　ふわり　メッセージ2008
	12月	萬來舎から学ぶ　―広島の芸術と都市計画―
2009年度	7月	アトミカリア　ATOMICALIA
	11月	ウィンターフェスト　暖・談・団　極寒に生きるアイヌ・イヌイットの文化と生活
2010年度	9月	広島アートプロジェクト2010 ここまでと、これからを探る
	11月	時を超えてⅡ　平安絵巻の雅
	12月	閃灼炎焦生 ―片岡脩と山下新治　平和ポスターをつくりつづけたデザイナーたち
2011年度	7月	From Seoul to Hiroshima　―広島市立大学・西京大学校国際交流展―
	10月	堀研　―イタリアの風―　スケッチ展
	12月	キッズキャンパス2011展
	2月	いのちの気配 ―藁谷実・秋山隆展
	2月	曾根幹子コレクション ―スポーツポスター展
2012年度	4月	受け継がれる心 ―広島市立大学芸術学部名誉教授 作品展
	11月	風景彫刻について
2013年度	10月	新任教員展
	12月	時を超えてⅢ　未来へ繋ぐ模写の可能性

上記のほか、教員、学生の研究発表の展覧会を随時開催している。

5. 社会連携センター

広島市立大学では、教育や研究だけでなく、地域住民、地元企業、広島市をはじめとする行政機関などを対象として、社会貢献にも積極的に取り組んでいる。こうした社会貢献活動の中心となる機関として、2007年7月に「社会連携センター」を設置し、本学の教育研究活動の成果を社会へ還元する取り組みを推進している。

(1) 沿革

2003年4月　産学官連携推進室設置
2007年7月　社会連携センター設置
2010年4月　公立大学法人化に伴い「連携推進室」および「プロジェクト研究推進室」設置

開所式（2007年7月6日）

(2) 社会連携センターの設置

① 設置年月日：2007年7月6日
② 設置場所：情報科学部棟別館1階

(3) 社会貢献の取り組み

① 産学連携の推進
　i. 研究シーズと企業ニーズのマッチングの推進
　ii. 共同研究・受託研究の推進
　iii. 企業等からの技術相談への対応

② 地域連携の推進
　i. 広島市等の行政課題解決への協力
　ii. NPO・市民等との協働事業

③ 生涯学習支援
　公開講座および社会人講座の実施

④ 知的財産管理
　知的財産権の権利化および管理（特許出願等）
　知的財産権保護

(4) 社会連携の関係図

(5) これまでの主な社会貢献活動

広島市との連携事業	【国際学部】	広島市職員向け英語力養成eラーニング講座
		外国人のための公文書書き換えプロジェクト
		都市ギャラリープロジェクト
		観光資源のブランディングとイノベーションによる地域活性化
		街区公園の指定管理者制度への政策提言
	【情報科学部】	広島市・日本IBMとの連携協定
		ICT技術を用いた被爆資料の電子展示
		ひろしま菓子博2013におけるICTを活用した実証実験
		交通系ICカード「PASPY」を用いた災害時の安否確認システム
		ひろしまコンピュータサイエンス塾（小学生向け情報科学講座）
	【芸術学部】	基町プロジェクト（文化芸術活動を通じた地域活性化）
		「光の肖像」展（芸術学部による被爆者およびその2世、3世の肖像画制作）
		銅蟲の商品開発に関する共同研究、銅蟲ランプの制作
		各種ロゴマークおよび下水道マンホールふたのデザイン
		西風新都中央線沿道での彫刻作品設置
		紙屋町シャレオでのichidai ichi（芸術作品の展示・販売）
地域貢献・市民対象事業	【全学部】	各種公開講座の開催
	【国際学部】	日本語教室での日本語教育支援、児童教育支援活動
		From Seoul to Hiroshima　―広島市立大学・西京大学校国際交流展―
	【情報科学部】	広島県科学オリンピックへの参加・協力
		高校生を対象とした情報通信技術者育成講座
	【芸術学部】	己斐小学校への被爆モニュメント設置
		広島アートプロジェクト（遊休施設での芸術作品展示）
		大塚かぐや姫プロジェクト（竹を活用した芸術作品制作）
		キッズキャンパス（幼児・児童を対象とした美術講座）
産学連携の推進	広島市立大学産学連携研究発表会（リエゾンフェスタ）の開催（研究紹介、地域産業界等との連携推進）	
	各種産学官連携イベント等への出展	

各種ロゴのデザイン

基町プロジェクト開設式

大塚かぐや姫プロジェクト

ひろしま菓子博2013でのICT活用実験

公開講座の開催

銅蟲ランプ制作

産学連携研究発表会（リエゾンフェスタ）

児童教育支援活動

6. 国際交流推進センター

（1）概要

国際交流推進センターは、2013年４月に開設された。本学学生の海外派遣留学および留学生受入に関わる企画・広報・実施・相談などのサービスの提供に加え、国際化の面から大学の教育や研究の活性化を広範にサポートしている。

（2）設置の経緯

本学は1994年４月の開学以来、「科学と芸術を軸に世界平和と地域に貢献する国際的な大学」という建学の基本理念にのっとり、西南大学（中国重慶市）やハノーバー専科大学（ドイツ・ハノーバー市）をはじめとした広島市の姉妹・友好都市にある大学を中心に学術交流協定の締結を進め、大学間では12大学、学部間では４大学と学術交流を進めてきた。

学術交流協定の締結には、それを支える充実した留学生の派遣・受入体制が必要である。しかしながら、国際交流推進センター開設以前は、学術交流協定の締結に関する事務と、留学生の派遣・受入に関する事務の所管が分かれており、窓口が一本化されていなかった。こうしたことから、国際交流の企画から実施までの業務を一貫して所掌し、学術交流協定の締結を含め、本学の留学生（派遣・受入）への対応、海外短期留学プログラムの実施など、国際交流の円滑な実施を図るため、国際交流推進センターを設置した。

（3）主な活動

国際交流推進センターでは、学術交流協定の締結や留学生の派遣・受入といった国際交流の根幹となる業務を行うほか、グローバル人材の育成や国際交流推進のため、以下のような取り組みも進めている。

■広島市立大学グローバル人材育成講演会「市大から世界へ」

国際交流推進センター開設とともに始まったグローバル人材育成講演会は、さまざまな分野において一線で活躍する講師を招いて毎年度２回程度開催し、多彩な経験や見識を学ぶ機会を提供している。初年度である2013年度は、国際連合戦略広報部国連広報センターサービス部長の植木安弘氏と、米国ハーバード大学名誉教授のエズラ・ヴォーゲル氏を、2014年度は東京外国語大学教授の伊勢崎賢治氏と、チームラボ株式会社社長の猪子寿之氏（予定）を招き、毎回多くの聴講者が参加している。

■留学関連行事や留学生向け行事の開催

留学に関心のある学生を対象にした留学説明会を実施している。また、留学生・学生間の交流を促進させるため、留学生との交流会や、秋には学部学生との遠足などの行事を実施している。

7. キャリアセンター

（1）概要

キャリアセンターは2014年４月に開設された附属施設で、学生の就職・進学という事柄を超えたより大きな意味での進路（キャリア）について、さまざまな方策により学生一人ひとりにきめ細かい丁寧な支援を行っている。これにより、学生が自らのキャリアについて考え行動し、さらに人間力を高められることをねらいとしている。

（2）設置の経緯

就職支援やキャリア教育の推進は、開学以来、教員と事務組織が役割を分担し、就職・キャリア形成支援委員会と事務局教務学生室を中心に、学生が希望する職に就職できるようきめ細かい支援を行うためのさまざまな取り組みを進めてきた。しかしながら、2008年９月に発生したリーマンショック以後、学生の就職を取り巻く環境は厳しい状態が続き、雇用環境の見通しが不透明になる中、就職決定率や就職先が入学志願者の動向や大学の社会的評価を決める大きな要因の一つとなった。

こうした状況の下、大学の重要な使命の一つである学生への就職支援やキャリア教育をより一層推進するため、これまでの就職斡旋という概念を一歩進め、初年時から社会人としての基礎的な力（話す力、考える力、チームで働く力等）を養うとともに、ライフプランニングの支援をより積極的に行うなど、キャリア教育の充実という観点から取り組むことが必要になった。このキャリア教育の強力な推進は、就職決定率の向上のみにとどまらず、学生が自分に相応しい仕事を見つけ、より一層、希望に沿った就職を可能とし、今後のキャリアアップにつながる重要な取り組みである。

これらの重要な取り組みを実現することを目的として、2014年４月、新たに附属施設としてキャリアセンターが設置された。

（3）主な活動

キャリアセンターでは、センター長以下、事務局学生支援室職員３名とキャリアアドバイザー２名により、次の活動に取り組んでいる。

① 就職ガイダンス、就職支援セミナー
② 求人票開示、求人開拓
③ 学内合同・個別企業セミナー
④ キャリアセミナー
⑤ 企業インターンシップ
⑥ 大学説明会、情報交換会
⑦ 保護者進路説明会
⑧ キャリア相談
⑨ 履歴書・エントリーシート添削
⑩ 模擬面接

8. サテライトキャンパス

（1）概要

サテライトキャンパスは、本学の市内中心部における活動拠点機能強化と、市民の生涯学習のさらなる推進等を目的として、2013年10月に開設された。

オープニング・セレモニー（2013年10月6日）

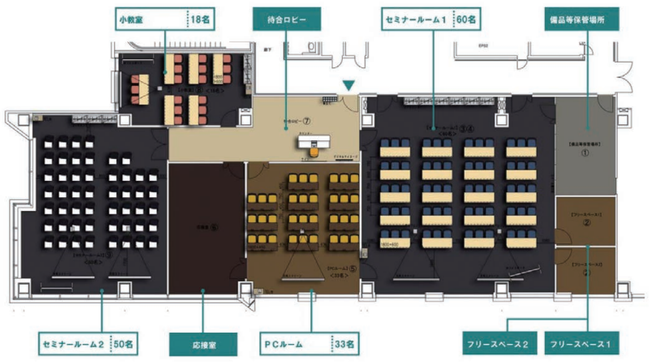
（2）設置年月日および所在地

① 設置年月日：2013年10月1日
② 所在地：広島市中区大手町四丁目1番1号　大手町平和ビル9階

（3）主な利用方法

① 市内中心部における本学の活動拠点の場（本学主催セミナー、講演会、研究会等）
② 広島市民の生涯学習の場（市大英語eラーニング講座、講演会・公開講座等）
③ 本学学生と地域住民等との交流の場（学生によるパソコン相談室等）

施設名称	面積（㎡）	基本席数	主な活用方法
セミナールーム1	135.5	60	各種セミナー、講演会、研究会、分科会等
セミナールーム2	92.1	50	各種セミナー、講演会、研究会、分科会等
PCルーム	53.4	33	市大英語eラーニング、パソコン利用の公開講座等
小教室	34.1	18	ゼミ等の小規模会合用
待合ロビー	35.6	-	総合受付、本学情報・各種事業案内等の提供
応接室	40.0	-	来客等応接用



セミナールーム1

PCルーム

9. 歴代教員一覧

（1）過去在職教員

（在職期間について、年度途中の着任・離任の場合は年月を、そうでない場合は年度を示す。）

加藤　直規
社会連携センター
専任教授
2005年度～2010年度

神原　信幸
国際交流推進センター
特任教授
2013年4月～2014年2月

野村　啓治
社会連携センター
特任教授
2011年度～2013年度

藤井　博信
社会連携センター
特任研究員
2010年度～2011年度

（2）教員略歴

（2014年4月1日時点在職者）

准教授 釘宮（くぎみや） 章光（あきみつ）

1968年生まれ。大阪府出身。1995年、東京大学大学院工学系研究科化学生命工学専攻修士課程修了。博士（工学）。1996年1月に本学着任（情報科学部助手→情報科学研究科助手→財団法人広島市産業振興センター先端科学技術研究所次長［本学より出向］→社会連携センター准教授）。専門分野は生物機能工学。これまでの主な担当科目は「広島の産業と技術」。

（3）在職期間一覧

（2014年度4月1日時点。年度途中の着任・離任の場合でも、その年度は在職期間として示す。）

氏名＼年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
釘宮　章光		1995																			2014
加藤　直規												2005					2010				
藤井　博信																	2010	2011			
野村　啓治																		2011		2013	
神原　信幸																				2013	

附属施設

10. その他の学内施設

4 学生寮

他県など遠方からの入学生に対して安価な住居を提供する学生寮は、1、2年生の男女100名弱が共同生活を営んでいる。1階はバリアフリーになっており、車椅子の人でも安心して利用できる。留学生も入居しており、国際交流の場にもなっている。

5 保健管理室（保健室・相談室）

本部棟1階にある保健管理室では、心身の健康上の悩みや相談に応じ、学生の疾病の予防と健康相談、カウンセリングを中心に、健康の維持増進を図っている。

1 講堂

壁面レリーフや舞台の緞帳などに芸術学部教員たちの作品を生かした、本学ならではの施設。大・小ホール、大型スクリーンや国際会議も可能な同時通訳設備など、機能も充実している。

2 学生会館

学生食堂やクラブハウス、売店、ATMなど、学生生活に欠かせない機能がそろっている。中でも学生食堂は、吹き抜けの天井から太陽の光が射し込む心地よい空間で、カフェテリアと併せて学生たちの交流の場となっている。

3 体育館

バスケットコートが2面使用できるアリーナや、本格的なトレーニングルーム等を備えている。授業やクラブ・サークル活動のほかにも、多目的な利用が可能。

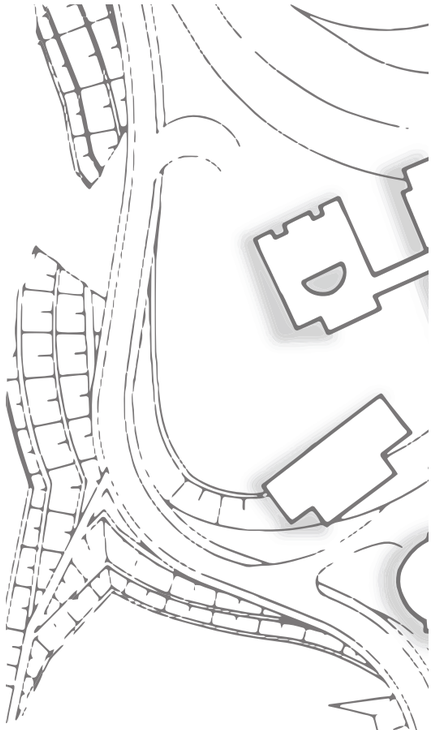
6 グラウンド

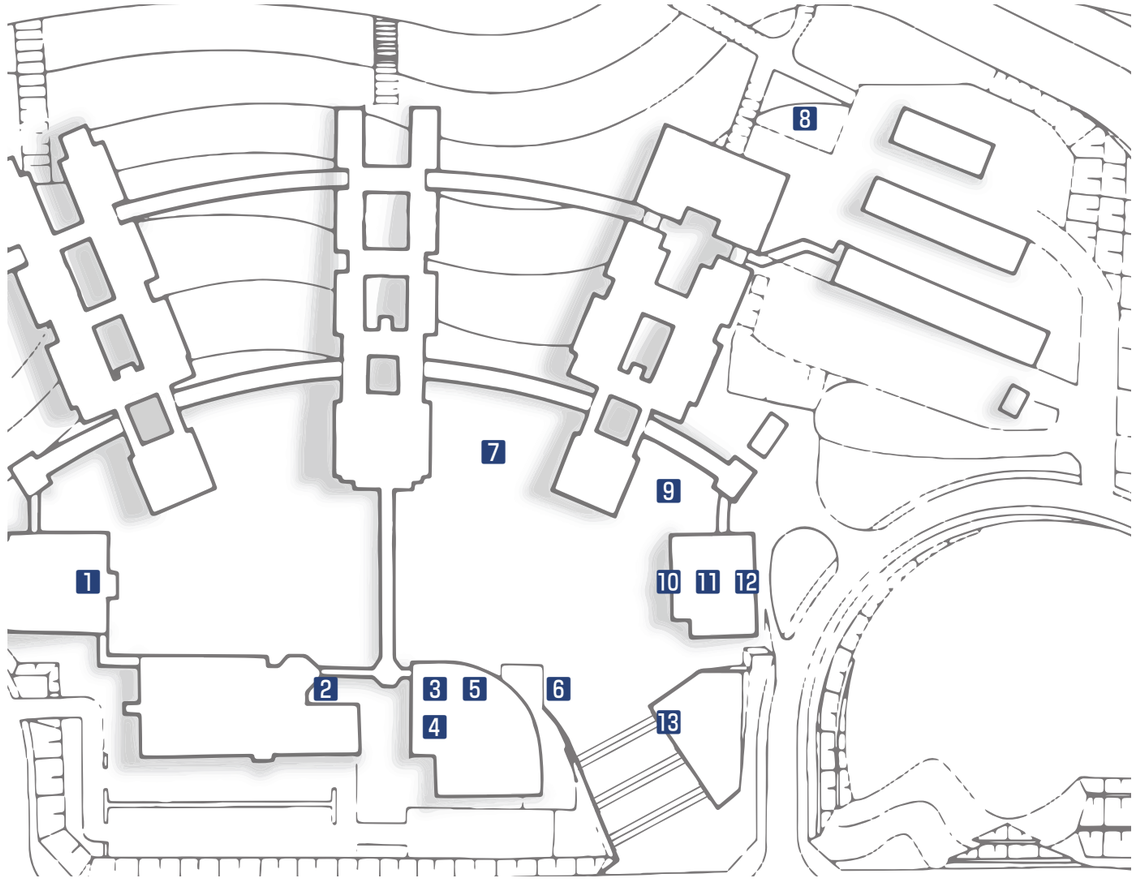
7 トラック・フィールド

全天候型のテニスコート4面と、野球、サッカーなどができるグラウンドとトラック・フィールド。クラブ・サークル活動以外でも利用することができる。

11. 学内アートマップ

広島市立大学のキャンパスには、本学芸術学部教員をはじめとするさまざまな芸術家の作品が置かれており、キャンパス全体が芸術学部を有する大学ならではの独自性を持った、文化の薫りあふれる環境となっている。





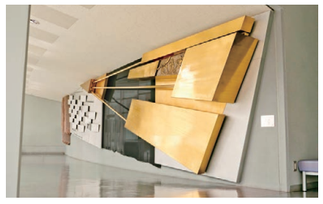
1 展象

2 青年

3 選択の方向

4 新都緑映

5 NEXT from HIROSHIMA



6 石の懸樋

7 オクテトラ

8 筆塚

9 集積融合 ―manoma―

10 放蕩息子

11 green

12 とびたいガルダァのように

13 Hommage to Hokusai

12. 学外アートマップ

本学芸術学部関係者は、芸術による広島のまちづくりにも貢献している。ここではその一例を紹介する。

1.広島市立向洋新町小学校　外観色彩計画（1995年、向洋新町）／2. 広島市立高須小学校　外観色彩計画（1995年、高須）／3. 折り鶴の碑（2000年、幟町中学校）／4. 宇品橋（2000年、右岸：中区南千田町～左岸：南区宇品西）／5. 自然を守るひと（2000年、広島広域公園）／6. 鷹野橋交差点横断歩道橋（2001年、大手町五丁目）／7. 紙屋町地下街シャレオ（2001年、基町地下街）／8. 紙屋町地下街シャレオのベンチ（2003年、基町地下街）／9. 横川駅前バス停ベンチ（2003年、横川町）／10. 横川レトロバス（2003年、横川町）／11. 元安川左岸中1区215号歩道（2005年、大手町）／12. 永井建子の碑（2005年、臼山八幡神社）／13. 大手町通り歩道（2006年、大手町）／14. 可部駅西口広場モニュメント（2006年、可部二丁目）／15. デザインマンホールふた（折り鶴）（2007年、広島駅周辺）／16. デザインマンホールふた（カープ坊や）（2007年、MAZDA Zoom-Zoomスタジアム広島周辺）／17. コイン通り「金持神」モニュメント（2007年、五日市町）／18. 原爆死没者慰霊碑多言語説明板（2008年、広島平和記念公園）／19. 袋町通り歩道（2008年、袋町）／20. 新球場周辺歩道（2008年、南蟹屋）／21. デザインマンホールふた（かもめ）（2008年、宇品～元宇品周辺）／22. 大洲通り歩道（2008年、荒神町）／23. デザインマンホールふた（紅葉）（2009年、広島城～広島県立美術館周辺）／24. 薬研堀通り歩道（2010年、薬研堀）／25. デザインマンホールふた（かよこバス）（2010年、横川駅周辺）／26. 原爆犠牲者慰霊モニュメント（2010年、己斐小学校）／27. 穿孔（2010年、西風新都中央線沿道）／28. Untitled（2010年、西風新都中央線沿道）／29. WORLD（2011年、西風新都中央線沿道）／30. 壁画（2013年、広島市安佐動物公園）

1 広島市立向洋新町小学校 外観色彩計画

3 折り鶴の碑

4 宇品橋

5 自然を守るひと

6 鷹野橋交差点横断歩道橋

8 紙屋町地下街シャレオのベンチ

9 横川駅前バス停ベンチ

10 横川レトロバス

11 元安川左岸中1区215号歩道

12 永井建子の碑

15 デザインマンホールふた（折り鶴）

17 コイン通り「金持神」モニュメント

18 原爆死没者慰霊碑多言語説明板

27 穿孔

30 広島市安佐動物公園 壁画

第５章　資料

1. 学生・教職員数

学生数 （2014年5月1日時点）

（単位：人）

学部・学科			総定員	1年次	2年次	3年次	4年次	計
国際学部	国際学科		400	114 (87)	112 (83)	108 (87)	134 (102)	468 (359)
情報科学部	（学部所属）			232 (53)	—	—	—	232 (53)
	情報工学科		240	—	84 (8)	64 (8)	73 (5)	221 (21)
	知能工学科		240	—	77 (18)	62 (11)	70 (17)	209 (46)
	システム工学科		240	—	73 (13)	72 (19)	85 (9)	230 (41)
	医用情報科学科		120	—	45 (11)	16 (5)	—	61 (16)
	計		840	232 (53)	279 (50)	214 (43)	228 (31)	953 (177)
芸術学部	美術学科	日本画専攻	40	12 (12)	10 (8)	10 (10)	11 (10)	43 (40)
		油絵専攻	80	20 (19)	20 (15)	25 (20)	26 (20)	91 (74)
		彫刻専攻	40	11 (7)	9 (6)	11 (6)	12 (8)	43 (27)
	計		160	43 (38)	39 (29)	46 (36)	49 (38)	177 (141)
	デザイン工芸学科		160	40 (35)	49 (43)	42 (39)	52 (41)	183 (158)
	計		320	83 (73)	88 (72)	88 (75)	101 (79)	360 (299)
合計			1,560	429 (213)	479 (205)	410 (205)	463 (212)	1,781 (835)

※（　）は女子で内数

（単位：人）

研究科	専攻		総定員	1年次	2年次	3年次	計
国際学研究科	前期	国際学専攻	30	14 (6)	17 (6)	—	31 (12)
	後期	国際学専攻	21	2 (1)	3 (3)	10 (8)	15 (12)
	計		51	16 (7)	20 (9)	10 (8)	46 (24)
情報科学研究科	前期	情報工学専攻	46	24 (0)	27 (5)	—	51 (5)
		知能工学専攻	46	28 (0)	27 (1)	—	55 (1)
		システム工学専攻	46	29 (3)	20 (2)	—	49 (5)
		創造科学専攻	30	5 (0)	3 (1)	—	8 (1)
	後期	情報科学専攻	84	3 (0)	5 (0)	7 (1)	15 (1)
	計		252	89 (3)	82 (9)	7 (1)	178 (13)
芸術学研究科	前期	絵画専攻	—	—	—	—	0 (0)
		彫刻専攻	—	—	1 (0)	—	1 (0)
		造形計画専攻	—	—	1 (1)	—	1 (1)
		造形芸術専攻	60	23 (16)	37 (25)	—	60 (41)
	後期	総合造形芸術専攻	18	10 (4)	3 (2)	5 (1)	18 (7)
	計		78	33 (20)	42 (28)	5 (1)	80 (49)
合計			381	138 (30)	144 (46)	22 (10)	304 (86)

※（　）は女子で内数

教員数 （2014年5月1日時点）

（単位：人）

所属		教授	准教授	講師	助教	特任助教	計
国際学部	男	16 (3)	11 (2)	3 (1)	0 (0)	0 (0)	30 (6)
	女	8 (1)	6 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	15 (3)
	計	24 (4)	17 (3)	4 (2)	0 (0)	0 (0)	45 (9)
情報科学部	男	26 (0)	35 (1)	15 (0)	20 (0)	0 (0)	96 (1)
	女	1 (0)	1 (0)	1 (0)	1 (0)	1 (0)	5 (0)
	計	27 (0)	36 (1)	16 (0)	21 (0)	1 (0)	101 (1)
芸術学部	男	13 (0)	9 (1)	3 (0)	2 (0)	0 (0)	27 (1)
	女	0 (0)	0 (0)	2 (0)	2 (0)	0 (0)	4 (0)
	計	13 (0)	9 (1)	5 (0)	4 (0)	0 (0)	31 (1)
広島平和研究所	男	4 (1)	4 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (3)
	女	0 (0)	1 (1)	3 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (1)
	計	4 (1)	5 (3)	3 (0)	0 (0)	0 (0)	12 (4)
社会連携センター	男	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)
	女	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	計	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)
合計	男	59 (4)	60 (6)	21 (1)	22 (0)	0 (0)	162 (11)
	女	9 (1)	8 (2)	7 (1)	3 (0)	1 (0)	28 (4)
	計	68 (5)	68 (8)	28 (2)	25 (0)	1 (0)	190 (15)

※（　）は外国人教員で内数

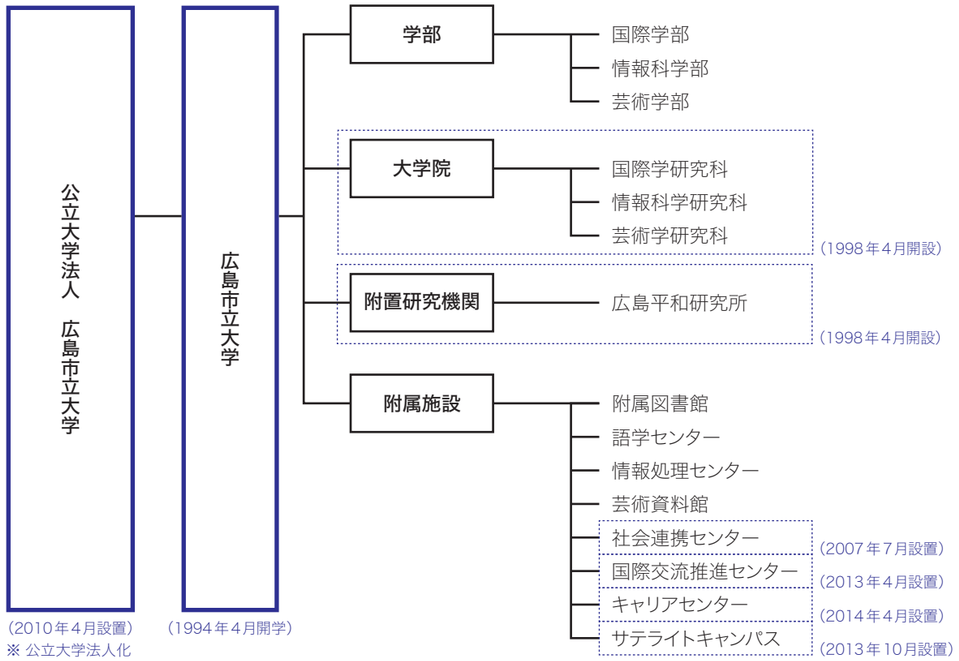
職員数 （2014年5月1日時点）

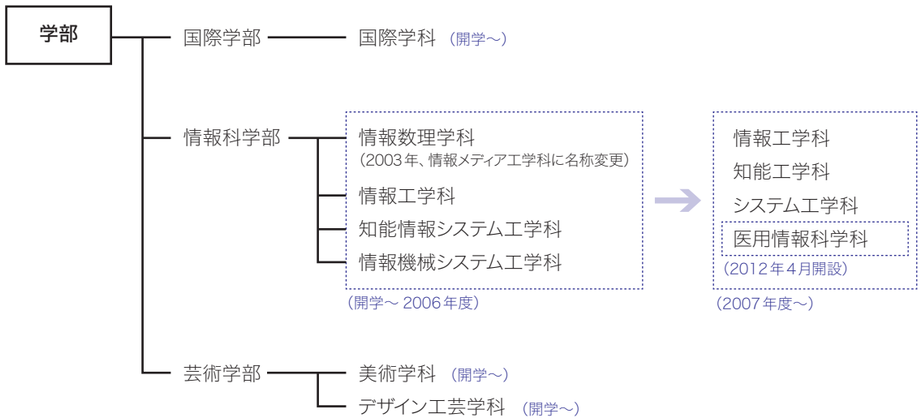
（単位：人）

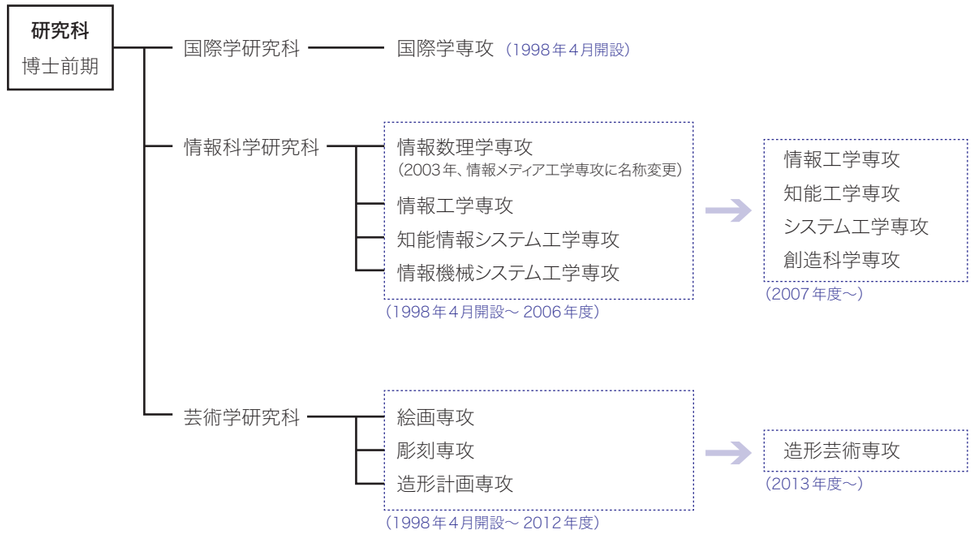
所属		派遣職員	嘱託職員	臨時職員	計
事務局	男	26	6	1	33
	女	13	25	14	52
	計	39	31	15	85
社会連携センター	男	3	1	0	4
	女	2	2	4	8
	計	5	3	4	12
国際交流推進センター	男	1	0	0	1
	女	0	1	1	2
	計	1	1	1	3
合計	男	30	7	1	38
	女	15	28	19	62
	計	45	35	20	100

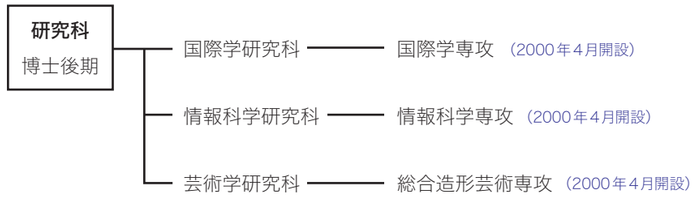
※臨時職員は7時間45分勤務の者のみ

2. 組織の変遷


公立大学法人　広島市立大学
（2010年4月設置）
※ 公立大学法人化
広島市立大学
（1994年4月開学）
学部
国際学部
情報科学部
芸術学部
大学院
国際学研究科
情報科学研究科
芸術学研究科
（1998年4月開設）
附置研究機関
広島平和研究所
（1998年4月開設）
附属施設
附属図書館
語学センター
情報処理センター
芸術資料館
社会連携センター
（2007年7月設置）
国際交流推進センター
（2013年4月設置）
キャリアセンター
（2014年4月設置）
サテライトキャンパス
（2013年10月設置）


学部
国際学部
国際学科　（開学～）
情報科学部
情報数理学科
（2003年、情報メディア工学科に名称変更）
情報工学科
知能情報システム工学科
情報機械システム工学科
（開学～ 2006年度）
情報工学科
知能工学科
システム工学科
医用情報科学科
（2012年4月開設）
（2007年度～）
芸術学部
美術学科　（開学～）
デザイン工芸学科　（開学～）


研究科
博士前期
国際学研究科
国際学専攻　（1998年4月開設）
情報科学研究科
情報数理学専攻
（2003年、情報メディア工学専攻に名称変更）
情報工学専攻
知能情報システム工学専攻
情報機械システム工学専攻
（1998年4月開設～ 2006年度）
情報工学専攻
知能工学専攻
システム工学専攻
創造科学専攻
（2007年度～）
芸術学研究科
絵画専攻
彫刻専攻
造形計画専攻
（1998年4月開設～ 2012年度）
造形芸術専攻
（2013年度～）


研究科
博士後期
国際学研究科
国際学専攻　（2000年4月開設）
情報科学研究科
情報科学専攻　（2000年4月開設）
芸術学研究科
総合造形芸術専攻　（2000年4月開設）

3. 歴代役職者一覧

（2014年5月1日時点）

役職＼年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
学長	田中 隆荘						藤本 黎時		
副学長 （2002年度まで学長補佐）		吉田 典可			櫟本 功				
								森末 道忠	
事務局長	松浦 洋二		樋渡 敬宇		中本 信雄			恵南 祈八郎	
教学部長	今永 清二 （～97.12.31）				嶋矢 志郎 （98.1.1～01.3.21）				
国際学部長	平井 友義		藤本 黎時				毛利 敏彦	大野 喜久之輔	青木 薫
情報科学部長	磯道 義典				大槻 説乎				堀居 賢樹
芸術学部長	山下 恒雄 （～97.4.30）			今井 昭吾（珠泉） （97.5.1～）			細井 良雄		
広島平和研究所長					明石 康 （～99.2.19）	田中 隆荘 （学長が事務取扱）	藤本 黎時 （学長が事務取扱）	福井 治弘	
附属図書館長	大野 喜久之輔				三原 捷宏				潮 隆雄
語学センター長	山本 雅				姜 範錫		田中 隆二		欒 竹民
情報処理センター長	天野 橘太郎				橘 啓八郎		浅田 尚紀		
芸術資料館長	大歳 克衛				細井 良雄		潮 隆雄		倉島 重友
社会連携センター長									
国際交流推進センター長									
キャリアセンター長									

役職＼年度	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
学長	藤本 黎時			浅田 尚紀							青木 信之	
副学長 （2002年度まで学長補佐）	坂井 秀吉			青木 信之							岩井 千秋	
	浅田 尚紀	石渡 孝		佐野 学		若林 真一						
事務局長	恵南 祈八郎	尾兼 弘幸	増田 学 （～06.10.31）	志賀 賢治 （06.11.1～）				皆本 也寸志	城 一博		塩田 芳丈	
教学部長												
国際学部長	青木 薫	山本 雅		大東和 武司				岩井 千秋		二村 英夫		
情報科学部長	堀居 賢樹	浅田 尚紀		堀居 賢樹		佐野 学				矢野 卓雄		
芸術学部長	大井 健次				若山 裕昭				前川 義春			
広島平和研究所長	福井 治弘		浅井 基文						浅田 尚紀 （学長が事務取扱）		吉川 元	
附属図書館長	潮 隆雄		服部 等作				藤本 哲夫	赤星 晋作			前田 香織	
語学センター長	欒 竹民	青木 信之		宇野 昌樹				横山 知幸				
情報処理センター長	北村 俊明							前田 香織			北村 俊明	
芸術資料館長	倉島 重友			植草 正勝		吉井 章		大井 健二		若山 裕昭	吉田 幸弘	
社会連携センター長					大場 充		井上 智生				竹澤 寿幸	
国際交流推進センター長											神原 信幸 （～14.2.28）	岩井 千秋 （副学長が事務取扱）
キャリアセンター長												井上 智生

4. 名誉教授一覧

（2014年6月8日時点）

氏名	授与年月日	退職時所属	在職期間	専門分野	備考
田中 隆荘	2000.4.26	学長	1994.4-2000.3	植物学	＊
山中 雪人	2000.4.26	芸術学部	1994.4-2000.3	日本画	＊
清水 英夫	2000.4.26	芸術学部	1994.4-2000.3	視覚造形	＊
大歳 克衛	2000.4.26	芸術学部	1994.4-2000.3	油絵	＊
中島 潤	2000.4.26	国際学部	1995.4-2000.3	国際経営論、多国籍企業論	＊
今井 昭吾	2000.4.26	芸術学部	1994.4-2000.3	日本画	
平井 友義	2000.4.26	国際学部	1994.4-2000.3	国際政治	
嵩 忠雄	2003.5.28	情報科学部	1998.4-2003.3	情報工学	＊
大野 喜久之輔	2003.5.28	国際学部	1994.4-2003.3	比較経済学、比較経済システム論、不動産経済学、ロシア研究	
森末 道忠	2003.5.28	情報科学部	1996.4-2003.3	計算機工学、エレクトロニクス工学、非線形理論	
細井 良雄	2003.5.28	芸術学部	1994.4-2003.3	彫刻	
田村 秋雄	2003.5.28	情報科学部	1994.4-2003.3	計算機支援設計、CAGD、電子回路	＊
齋藤 稔	2003.5.28	国際学部	1997.4-2003.3	西洋美術史、芸術学、比較芸術学	
吉田 典可	2003.5.28	情報科学部	1995.4-2003.3	情報工学、電子工学	＊
大槻 説乎	2003.5.28	情報科学部	1996.4-2003.3	知識工学、教育情報工学	
津田 孝夫	2003.5.28	情報科学部	1996.4-2003.3	基本ソフトウェア（ベクトル化・並列化コンパイラなど）、モンテカルロ法、磁力線再結合	
天野 橘太郎	2003.5.28	情報科学部	1994.4-2003.3	通信工学、信号処理工学	＊
櫟本 功	2003.5.28	国際学部	1996.4-2003.3	経済政策論	
川田 順造	2003.5.28	国際学部	1997.4-2002.9	アフリカ研究（人類学）	
沖田 豪	2003.5.28	情報科学部	1995.4-2003.3	システム制御工学	
武藤 三千夫	2004.4.28	国際学部	1999.4-2004.3	一般美学、環境美学	
田中 隆二	2004.4.28	国際学部	1994.4-2004.3	フランス文学、フランス語学、日仏交流史	＊
姜 範錫	2004.4.28	国際学部	1994.4-2004.3	国際関係史	
百瀬 宏	2005.5.25	国際学部	2000.4-2005.3	国際関係学、国際関係史学	
友枝 啓泰	2005.5.25	国際学部	1996.4-2005.3	文化人類学、ラテンアメリカ研究	＊
野田 弘志	2005.5.25	芸術学部	1995.4-2005.3	油絵	
青木 薫	2005.5.25	国際学部	1994.4-2005.3	教育経営学	
磯野 清夫	2005.5.25	芸術学部	1994.4-2005.3	漆芸	
橘 啓八郎	2005.5.25	情報科学部	1994.4-2005.3	計測制御システム、情報通信システム、経営情報システム	

氏名	授与年月日	退職時所属	在職期間	専門分野	備考
磯道 義典	2005.5.25	情報科学部	1994.4-2005.3	人工知能論、社会システム論、ゲーム理論、情報理論	
潮 隆雄	2005.5.25	芸術学部	1995.4-2005.3	テキスタイル・デザイン	
藤本 黎時	2006.5.24	学長	1995.4-2006.3	イギリス地域文化、アイルランド文化・文学	
相澤 輝昭	2006.5.24	情報科学部	1995.4-2006.3	自然言語処理	
坂井 秀吉	2007.5.23	国際学部	1995.4-2007.3	経済発展論、開発経済学	
三原 捷宏	2007.5.23	芸術学部	1994.4-2007.3	油絵	
綿引 道郎	2008.5.28	芸術学部	1994.4-2008.3	彫刻	
山本 雅	2008.5.28	国際学部	1994.4-2008.3	アメリカ文学	＊
堀居 賢樹	2008.5.28	情報科学部	1994.4-2008.3	情報物性工学、情報デバイス工学	
加藤 千代	2009.5.27	国際学部	1994.4-2009.3	中国民俗学、口承文芸研究	
倉島 重友	2010.5.26	芸術学部	1994.4-2010.3	日本画	
大井 健次	2011.5.30	芸術学部	1994.4-2011.3	現代表現、視覚造形	
大井 健二	2012.5.23	国際学部	1994.4-2012.3	美術史、創作と人間	
ファルーク,オマール	2012.5.23	国際学部	1994.4-2012.3	比較政治体制論	
リナート,キャロル	2012.5.23	国際学部	1994.4-2012.3	社会言語論	
服部 等作	2012.5.23	芸術学部	2000.4-2012.3	立体造形	
西田 俊英	2012.5.23	芸術学部	2000.4-2012.3	日本画	
浅田 尚紀	2013.5.29	学長	1995.4-2013.3	画像情報処理	
富永 憲生	2013.5.29	国際学部	1994.4-2013.3	日本経済論、現代日本経済史	
ミハイロバ,ユリア	2013.5.29	国際学部	1996.4-2013.3	国際関係史（日本とロシア）	
伊藤 史朗	2013.5.29	情報科学部	1994.4-2013.3	代数学	
生岩 量久	2013.5.29	情報科学部	2004.7-2013.3	ディジタル放送	
佐野 学	2013.5.29	情報科学部	1994.4-2013.3	制御工学	
北田 克己	2013.5.29	芸術学部	2000.4-2013.3	日本画	
ルディムナ,クリスチャン	2014.5.28	国際学部	2004.4-2014.3	フランス文化論	
大場 充	2014.5.28	情報科学部	1994.4-2014.3	ソフトウェア工学	
寺田 和夫	2014.5.28	情報科学部	1994.4-2014.3	機能デバイス学	
友安 一成	2014.5.28	芸術学部	1994.4-2014.3	油絵	
堀 研	2014.5.28	芸術学部	1994.4-2014.3	油絵	
若山 裕昭	2014.5.28	芸術学部	1994.4-2014.3	金属造形	

＊物故者

5. 入学者数の推移

大学

（単位：人）

学部・学科 ＼ 年度			1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	計
国際学部	国際学科		99	109	101	106	109	102	105	100	109	103	103	106	110	119	112	113	117	113	111	112	2,159
情報科学部	情報数理学科		49	52	50	50	53	51	51	52	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	458
	情報メディア工学科		—	—	—	—	—	—	—	—	—	53	50	50	51	—	—	—	—	—	—	—	204
	情報工学科（旧）		53	53	52	52	50	53	53	53	53	55	55	56	53	—	—	—	—	—	—	—	691
	知能情報システム工学科		50	54	52	55	51	52	50	50	51	56	55	52	55	—	—	—	—	—	—	—	683
	情報機械システム工学科		50	55	52	52	50	53	53	52	51	51	53	52	53	—	—	—	—	—	—	—	677
	情報工学科（新）		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一括入試※	一括入試	一括入試	一括入試	一括入試	一括入試	一括入試	—
	知能工学科		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—								
	システム工学科		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—								
	医用情報科学科		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—								
	計		202	214	206	209	204	209	207	207	205	215	213	210	212	226	218	225	216	230	231	226	4,285
芸術学部	美術学科	日本画専攻	10	10	11	11	10	10	11	10	10	10	11	11	11	11	12	10	10	11	10	10	210
		油絵専攻	20	22	21	20	20	20	20	21	21	20	20	20	20	21	20	20	20	24	25	20	415
		彫刻専攻	10	10	10	11	10	10	10	10	10	10	10	11	10	10	10	10	10	10	12	10	204
		計	40	42	42	42	40	40	41	41	41	40	41	42	41	42	42	40	40	45	47	40	829
	デザイン工芸学科		42	41	42	40	40	40	42	42	40	40	40	40	40	41	40	40	40	48	43	49	830
	計		82	83	84	82	80	80	83	83	81	80	81	82	81	83	82	80	80	93	90	89	1,659
合計			383	406	391	397	393	391	395	390	395	398	397	398	403	428	412	418	413	436	432	427	8,103
情報科学部編入生			—	—	22	17	20	27	22	10	15	9	4	6	5	4	2	2	4	2	2	0	173

※2007年度入学生から学部一括入試に

大学院（博士前期課程）

（単位：人）

研究科・専攻 ＼ 年度		1994	1995	1996	1997	1998		1999		2000		2001		2002		2003		2004		2005		2006		2007		2008		2009		2010		2011		2012		2013		計
						春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	
国際学研究科	国際学専攻	—	—	—	—	16	4	16	2	13	2	12	4	13	0	13	2	12	2	9	9	12	1	12	6	6	3	6	4	10	6	8	2	7	6	8	5	231
情報科学研究科	情報数理学専攻	—	—	—	—	19	—	16	0	13	0	10	0	13	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	71
	情報メディア工学専攻	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	14	0	21	0	18	0	9	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	62
	情報工学専攻（旧）	—	—	—	—	23	—	21	0	23	0	21	0	21	0	17	0	27	0	19	0	26	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	198
	知能情報システム工学専攻	—	—	—	—	21	—	23	0	19	0	11	0	17	0	16	0	18	0	11	0	25	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	161
	情報機械システム工学専攻	—	—	—	—	25	—	23	0	19	0	20	0	26	0	18	0	24	0	27	0	19	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	201
	情報工学専攻（新）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	18	0	33	0	30	0	36	0	29	0	27	1	24	0	198
	知能工学専攻	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23	1	21	0	20	0	21	1	34	0	36	0	27	0	184
	システム工学専攻	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20	0	26	0	25	0	34	0	23	0	34	0	19	0	181
	創造科学専攻	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	0	3	0	10	1	7	0	6	0	2	1	2	0	37
	計	—	—	—	—	88	—	83	0	74	0	62	0	77	0	65	0	90	0	75	0	79	0	66	1	83	0	85	1	98	1	92	0	99	2	72	0	1,293
芸術学研究科	絵画専攻	—	—	—	—	14	—	10	—	12	—	13	—	13	—	11	—	14	—	13	—	13	—	10	—	11	—	12	—	8	—	11	—	15	—	—	—	180
	彫刻専攻	—	—	—	—	6	—	6	—	6	—	6	—	5	—	6	—	6	—	5	—	7	—	5	—	5	—	6	—	6	—	6	—	5	—	—	—	86
	造形計画専攻	—	—	—	—	21	—	16	—	18	—	10	—	16	—	18	—	15	—	18	—	22	—	10	—	12	—	10	—	12	—	18	—	6	—	—	—	222
	造形芸術専攻	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	37	—	37
	計	—	—	—	—	41	—	32	—	36	—	29	—	34	—	35	—	35	—	36	—	42	—	25	—	28	—	28	—	26	—	35	—	26	—	37	—	525
合計		—	—	—	—	145	4	131	2	123	2	103	0	124	0	113	2	137	2	120	9	133	1	103	7	117	3	119	5	134	7	135	2	132	8	117	5	2,045

大学院（博士後期課程）

（単位：人）

研究科・専攻 ＼ 年度		1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000		2001		2002		2003		2004		2005		2006		2007		2008		2009		2010		2011		2012		2013		計
								春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	
国際学研究科	国際学専攻	—	—	—	—	—	—	13	2	9	5	8	3	7	0	8	1	3	2	3	2	4	4	6	0	1	2	0	1	5	2	3	2	1	1	98
情報科学研究科	情報科学専攻	—	—	—	—	—	—	17	4	7	1	1	1	8	1	4	0	6	3	6	0	5	0	4	1	2	1	6	1	5	1	2	1	4	0	92
芸術学研究科	総合造形芸術専攻	—	—	—	—	—	—	8	—	7	—	12	—	10	—	6	—	8	—	7	—	1	—	6	—	7	—	3	—	8	—	3	—	3	—	89
計		—	—	—	—	—	—	38	6	23	6	21	4	25	1	18	1	17	5	16	2	10	4	16	1	10	3	9	2	18	3	8	3	8	1	279

6. 卒業生・修了生数等の推移

学部課程

（単位：人）

学部・学科		年度	1997 春	1998 秋	1998 春	1999 秋	1999 春	2000 秋	2000 春	2001 秋	2001 春	2002 秋	2002 春	2003 秋	2003 春	2004 秋	2004 春
国際学部	国際学科		84	—	106	—	92	1	94	1	97	3	99	4	98	1	96
情報科学部	情報数理学科		40	—	40	1	48	—	47	—	52	—	55	—	—	—	—
	情報メディア工学科		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	52	—	54
	情報工学科（旧）		51	—	48	—	57	—	43	—	46	—	42	—	54	—	54
	知能情報システム工学科		46	1	48	—	46	—	60	—	58	—	49	—	55	—	43
	情報機械システム工学科		49	—	45	—	52	—	53	—	51	—	49	1	55	—	51
	情報工学科（新）		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	知能工学科		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	システム工学科		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	計		186	1	181	1	203	—	203	—	207	—	195	1	216	—	202
芸術学部	美術学科	日本画専攻	9	—	11	—	11	—	11	—	9	—	9	—	11	—	9
		油絵専攻	17	—	24	—	20	—	18	—	21	—	19	—	20	—	20
		彫刻専攻	10	—	9	—	9	—	11	—	8	—	11	—	8	—	10
		計	36	—	44	—	40	—	40	—	38	—	39	—	39	—	39
	デザイン工芸学科		38	—	39	—	41	1	36	—	41	—	39	—	42	—	35
	計		74	—	83	—	81	1	76	—	79	—	78	—	81	—	74
合計			344	1	370	1	376	2	373	1	383	3	372	5	395	1	372

学部・学科		年度	2005 秋	2005 春	2006 秋	2006 春	2007 秋	2007 春	2008 秋	2008 春	2009 秋	2009 春	2010 秋	2010 春	2011 秋	2011 春	2012 秋	2012 春	2013 秋	2013 春	計
国際学部	国際学科		1	104	—	101	1	103	2	89	—	116	—	115	1	103	—	97	3	120	1,732
情報科学部	情報数理学科		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	283
	情報メディア工学科		—	39	—	44	—	52	—	48	—	48	—	5	—	3	—	2	—	1	348
	情報工学科（旧）		1	44	—	33	—	63	—	51	—	60	—	7	—	1	1	1	—	—	658
	知能情報システム工学科		—	48	—	55	1	51	—	51	—	50	1	4	—	1	1	4	—	—	677
	情報機械システム工学科		—	39	—	53	—	52	—	47	2	53	—	3	—	2	—	—	—	—	657
	情報工学科（新）		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	54	—	57	—	67	1	75	254
	知能工学科		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	62	—	74	—	51	—	76	263
	システム工学科		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	44	—	72	—	72	—	60	249
	計		1	170	—	185	1	218	—	197	2	211	2	179	—	210	2	197	1	212	3,384
芸術学部	美術学科	日本画専攻	—	11	—	9	—	11	—	11	—	11	—	11	—	12	—	9	—	11	176
		油絵専攻	—	20	—	19	—	18	1	21	—	21	—	19	—	19	—	20	—	17	334
		彫刻専攻	1	9	—	12	—	8	—	11	—	8	—	6	—	10	—	9	—	9	159
		計	1	40	—	40	—	37	1	43	—	40	—	36	—	41	—	38	—	37	667
	デザイン工芸学科		—	42	—	39	—	33	—	43	—	33	1	37	—	36	—	41	—	38	655
	計		1	82	—	79	—	70	1	86	—	73	1	73	—	77	—	79	—	75	1,324
合計			3	356	—	365	2	391	3	372	2	400	3	367	1	390	2	373	4	407	6,440

博士前期課程

（単位：人）

研究科・専攻		年度	1997 春	1998 秋	1998 春	1999 秋	1999 春	2000 秋	2000 春	2001 秋	2001 春	2002 秋	2002 春	2003 秋	2003 春	2004 秋	2004 春
国際学研究科	国際学専攻		—	—	—	—	8	1	13	5	13	4	13	1	11	2	11
情報科学研究科	情報数理学専攻		—	—	—	—	15	—	14	2	14	—	10	—	—	—	—
	情報メディア工学専攻		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	12	—	14
	情報工学専攻（旧）		—	—	—	—	23	—	20	—	23	—	18	—	17	—	20
	知能情報システム工学専攻		—	—	—	—	18	1	21	—	19	—	11	—	16	—	16
	情報機械システム工学専攻		—	—	—	—	25	—	19	—	17	—	20	—	23	—	15
	情報工学専攻（新）		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	知能工学専攻		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	システム工学専攻		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	創造科学専攻		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	計		—	—	—	—	81	1	74	2	73	—	59	—	68	—	65
芸術学研究科	絵画専攻		—	—	—	—	14	—	10	—	11	—	13	1	11	—	12
	彫刻専攻		—	—	—	—	6	—	5	—	7	—	6	—	5	—	6
	造形計画専攻		—	—	—	—	21	—	15	—	19	—	10	—	15	—	18
	計		—	—	—	—	41	—	30	—	37	—	29	1	31	—	36
合計			—	—	—	—	130	2	117	7	123	4	101	2	110	2	112

研究科・専攻		年度	2005 秋	2005 春	2006 秋	2006 春	2007 秋	2007 春	2008 秋	2008 春	2009 秋	2009 春	2010 秋	2010 春	2011 秋	2011 春	2012 秋	2012 春	2013 秋	2013 春	計
国際学研究科	国際学専攻		3	9	2	7	7	9	1	8	7	4	3	7	5	7	6	8	1	7	183
情報科学研究科	情報数理学専攻		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	55
	情報メディア工学専攻		1	18	—	18	—	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	72
	情報工学専攻（旧）		1	24	1	18	—	25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	190
	知能情報システム工学専攻		—	17	—	11	1	22	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	154
	情報機械システム工学専攻		—	25	—	26	—	17	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	188
	情報工学専攻（新）		—	—	—	—	—	—	—	17	—	29	—	30	—	34	—	26	—	26	162
	知能工学専攻		—	—	—	—	—	—	—	24	—	20	—	18	—	20	1	34	—	34	151
	システム工学専攻		—	—	—	—	—	—	—	20	—	23	—	23	—	34	—	22	—	34	156
	創造科学専攻		—	—	—	—	—	—	—	5	—	2	—	6	—	8	—	5	—	2	28
	計		2	84	1	73	1	73	—	68	—	74	—	77	—	96	1	87	—	96	1,156
芸術学研究科	絵画専攻		—	14	—	10	—	13	—	10	1	10	—	12	—	7	—	11	—	15	175
	彫刻専攻		—	5	—	5	—	8	—	5	—	5	—	6	—	5	—	5	—	6	85
	造形計画専攻		—	13	—	18	—	17	—	12	—	13	—	9	—	14	—	13	—	7	214
	計		—	32	—	33	—	38	—	27	1	28	—	27	—	26	—	29	—	28	474
合計			5	125	3	113	8	120	1	103	8	106	3	111	5	129	7	124	1	131	1,813

博士後期課程

（単位：人）

研究科・専攻		年度	1997 春	1998 秋	1998 春	1999 秋	1999 春	2000 秋	2000 春	2001 秋	2001 春	2002 秋	2002 春	2003 秋	2003 春	2004 秋	2004 春
国際学研究科 国際学専攻	満期退学者		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	博士号取得者		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	1	2
	論文博士号取得者		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	計		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	1	2
情報科学研究科 情報科学専攻	満期退学者		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	博士号取得者		—	—	—	—	—	—	—	1	2	2	6	1	5	1	1
	論文博士号取得者		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	計		—	—	—	—	—	—	—	1	2	2	6	1	5	1	1
芸術学研究科 総合造形芸術専攻	満期退学者		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	博士号取得者		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	2	—	3
	論文博士号取得者		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	計		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	2	—	3
満期退学者			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
博士号取得者			—	—	—	—	—	—	—	1	2	2	11	2	9	2	6
論文博士号取得者			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計			—	—	—	—	—	—	—	1	2	2	11	2	9	2	6

研究科・専攻		年度	2005 秋	2005 春	2006 秋	2006 春	2007 秋	2007 春	2008 秋	2008 春	2009 秋	2009 春	2010 秋	2010 春	2011 秋	2011 春	2012 秋	2012 春	2013 秋	2013 春	計
国際学研究科 国際学専攻	満期退学者		—	—	3	3	—	—	2	1	—	—	1	2	2	—	—	1	—	1	16
	博士号取得者		—	5	4	2	—	2	—	2	2	1	2	1	1	4	—	—	—	2	34
	論文博士号取得者		—	1	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	4
	計		—	6	7	5	—	2	2	3	2	2	3	3	3	5	—	1	—	3	53
情報科学研究科 情報科学専攻	満期退学者		—	2	1	3	—	1	—	1	—	—	—	4	—	—	—	1	—	1	14
	博士号取得者		2	2	2	2	—	—	—	2	3	2	2	3	—	1	—	3	—	2	45
	論文博士号取得者		—	1	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	4
	計		2	5	3	5	—	2	—	4	3	2	2	7	—	1	—	5	—	3	63
芸術学研究科 総合造形芸術専攻	満期退学者		—	1	—	3	—	7	—	1	—	2	—	4	1	3	—	2	—	3	27
	博士号取得者		—	3	—	3	—	1	—	2	—	2	—	2	—	3	—	1	—	3	30
	論文博士号取得者		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
	計		—	4	—	6	—	8	—	3	—	4	—	6	1	7	—	3	—	6	58
満期退学者			—	3	4	9	—	8	2	3	—	2	1	10	3	3	—	4	—	5	57
博士号取得者			2	10	6	7	—	3	—	6	5	5	4	6	1	8	—	4	—	7	109
論文博士号取得者			—	2	—	1	—	1	—	1	—	1	—	—	—	2	—	1	—	—	9
合計			2	15	10	17	—	12	2	10	5	8	5	16	4	13	—	9	—	12	175

7. 外部資金獲得の推移

（単位：千円）

区分		年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	計
科学研究費補助金	国際学部	件数		1	2	4	5	4	4	3	6	6	5	9	13	14	10	18	19	19	17	16	175
		金額		4,700	4,400	18,700	18,000	9,400	14,100	8,300	16,300	15,900	14,200	21,400	24,100	25,900	21,500	31,540	27,800	27,349	23,100	27,000	353,689
	情報科学部	件数	7	12	17	28	33	19	22	25	20	29	38	35	33	33	31	35	35	33	43	40	568
		金額	8,250	19,400	30,400	49,900	46,500	30,900	36,400	40,800	25,200	44,300	55,100	49,200	46,800	40,880	33,570	48,500	51,400	49,100	64,700	66,600	837,900
	芸術学部	件数				1	1		1	1	1	1	3	3	3	2	1	1	3	3	3	2	30
		金額				900	700		5,700	2,900	5,200	2,900	6,200	8,400	2,300	2,100	1,300	4,000	7,100	4,800	4,200	1,800	60,500
	広島平和研究所	件数								1	3	2	3	3	5	5	5	6	5	6	6	5	55
		金額								1,300	9,300	8,800	3,000	2,900	4,500	4,800	4,300	4,700	3,800	9,800	7,400	4,600	69,200
	社会連携センター	件数																				1	1
		金額																				1,300	1,300
	国際交流推進センター	件数																				1	1
		金額																				800	800
	計	件数	7	13	19	33	39	23	27	30	30	38	49	50	54	54	47	60	62	61	69	65	830
		金額	8,250	24,100	34,800	69,500	65,200	40,300	56,200	53,300	56,000	71,900	78,500	81,900	77,700	73,680	60,670	88,740	90,100	91,049	99,400	102,100	1,323,389
その他外部資金	受託研究・共同研究費	件数		1	4	1	2	5	7	8	9	5	8	12	9	19	19	14	36	33	29	34	255
		金額		1,000	8,192	3,000	3,983	9,611	16,038	11,978	15,420	14,130	19,148	33,020	36,211	40,749	53,437	51,612	136,936	44,528	34,324	43,280	576,597
	助成金・補助金	件数	7	8	6	7	5	2	5	3	2	2	5	6	3	2	2	1	2	2	2	4	76
		金額	9,150	7,800	5,100	10,600	4,980	260	3,830	2,850	2,000	1,900	23,990	31,561	26,500	22,407	12,900	11,000	19,660	24,757	14,751	37,566	273,562
	奨学寄附金	件数	3	5	1	16	12	17	13	8	10	10	15	18	20	20	22	24	26	21	15	17	293
		金額	860	3,000	3,000	13,341	17,160	13,400	14,950	8,900	10,000	11,780	11,270	14,700	14,070	14,070	17,906	17,706	14,231	20,098	9,278	16,685	246,405
	計	件数	10	14	11	24	19	24	25	19	21	17	28	36	32	41	43	39	64	56	46	55	624
		金額	10,010	11,800	16,292	26,941	26,123	23,271	34,818	23,728	27,420	27,810	54,408	79,281	76,781	77,226	84,243	80,318	170,827	89,383	58,353	97,531	1,096,564
合計		件数	17	27	30	57	58	47	52	49	51	55	77	86	86	95	90	99	126	117	115	119	1,454
		金額	18,260	35,900	51,092	96,441	91,323	63,571	91,018	77,028	83,420	99,710	132,908	161,181	154,481	150,906	144,913	169,058	260,927	180,432	157,753	199,398	2,419,953

8. 国際交流事業実績

本学がこれまでに締結した学術交流協定等

締結年月	協定等の締結
1996年3月	西南師範大学（中国）と学術交流協定を締結
1997年5月	ハノーバー専科大学（ドイツ）と学術交流協定を締結
2000年12月	モハメド五世大学（モロッコ）と学術交流協定を締結
2001年1月	ハワイ大学マノア校（米国）と学術交流協定を締結
2003年6月	オルレアン大学（フランス）と学術交流協定を締結
2003年8月	チュニス・アルマナール大学（チュニジア）と学術交流協定を締結
2005年3月	西京大学校（韓国）と学術交流協定を締結
2005年10月	アラヌス大学（ドイツ）と学術交流協定を締結
2005年12月	ベルリン・バイセンゼー芸術大学（ドイツ）と学術交流協定を締結
2006年11月	西南大学（中国）と学術交流協定を締結
2008年4月	国際関係学院（中国）と学術交流協定を締結
2009年3月	梨花女子大学校（韓国）と学術交流協定を締結
2011年10月	レンヌ第2大学（フランス）と学術交流協定を締結
2012年5月	短期留学プログラム開始のため西南大学との協定内容を更新
2012年11月	国連平和大学（コスタリカ）と学術交流協定を締結
2013年2月	短期留学プログラム開始のため国際関係学院との協定内容を更新
2013年2月	上海大学（中国）と学生交流に関する覚書を締結
2013年3月	短期留学プログラム開始のため西京大学校との協定内容を更新

協定校との学生派遣・受入数

（単位：人）

協定校	年度	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	計
西南大学（旧・西南師範大学）	派遣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	0	0	0	0	6	6	13
	受入	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	0	2	2	2	2	12
ハノーバー専科大学	派遣	0	0	4	5	7	7	8	6	4	5	4	3	3	2	2	7	6	73
	受入	0	0	3	4	4	4	5	7	6	5	5	5	4	4	5	3	6	70
ハワイ大学マノア校	派遣	—	—	—	—	2	3	3	3	1	0	2	0	0	2	0	1	1	18
	受入	—	—	—	—	0	0	7	4	7	5	6	6	4	4	3	2	1	49
オルレアン大学	派遣	—	—	—	—	—	—	0	1	1	1	2	1	2	0	3	2	2	15
	受入	—	—	—	—	—	—	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4	6
西京大学校	派遣	—	—	—	—	—	—	—	—	3	1	4	3	3	1	1	23	2	41
	受入	—	—	—	—	—	—	—	—	3	4	3	3	4	4	3	2	2	28
アラヌス大学	派遣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	0	1	1	0	0	1	1	6
	受入	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	4	0	0	0	0	0	1	5
ベルリン・バイセンゼー芸術大学	派遣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	1	1	1	1	2	1	2	12
	受入	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	3	2	0	2	0	0	0	9
国際関係学院	派遣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0	0	1	1	2	4
	受入	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	2	2	2	2	12
梨花女子大学校	派遣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	1	1	2	1	5
	受入	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	0
レンヌ第2大学	派遣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	3	5
	受入	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	3
上海大学	派遣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0
	受入	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2
計	派遣	0	0	4	5	9	10	11	10	9	12	14	9	10	7	10	46	26	192
	受入	0	0	3	4	4	4	13	11	16	16	23	21	14	18	15	12	22	196

※2012年度および2013年度の西南大学への派遣学生は、それぞれ6名と5名の短期留学生を含む。
※ハワイ大学アノマ校からの受入学生は、夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」への参加者。ただし、2006年度の受入学生5名のうち1名は交換留学生。
※2012年度の西京大学校への派遣学生23名のうち、20名は短期留学生。

編集後記

広島市立大学開学20周年記念事業の一つとして、『開学20周年記念誌』の編纂が企画されました。本学の歴史を振り返り、設立の意義や使命および目標を再確認し、今後の教育研究活動や地域貢献に取り組むための指標となることを目指した一大事業です。

編纂にあたっては2012年8月に編集委員会を設置し、そこから資料室や倉庫に眠る貴重資料の掘り出しや、昔を知る関係者への取材が始まりました。少数精鋭の編集委員での作業は予想以上に大変な労力を要しましたが、作業を進めるにつれ、本学が歩んできたこの20年の短くも長い歴史の奥深さを、あらためて知ることができました。

無事に発行を迎えた今、本記念誌がこれまでの20年の歩みを礎に、建学の基本理念「科学と芸術を軸に世界平和と地域に貢献する国際的な大学」を、今後これまで以上に体現していくための契機となることを祈念いたします。

最後になりましたが、資料収集や執筆作業等、多大なるご協力を賜りました関係各位に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

2014年10月

編集委員長　吉田幸弘

【開学20周年記念ロゴマーク】

20th anniversary
Hiroshima City University

算用数字の「0」(ゼロ) を樹木の年輪に見立て、10個連ねることで「十年ひと昔」という年月の積み重ねを表現している。そこに立体感を持たせるように「2」を重ね合わせ、さらにコミュニケーションマークと組み合わせた。

広島市立大学開学20周年記念誌

編集　広島市立大学開学20周年記念誌編集委員会
デザイン担当：橋本 英和
実務担当：髙橋 優子

発行　公立大学法人広島市立大学

印刷　株式会社インパルスコーポレーション

発行日　2014年11月1日